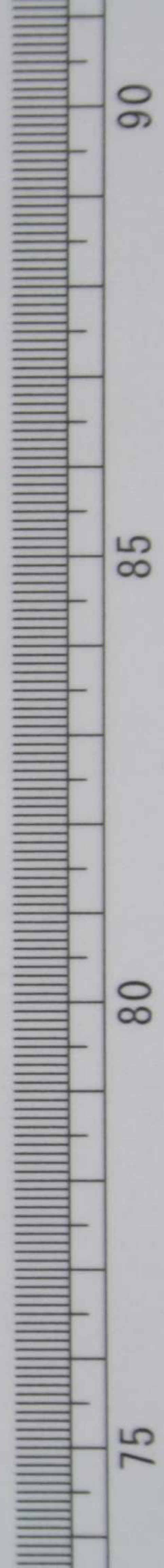


文藝小品



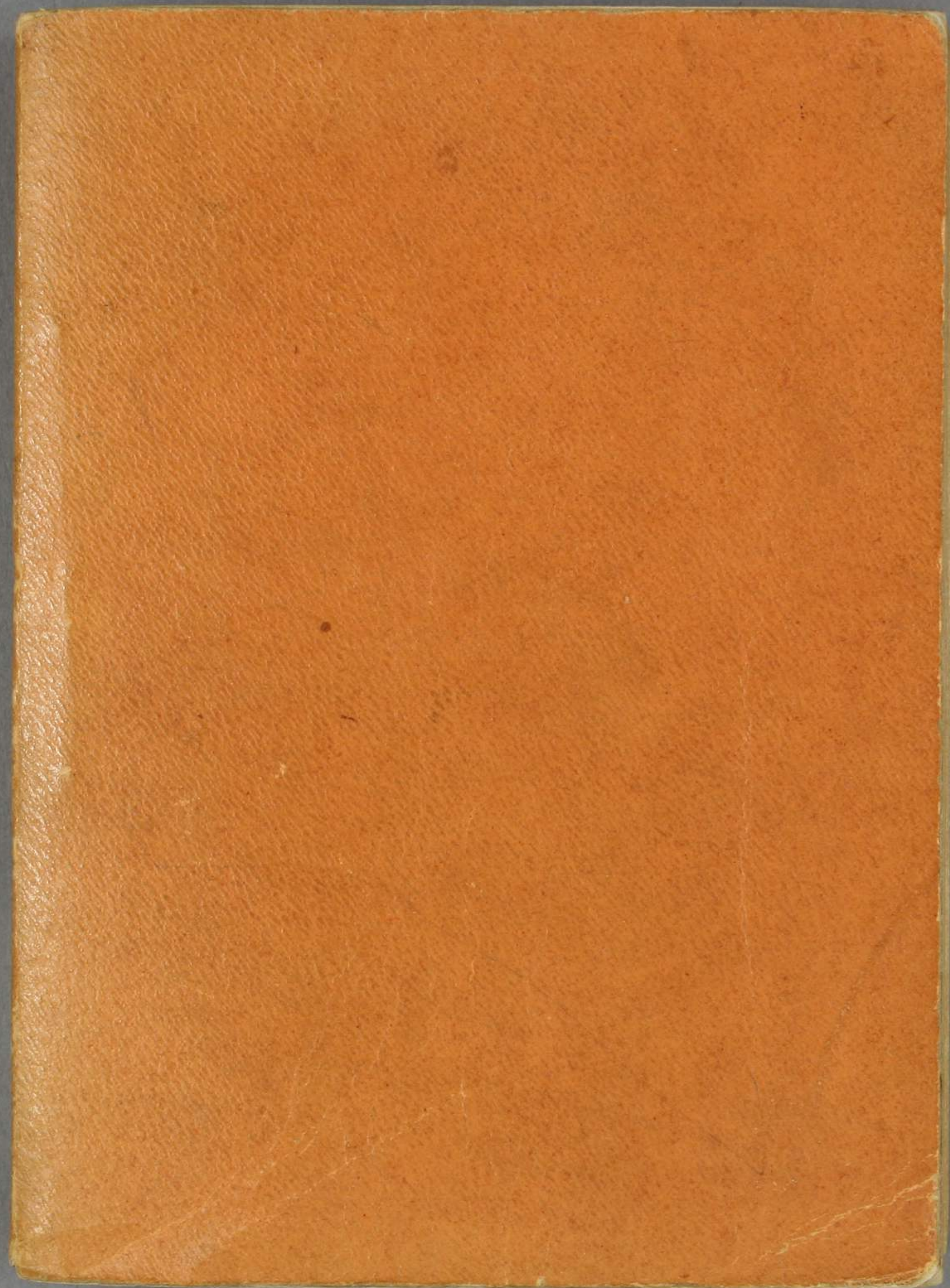
文藝

小品

本間文庫

文庫 14

D 20



文庫14

D20

14
20

14
20

凡例

一 余操孤の業に従ひてより凡そ十年、顧みれば杳として夢の如し。先輩諸君子の扶掖に由て今猶ほ文壇の食客たるを得れども、朝暮に營々として造詣の暇なく、依然吳下の阿蒙たるを免むるゝ能はず。罵に巧みなる友來つて罵つて曰く、言者不知知者黙と汝不知庵と號す名詮自稱なり言は百舌に同じく、膽は鼯鼠の如しとは夫れ汝の謂乎と呵然として笑ふ。余悚然として屏息し深く自ら慚愧して鑑戒となす。

一 余が批評文は曾て淺近なりと斥けられ杓子定規なりと嘲けられ斜視眼なりと侮づられたりき。又余が隨筆は曾て或る才人より厭讀十種の中に數へられしものなりき。又余が創作の如きは文字蕪雜粗獷にして加ふるに詩趣乏しく感興淺く到底今の秀才の詩味滴る如き佳什と比ぶべきものに

あらず。而して是等到底覆瓶にだも値ひせざるものを集めて更に鉛槧に上すは大方の毀を免かるゝ能はざれども畢竟唯だ十年文壇に住せし余一箇の紀念として幸ひに大橋君の好意に由て剞劂に附するに過ぎざるなり。

一 集載の諸篇は多く國民之友、女學雜誌等の諸誌に寄稿せしものにして今より見れば有繫に釋びて穩健を缺くもの少からざれども些か二三の字句を修正せし外は惣て改竄せず、却て大方諸君が笑諠の資料となす。綠蔭若話及び「落葉」名けしものは隨時の所感を集めし雜纂にして前者は多く國民之友に載せしもの、後者は多く女學雜誌に寄せしものなり。

一 短篇中「落紅」は某文士を描きたり云ひ、或は他の某文士の夫人と女主人公の名と職業とを同ふすといひ、頗る物議を生じたるものなり。余が疏慢の

實計らずも此罪を獲たるは深く自ら恥づるさいへども、抑も同一社會に住する同一人情を描くものが時として偶々多少の類似點を生ずる事あるは止むを得ざるべし。之あるが爲に直ちに輕斷して某の境界を描きたり某の事實を材としたりさいふ如きは作家を罪せんとして却て誤つて粉本視する某々等を誣ふるものにあらずや。慎重なる評家苟くも爲さざるなり。「落紅」は本と全く余の想像に成る。絶えて其人あるにあらず、其事實あるにあらず。自ら信ずる處あれば紛々擾々たる流妄の譬説の如きは敢て嗽々するを好まず。雖ども誤つて粉本視せらるゝ某々氏の爲め些か其虚謬を辨じ置く。

一 卷末「晴水冷語」は其二三項を太陽に載せし外未だ公けにせざるものなり。最近の文壇に對する余が所懐として之を附載す。

14
20

一方今文壇多士濟々たり。加ふるに知名の才人の多くは春秋に富めば前途の希望洋々として其進歩揣るべからざるものあり。余が如きは文壇に投ずる十年猶碌々、些か自ら強ふるに足る一作だに無きを深く慙づること雖ども敢て非才鈍根を揣らす諸君子の驥尾に従つて益々文壇の爲めに盡さんさす。トルストイが處女作を公けにせしは既に三十歳を超え、ドストエフスキイの作が較や成功せしは殆んど四十歳に近かりき。古今の文豪が傑作を著はすは大抵四十歳前後なれば我が文壇諸君子が不朽の大作を残すべきは正に十年の後にありさす。余の如きは諸君子の走卒となつて二十世紀の文壇の末班に列するを得ば即ち足れりさす。偶々、過去十年の手習草紙を公けにするに臨みて所感を陳す。

亥の九月

著者識

文藝小品

目録

- (一) 綠蔭茗話……………自明治二十三年十一月到明治二十四年六月……………一
- (二) 筆隨落……………葉……………自明治二十二年到明治二十三年……………四三
- (三) 詩文の感應力……………自明治二十二年七月……………七二
- (四) 詩文の粉飾……………自明治二十二年十月……………八四

14
20

(五) 詩 辨(美妙の韻文論を讀みて)……………九五
 明治二十四年一月

(六) 戦後の文學(國民をして機運に乗せしめよ)……………二二五
 明治二十八年五月

(七) 政治小説を作るべき好時機……………二四〇
 明治三十一年九月

(八) 如是放語……………二五九
 明治三十一年二月

(九) 市川白猿……………二八三
 明治二十二年八月

(十) 東花坊支考……………二九一
 明治二十四年五月

(十一) ラセラス傳の作者……………三〇四
 明治二十七年四月

(十二) 伯刺西爾文豪シルヴ#オ、ディナルテ……………三三二
 明治三十二年二月

(十三) 饗庭篁村氏……………三五八
 明治二十四年三月

(十四) 老車夫……………三三二
 明治三十一年七月

(十五) 湯女……………三五六
 明治三十一年九月

(十六) あたらよ……………三八九
 明治三十一年十二月

14
20

(十七) 落 紅……………四四

明治三十二年三月

附 録

嚼 氷 冷 語……………五三

明治三十二年八月

目 次

文藝小品目錄 終

文 藝 小 品



不 知 庵 雜 著

綠 蔭 茗 話

○綠蔭滴たる如く却て花時に勝るといふ。我等の如く爛熳の才なきものは却て綠蔭に苦茗を汲んで所感を談せんとす。艶語麗句を陳ねて人を酔はしむる如きは即ち我が所長にあらざれば也。

○凡そ社會の各事各物は寒暑の往來する如く常に繰返さる。政治の時代あり、戰爭の時代あり、藝術の時代あり、殖産の時代あり。時に由て社會の歸嚮を異にすれども之を以て直ちに進歩退歩を説くは輕淺を免かれざるなり。常に文壇を嫉視し或は輕視し或は嫌惡する者が折に觸れて繰

一 話 茗 蔭 終



返すは文壇疲弊の套語なり。されど思ひ見よ。如何なる方面にも偉人を有せざる社會が獨り文壇に向つて偉人を請求し得るや否や。ダンテ、ギョーテなきが爲に憐れなる文壇と罵り、「哀史」或は「ファウスト」を見ざるが爲に意氣地なき文壇と嘲けるもの、如きは珍羞佳肴あるも猶ほ不足を愬ふる餓鬼と同じきにあらずや。且つ小説は轆轤細工と同じからざれば矢繼早に製作し得ざるは勿論にして時としては静養して暫らく新作を絶つ事あるも珍らしからず。昔しはドイツケンス一年静養して筆を持たざりし時嗚呼なる白者は所在に「He has exhausted」の聲を擧げて罵り叫びしが、其後フォルスターの家に渠が新作の讀會を開くを聞くや罵者は皆聲を潜めて顔を赤めたりといふ。今は即ち文壇疲弊の聲あるを常に聞けども曾て新作の讀會を開いて輕淺者流の誹言を潜ましむる如き用意あるを聞かず。我は文壇疲弊の聲あるを憂ひずして却て文士を支配する三怠

慢病を憂ふ。曰く、風流。曰く通、粹。曰く詩人狂。

○作者部類に「まかれども走るものは必ず疾く勝者はおのづから強し只一部たりとも多く賣るゝを版元の忠臣とすべければ」云々どあるり。天明以來の所謂戯作者は恐らく版元の忠臣となりて満足し、表には先生と呼ばれて尊ばれしも實は書肆の奴隸をもて甘んせしなりき。天明四年出版の江戸土産巻尾に、

口 上

此度鐵砲町橋井宇惣太方にて作者印盡し御糶袋御手拭染出し候間
御ひいき御屋敷方御女中様方遊里御女郎衆様方地もの御さむすめ
様方御うば様方まで御もどめ可被下候
御あふぞ 惣作者自筆

御やうじ差 發句御のぞみ次第早速
御ふくさ か、せ差上げ申候

とある如き其時代を推想するに足るべし。今こそ種彦三馬などをえら
き人の様に言嗾せども現存せし折は悉く斯る心掛を抱きし者なり。種
彦が門人種員に與ふる書牘にて世間の氣に入る様に作るべしと教へ又春
水は自作の序に衣食の代を得んとて拙き作を爲すと明かに記したる如き
いづれも戯作者の名に背かぬ風儀を知るべし。されど此時代は知らず、
今は文學者とし稱せらるれば此名目に對しても相當の見識を具すべきは
當然なるべし。然るに頗る怪むべきは今猶ほ公然俗受けの機能を説きて
只管阿世を専らとする者決して少からず。何れの社會にも絶えざるは此
阿世先生にして表には嚴肅なる衣冠を粧ふも畢竟幫間一般なり。而して

特に文壇に於て此幫間君の多きを憾む。
○西鶴が正しく明治の文學史に影響を與へたるは争ふべからず。紅露以
下の文學は畢竟元祿復興の紀元を開きしなり。而して其復興の起源を尋
ねるに、本と愛鶴軒書棚の故紙堆裏より來る。愛鶴軒は淡島氏、名は寶
受郎、今は向島弘福寺の境内に住す。初め淺草森川町に在りし頃中西梅
花、尾崎紅葉、幸田露伴等諸子屢々其廬を叩きて文詩を談せしが、之よ
り先き明治八九年頃淡島氏は小川町の古本店某方にて古書一とからげを
購ひし中に偶然西鶴の置土産を發見したり。豫て京傳、種彦、馬琴等の
隨筆にて其名を記憶せしかば日夕繰返し々々翻讀して終に自づと其妙趣
を理解し其後胸算用一代男と讀むに従ひて愈々獨得の趣味あるを喜び花
晨月夕暫らくも離さず之と親みしが、此時西鶴あるを知るものは極めて
少かりき。勿論饗庭篁村氏等は既に涉獵しつゝありしが、唯だ元祿の珍

書として愛翫せしに過ぎず。之を文學上の價値あるものと認めしは即ち愛鶴軒なり。愛鶴軒は實に明治に於ける元録復興の祖なり。ニコラス、ローが沙翁の院本を校訂評釋して出版せしは千七百九年にして沙翁歿後殆んど百年なり。西鶴が現はれしは歿後二百年にして愛鶴軒即ち我が國のニコラス、ローなり。

○西鶴の名が喝采され初めし頃、政治家にして小説を書ける確か芳草先生と綽名を呼ばれし人なりき。西鶴の小夜嵐を讀みしとて痛く其取るに足らざる拙文章なるを冷嘲したり。又日本のヂユマと呼ばれし某新聞小説家同じ小夜嵐を一讀したりとて此人は文章の極めてめでたきを只管歎賞したり。然るに此小夜嵐が西鶴の作ならざるは今知らぬ者なけれど其頃は之をすら鶴の作なりと信じ獲がたき珍什として愛惜したる者多かりき。嘲ける者も褒むる者も共に笑止の沙汰なりといふべし。

○之も其時分なりき。八文字屋に感化れし男ありてドイツケンスを西鶴ふりに譯せば如何に、ドストエーフスキイを馬琴風に譯せば面白かるべし、世評も必ず目出たかるべしと仕たり顔に勧めし事ありき。此人はギョーテのファウストを夢想兵衛位に想像する文學の大通人なりき。

○之も亦た其時分なりき。紅葉山人の書窓の障子に「花も月も何でもない戀の道」と無駄書してありき。又蝸牛子の壁上に「獅子眠る其唇に蠅の糞」と題せるを見たり。又愛鶴軒の床の間には懸軸の裏を出して自畫の三尊佛を貼付けてありき。三者の好奇を知るに足るべし。

○愛鶴軒氏は面白き人はなし。自ら世に賣らざれども其名次第に知らるゝを厭ひて名利の男と誤まるゝを恐れ露伴子に托して愛鶴軒を吊ふ文を書かしたりしが、曾て其室に相對座せし時庭前の卒塔婆を指さして曰く、あれは亡き寒月が墓標なり、生前書捨ての一作駄洒落とも辭世と

も教訓とも何とでも勝手に見るべきものありと臆て讀めるは、

魔性何物無始輪廻妄執也

本尊何物己心本覺如來佛魔一如

寂しさに友呼びたつる犬の聲

夢はさめけり眞夜なかのころ

何物に付て怒り何物に付て喜ぶ

○人の瑕瑾を捜すを喜べる男來つて曰く、誰は南水漫遊を種本とす、誰は醉古堂劍帚を珍重す、誰は事文類聚を暫らくも離さず、誰は唐詩金粉を常に重寶とす、誰は白駒の粹言精言を机の下に置く、誰はアリポーンの金言抄を巾箱本とす、連りに陳立て、止まず。傍らに人あり嘯いて曰

く、朝あらし馬の目で行く頭巾哉。

○逍遙子と鷗外子とは兎もかくも文壇一對の學者なり。之をスコットが曾て沙翁のカツシヤスを咏ひし句を以てス井フトを形容せし響に倣ひて先人が蕉門の二豪傑去來及び許六を評せし語を借りて當代の二先生を想像して見ん哉。尙義が撰びし去來の讚に曰く、

先生爲人

孝弟貞誠

事兄竭力

處事必正

有文有武

風雅華英

存思其人

亡慕其名

是れ寧ろ褒辭に過ぐる嫌ありと雖ども一代の行狀を案ずるに醇良温雅にして同門の類りに狂妄に流るゝを憂ひ一圖に先師の掟を破らざらん事を勗めしは蕉門の忠臣といふべし。然れども君子の美德あつて却て勇士の

氣象なく能く蕉風を奉じたれども大に俳諧を奮ふ事なかりき。頭陀物語
 (俳諧水滸傳一流の偽書也)に石山登行の逸事を記せし中に去來曰く俳諧
 はよしなきものかな風景の奴となつて心上のほだし止む時なしされば其
 れも知らず是れも知らず手を拱て閑居する人には遙に劣りぬべき業なら
 むとあり。又其筆に成りし落柿舎制札を渡白狂評して曰く、

(上略)去レバ蕉門ニ此人アリテ其性ハ殊ニ篤實ニシテ常ニハ言語ノ虚
 ニ遊ベル(中略)誠ニ洛陽ニ去來アリテ鎮西ノ俳諧奉行ナリト故翁モ稱
 シ給ヘレバ云々

と。前なるは大久保隱居の口より出づべく、後なるは以て其讚に充つべ
 し。又尙義の去來行狀に曰く「四方の俳師遠き近き當世の墨客者流才を
 挟み簡傲非笑するものといへどもその風采を感じ惇睦間言ある事なく心
 服謁拜して席下に走り此道の先達とす」云々。許六は一生を自負を以て

終り傲語を吐て漫りに世を罵りたれども一篇の自得發明辨終に發明の實
 を現さざりき。畢竟するに其才識は常班に超へたれども大才といふほど
 にもなく、唯自ら抱負する處盛んなりし故に他を蕪狗の徒と思ひ、芭蕉
 の腹中に足駄はきて入るものは我れのみと高言し、自ら滑稽傳の末に「先
 師の發句仕様を前後能く知り俳諧の底をぬきて古今に渡るものは五老井
 一人なり」と大言せし如き自信の強きは比ぶべきなしといへども徒らに
 同門諸子を見下せしばかりにて風俗文選を著はして一種の文格を世に残
 せし外は去來が美德の名を得たるに比べて功蹟少かりしと同じく、其高
 言は俳諧壇に目ざましき功名を遂げざりき。殊に不思議なるは平生の
 高言放語を筆にせるに似氣なく人に接する時恭謙を粧ひしは隨齋諧話に
 記せるをもて知るべし。曰く、

彦根の許六は世に自負放言の人と思へるに常に温厚謙遜の人にてあり

しどぞ或時一士人來りて俳諧の指南を乞ふ許六辭してうけがはず士人
 懇ろにいひて止まず許六の云ふやう我れ人に教ふべきほどの事知らず
 許したまはれといふにかの士少し不興し某し此道執心なればこそかく
 までは申せ御教示を得ても物の益にたつまじきものなりとお見限あ
 りてさはの玉ふなるべしと少しあらゝかにいふ時許六大に迷惑せる體
 にて更に左様の事ならず我れ俳諧に何の心得たる事なければ否み申す
 なり足下はまた何に依りてかくは仰せらるゝぞと云にかの士いよゝゝ
 憤りてそれは某をわざむき給ふなり既に御著作のものあまた熟覽す
 るに芭蕉門に於て血脈相承せる人世更になし君獨り實に傳灯の俳諧
 なりといふ事を著はし給ふさる故にかくは望み申すなりといふに許六
 打笑ひて誠にさにて侍るやあの著述のものはみなくゝ一時のたはふれ
 事にて候ぞやあのたぐひの書留ものをもて實とし給ふは痛入たる事な

り元より跡なし事なれば必ずそれらにすかされ給ふな云々。
 是等の行狀及び平生の氣象現れし文字を讀む毎に晩歲病蓐に在つて金
 澤の萬子を引見し共に滿飲して風雅の奥を談せし卓朗豪爽たる姿を眼中
 に映する心地す。誠に此の二人は蕉門の二傑にして遙に儕輩の上に超絶
 す。一人は徳萬人をして欽仰せしむる君子の象あり一人は氣宇宙を呑む
 豪傑の風あり。共に俳壇に非常の偉蹟を遺さるも又我が文學史を飾る
 に足らむ。許六が去來に與へし書の結尾に曰く、
 予短才未練なりと雖ども一派の俳諧に於ては大敵を受けて一方の城を
 かため大軍を眞先駈け一番に討死せんとする志鐵石の如し故に同門
 の嫉み嘲りを顧みず筆をつゝますして是を起す此雜談隱密の事沙汰に
 及ばず諸門の眼にさらし向後を謹むたよりとならば大幸ならん云々。
 去來が之に答ふる書に曰く、

勇者は必ずしも義あるにあらざるこれ角の謂か義者は必ず勇ありこれ雅兄の謂か雅兄道に志すの深き此言にいたる最も感涙す是を他日湖南の丈草兄正秀兄におくりてなほ二子の俳諧を聞かむ雅兄の言勇なりと云つべし然れども予が性もと柔弱にして敵に當るの器にあらざる曾て十月のはじめより心虚勞を兼病す今日薬に怠らず向來なほ弓を射矛を振ふの力なけん幸に強將の下に弱卒なし益々兵を養ひ陣を練て大敵を破りたまへ雅兄の如きは蕉門の忠臣、一方の大將軍なり云々と。兩個の氣象は自づから此數行の中に髣髴として現はる。之を道鷗二家に比するは言語道斷の沙汰なりといへども二家が今の文壇に雄視する恰も落柿舎及び五老井が元録俳壇の雄鎮たりしと同じ觀あるは面白し。文壇の將來は此二傑ある限りは決して憂ふるに足らず。大久保の花に吟じて沙翁を食後の茶の子とするものあり。千駄木の月に嘯きてギョーテを酒

の殺とするものあり。蕉の俳諧を奉じて永く傳へし往昔の人と共に此二傑は即ち今の文壇の守り本尊たるべし。
○碁を好める男曾て語るらく、一向專念に工風して無我なる時は天井障子疊まで悉く盤面と見えて鳥の枝から枝へ飛べるさまも魚の水に潑漉たるも自づから定石に協ふ心地すと。詩人また斯の如くならざるべからず。苟くも詩美を解するものより見ば森羅萬象何物か詩趣を具へざるものあるべき。街頭に連弾きする新内語り寒空に足駄を鳴らす職工は本より賣淫婦も賭博者も乞食非人も亦好箇の詩材たるを失はざるなり。有繫に小説家は人事を題とすれば内容は猶ほ舊套なるも詩題の撰擇だけは較や新らしきを加へたり。されど依然として月花の埒内に吟ずるは歌人、俳諧師、續きては死せる古語を綴る外に能なき和文章家輩にして文學革新の聲聞えて既に十數年を経るも更に變らず。自信力が強しと云へば感

服至極なれども左りとしては、チ、ヨン、鬚親爺の大御所様時の風俗儀式を擬すると同様ならずや。是れ畢竟文學に於ける假裝舞踏會なり。

○旅より歸るさ一二と指折らるゝ名優何がしと汽車にて計らずも同乗したり。聽て此名優同伴なる男に向つて語るらく、大磯に逗留中奇しき物語あり。或朝の事なりき、灣泊盛りの童二人海邊に相撲取りて戯れ諸共に砂の中に轉びしに、不斗足に觸れしものあれば拾上げしに二寸に足らざる銅佛なり。能き物得つと童は家に走りて母に見せしに是は如何に勿躰なや觀世音菩薩の御像なりと恭しく持佛堂に安置し奉りしを、そここゝより忽ち聞付け我も我もと集り、尋常ならぬ示現とさゞめきて、近頃は土地の漁師は申すまでもなく近郷近在の者勸請の爲め御堂建立の相談中なりと。今の世の濱成兄弟、誠に面白き事ならずや、之をば材料に二番目物を仕組みて見ばやと誇り顔に語るを傍へ聞きして思掛けな

き興を催ふしたりき。今の劇は知らざれども此物語にて其價值畧ば知るべし。

○元祿十二年の「今日の昔」に
「俳諧は平話の新しみを本意にして強ち古人の詞を用ゐずと芭蕉庵の示されしとて窮巷僻地には傾冶の艶言舞妓の荒唐俚語俗詞ならねば俳諧ならずと此筋の魔境に陥るもの多し」云々

とあり。弊は常に何事にも伴へば、坪内氏が勸懲主義を打破せし結果は非勸懲主義を小説の本領なりと謬想して、殊更に猥褻の結構をものして審美の理に協ふと誇る嗚呼の白者を生じたりき。さる人ゾーラの脚色は専ら赤裸美人を點出するにありと評せしが、若し斯る批評眼をもて讀まば實際派は誠に文學の妖魔にして天下の人心に惡毒を注入するもの、如く見ゆべし。道德論者が口を極めて小説の弊害を説く所以は畢竟斯る

淺近なる謬解者多きに本づく。

○日本一大安賣と墨黒くくと張出して帽子商ふ店あり。朝から晩まで客の絶間なければ眞實大安賣かと同町内の同業に聞けば世間様は皆正直なりと空嘯さける。元勳が大豪傑にて政黨員が大政事家、相場師が實業家にて俳優までが美術家と云はるゝ世の中なれば度々新聞に名が出れば何か有がたさうに買被らるゝも無理ならず。畢竟今の大名あるもの世間様の正直に乗じて大看板を擧げたる亞流なれば之を稱して廣告豪傑、廣告道德者、廣告慈善家、廣告學者、廣告事業々々といふ。

○常に知れる唐物店に遊びし時、帽子を購はんとて來りし客あれば恰好の品を見せしに不興なる顔して今一層上等の品なきやといふ。主人心得て代るゝ見せしに何れも是れも古臭き型にて氣に入らずと通を鼻の尖にひけらして罵りしかば、聽て土藏より恭しく一帽を取出し之は巴里最

新流行の品にて見本に唯だ一箇參りしばかりなれば何處へ出てもヒケは取りませぬと長々しき講釋して到頭兌換券五枚にて賣附けたり。跡にて聞けば去年の賣残りにてダース十二圓の代物なり。あの様な生意氣なる盲客には押付けるが却て冥利なりと店の者手を拍いて打笑ひたり。鑑識の眼なくして濫りに生意氣振るもの往々失敗するは何れの方面にも珍らしからず。文壇また時として此種の批評家を見る。

○今は更に聞えざれども一時は篁村宗とまで歌はれし饗庭篁村氏は明治の亥年頃より振假名新聞の雜報を擔任して折々短篇を物されしが、其頃は柳北、魯文、撫松、橋塘等の文名高くして氏の名を知るものなかりき。此時分より余は其尋常ならざる文才を喜びて日々の新聞を切抜き手箱の中に收め置きしが後氏と相見し時因縁淺からざるを語合ひたりき。然るに森鷗外氏は篁村文愛讀者の一人にして何事にも丹念なる氏の常と

して日頃讀賣新聞を切抜き置きたれば叢竹編輯の時は氏のスクラップ、ブックより補ふ處少からざりし。傳へ聞くデク井ンシー、ラム等は本國よりは却て米國に早く知られ其小品文は冊子となりて廣く行はれ交際社會の話題に上りしと云ふ。又カーライルのサルトアは初め倫敦の評判高からざりしが、北米雜誌の記者エベレットは早くも盛んに激稱して文壇將來の霸王と宣言し、當時の先覺者エメルソンは特に書を裁して米國來遊を望みたりといふ。篁村君の名今は知らざるものなけれども其昔し讀賣新聞に隠れて漸く雜報欄に綿繡の筆を織りしものとは誰か知るべき。篁村氏の文藻は最も早く熟して而して暫らく埋没して知られざりしなり。

○ドストエフスキイの侮辱に一青年小説家を描出す。其才名少しく世に知られたるも猶ほ陋巷に下宿して未だ富貴を送るを得ざりき。伯父なる

人すらも高く其價値を認めず、碌くに浮世の鹽を試めざる二才が小説を書くとは笑止の沙汰なりと初めは冷笑して容易に信せざりしが、其後甥が自ら新作の原稿を讀むを聞きて痛く喫驚し今の今まで小兒同様に思ひし甥が如何にして斯くまで深く人情に通ずるやと暫らくは呆れて言葉なかりし條頗る面白く描寫せらる。侮辱篇中の好笑資料なり。此青年小説家道に暫らく相別れし友と邂逅す。磊落なる友は懐かしき聲を揚げて曰く、オ、文壇の將軍！足下が詩人の元帥と仰がれんとは此三年前までは想像せざりしと。相見ても然として笑ふ。此種の經驗は青年小説家なるもの知らざるはなかるべし。ドストエフスキイも恐らく自ら經驗せしなるべし。

○懸賞小説といふもの昔から今に到る迄流行なり。初めは相當の名ある人の作を募りしなるが、大凡は未だ名を成さざるもの、作を集むるを

目的とす。金錢を賭けて善詩善文を募らんとするは極めて嗚呼の振舞なれども、賞を懸くるものは大抵他に目的あるを常とし。強ち金篇佳什を獲んと欲するにあらで之に依て人氣を牽き別に畫策する處あるが故に其性質極めて卑俗にして文壇の惡弊なり。日本にて文壇に懸賞の行はれしは本と俳諧師の商賣根性に出でたり。延寶七年の昔し西山宗因、總本寺高政亞流檀林俳諧を創めて貞派の古風を破りたれども只管一時を風靡せん事を欲して俗衆の意を迎合するを勤め温順篤實なる貞風の偽らざる點附に反して利益あれば埒なき者にまで濫りに高點を與へ其頃まで猶は風雅一方なりし俳壇の氣格を較や壞し初めたり。其後晋其角出で、半面美人の點印を作り俳諧師は點附を以て一種の營業となせしが、其頃は未だ金錢或は物品を賭する事はなさざりき。斯る惡風の漸く盛んなりしは水間活徳に初まり寶永より享保頃かの冠り付といへるもの流行し吳服類

を初め相應の價高き景物を競ふて猶は足らず、俳諧師は阿諛百方して顧客の多きを争ふに到りぬ。宛然たるチーバーの賭博なり。今の青年を顧客とする懸賞小説は殆んど之に類するものあり。況んや用箋を附して詩歌俳句を募る如きは公然入花料を徵收すると同じく明かに營業を廣告するものなり。斯る流行は畢竟文壇の惡疫と見做して然るべきなり。○雜誌商賣に經驗あるもの、語るを聞くに、文學雜誌を多く賣らんとするは廣く投書を集めて採録するを秘訣とす。是れ總ての投書家が已れの投書の載せらるゝ時は百部を購ふべしと一種の賄賂を申込む者もありて斯る小天狗どのは必ず多く購ふて郷黨に頒ち鬼の首でも獲たるもの、如く吹聴するなりといふ。懸賞募集は蓋し此青年の弱點に投せしものにして、就中或る雜誌が曾て高點者の肖像を挿入するをもて啗はせし如き商利に賢

きは恐ろしけれ。さるにても青年の勤勉心を腐らする毒弊はまた頗る恐ろしけれ。

○賣文といふ事人の賤むは怪しき限りなれ。文士もまた米鹽の虫なれば喰はずして焉で美文の業に従ふを得べき。されど時代の最高思想を教ゆるといふ文學を他の商品と感情上同一に見做し難きが故に賣文を極めて鄙きものゝやうに罵れども、博士が講義をして俸給を得、僧侶が説教をして生活する以上は詩文人が操觚に衣食する何ぞ怪むを須たんや。昔しはゴールドスミツス一生負債に追はれて唯だ償却せんが爲め餘義なく著述したり。今は東京諸學校の教科書とさへなりて中外争つて傳稱する“Vicar of Wakefield”の如き其著述の由來を尋ぬれば頗る酸鼻に堪へざるものあり。又スコットがウエーバリー集の如き浩漭の大冊堆をなせども本と己れが關係せる銀行の倒産に餘義なくせられしを聞かば誰か

此天才の數奇を慙まざるものあらんや。渠が病を患ふるも猶ほ筆を棄てず終に原稿紙に對して瞑目せしを詩人の名譽として傳ふるものあれども去りとは詩人の身に取りて有がた過ぎたる迷惑なり。文士の賣文を咎むるもの先づ細さに内部の事情を審かにせば必ずや同情の涙を濺ぐべし。されど己れが虚名を利用して一行の端書をだに錢に代へんと欲するものゝ如きは余の與せざる處なり。

○帝室技藝員を置かれし時廳て帝室文學者をも置かるべきを想像して聖代の徳澤に感泣せし文士ありき。帝室が文藝保護の源泉たるは何れの時代何れの國に於ても然るが故に若し保護すべき價値あるものあらば相當の保護を與ふるも當然なるべし。されど帝室にまれ富豪にまれ保護に依頼するは文士の獨立思想を妨ぐるが故に保護を雲霓の如く望むよりは寧ろ適當の禮遇を以て報酬せらるべきを欲す。我は總ての人爵以外に立つ

を以て文士の面目なりと信ず。

○ドストエーフスキー二十三の時初作あり、時の詩人チクラーツフ之を讀んで大に其奇才を稱し、急ぎ大批評家ベリンスキーの門を敲きてゴリ新に生じたりといきまきて曰へば批評家苦笑して答ふらく、珍らしくもなしゴリはきのこの様に再生するはど。ドストエーフスキーまこと大才なりしかばゴリにも増して名聲を博したれども世には其の様に殖へる新ゴリぞ多かる。殊に奇怪なるは大名を濫用して我は今の誰彼は當時の誰なぞ唯譯もなくしたり顔に罵る事東西ともに多き例なれどもをかしき限なり。我が知れるだけにててもシエークスビヤーと異名せらるゝ人相應に多し、

獨乙のシエークスビヤー(三人)

シ
ル
レ
ル

- 佛蘭西の同じく
- 和蘭の同じく
- 散文界の同じく
- 物語派の同じく
- 小説壇の同じく
- 神學界の同じく
- 雄辨社會の同じく

此外に猶は澤山あるべし。東洋には此光明ある月桂冠を戴きしもの印度のカリダサ一人と覺へしに我が日本にも幾多のシエークスビヤー出現せしを見て驚きぬ。今より十年はど前丸善にて院本翻刻を企てし時初めて

- グロツスマン
- コツチエビユー
- コルチイユ
- ボルデル
- ウォースチン婦人
- ラドクリツフ夫人
- フヒールディング
- テイロル
- ミラボー

近松巢林子を我がシエークスビーヤなりとわがめ、其後イーストレーキ氏は曲亭をもて是に較べ渠が富貴に終りしにも似ず此は却て晩年に盲目となりしを憐みたり。又二年前黙阿彌翁の脚本を讀賣新聞に載せし時坪内氏は翁こそ我が沙翁なりと紹介し、之にて三人となりしに間もなく夏木立出版せられし時金港堂は『或は文界の左甚五郎とも或は東洋のシエークスビーヤとも評判高き』と美妙齋主人を嘖々せり。觀世音菩薩は大慈悲の本願を立て、分身して普く衆生を濟度し給ひしが、沙翁も斯る大本願を立てしにや年月の積るに連れて化現する事何ぞ多きや。羅貫中李笠翁は本よりシエークスビーヤならん、紫式部小島法師もシエークスビーヤならん。さては金瓶梅紅樓夢の著者竹取榮華の作者をはじめ西鶴秋成はおるか岳亭振鷺亭のやから若くは今の雜報先生までが天晴シエークスビーヤとなりぬふせてストラットフォルド、オン、アボンの舊跡もそ

ここに殖へ、信心渴仰の宗徒は三十三番はおるか千百番の札所めぐりに行艱みて五十年の生涯にては迎も巡禮しかぬるを嘆つなるべし。

○隨齋諧話に、

「(上畧)詩は必ず講説を爲すべからず口に出して其意を講ずれば詩は一等わるくなるなり唯よく熟讀してみづから其意のある所を見るべき也(中略)芭蕉の句の中初心には聞得ざるもの少からず是にさまゝの論辨をまうけて解なす者あれども多く其意に的當せず只自ら勤めて深く味ひぬれば多年の後自然に豁然として眼のひらくる時あり」云々
とあり。蓋し詩は文字節奏外に不言不説の妙想を有するなれば、それを會得せんに幾千萬言を陳ぬるも到底効あるを見ざるなり。東坡が靖節の詩を味はんとすれば先づ田園の興を解せざるべからずと曰ひしは畢竟此意味にして、街學の輩が博引旁證して功者振りたる解釋ものを讀まんより

は却て能く細かに咀嚼して靜に箇中の美を味ふに如かず。殊に芭蕉句集に於て然りとす。

○小賢しき男我が許に來りて曰く、釋迦一切の衆生に慈悲の眼を垂れて化度せんどの大本願を立て給へり、若しシエークスビーヤをアポロの再來と爲し此の道の神なりと云は、少くも釋迦と同量の涙を胸中に蓄へしならん。己れ詩の何たるを知らねども假に大別して三種となし、全人類に慈悲を低るゝを上品と云ひ一部に涙を濺ぐを中品と名け一種の性格に限りて愛するを下品と考ふ、其以下唯だ漫然筆を執りて一滴の涙をすら硯池に濺がさるもの果して詩人と云ふべきや否やを知らず、今の小説家の涙量幾何ぞ請ふ聞くを得んと。笑ふて答ふらく、今の作家の涙量頗る多し、試みに説かん乎、製本装釘に苦心するは第一流なり、俗受を心配するは第二流なり、趣向文字に慘澹たるは第三流なり、理想若くは主

張に倂々たるもの、如きは下々の下等なるもの、盛大なる文壇は其人あるを見ざるなりと。問者理解せずして眞摯に云ふ、左様でムいますか。

○螢火ほどのインスピレーションを燃して慷慨激憤殆んど遺瀨なき一論客あり。冷淡なる一批評家は評して曰く、感服出来ないが仕方がなしに感服す。他の白熱せる一批評家は評して云ふ、感服したいが仕方なしに感服出来ない。

○或る批評家あり。涅槃の圖の讚を頼まれて臆て筆執りて書して云く、據なく死に申候と。恐らくは佛徒の唾を吐きて憤る語なるべし。然れども飽くまで人間の弱點を看破りしものとして頗る面白し。

○樂天厭世の語は俗談となりしが此言葉はど笑止しきはなし。樂天がる人の書齋に垂籠めて人生無常を觀するもあれば、口癖に厭世々々といふ人の棋に耽り歌俳諧にすさみて抹茶三昧に日も足らず樂んで朝露夕電を

鼻唄の料とする者あり。何れか東洋に流行する風流病の患者ならざるべき。畢竟社會に活動する力量勇氣を缺くものなれば此語を口癖にするものに限られて大方は社會に一毫の益だも加ふる能はざる白者なり。されど眞に人生を觀じて兩極の高度に到りし者を比ぶれば苦觀する者は概して人間の理想を高め、樂觀する者は時として墮落する事多し。人生を苦觀する者は少くも人間に針鉸を與へ、樂觀する者は少くも人間の弱點に媚びて増長せしむる弊あるを以てなり。西行、元政、芭蕉等は厭世隱遁者の巨擘にして渠等の行實は今日學ぶべからずと雖も其の後世に残せし訓言は以て我等が日常の規箴とすべきもの頗る多し。寧ろ他の嚙飲興樂して裕々として遊べるエビキユリアン先生に勝る萬々。況んや今の茶に耽り俳諧にすさめる徒輩は厭世樂天何れにもせよ風上にも置くべからざるものなり。

○詩人某余が許へ來りし時恰も巻帙座右に堆きを見て笑つて曰く、君が机邊何ぞ雜然たる、然れども書房の齊然として序あるは寧ろ之を厭ふ、架上の珍籍裝潢を盡して却て有用に供するを忘れたればなり、古人謂ふ架上書あり樽に酒ありと、僕如きは架上書なきも酒あれば輒ち足る、請ふ來り見よ机上一卷の唐詩選の外一物をも蓄へずと。恰も當年の郝隆を擬して得意たるが如し。スペクテータに一藏書家深く書籍を愛惜して些かも汚さじと只管大切がりて全く繙かず叮嚀に書匣に藏むる事を巧みに冷諷す。一と口に藏書家は書を讀まず讀書家は却て一卷を蓄へずと云ひ、或者は確に藏書の一巻をだに讀まず所謂目錄學問をして得意なる者あり。近頃詩界の明星某が作りし評語に、諸人争つて奇書を購ふ、鄴架萬卷を以て互に相炫耀す、一時書淫書癡の目あり、未だ玩物喪志の譏あるを免かれず云々と。古人必ずしも多く書を讀まず又た必ずしも蓄へず、

何ぞ詩書の淨机に堆きを要せんや。然れども書に淫すると酒肉に淫し位冠に淫すると何れが優れか。我は寧ろ書淫と云はるゝだけに書籍を蓄ふる能はざるを憾む。

○トーマス、グレイがアルプス山を過ぎるや其友に書を贈つて曰く、
「余は未だ絶大且單純にして余を驚かすに足る美術を見ざりしが自然の美術は余をして意想外に吃驚せしめたり。シャートルースの途上は唯十歩すらも絶叫せずして進むを得ざりき、懸巖と云はず激流と云はず絶壁と云はず、悉く是れ詩と宗教を姪めるものなれば無神經論者も毫頭の議論を借らずして信仰を起すの風景頗る多く、白日幽鬼を見るに狂的の妄想を要せざるなり。爰に世を遁れしと云ふなるかのブルーノは此境地を見て既に異常の人なりしを知るべし。若し其時代に生れしならば余は恐らく弟子の禮を執りしならん」云々

後年有名なるエレジーを作り唯一篇の短詩歐洲全土を震動せしグレイが觀念以て見るべし。喃々たる鳥語涓々たる水聲さては蓬頭垢面の壯士ズボン足駄の職工も皆詩なるべきに、借問す今の詩人、何を苦んで佩文韻府の中より又雅言集覽の中より詩を作り歌を咏まんとするや。
○詩人トランド自ら墓銘を作つて曰く、

Veritatis propugnator,
Libertatis assertator,;

nullus autem sectator aut cliens,
nec minis, nec, malis est inflexas,

(眞理の探討者、自由の保護者、誰人の從僕にも幕下にもあらねば、富貴位冠も是を屈するを得ず……)
如何に任ずる事の高かりしよ。苟くも文藝に従ふ者は正義の公道を踏ま

ば恐るゝ處なかるべし。然るに當た文字を賣ふものとのみ目さるゝは是非なし。査氏の詩に莫認園丁一作園主種花人是賣花人とあり。世に文學者と云はるゝ者にして此賣花先生たらざるは幾人が有る。文士の生活をなすものゝ文を賣るは止むを得ざれども切めては理想地に住して縁日の夜店商人たらざるこそ願はしけれ。

○いつの頃よりか大家なる名目生じて苟めに筆持つ人は大家を以て任す。グラスゴアの博士某(名は忘れたり)が撰びし歐洲文學家年表は大小の區別を立てしが、中世以降大家稱を冠せしものチヨースー以下僅に十二三名に過ぎず。然るに聖代の德澤と云ひながら大家の日に増殖する殆んど涯りなし。誰やらが牛込に杉苗を賣り本郷に大風呂敷を商はんと戯むれしは何ばう笑止しき事ならずや。爰にまた或る秀才は「大家號を返上する書」を眞面目に物されしが、未だ此秀才を大家と仰ぎし人だに

なきに偕ては大家號を無心する一種苦肉の謀計ならめと大笑ひに笑ひし事あり。シルレルは正廉温篤の一市民と身を謹みて己れが匹儔なき大文學者たるを忘れたり。ルーテルは毫も宗教改革者たるを知らず首尾よく改革の功を奏して後人より改革者と呼ばれて初めて改革者たるに心附きしといふ。葛飾北齋は生涯技量の猶ほ足らざるを憂ひて八十餘歳の老後に病蓐に入つてすらも最う二十年の勉強したし切めては十年長生きして見たしと悶へ終には五年なりとも長延びて修行したきものなりと言死にして殮れたりといふ。大家の氣象將に斯の如くなるべし。今の大家は畢竟十歳で神童なるものと同じからざるや。

○今の文壇は年少弱冠の專領に屬す。門外漢が嘲弄する所以は概ね之に原因す。陸放翁は十二詩文を能くし十六既に名を成す。頼山陽が有名なる「蒙古來」を作りしは十八歳なり。バイロンが「チャイルド、ハロルド」

を著はせしは二十四歳、カンパベルが「プレジエア、オズ、ホープ」は二十二歳、ドイツケンスが「ピツク井ツク」は二十五歳、キーツの「エンヂイミオン」は實に十八歳の作に屬す。少年の作豈に侮るべき事かは。然れども年少氣銳の士の多くは早衰挫折し易し。ス井フトが所謂有望の公子愚蒙の君王に終るもの文界亦た決して其例に乏しからず。老鷲の槽檻に殞るゝを笑ふを休めよ、却て是れ昔日天上の麒麟種なりしを鑑みて以て自家の誠となせよ。

○理想派と云ひ實際派と云ふ殆んど區別なしと云ふものあり。佛露の實際派といふもの、例へばゾラ若くはドーデの如き或はトルストイと云ひドストエフスキイと云ひ寫眞師が寫眞を撮影すると同じ意味の寫實にあらざるなり。一箇の理想若くは主張あるも決して之を其表面に現はさず理想派のすなる如く實際世界にあるまじき結構を作らず総て性格を實際

其まゝに描寫す。之に反して理想派は必ず高上なる極致を直ちに性格及び結構の上を示し時としては實際と離るゝも決して避けざるなり。然れども今の作家を目して實際派といひ理想派といふは餘り仰山らしくして有様に云はゞ爾く區別して稱するだけに進歩し居らざるが如し。今の諸作の如き多くは數十年前の戯作の翻案にして西歐の文學者が頻りに論及するものと同じの價値あるにあらず。唯だ二三を除けば果して不朽に傳ふべきものなりや否や——否な恐らくは一年の壽命だにあるもの極めて稀なるべし。昔しはベリンスキイ佛のデユマを目して新聞雜報記者なりと罵りユーゴをすら唯だ若干の詩趣を解するのみと冷視したりき。夫れ物臭太郎、繪師の草子の昔しよりゾラ、ドーテの作に到る、小説とし名けらるゝもの數十種。唯だ一方に偏して狹隘なる定義を小説に附するは偏癖を免がれざれども僅に新聞小説を書きし者が或は實際派と稱し或は

理想派と號す、誠に捧腹絶倒すべき哉。

○“Canons of Criticism”の序に、其著述よりは名を以て聞えたる——其著述は讀まれしよりは寧ろ知られたる人と争ふは第一の不利不幸なり云々。批評に従事して此感を抱きしもの恐らくは少からざるべし。

○爰に十八世紀の頃倫敦雜誌に筆を採り猛威を文界に奮ひしケンリックと云へる強者あり。世に完璧なしと悟りて眸銳をくわらゆる新洋を罵るをもて愉快を購ふ不思議の曲者にして時の文人鬼の如く嫌ひしが、其筆鋒銳利にして毛筋ほどの瑕瑾を目付けて錐を揉む如く評せしかば、博識なるも精勁なるも是に敵するはなかりき。殊に不思議なる健筆家にして恰も出版物と競走を試みる如く、新著世に出づるや否や忽ちに其評を作り、當時の著作家凡そ如何なる名譽の者なりとも毫も假借する處なく無

遠慮にも皮肉なる極烈酷まりし文字を縦横に振廻し、其巧妙なる嘲弄と快絶なる毀言を錯綜して作家を惱まし。偶々反駁せらるれば直ちに其反駁文字を訓練して自家幕中の卒となし以て反駁者の中堅を破るの才を有し、誠に文壇稀有の將材と一時は讚嘆して褒めはやしけり。ジョンソンの“Tour to the Hebrides”を評して「斯作者は一寸覗きたるばかりなれば少しも面白くなし」と嘲り、ゴールドスミスの“the Traveller”を纖弱なる小詩と罵り、又其の“The Deserted Village”を「可成の出来なれど想像も氣韻も天才も火氣もなし」と躰よく破りしなど八方に當り散らして無敵なる詬辭を逞しふせしかども之に抗するは蝮を釣るの計に似たるをもてジョンソン、アケンサイド等は忍んで常に知らざる擬をなせしが、正直無類のゴールドスミスは堪りかねて絶叫して曰く「公衆の面前に受けたる此損害を法律は何故に保護せざるや。彼等は卑劣の白者なれば反

駁するを値ひせずと雖も賤んじて沈黙するは到底毀損せられし名譽を回復するを得ざれば詮方なくも法律の援助を借らざるべからず云々。ケンリック、是れ又一人物なりのジョンソン、アケンサイド、ガーリック、ゴードスミツス等の名士頻々として現れし中に立つて、冷罵冷笑衆多の名流が腦裏を錯亂せしむ。然れども惜むべし、彼れ此の異才を蓄へて猶ほ今日に名を留むるを得ず、僅に一時文學海を噪がせし鱈魚と爲つて終りぬ。冷罵冷笑妙ならずるにあらざれども、沈黙の冷罵冷笑は却て百倍の妙ならずや

(自明治二十三年十一月至明治二十四年六月)

筆隨 落 葉

○誰なりしか支那の四大奇書に倣つて日本四大奇書を撰びし人あり、曰く里見八犬傳、曰く梅曆、曰く田舎源氏、曰く膝栗毛。我が是まで讀みしもの、中にも拍案妙を稱へしは此の所謂四大奇書にあらざして、却て他の數種なり。

- | | | | | | |
|---|---|---------------------------------|---|---|--------|
| 一 | 代 | 男(西鶴) | 胸 | 算 | 用(西鶴) |
| 五 | 人 | 女(西鶴) | 置 | 土 | 産(西鶴) |
| 一 | 代 | 女(西鶴) | 禁 | 短 | 氣(其碩) |
| 傾 | 城 | 買一筋道(谷峨) | 名 | 代 | 紙 |
| 天 | の | 網 | 博 | 多 | 小 |
| 河 | 原 | 達 | 總 | 籬 | 郎(巢林子) |
| | | 引(作者中村重助とあれども實は詳かならず、或は巢林子の逸作乎) | | | 籬(京傳) |

絹 飾(京傳)

客者評判記(三馬)

まげく千話(京傳)

大よそ是等は是れも是れも感服したるものなり。就中一代女及び天の網
嶋の二書は匹儔なき傑作として永へに傳はるべし。

○黄表紙時代に南仙笑楚滿人ふと仇討物を著はせしに意外にも俗耳に投
じて作者競つて仇討を書き出したり。京傳の如きすら十數種を作りしは
どなれば當時の流行は想像すべし。其のなかに仇討に寄せたる滑稽物も
少からざりしが、大方は茶番染みて馬鹿々々しき限りなり。獨り最も珍
とすべきもの全交が遺せし案を三馬が綴りし「敵打たず」と題する三冊物
なり。當時の楚滿人一輩が仇討物の趣向悉く一轍に出づるを冷笑せし
極めて笑止しき作なり。且つ他の黄表紙に比較べて冷刺骨に徹するもの
頗る多し。物語の筋は、仇討物を飯よりも好める嗚呼の男あり、到頭仇

討がして見たくなりて實地に出掛け、有りど有らゆる仇討の趣向を自ら
試みて到る處に失敗する眞のグレハマのどんちんかんを頗る平易に、加
之も頗る冷淡に描寫したり。蓋し我が國に於ける小ドンキホテにして誠
に拍案を値ひする珍什なり。惜い哉、其書今に傳はらず。所藏する人頗
る少なし。

○黄表紙は安永天明より文化頃まで流行す。黒表紙の後にいでたり。近
く御維新前まで行はれし合巻様の五枚綴二冊或は三冊ものなり。黄表紙
の面白きは滑稽及諷諷にて其奇想は蓋し歐米の文壇に見ざるものなるべ
し。三馬、一九の徒輩滑稽を以て鳴れども淵源は黄表紙にありて趣向大
抵黄表紙作者の範圍に出でず。例へば膝栗毛の如き或人より四大奇書に
數へらるゝに係はらず其趣向は總て黄表紙に見えたる趣向を剽竊したる
ものなり。一々出所を擧ぐるに難からず。黄表紙作者は戀川春町、芝全

交、平澤喜三二、唐來三和、市場通笑、櫻川慈悲成を主として其外數多し。其中最も高名にして永く文學史に残るべきは、

金々先生榮華之夢(安永四年)

高慢齋行脚日記(安永五年)

南無大通佛開帳(天明年中)

善惡邪正大勘定

芝居好めくら仙人めあき仙人

むかし〜、嘶問屋

口合兄弟

江戸生浮氣の蒲焼(寛政九年)

孔子縞時に藍染(天明九年)

絞染五郎剛勢談(文化五年)

春町

全交

全和

三笑

通町

好成

慈悲

京傳

全

全

右の中最も有名なるは金々先生と高慢齋にして、金々先生の出版せられし時は板元の店頭に顧客の山を築きたりといふ。今の南新二及び幸堂得知の二子は此脈を傳ふるものなり。然れども二氏の如きは唯だ黄表紙の舊套を摸擬する外獨特の意匠なきものなり。

○安永の『菊壽草』に載りたる黄表紙にて、其高點なるものは、

極上々吉

大上々吉

功上々吉

又寅歳の「岡目八目」にて高點なるは、

極上々吉

大上々吉

又亥歳の「江戸土産」には黄表紙中頗る有名なる従夫以來記、長生見度記、

見徳一睡夢
大ちがひ寶船
桃太郎一代記

景清百人一首
御存商賣物

太平萬八講釋、萬象亭戲作濫觴を載す。

○享和二年の「花折紙」は、シャレ本俗に蒟蒻本と稱するもの、評判記なり。其高點なるものは、

極上々吉

極上々吉

太上々吉

至上々吉

傾城虎之卷(金魚)

四十八手(京傳)

八算總(京傳)

聖遊廓(無名氏)

總卷軸

眞上々吉

游子方言(田舎老人)

三和の三教色及び和唐珍解、一九の野良玉子、三馬の辰巳婦言、谷峨の白狐通等、悉く此中に見えたり。此時分の批評物なるべし。中々に穿ちたる處もありて面白し。

○シヤレ本の名人は京傳なるべし。總籙以下十餘種悉く面白し。之に次ぐは三馬なり。其の辰巳婦言、船頭深話、船頭夜話の三冊は三馬作中の五指に屈すべきものなるべし。谷峨の二筋道に到つては眞情流露せるものあり。蓋し獲易からざる傑作なり。

○或人梅室の「風吹かぬ方に行燈ねぢ向けて」の句に脇を作らんとて種々推敲すれども適句を案するを得ず。漸く「馬に召せよと蒲團投出す」の句を考へ出せしが、猶ほ安んずるを得ずして去つて蒼虬に量る。蒼虬即下に筆を執てさら〜と認めて曰く「去らるゝ覺えないとゐすはる」と。某大に喜び二句を以て梅室の許へ行き示したりしに、梅室數度吟じて曰く、我が句の脇としては「去らるゝ覺えないと居座る」の句は動かぬ案なり。然れども此句を案する者は當今蒼虬一人なり。足下輩の作り得るものにあらずと。即ち「馬に召せよ」との句を採て其脇とす。此逸事の眞偽

は知らねども面白ければ人の語るまゝ。

○今の正風俳諧をして無味淡泊白湯を呑む如くならしめしものは嵐雪の罪なり。鄙俗軽淺ならしめしものは其角の罪なり。悟道めかしく禪臭からしめしものは支考の罪なり。此三子は芭蕉の忠臣にして而も又芭蕉の賊なり。

○此頃讀みし古人の俳句中、

ちやんがらくゝあはゝおほゝの花の山(來山)

寐てゐよが起きてゐやうが花の春(西吟)

花化けて目鼻ばかりや幕に聲(高政)

餘りに笑止しければ書留めたり。談林の句は得て無法に流れ易し。

○犬筑波集の言語道斷なるは斯様の句ありと擧るさへ憚かるものあり。或る一節は慥に風俗壞亂の價値あり。俳諧者流が高遠を銜はんとして大

口叩くは珍らしからねども餘りに沙汰の涯なり。此頃涉りし集の中に、

何者のひりちらしたる道の屎(花つみ集)

雨のをとしのをつくとは此夜なり

亭主にかくすえんのせうべん

作者の俗情誠に推しはかるゝ。

○千代尼の團扇の賛といふものあり。何の書にあるやを知らず、千代句集外二三の俳文集にも見えず。

菩提の螢は招けども來らず

煩腦の蚊は拂へども去らず

いぞき團扇を棄てゝ

一向に他力尊とし蚊帳の内

○戀の句を作るは難しと聞く。人情の弱點なるが故に心の見透かさるゝ

事多ければなり。こは獨り俳句の上のみにいふならねども爰に試みに俳句の例を擧げて云は、

むし干に小袖着て見る女かな

蟲干の目にたつまくら二つ哉

冬文
文瀾

姿は全じなれども情は大に異なりて後者をよみし人の俗腸推し量らる。戀を描くは例へば裸體像を作るが如く、戀それ自身は決して鄙しきものならずれども寫法の如何に依りて或は人の感情を刺激する事あり。和歌及び漢詩はいくらか俗氣をはなれたれども是れすら聞怨と云ひ或は聞をかこつなどは面白からず。李白が何時平胡虜良人休遠征の如き千代が「起て見つ寢て見つ蚊帳のひろさ哉」の類は情深くして更に卑俚ならざるを覺ゆ。然るに我が俗曲小説を見るに戀をもて野合と全じ事となし讀者の感情を汚し、肌觸るゝトカ腹帶トカ嫌ふべき文字を列ふるをもてよ

しと考ふるは風俗を亂す事少からざれば道德先生の爪はじきするも無理ならず。筆を操るもの宜敷謹しむべきとなり。

○延寶頃の流行唄なるべし。

『三谷堤下に大きな奴が棄てゝある。さだめしゝきんきめ細かで

ごんぢやるからは女郎の子でごんぢやるべえ。』

愛鶴軒の主人より聞きたれば何かの珍書にあるなるべし。當時の江戸詞を交へたれば頗る面白し。

○元祿文學復興につき元祿前後の古書俄に價格を生じ露店に晒されたるボロボロ本までが不相當に賣れたり。例へば吉原つね々草が僅に五枚綴の本にて二圓五十錢に賣買さるゝが如き紙一枚の價が五十錢なり。殆んど骨董相場なり。流行古書の原價を參考の爲め示すべし。

貞徳家集(五冊)

七 夕

京	京	京	七	新	人倫	江戸	江戸	江戸	し	一	二
わらん	羽	比	人	可	訓	戸	戸	戸	か	代	代
べ(六冊)	二重(六冊)	丘尼(三冊)	比丘尼(三冊)	笑記(五冊)	蒙會(七冊)	鹿子(八冊)	すいめ(十冊)	總鹿子(八冊)	た	男(八冊)	男(八冊)
三	四	一	一	三	四	五	九	五	三	五	四
三	四	五	一	三	四	五	九	五	三	五	四
三	四	五	一	三	四	五	九	五	三	五	四
三	四	五	一	三	四	五	九	五	三	五	四
三	四	五	一	三	四	五	九	五	三	五	四
三	四	五	一	三	四	五	九	五	三	五	四

三 代 男(五冊) 三 匁
一 代 女(五冊) 三 匁五分
五 代 女(五冊) 二 匁八分
文 反 女(五冊) 二 匁五分
俗 反 古(五冊) 二 匁八分
是等の諸書が廉きは三圓、高きは十圓以上に賣買せらるゝは一つには少
きが故なるべしといへども一般好奇熱の亢進に原由す。一時の流行なる
べし。
○されど一時の流行といひながら西鶴が讀書社會を奮ひし勢力は凄まじ
かりき。文字に縁なき輩までが何かは知らず西鶴を日本に稀なる大豪傑
の如く思惟したりき。之につき面白き評も種々ありしが或る總明なる人
の評最も笑止しかりき。曰く、西鶴の文は太き銀の繩をねぢりたるが

如しと。此人は極めて潔癖にして恐らく西鶴の好色本と相容れざるものなれども其聲の餘りに高さに聞怯ちして思ふまゝに口外するを躊躇せしなるべし。

○西歐の小説家にて最も盛に噴々せられしはユーゴーなるべし。ユーゴーの翻譯日本に現はれしは蓋し三日奇變英雄之肝膽を以て初とす。其當時は格別に人の注意を引かざりしが森田氏隨見録を譯し依田氏の贊評を得、次で探偵ユーベルを譯し長谷川氏の嗜好書目の中に撰拔せられ。ユーゴーの名遽に文壇を聳動せり。今は十年の昔となりしが織田氏の花柳春話出るやリットンの名は在來文學者の耳朶を驚かし關氏の春鶯囀出で、デスレリーの趣向は幾多の政治小説を産出したり。此三氏は歐洲屈指の文學者たるに相違なければども歐米の文學は決して此二三氏に止まらず。邦語に譯されしもの、中にすらシエークスビーヤありヂツケンヌの

りカルデロンありシルレルありツルゲーネフありドストエーフスキイあり。其他猶ほ好譯本あれども曾て一人の稱讚する人なきは何故ぞや。數年前に自由を主張せし急激論者縦横せし時デュマの 'Twenty Years After' (譯名忘れたり)を譯せし者ありしに四方賞讃して措かざりき。其後關氏は之よりも一層面白きデュマのモントクリスト(西洋復讐奇譚)を譯されしが案外にも顧みるもの極めて少なかりき。報知新聞の新嘉坡通信の欄を設け森田氏の初めて健筆を奮はるゝやアラビヤ物語の如き奇異談若くはベル子の著の如き變幻を以て西洋小説の本色と考へ月世界一周、海底紀行等の理學小説を愛好するもの頗る多きを效したり。黒岩氏の今日新聞紙上にガボリアー及ボアスゴベイの著を譯し初むるや探偵小説は最も進歩したる文學と心得るものさへありて、涙香物は即ち流行物なりと譯名附けられしほど聲名隆々として天下を動かしたり。著述にも遇

不遇は常と云ひながら坪内氏がシエークスビーヤを長谷川氏がツルゲ
 テフを福地氏がシルレルを森氏がカルデロンを紹介せしに之を賞翫する
 人少なかりしは誠に歎すべき哉。書肆某の話に發兌以來購客の絶えざる
 は鐵腸氏の雪中梅なりと。又赤木屋某の話に新聞小説にて都鄙の評判
 最も喧かりしは繪入新聞の淺尾岩切眞實競なりしと。又曾て英國某圖書
 館の統計を見しに最多人の借讀するは則ちアラビヤ物語なりき。又同
 じ國の某書肆の報告に依れば失樂園詩は一年の購買者僅かに十指に滿た
 ざりしといふ。いづくも變はらぬ事と見えたり。
 ○沙漠の中にピラミッドを描くに、唯だ三角形の塔を描きしだけにては
 絶大なる大きさを知るべからず。是に於て若し黒人と駱駝とを副ければ
 其比較物を得てピラミッドの大きさ初めて知らる。又波濤を描かんとす
 るに唯だ汪洋たる水のみを描きては波濤の強大なるを知る能はず。是に

於て乎、輪船又は飛禽を點景して初め太洋の浩蕩たるを知らしむるに足
 る。文を屬する將に之と同じかるべし。例へば楠公の忠を現さんとする
 には其盡忠を寫すよりは寧ろ尊氏の奸惡を描きて相反照比較するに如か
 ず。山岳の嶮を現はさんとするには湖水の平かなる或は麋鹿の裕々自適
 する態と相對照せしむべし。又夕陽の景を寫すに日は山の端に入らんと
 し晚鴉森に噪がしく歸心矢の如き時落花の風なきにヒラ〜と散るを、
 或は隅田川堤上精神錯亂混雜して迷土の旅をいそぎ南無阿彌陀佛と唱ふ
 る時金龍山の鐘靜かに初更を報ずるなど矢の如き歸心をして愈々矢の如
 くならしめ錯亂混雜したる精神をして益々錯亂混雜せしむ。是れ古來よ
 り作者の慣用したるものにして忙中閑を出せば忙をして愈々忙たらしむ
 るの妙あり。お染久松質屋の段に「今を限りの暇乞佛前には親太郎兵衛
 看經の聲殊勝なり」とありてお染久松が焦心苦慮將に死なんとする百忙

の中に緩乎としたる看經の聲を出したるは作者が最も意を用ゐたる處なり。此頃思軒居士の譯「探偵ユーベル」を讀む。其中拍案の句あり、「此紛擾の聲激く起れる中に於て朗讀者は少むを得ず更に其聲を高くせりラツチール朗讀しをれりマター之に一枚ヅ、紙を渡しをれりゴロワ井ズ蠟燭を舉げてラツチールに傍へたり蠟燭の蠟は滴々テールブルの上にしたれり」

是れ紛擾の中に落付拂ひたる蠟燭のしたるを出せしは筆力最も非凡なるを見る。楠柯夢に半七自殺の回にお通を、仙臺萩飯焚の場に鶴千代を、近くは紅葉の京人形第八回に永代を出したる如き對照の最巧なるものにして作者要領の深きを知るべし。

○魯敏孫クルソーの名は早くより我が國に知らる。今は小學兒童すら能く其名を諳んず。此書は如何にして乎著はされたる。デフォオーの一生

を案じて此書を考ふるに斯の如き不平に日を送りし人の著なれば或は世路の困難を寓し自育自治自養自衣の理を諷せしものなりと云ふもあり。或は作り物にあらで實事を記せしなりと云ふもありて諸説紛々たりしが著者在世の日は全く著者が想像より成ると信せられき。然るに其歿後及んで世間眞にロビンソン、クルソーあるを發見せり。即ち其人はアレキサンダー、セルカークにして魯敏孫漂流記の一篇は悉く其履歴より成る。セルカークはジュアン、ファーンデスなる無人島に獨棲し千七百十二年に旅行記を出版せしクック氏の一行の爲に見出されて終に其冒險事業を世に顯はせしが、頗る奇事異聞に富みたるは史傳類典に見え、船長バーネイ氏も又是を編輯したり。ロビンソン、クルソーは實に此セルカークの冒險記事に胚胎す。クック氏が初めてセルカークを發見せし時は渠が山羊の皮を着したる様は皮の初めの所有者即ち山羊其れ自

身よりも粗野に見えたり。渠は二つの小屋を作りて一を寢室となし一を庖厨となし山に狩り海に漁り或時は農夫となり或時は陶工となり或は讚美歌を唱ひて神に祈り、或は山羊を牧養して其肉を喰ひ其乳を飲みて生活したり。是等悉く漂流記の材料たらざるはなし。セルカークの冒険紀事出版の後一年スチールは大に注目して自らセルカークを訪ひ、世間未だ聞知せざる異事を千七百十三年十二月出版の「英國人」(雑誌の名)に投寄せり。其記する處に依れば「セルカークは其動作より考ふるも暫らく人界を隔離したる事を判然證すべく容貌は頗る嚴肅なれども何處となく愛嬌ありて威を添ゆるに足る常に沈黙して深く考ふる處あるが如く左右のものに注意せず屢々最早孤棲の安穩を樂しむを得ず」と嘆息して大に人界に歸りしを悔めり」と。スチールは再び此野人の珍らしき變化を附加して曰く、「余は數月の後道路に渠と邂逅し渠は余に親しく話掛し

が余は其何人たるを憶出す能はざりしほど渠は都門の空気を吸ひ次第に雅びて全く動作の孤島の蠻風を帯びたるを失ひ粗野なる容貌は惣て變せり」と。此等即ちデフオーが著作の種子とも云ふべきなり。然れどもデフオーが著作も偶然に現はれたるものにあらず。氏は其政事上の争に繋累して禁錮に處せられ、獄中にて病に罹り憂鬱苦惱徒らに呻吟して慰むる人なく、其果は終にセルカークの孤棲を思出し、スチールが精細なる記録も胸に浮び、鐵窓の別界をセルカークの無人島に比し、追懐餘りあつて獄を出るの後天資の文才をもて作りしは即ち魯敏孫漂流記にしてセルカーク世界に出でしより七年後千七百十九年なり。然れども斯の如く全く實際の事實談にして想像にあらざるが故に價値なしと云ふは非なり。當時の記録に依ればセルカークの事蹟世に公けになりて之を記述し或はせんと試みしもの多きに係らず一人として成効せしものなくデフオー

一の筆に依て百歳の後までもにクルーソーの奇聞と共にセルカークの名をも傳へ得たるもの豈に渠が達文の致す處ならずや。デフォー漂流記を書きし時五十八歳なり。

○フルベツキ先生曾て語るらく、貝原益軒は日本のアヂソンなり。蓋し益軒の文は明晰平易にして機智談諧に富み極めて瑕瑜少きはアヂソンの文が完全なる英文をもて評家に許さるゝと同じく完全なる日本文にして以て理想的日本文となすべきものなりと。外國紳士の評なれども蓋し肯綮を得たるものなるべし。

○アヂソンの文章は紳士らしき文章にして今の英文に比較すれば較や冗漫の嫌ひあれども亦頗る敬誦するに足る。其諷諭の如き極めて温健にして常に道德的教訓を含蓄すれば以て座右の箴言とすべきもの多し。スペクテートアが中村敬宇先生の愛讀書たりし如き偶々其性質を知るに足

るべし。

○ス井フトの文章は男性的にしてアヂソンが女性的なると全く相反す。

ジョンソンの評あり、曰くス井フトの文は之を喩ふれば峻坂を登るにあらず、深谿に下るにあらず地盤堅き坦路を障礙なく疾走するが如しと。

ジエツフレイ又評して曰く、ス井フトの文はドライデンの如く爛熟せず

ポーブ或はアヂソンの如く流麗たらずポーリングブロークの如く高潔な

らず一言すれば古文學者の高尚醇雅を缺く、然れども巧妙なる反語を用ひて謔浪する伎倆に於ては恐らくは世界の文壇一人の匹儔するものな

るべしと。此二評語は能くス井フトを知るを得べし。ス井フトの反語を用ゆる伎倆の眞に古來稀なるは其「基督教廢止抗議」の快痛なる冷罵が今に到るも猶ほ基督教徒をして憤恨せしむるを以て知るべし。

○ス井フト集中「ガリバル」と「テール、オブ、エ、タツプ」の二大傑作は措

き、小品中にては「基督教廢止抗議」及び「千七百八年年々報」の二作なるべし。殊に前者は幾度繰返しても飽かざる名文章なり。深刻なる諷刺の修辭上の價値を認めしは余實に此文章に於てす。三馬風來を隨喜する者の如きは未だ共に談ずるに足らざるなり。

○アヂソン歿する時「善良なる基督教徒の平和なる終焉を見よ」と遺言して靜かに永眠す。ス井フトは爪を噛みて「我が遺産を擧げて癡狂院に寄附せよ」と罵りつゝ逝く。二者が性質の異なる之を以て知るべし。ス井フトは小學校時代より嘲諷の才を以て聞え其學窓に在るや教授役員等の苟くも意に協はざるあれば演説文章を草して冷嘲痛罵す。皆其小憎らしき才智に舌を卷かざるなし。其講壇に立つや詭辯を奮つて聽衆を懾動し奇言奇論殆んど端睨すべからざるものあり。スコット其傳を作りてシーザーがカツシアスを形容せし句を以てス井フトの傳讚としたり。曰く、

He is a great observer, and he looks quite through the deeds of men.—
Seldom he smile, and smile in such a sort, as if he mock'd himself,
and scorned his spirit, that could be moved to smile at anything.

○東西古今の文學者は常に默せり。詩學の祖希臘のパーシルは平生愚人の如く一見して其大詩人たるを想像する能はざりしと。佛國第一の戯曲家コルチエユは筆を取れば人情の微を穿ちしが自國の言葉だに濫りて正確に話すを得ざりしと。デカルトも口常に重かりしかばある人は渠の智囊に充つるものは流通貨ならで金棍なりと評せり。アヂソンも衆人の中に濫りに語らず、其觀察せしものは總てスペクテーターの紙上に顯はれたり。一代の詩宗にして其作長く師表となりしラ、フォンテインは頗る吶辯にして見聞せしものだに語る能はざりしと。ある人評して曰くフオンテインは秀才なり愚者なり、智愚併有してニツながら其の極に達す

と。演説的文章を以て高名なりしイソクラテスは公衆の面前に出づれば臆して一語を發するを得ず、常に曰く余は砥石なり自ら切る事を得ざれど他物をしてよく銳利ならしむト。チヨーサーも頗る談話に拙にしてペンブローク伯爵夫人曾て戯れて曰く先生は口を開かんよりは寧ろ黙するに如かずと。ドライデンも自ら曰へり余の談話は遲緩鈍拙にして滑稽は最も平手なり一言するに余は會席に興味を助け群客に歎語を與ふるの人にあらざるなりと。其他ゴールドスミスもグレイもスチールも近くはスコットもサツカレーも最も訥辯なりき。我國に於て見るも西鶴其碩は知らず。近き京傳、三馬、一九等概ね訥辯なりしもの多し。作りし處を見れば玲瓏玉の如し、しかも其人は愚にちかし。今の文學者は之に反して多くは高聲笑語快辯流るゝが如し。文學既に珠玉、咳唾亦珠玉、誠に盛んなる哉。然れども飲中の八仙中、高談四筵を驚かせしものは大い

なる詩人ならざりし事を記臆せよ。

○高名なる人の傑作とし聞えたるを黒表紙振りに月旦せば、

(1) 櫻癡居士の「もしや草紙」は龜葛の大風呂敷の如き乎。社會の塵芥を包むには丈夫にして之に過ぎたるはなし。

(2) 東海散士の「佳人之奇遇」は糊の強き羽二重の羽織に似たり。ピンとして一帳羅となり儀式張たる席にも着して恥かしからず。されど瞬く間に羊羹色となる時は、べろ、べろとして着心快ならず。

(3) 鐵腸居士の「雪中梅」は瓦斯糸織の縞物の如し。何れ職人どもには向きの善さうなる品なり。

(4) 龍溪學人の「浮城物語」は千住羅紗にて仕立てたるフロツクコートの如し。柳原あたりで一度賣物に仕立て、買手のなきに持ちあつかひたりと噂あり。されど南洋あたりの宴會には無くてかなはぬ品なるべし。

(5) 春の屋大人の「書生氣質」は紀州子ルにて縫ひたる西洋寐衣の如し。
 ダブとして縮りなければ着心よしと珍重するもの少からず。
 (6) 竹の屋主人の「商人氣質」は古代更紗の下着の如し。柄合は頗る濛きやうなれども下着なれば誰にも解らず。其代り大切に藏つて置けば色の褪める心配も地が切れる憂もあるまじ。
 (7) 鷗外漁史の諸作は絹莫大小の肌衣の如し。肌觸り和かに縮りよく体裁も上品なれども豈夫一枚では道中もなるまじ。
 (8) 紅葉山人の諸作は紺屋の小紋帳の如き乎。中には慄へつくほど氣に入りたるもありて兎にかく婦人どもは見惚れて手離しかぬるべし。
 (9) 露伴子の諸作は道明の店に下りさうな古錦纒の如し。品物は尊けれども處々に損下ありて第一實用にはならず、好事家か寺方ならでは向かぬものなり。

10) 硯友社諸子の作は鹿子絞りの頭かけ位のものなる乎。可愛らしい娘さん達に喜ばるゝが儲けものなるべし。

(自明治二十二年至明治二十三年)



詩文の感應力

十論爲辨抄に曰く

感仰は文章の餘情の哀怨なり、たとへば艶書の千束なるも思といふ字の外はなしとて思ふくと百枚かきやるとも人の心の露動くまじきを浅茅が宿に立しのび雲井のよそに思ひやりてとは人を動す詞のあやなり、浅茅も雲井も何の用なるや爰に無用の用といふを知るべし云々。假に此説の如くんば白居易の文は最も人を感動せしむるものなるべし。然れども甌北曾て評せし如く香山の句は坦易にして眼前の景を寫せし巧妙は韓孟に優れども畢竟綺語麗句のみ。當時海内を風行し妾婦牛童盛んに之を唱道せしは偶々浮華なる輕俗に投せし故にして、豈に青蓮の飄逸、少陵の沈刻、昌黎の雄鷲と共に語るべけんや。

曾て美術展覽會にて刺繡の屏風を見る。繡金色彩眩然として眼を奪ふ。然れども美麗と云ふ外は一の感念も浮ばざりき。又曾て牧溪が瀟湘の圖を見る。淡墨を以て遠山遠水を描きし神韻縹緲として佇立久しきを覺へざりき。思ふに刺繡の屏風は是を竣功するに少くも百餘日を費すべく、而して其勞心刻骨は牧溪が舐筆輒成と全日にあらず。然るに其精巧美彩は人を感仰せしめずして却て粗末なる一幅の能く恍然たらしめしは何故ぞ。蓋し雕琢を以て望むべからざる神韻其中に存するが爲なり。香山の文字は例へば刺繡の屏風の如し、其勞心刻骨其精巧美彩は李杜韓に勝れども、所謂神韻に乏しければ唯妾婦牛童を喜ばしむるに過ぎざるなり。然れば爲辨抄の説は誤れる乎。浅茅が宿に立しのび雲井のよそに思ひやりて等の詞なくとも思ふくとかきて人の心を動かすべき乎。若し然らんには桃太郎、花咲爺等の兎園小説こそ天下の名文章と許さるゝなるべ

し。蓋し牧溪の神韻は之を牧溪に望むべくして他の凡庸の人に求むべからず。強て求めんとすれば一抹の淡墨唯紙絹を汚すのみにて神韻はおろか瀟湘の圖をも成さざれば却て葛嶺山水の寧ろ山水らしく見ゆるに如かず。之に反して刺繡は縱令其精巧を極めずとも色彩の美は多少人目を喜ばしむるものあり。爰に於てか知る詩文の感應力は唯だ辭達にあらずして爲辨抄の説も誤にあらざるを。思無邪の一言を以て蓋ふべき詩篇三百の多きに及ぶも又此故にあらざる乎。

今俳諧語を借りて詩文を説かば詩文の主たるもの二あり。一を風姿と云ひ一を風情と云ふ。風姿を以て主とするは輕浮淫靡に流れ易く風情を以て主とするは無味乾燥に傾き易し。續五論に是を世上の人に喩はゞ辨舌才の人赤裸にて玄關にかしこまりたらんに何の使者か勤まり侍らん綾羅錦繡を身にまとひたる人の耳疎く舌短きは風姿ありて風情なき云々

とあるは此兩極弊を併論せしものなれども仔細に此二點を比較すれば感應力に於ては大に度を異にす。風姿を以て主とせしは縱令婉麗綺華なりとも唯だ人を喜ばしむるのみ。風情を以て主とせしは縱令乾燥無味に陥るとも猶ほ其心志を感働せしむるあり。世の所謂慷慨激昂の士が胸中の鬱積を洩したる詩歌は多くは蕪雜陋拙にして見るに足る者なきに却て讀む人をして扼腕墮涙せしむるは則ち情を以て主としたる詩歌の感應力なり。武侯の出師表と退之の祭三十一郎一文とを比較すれば何れか感應力に富めるを知るべし。武侯文に精しとするも豈に退之が天稟の奇才に及ばんや。然るに平易の文字を臚列して千載の下懦夫を振起し勇者をも歎歎せしむる事退之よりも深きは其忠憤の氣慨效す處にあらずして何ぞ。胡澹菴の封事も文天祥の正氣歌も單だ文字を以てすれば何等の價値あるにあらざるなり。

和文及和歌が雄大莊重に乏しきは風姿を専らにせしを以てなり。試に
次の二首を見よ、

都をばかすみと共に出しかどあきかせぞ吹く白川の關(能因)

都にはまだ青葉にて見しかども紅葉ちりゆく白川の關(賴政)

前者は風情を讀み後者は風姿を咏せしものなるが一目して能因の勝れる
を知る。長明の如き其の瑩玉集に歌は風情よりも風姿をもて貴しと論じ
たるほどなれば、文章も是と同一規に陥るは詮なけれども一代の傑作方
丈記すら猶ほ文飾の爲に氣魄を失ひし處多し。如何に悲慘痛惻の句を重
ぬるとも若し風情を缺けば是れ偽飾の文字にして愛すべくとも敬すべか
らず、喜ばしむるとも感せしむる能はず。

ポーブは綺語造句を以て聞えたり。然れ共イリヤツド及オドイツセイ
を譯すや終に精神を移すを得ずして、批評家の推獎を得ざりき。傑作ぜ、

レーブ、オブ、ゼ、ロツクの如き今に到りて猶ほ詞人に垂涎せらるれど
も感應の力は却て無雅の書生に愛さるゝスコットの湖上佳人篇に劣る。
ジョンソンがドライデンとポーブとを比較せし中に一は心の思ふまゝに
書き一は章句に縛らるとあるはポーブの缺點を觀破せし言にて流暢艶麗
なりと雖も纖弱にして感應の力毫もなし。

又スウ井フトを見よ。其趣向は或はラベレーを襲踏せし者もあらんが、
文辭の奔騰して且壯快なるは英國文學の第一とす。渠れ元より諷刺に巧
妙なれども其巧妙を逞ふし王侯貴人を戰栗せしめしは即ち平易にして氣
骨ある文字ならずや。人は疎笨と之を罵れども尋常凡近の文字をもて自
在に強硬なる嘲罵を加へしは滿腔の不平盡く筆頭に迸逸せしを以てな
り。高尚嫺雅の質なく婉麗優美の句に乏しけれども平凡の文字を使用せ
し巧妙に於ては古今隨一と平生許可少なきジョンソンすら盛んに之を稱

揚したり。

されば爲辨抄の説は誤にあらざるも風姿を専らとし塗飾を事とすれば却て感應の力を失ふ。魏叔子が可和柔不可靡弱と云ひしは即ち此通弊を戒めし言なり。

之を歌曲小説の類に求むるに中情より發したるは感應に富めども粉抹を主としたるは淫靡輕浮に陥り娼婦俗子の玩弄となる。例へば馬琴の如きは輕俗の文字を作りしならねども猶は自墮落風來の氣骨ある或は西鶴京傳の情致あるに及はず。是れ章句に牽制せられしが故なり。

蓋し艶麗瑰奇の文字は趣味に乏しき人をも喜しむべくして作る事極めて易し。若し平俗の文字をもて餘情の哀怨を求めんとするは文に深からざれば能はず。アヂソン、スウ井フト、デフオー、ゴールドスミツス等の諸家が推尊せらるゝは能く平易の文字を作りし故のみ。ベントレイが

失樂園の詩に雌黄を加へしものを見るに法度規距に於て或は勝る事あるもミルトンの氣魄に於ては全く之を損せり。是れ章句文字に拘執して徒らに塗抹せしに過ぎざればなり。

我が俗曲の往々多恨の人をして袖に雫を覺へしむるものあるは只管風情を専らとせるを以てなり。彼の人口に膾炙する一中の紙治若くは次に抄出する朗細の如きは最も好例と云ふべし。

逢ふて立名がたつ名の内かあはで立こそたつ名なれ思ひ出すとは忘るゝ故よ思ひ出さぬよ忘れねば秋は夜長し訪ふ人もなし明し兼たる今宵かななげきながらも月日を送る扱も命はあるものかよしやなげかじかなはぬとても定めなきこそ浮世なれよしや今宵はくもらばくもれとても涙で見える月をつれてござれやいづくへもたとへむぐらが宿なりと住めば浮世に思ひのますに月と入らばや山の端に

京傳曾て左交が高尾懺悔の稿を讀み、「年が明ての樂しみはやがておの
 字の名を附てむり酒吞まぬ身とならば素足も野暮な足袋になり」の句に
 到り大に賞賛して曰く、もし「むり酒吞まぬ」を「二日酔せぬ」と改竄
 せば如何と。是れ些末の字句に拘せしにあらすして情趣を穿ちたる事更
 に一段を進めたるなり。

斯れば詩文の感應は専ら風情にありて風姿にあらす。もし徒らに雕琢
 を事とし無益の塗飾を其本旨と考ふれば六朝の浮華となり明代の輕佻と
 ならん。マコーレー伊國文學の衰へたるを論じて曰く、

ペトラークの時よりアルファイエリの戯曲出づるまで伊國文學書に婉
 麗輕佻にして摸範とすべからざる高名なる小唄を見る事多し、當時の
 詩人縱令學識才量を異にするも大抵誇張を常とし殊に極めてセンチメ
 ントに乏しく些細の浮華なる偽飾を喜び風躰頗る錯雜し且つ纖弱に陷

れり、タツツ、マリノ、グワリニ、メタスタシオ及其他の賤劣なる
 才資ありて名ある作家悉く豊艶麗色の中に敗徳汚毒を包藏したる妖嬈
 陰險なるアルシナの魔術に縛られ、アリオストー——彼の大アリオス
 ト自身も其理想したるルージャローの如く暫しは幻法の顯はしたる花
 園に遊び梟娜にして粉粧を凝したる妖魔と共に戯れしが又ルージャロ
 ーと全しく神聖なるリングと羽翼ある馬を得て欺偽の極樂より一蹴し
 て榮光自然の域に入れり、云々と。

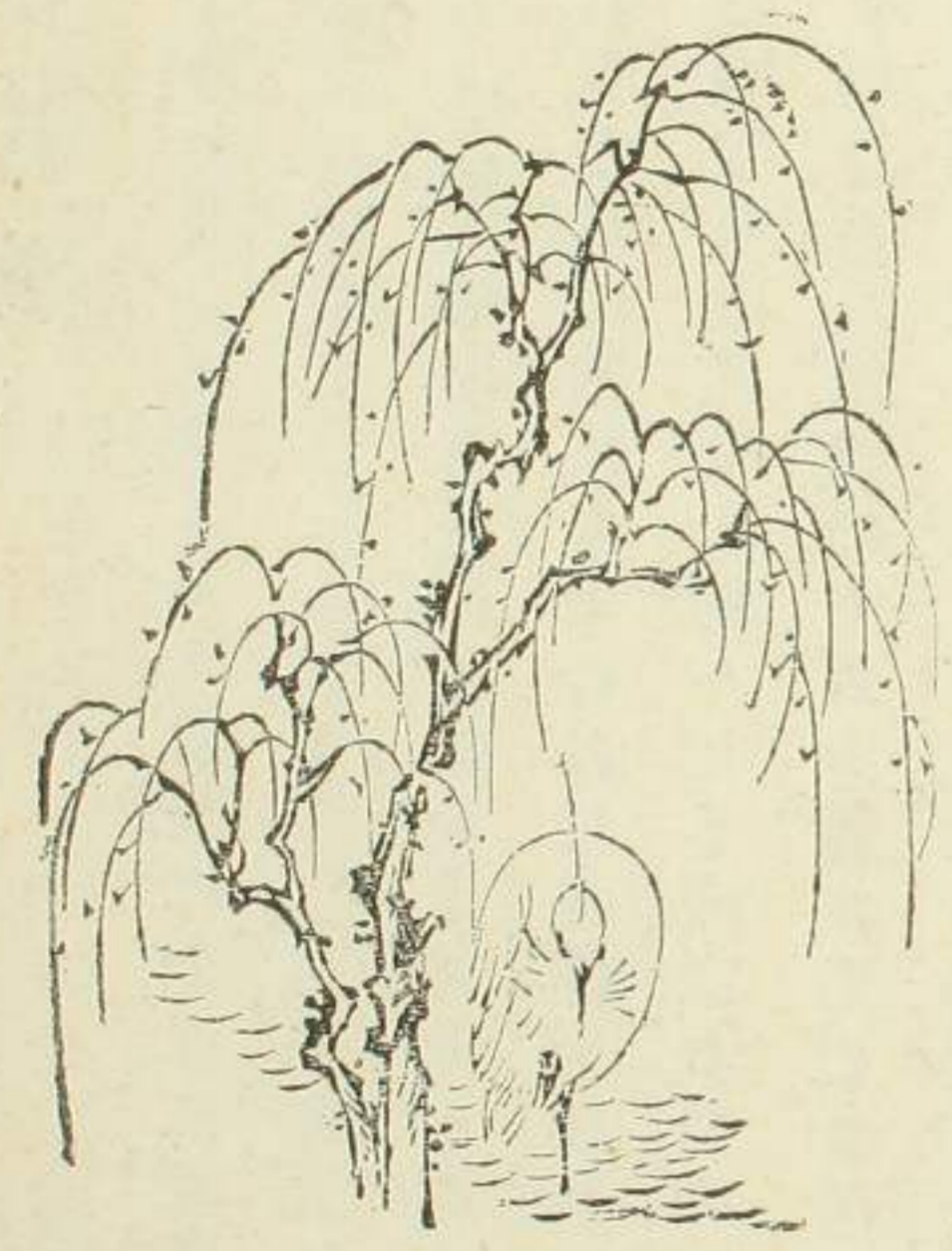
實にアリオストーの宏識を以て漸くに衰亡を救ひ得たれども風姿を専ら
 とすれば輕浮に陥り感應の力を缺けば隨て文學を振ふべからず。然るに
 日本今日の文學を見るに些末の字句に拘執し粉飾を事とする何ぞ甚しき
 や。言文一致と云ひ雅俗折衷と云ふも畢竟華美を競ふ時世粧のみ。何れ
 の處にか信を求むべき。例へば千紅万紫一時に開きて其色を鬪はすも

秋夜の凄凉冬野の閑寂に及ばざるが如し。此間唯だ二ツの取るべきものあり。一は美妙齋主人の武藏野上の巻、一は紅葉山人の京人形第八回とす。共に平俗の文字をもて言外の哀怨を含ませしは他の推敲鍛錬したる蝴蝶或は色懺悔に見るべからず。之を二氏に聞く二ツのもの共に推敲を缺きしなりと。縦令推敲を缺くとも雕琢を以て望むべからざる自然の情趣其中に存するにあらすや。

詩文の感應力は文字に在らず、風情にあり。殊に氣あるをもて貴しとす。禪林隨筆にある和尚の坐禪の時に野狐の妖怪をなしたるに一喝を下し給へば忽に消失したり。其夜同じく典座をおびやかすに例の一喝を下しぬれば狐くつくと笑ひたるよし。おなじ口よりおなじ一喝をいへども一人に恐れ一人に笑ふは徹未徹の差違なり。詩文を作るもの能く此理を悟れ。白居易或はペトラークの文字縦横するは脂粉を以て清流を濁す

が如し。此故に我らは敢て信を文壇に求めんと欲す。今の表面のみ飾りて陸離たるを競ふもの、如きは却て望まざるなり。

(明治二十二年七月)



詩文の粉飾

今年富士の岳麓に暑を避く。我客舎は山間にあれば鬱葱たる茂林に遮
 ぎられて遠望なく、惣て詩思を動かすに足る溪流、懸瀑等は本より詩人が
 慣用する碧岫、峭壁、深澗、飛泉等の絶景は全く見るを得ず。唯だ蓬生の
 深く生茂て拳石の砂塵の間に散在するのみにて所謂山居の趣味を掬する
 能はず。況て盛夏の頃なれば鹿鳴の呦々たる或は衣打の砧の聲をも聞く
 能はず。二六時中唯だ道者の鈴聲絶す耳を聳するばかりにて門外は積砂
 履を致し濛々たる雲烟屋を繞つて誠に索然たる心地す。然れ共天晴れ雲
 散する晨、門を出て十數歩小高き丘に登れば蓬萊の大嶽は巍然雲表に聳
 え恰も頭臚を積疊する如き駿甲諸山に君臨する觀あり。是れ狹隘なる山
 中の小景に非ずして一方は突兀たる山巔の連なるを見、一方は富士が根

に廣がる十數里の大森林を見、遙かに駿の灘の汪洋たるを臨める誠に壯
 大なる偉觀なり。
 暫らくして京に歸る。樓閣は益々高く電燈は愈爛々として輪奐の美
 と結構の大は僅に數旬都外の客たりし人をして猶ほ呆然たらしむれど
 も絡繹喧噪する外、特に樓臺建築の美の自然の美より更に深く感せしむ
 るものあるにあらざるなり。
 精彩華麗の美も人を動かすに足る。されど建築園冶等が與ふる感情
 は天地山川が與ふるものより勝る能はざるが故に世を遁るゝ高邁の士は
 孤雲野鶴と伴ふて城市の娛樂に代ゆるに風月の歡を以てす。自然の物象
 に觸れて動かさるゝ情趣は高潔にして些どの垢塵を含まざればなり。且
 つ人巧の美は如何に偉大なるも涯らるゝ處あれば未だ自然の景象が無限
 大の感を養ひ來るに如かざるなり。古來より名山大川に遊んで而して後

ち名文章を得るといひ、或は千卷の書を讀まざれば千里の道を行くべしといふもの畢竟此理由に外ならず。

文章亦た之に類す物のあり。唯だ文字の巧緻精麗を欲するは只管人工を以て自然の美に加へんとするに同じ。自然は人工に由て更に其美を増さず却て時としては傷けらるゝ事さへあり。恰も文を修むるものが内容を忽諸にして唯だ表面の美しくしからん事のみを專一とするは人巧に由て

天真の美を偽り得べしと信ずるが如し。蓋し字形と字音とは大に感應を助る故に時として好んで有力なる字形と字音を選ぶ者あり。例へば湯淺常山の「南溟奉使使臣槎、直破長風萬

里波、忽值怒濤似奔馬、起提雄劍叱龍鼉」又は貫之の「糸による物ならなくに別れぢの心細くもおもほゆるかな」の如き七言或は卅一文字の調をなさざるも南溟、長風、萬里、怒濤、奔馬、雄劍、龍鼉の文字は元より雄

快にして糸、別路、心細くの文字は云ふ迄もなく哀れなれば縦令散文となすとも大に其感應力を減せざるなり。山陽が蒙古來及び前兵兒謠は頗る雄壯快絶にして少年壯士の大聲高樓に吟じて楽しむ處なれども用語の雄快なる男子國と云羶血と云ひ日本刀と云ひ秋水と云ひ彈丸と云ひ寶刀と云ひ悉く悲歌慷慨の人士が喜ぶ材料にしてよし山陽の大才を借らざるも之を以て絶命の辭を作り慨世の吟を咏するを得べし。たゞ山陽は感情餘りあつて作りしが故に縦令其文字を使用するとも皮相は能く摸するを得て其情致は寫しがたかるべし。昔し庭園花木を好みし人あり、石を疊み池を作り妖艶なる牡丹芍薬清楚なる水仙蓮荷は元より百草百花を悉く集めて千紅萬紫の一時に美はしきを喜びたりしが猶ほ是にも厭さ足らで赤松翠柳のたぐひを思ふまゝに移せしに終には藪の如くなりて風光も景致もすべて失せたりき。庭園は花木竹石の多きを以て尊きにあら

ず、配合附置の自然に協へば數箇の竹石數種の花木も自から妙趣を備ふべし。「青苔日厚自無塵」の幽玄も「朧月海少しある木の間哉」の閑静も「心とめて見ればこそあれ秋の山ちがやにまじる花のいろく」の詫しさも自然の排置に協は、百の花木も千の竹石も求むべき事かは。されば詩文の粉飾は有用に似たる無用にして感應力あるが如ければ衷情より發したるものにあらずんば虚偽の文字となりて唯俗子婦女の玩弄物たるべし。ポーブは一代の詩人にして古今に推稱せらるれども華麗の爲に一身を犠牲にしたればスウ井フトの深酷にもアヂソンの善謔にも及ばず。もし華麗を詩の根本とすれば斯の人こそ絶代の大詩人たるべきに、如何せん華麗は畢竟詩の末葉に過ぎずしてポーブの全集は全く幽玄或は壯大なる文字を見ず、殊に風情と氣焔とに乏ければ到底文學の技術者たる毀を免がれざるを。傑作「ゼ、レーブ、オブ、ゼ、ロツク」の如きは製作的

の麗粹に富むをもて却て大缺點となすと佛蘭西の批評家ラ、ハープは曰へり。殊更如斯口調は世俗の好んで容るゝ處なるをもて餘弊は終に一般の趣味を亂し端なくもゴールドスミツスをして「英國當時の詩篇は羅馬帝國の末世の如く無用の粉飾を疊用し少しの立案も結構もなく恰も形容詞の連鎖の如し」との嘆聲を洩さしめたり。ポーブの詩夫れ此くの如く字句と風姿とを先とし唯粧飾をのみ昂めければ白香山と同様なる纖弱輕浮に陥り希世の大才を抱きてなほ第二流の詩人たるを免がれず。其小詩短篇の如き字句愈々精練にして益々情趣と氣焔とを缺く。我が和歌に於て見るも定家卿が歌は五尺の菖蒲草に水灌ぎたる如くなるべしと教を立てたるより以來ひたすら風姿を専らにして終に一般の弊風を醸せり。歌學者が常に壯快なる歌の引例とする「武士の矢なみつくらふ籠手の上にあられたばしる奈須のしの原」を咏せし鎌倉の右大臣す

らなほ其師の癖説を脱し得ずして風情を三十一文字にかきつゞけん事を先として姿詞の趣を知らぬは商人の鮮衣をつけたるが如しと曰へり。是れ頗る癖見にして唯外面の美しきを知つて内裏の本色を悟らざるの説なり。其以前に俊成卿は歌合の判に歌は繪師の繪の具をさまざまに色どる様に作るにあらずと曰はれたれども、いつしか此卓説を奉ずる者なくなりて其道の聖者と曰はるゝ人すら大抵風姿を主張し歌讀む者みな皮相のみ咏じて揚々得意たり。噫、姿詞の趣を知らぬは果して商人の鮮衣をつけたるが如き乎。もし余をして曰はしめば姿詞の美しきを知つて風情の何たるを知らざるこそ却て商人が徒らに着飾りて却て心裏の俗腸を現はすと同じからん。

日本の古文學が或一方に於て燦爛たるに關はらず全牀に於て多數の人を失望せしめたるは畢竟長慶集を以て唯一の金科玉條と爲し知らず

粧飾を専らとし文章の本旨を忘れしを以てなり。蓋し風姿と風情とは元より兩立して離るべからざるものなれども風姿を先にすれば終には粧飾に失し易く、粧飾に失すれば浮華虚文となる。圓滿なる實例として風姿論者の常に引用する「ゆふざれば門田の稻葉音づれてあしの丸屋に秋風ぞ吹く」及び「鶉なくまの、入江の濱風に尾花なみよる秋の夕ぐれ」等の如き姿ばかりすぎるゝものは、幽玄閑寂の風情充分に籠れるなり。さるを悟らで詞をのみ飾り姿さへ美しくしければ歌道の奥儀に協ふものと誤まりしが故に終に末世の衰替を來し、加茂本居等の人々力を盡せしかど古學を振興せしのみにして結局之が範圍外に出づる事能はざりき。

和歌が粧飾に失敗せし事如斯なりしが連歌より出たる俳諧は俗談平話を咏むを以て主となし、歌道の如く不自由なる鑄型の中に苦しめられざりし故に情趣も氣魄も大に優る處ありき。宗因派の如きは稍や粧飾に傾

きしが芭蕉出で、全く自然の情を咏みしかば感應力の益々欽仰を起さし
 ひべきもの多し。定家卿が秀作「天の原思へばかばる色もなし秋こそ月
 の光なりけれ」の如きは其集に於て却て見る事少なければども芭蕉は常に
 如斯自然の感想を咏みしかば一代の句凡て後人の感仰を動さざるもの
 なし。今は雪門或は江戸坐の餘弊を承け、無學の俗人唯だ十七文字を並
 ぶるをもて俳道と心得し爲め眞正の趣味を亂せしかども元祿前後に生ぜ
 し句には一唱三嘆のもの頗る多し。是れ無用の粧飾を昂めず自然の風情
 に感得せしが故のみ。奥の細道、三日月日記、五元集、或は蕉尾琴等を
 緋けば幽玄に物さびて一種の香味自づから其中に含蓄せらるゝを見る。
 芭蕉の脱俗非凡はさらなり支考、許六、文章、去來等の文字いづれも尋
 常に超絶して氣焔万丈の勢あり。殊に其角が枯尾華に記せし芭蕉翁終焉
 記の如き平凡の文字をもて非常の感應力を有するは専ら風情を寫せし爲

めならずや。全章數千言、一句の冗文字なく卑近の文字をつらねて風骨
 自づから高きは徒らに粧飾を事として文字をぬりちらしたるものと同日
 に語るべけんや。鳩巢翁も曰へり「若し己が博聞に傲つてたゞに文辭に
 馳騁して義理を主とせるの文は強てその辭を矯飾して文彩目を驚かし變
 幻百出すといふとも明眼の人一たび見ればその猥淺にして見るに足らざ
 らんを知らんかし」と。詩文の粉飾は必ずしも無用といふにあらねども
 強て巧緻精細ならん事を欲するに到ては却て淺俗を示すに似たり。有識
 卓見の人焉んぞ雷同讚稱すべき。彼の最も粉飾を要する小説文すら最も
 有情にして能文なるは強がち艶麗又は晦澁の字句を借らざるなり。ドス
 トエフスキイの如き時の批評家より天下の悪文章家と罵られたりき。而
 も渠が作の最も心慄魂驚せしむるものあるは隠れなき事實ならずや。ト
 ルストイの如きは全く文章を度外し粧飾を以て藝術の目的とするを太く

斥罵したりき。而も渠は常に人の肺腑に徹する力あるにあらずや。斯の如く總じて詩文章は信を以て旨となし外面の粧飾よりは寧ろ作者の眞面目を重んずれば苟くも文學を批評する者は其外形を措きて先づ内容の眞面目を重んずるべからず。若し此心なくして表面の粉飾を喜び古今豪傑の作品を品騰するも唯だ其綺語麗句に眩耀せられて推奨するあらば恐らくは讀書社會の趣味を墮落せしむべし。

余が富士に遊び自然の物象に觸て感ずる處斯の如く碧岫、峭壁、深澗、飛泉等の秀絶なきも、寧ろ其等の秀絶なくして却て益々富嶽の大なるを感仰せんとす。樓臺苑囿の觀なき山——溪流懸瀑の景なき山、却て感仰の度を強ふするを見て愈々文學の感應力が些々たる字句の粉飾にあらずるを知る。

(明治二十二年十月)

詩 辨 (美妙齋の韻文)

最近の日本評論に美妙が新詩を載す。曰く、

おもひしるまことの光り

かたちにはかいはらざるを。

斯の如く咏ひし人は却て詩のまことの光が形にかゝはらざるを忘れしは豈に近來の滑稽にあらずや。

國民新聞に於て美妙が忍月に答へし書に彼は純文學を分ち散文韻文の二者と爲せり。其解釋に曰く韻文とは節奏を有するの文なりと。然らば散文とは節奏を有せざる文にして之を總稱して、文 (Composition) と云ふべきも文學と云ふべからざるなり。渠をして一篇の修辭書だに通讀せしめば斯る亮然たる誤謬を爲さざりしものを。

余は美妙の如く潜心苦慮して二年の長日月を詩の研究に苦みし者にあ
 らざれば深く詩に就て得る處あらねども唯少しく疑ふ處を述べて美妙一
 派の詩論家に質さんとす。若し彼の所謂韻文をして Metrical composition
 の謂ならしめば更に疑ふ處なけれども彼は斷言して「韻文とはポエトリ
 一の事」と云へり思ふに渠はポエトリもポーエムもバースもサングも
 悉く混同して之を區別せざりし故に、單に形骸の異なれるを見て草率に
 詩文の區別をなすの稱戲を免れざりしならん。逍遙子が日本文學史を評
 して若し此書をして數年早く公刊せしめば世は遠慮なく月桂の冠を編者
 の頭に戴かせしならんと嘆せし如く、若し新體詩抄時代に此韻文論出現
 せしならんには江湖は詩學の中興開山なる榮稱をもて美妙を歓迎せしな
 らんが、惜むべし彼は時機を見るの明なくして數年前に於てこそ少し
 く世の歡呼を買得べき説を今更物珍らしげに持出して却て識者の笑を求

む。昔は余れ丈八の蛇矛と八十二斤の青龍刀を持って張飛關羽を論ずる大
 道講釋ありしを知りしが、思はざりき今日の文界に單に聲調を以て詩を
 論ずる大家あらんとは。
 余は美妙が説の基く處を知らず。否渠は前人の説を襲踏せず却て未だ
 曾て一人も説かざりし破天荒の新意見なりとの意を朦朧と其中に寓した
 れども、這般形體的の詩説は最も初心なる修辭書に與へらるゝ處にして
 コリエルの如きは其英文學史に Poetry and Prose と題して分明に聲調
 を論じ恰も韻文論第一篇第一章と同様なる説を述べたり。然るもなほ其
 末節に縦令聲調は流るゝ如きも節奏は麗はしきも又ランブラーの如く無
 瑕の文字なるも未だ真正なる詩と云ふべからず、詩の要素は聲調節奏外
 の或る一種のものにして我等頗る其解釋に苦むと雖共若し此要素たる或
 る物を缺かば聲調節奏は美なりと雖ども詩と云ふを躊躇せざるを得ずと

曰へり。此所謂或るものは詩經の序も古今の序も杜撰淺薄なりと一喝せし美妙が二年間研究せしも猶ほ悟る能はざりし或るものにして、ブレト一以來諸くの學術進歩せし中に「詩とは何ぞや」の疑問氷結して解けざりしも詩に此或るもの即ち不言不説の妙想あるが故のみ。

詩は志なりと。古人の志なるもの我等之を詳かにせざるも若し詩人腦裡に存在せる或る一種のものにして、發しては光明と爲つて貫之が所謂天地を動かし眼に見えぬ鬼神をすら泣かしむるものなれば、我等は美妙の如く彈指之を退くる能はず。是れ縱令美妙は淺近なる説となすも節奏をもて詩を説く者より更に深ければなり。若し詩にしてコリエルが所謂或るものなからしめば美術の一として何ぞや繪畫彫刻等と相持するを得んや。是れあるが故に正氣歌に激昂し梁父吟に長嘯し荒村詩に慷慨し「ダンシアツド」に赧然し、一韻一句の爲に或は悲み或は憂ひ殆ん

と我等をして狂熱せしむるもの、抑も聲調の助くる處ありと雖も其聲調を作りしものは何ぞや其聲調の起因する處は果して偶然にして想の緣由する事會て無きや。恰も李東陽が會て詩必有具眼亦有具耳眼主格耳主聲と説きて詩に眼耳あるを知るも未だ其主腦あるを知らざりしが如く、美妙は詩に聲調ありと説て聲調を起すの想なるものあるを知らず、猥りに獨斷して詩思なるものなしと云ふ。豈に是れ詩界の餘りに幼稚なる新意見にあらずや。美妙を初め先人も往々説きし如く詩形元より輕んずべからず。鍛鍊推敲字句の修飾に苦心するは強ち無用にあらず。詩形を論じて修辭の法を喋々する亦文界を益するに足るべし。然れども詩形は思想に依て作らるゝを悟らずして唯だ其體をのみ論ずるは是れ爆發一聲火を噴き灰を降らし燒石飛び土砂流るゝ光景を述べて噴火山を説盡せりと考ふる如く老嫗癡婆或は感服して首肯すとも僅に地理初歩を讀得る

兒童すら何ぞ甘んじて聞くを欲せんや。詩形元より輕視すべきにあらねども之を第一義と爲して却て其本源を忘れ、極めて輕率にも韻文なる新熟語を造出して以てポエトリーを論じ、然も先人が思想説を大膽にも淺薄なる論定なりと打破し了す。余れ其斷見の勝れたるに感歎すれどもロード、ジエツフハレーにあらざればポエトリーなる語を以て惣ての有調文 (Metrical composition) に許す事能はざるなり。否な有調文にあらざるも或ものは分明にポエトリーなりと斷定せむ。フハウレルが曾て「Village (有韻句?)」の作者數千人中恐らくは一人も眞正なるポエトリーを感得せし者なからん」と云ひしは聲調をもて詩を説悉し得べからざればなり。蓋し美妙は質と能との別ありて同一にすべからざるを説きしが、彼が質と云ひ又能と云ふもの頗る朦朧として惑ふ處少なからず。寶丹は腹痛を治する能ありと曰ふ、是れ頗る佳なり、然れども寶丹の質は濕氣の

る赤き粉なりと曰ふに到つては二年間研窮の功を積まざる我等大に疑はざるを得ず。若し是れにて解釋し得たりと爲さば獨り詩のみにあらず一切萬物のミステリーと爲つて昔日より紛々決せざる諸説悉く一定して此混沌なる暗冥を破り刹那に光明遍照世界を現すべしと雖ども、自然の秘密は未だ這般微々たる一線香の光にて照すを得ざるなり。彼れ能く寶丹が腹痛を治する能あるを説けども未だ其質を知悉せずして唯濕氣ある赤き粉なりと云ふ。此故に其能あるを知れども能ある所以に到つては模稜に説去り獨斷して詩の根本は聲調なりと云ふ。讀む人誰か迷はざらんや。

美妙が第一に一撃を加へし反對論者とは出版月評に露伴が華末集を評せし F. O. A. を暗示するものなるべし。渠が説の當否は兎に角、其虛實論はポーエムとノーベルとの相違は着眼點にあるを辨せしに、美妙は輕

率に謬解してポエトリーとプローズとの區別と爲せり、殊に不審しきは渠れ詩を論ずるの人虚實の二語を詳かにせず、反撃の證例として哲學原理と持統の歌とを摘出するに到つては殆んど啞然たらざるを得ず。誠に聲調を以て詩を論ずるの人は詩想に考へ及ぼさざるも當然にして恠むに足らず。宜なり被が醉沈香は唯五七の調を陳ぬるのみにて詩想の取るべきものなきをや。

聲調又輕んずべからず。然れ共節奏と調和とは自然の配合に成り必ずしも人爲の巧を求めず。實にやエメルソンが曰へりし如く山川草木は景色の調、老若男女は人間の調にして凡そ眼耳を樂ましむるもの總て是れ一種のメロデーならざるはなし。詩に聲調あるは自然に生じ來りし結果にして、孩兒が意味なき聲音を高低して樂むと同じく古代文字未だ有らざりし時、木を鳴し石を敲き亂雜の調を作りて熱狂せしより次第に進

化して終に今日の韻法を作りしなり。單だ音の研究を爲して調の進歩を計るは音樂家にして詩學者が專念に本來の問題として討盡すべきにあらす。美妙が一箇の韻學狂として無韻の文を詩ならざるを斷ずるは可なり。唯だ怪しむ渠は前人が詩想論を淺薄と爲し枝葉の辨と退くるを。言ふ勿れ、聲調論は破天荒の説なりと。前人既に是淺近なる皮相論を試みし者多けれども畢竟オーソリチイとして聞かれべき價值なきが故に今に傳ふるもの少きののみ。

又怪しむ美妙はポエトリーを韻文と命じ、節奏に據る語及び句、及び節奏に據る句で出來た文が韻文ですと解し、節奏は詩の生命なりと斷定し、殆んで節奏外に詩なしと曰はぬ計りに論斷せしに、一篇四章の下に於て「いくら格式ばかりが出來たとして思想が完全にならなければ駄目な事です」と曰へり。此所謂思想なるもの果して何ぞや。若し詩の生命が

節奏にして節奏外に詩の價値なくんば何が故に一定の格式を作りし上に猶ほ思想の完全を望むや。更に問はん。思想の完全とは本來何物ぞ。美妙の説を標準として云へば節奏だに美はしくば想の何物たるを問はずして詩の價値は定まるべき筈ならずや。

カアライルは音調を重んぜし人なり。然れども猶ほ曰く詩を説くに唯だ樂調的の一方面のみを以てする舊説は餘りに漠然に過ぐ。詩人は獨り文字の上のみ音樂的にあらしして其根本たる思想既に音樂的ならざるべからず、思想既に音樂的なれば其發出する處の文字の自然に音樂的なるは固より當然にして、若し音樂的ならざる思想をもて唯だ外形の音樂的なるを欲するも恰も棒を以て板を叩く如く人をして感仰せしむるに足らずと。此音樂的思想なるもの即ち所謂詩想にして、詩に重んずべきは文字の音樂的なるにあらずして思想の音樂的なるにあり。美妙は節奏に

據る語句より成りしをもて詩なりと解せしが未だ其音樂的なる文字を造出する音樂的思想あるを知らざりき。然れども猶ほ怪むべし、其目次中に「各國詩想の相違其原因」なる一項あり。渠れ詩想なるものなしと云ひて却て其題目を設く。抑も彼が詩想なるもの果して何ぞ、余れ大に惑ふ。

支那人が詩と云ひ本邦人が歌と云ふもの極めて狭き意にして廣意のポエトリーと同じからねば、和漢の詩學者が詩論を引證するを好まねども狹意の詩歌を論ずる人すら少しく批評腦あるものは猶ほ美妙の如く聲調をもて説かざりしを例せん。嚴儀卿の滄浪詩話に曰く、禪家者流、乘有二大。小宗有南北二道有邪正、學者須從最上乘。具正法眼。悟第一義。若小乘禪聲聞辟支果。皆非正也。論詩如論禪。漢魏晉與盛唐之詩。則第一義也。大曆以還之詩。則小乘禪也。已落第二義矣。晚唐之詩。則聲聞辟支果

也、學漢魏晉與盛唐詩者臨濟下也、學大曆以還之詩曹洞下也、大抵
 禪道惟在妙悟、詩道亦在妙悟、(中畧) 然悟有淺深、有分限、有透徹之
 悟、有但得一知半解之悟、(中畧) 夫學詩者以識爲主、入門須正立
 志須高云云。此說未だ是なりと曰はず、韓魏晉盛唐の作を崇拜して
 之に到達するをもて詩を學ぶ者の本旨なりと爲すに到つては恰も某評者
 が近頃戲曲を論せし時ニスキユラス或はソフオクルス等を奉せよと云ひ
 しと同じく猶ほ是野狐外道蒙蔽其眞識不可救藥、終不悟也と曰はざ
 るを得ず。然れども美妙は前人の説を總て淺薄なりと斷せし卓見者なれ
 ども是嚴羽が批評眼にも及ばざりき。彼は連りに聲調を喋々し詩の生命
 は節奏なりと曰ひしが嚴羽は終に詩之極致有、一曰入神、詩而入神至矣
 盡矣と曰へり。此所謂入神なるものは千言萬語中々に解釋し得べからざ
 れども音調節奏等一切の外形を除却して猶ほ千萬人の腦裡に印して五年

十年百年千年を經過するも愛念愈熾えて忘られざる李杜ホーマー、ダン
 テ等詩聖の妙想にあらずや。グレイがベントレイに與へし詞に、
 But not to one in this benighted age
 Is that diviner inspiration given,
 That burns in Shakespeare's or in Milton's page,

The pomp and prodigality of heaven.

とあり。此 Diviner inspiration なるものは即ち儀卿が入神の域にして恐ら
 く聲調論者が夢にだも想像せざりし處ならん。詩實に入神の域に到つて
 鬼神を泣かしめ天地を動かすべし、風調何かあらん節奏是れ枝餘のみ。
 若し節奏をもて詩の生命と爲さば是等入神の域に達せしミルトン或はシ
 エークスビーヤの風調他のポーブ、ドライデン、コリンズ、等亞流に超
 出せし點を指摘して余れ等聲調に暗き者に示せ。美妙は恐らく失樂園を

熟讀せしならんが唯だ其無韻の調を愛好せし乎。又ハムレットは渠が例證の一となりしが單に一箇の有調文として讚嘆せし乎。然らばミルトン或はシエークスビーヤは千古の卓見者に想遇して吾下に美妙が知言を感謝せずして可ならんや。ドライデンは最も流麗なる調をもて聞へしなれどミルトンは評して曰く彼れ見事なる韻文家に相違なし、未だ詩人と云ふべからずと。余れミルトンを擬するにあらねども唯節奏聲調を具備するをもてポエトリリーなりと云ふを欲せず、又如何に有調文に巧妙なるも唯其一點を以て許すに詩人を以てする能はざるなり。

今詩體に就て見るも風賦比興雅頌の六體は元より挽歌と云ひ俳諧歌と云ひ譬喩歌と云ひ諷誡詩と云ひ教訓詩と云ふも悉く想より生せし區分法にして聲調の便宜より出しものにあらず。詩體明辯に其放情長言雜而無方曰レ歌、步驟馳騁疏而不帶曰レ行、兼之曰レ歌行、述事本末先後有レ序

以抽其意者曰レ引、高下長短委曲盡レ情以道其微者曰レ曲、吁嗟慨嘆悲憂深思以伸其鬱者曰レ吟、因其措辭之意曰レ詞、本其命篇之意曰レ篇、發歌曰レ唱、條理曰レ調、憤而不怒曰レ怨、感而發言曰レ嘆云々と、節奏風調をもて詩の生命と爲さば詩躰を區分するに聲調を以てすべき筈なるに却て想の異なるを採りて各々其名を命せしを見れば又以て詩が節奏風調を頼まざるを知るべし。アイアンバスと云ひトロキーと云ふは畢竟韻學上の研究にして詩學上の問題にあらず。美妙が之を日本に應用して調を論せしは少からざる苦心にして、一箇の韻學者として美妙を許すに足れども、詩學上より見れば僅かに其外面を説きしものといはざるべからず。餘情主義を難せし時美妙は哲學なる支字を濫用せしが、若し詩の生命が節奏なりせば音樂にこそ對すべけれ何ぞや哲學なる曖昧なる文字を持出すの勞あらんや。美妙は一方に於て世に思想あれども詩思なるもの

なしと斷言してドラマも哲學も政治學も物理學も一切混同し又他方に於て或は十八世紀の詩はダイダクチックなりと云ひ日本の歌俳諧は厭世主義なりと退け又餘情崇拜が我が詩學の大障礙を爲したりと嘆ず。若し美妙にして聲調節奏を詩の生命と爲し此以外に詩なしと固信するものならしめばダイダクチックにもあれ厭世主義にもあれ節奏だに整は、詩は圓滿にして間然する所なからん。此時に於てサイ、コ、ド、ン、節と美妙が作と價値相違幾何ぞ。マコーレーは曰く最も能く詩を読み又作るものは其美術たるを忘るゝものなりと。美妙は却て節奏風調を喋々して詩學を以て製造術の一と爲し恰も紙鳶繪を塗る如く詩を作らんとす。六百年の昔日五條三位既に其妄を嘲りしが今に於て猶ほ這般描詩的論者現はれんとは思はざりき。白居易は華麗を以て聞え較や輕浮の傾向ありしが猶ほ與元九一書に曰く（上略）自長安一抵江西三四千里、凡郷校佛寺逆旅行舟之

中往々有題僕詩者、士庶僧徒孀婦處女之口每々有詠僕詩者、此誠彫蟲之戲不足爲多、然今時俗所重正在此耳、雖前賢如淵雲者前輩如李杜者、亦未能忘情於其間哉（中略）古人云窮則獨善其身、達則兼濟天下、僕雖不肖常師此語、大丈夫所守者道、所待者時、時之來也爲雲龍爲風鵬、勃然突然以出、時之不來也爲霧豹爲冥鴻、寂兮寥兮奉身而退、進退出處何往而不自得哉、故僕志在兼濟、行爲獨善、奉而始終之則爲道、言而發明之則爲詩、謂之諷諭詩兼濟之志也、謂之間適詩獨善之義也（下畧）と。此說元より深きにあらず、唯白氏が長恨歌琵琶行に満足せずして時俗が己を誤りしを憤慨するに到つて詩人と紙鳶繪師とを混同して論ずる者に優る事萬々階。常愛陶彭澤、文思何高玄、又恠韋蘇州、詩情亦清閑、是れ廣意のポエトリーを云ひしものにあらざるも節奏をもて詩の生命と考ふる詩學家の解すべからざる

句なり。加茂眞淵は徒に萬葉復古を主張して蒿蹊の嘲を買ひしが其歌論に到つては較や香山に似たる處あり。歌源論に曰く(上畧)さて其始めは思ふ心しばかりを短く唱ひたるをうたふ物ながら助辭發語のをのづから出來それより冠詞いはゆる序歌など長き發語も出來て事長くはなりぬらん且うたふものなればかくしもふるき歌も今うちいひたるにもはうしのみかしかくしてたゞごとくは聞へざるなりさておのが心を遣るのみかは人をさとしなせしてはやくより用ある物になん云々。詩を以て諷誡の一助と爲すは余大に退くる處なれども何ぞ文字の詩を巧造し節奏の詩を製作して韻文家の名聲を貪らんとする淺見者の比ならんや。

詩は文字に在らず節奏に在らず極端に曰へば一篇の詩を作らざるも猶ほ詩人、萬言の句を吐くも却て是れ非詩人。文字節奏ポエトリーに於て何か有らん。ムアは絶叫して曰く若しパークとベークオンを詩人ならずと

云はれ余は詩の何たるを知らずと。

美妙齋よ、余は君に文學の階梯たるブライド氏の Highways of Literature を進めん。詩人に對する六條の金言は滔々たる數萬言の韻文論より却て幾多の詩人を益するに足らん。レイノールズが美術學校學生の前に演述せし如く美術の價値と位置は之に費したる心の勞力と之に依て生ずる心の快樂に比較するものなり。吾人能く之を解すると怠るとに由りて或は心藝(リベラル、アート)ともなり或は器械術(メカニカル、トレード)ともなる。此間一髪を容れざる差違に誠意留心するは詩人の爲すべき事にして苟も今日の混沌たる文學界に立つて他日の先導者たらんとする者豈に詩形を一定せんと妄想を凝す時ならんや。君が醉沈香に曰く、

こゝろより形を見るを
すぐれたる人なりと云ふ。

うはべだにづくり——かざらば

そのほまれ國にとゞろく。

噫、山田美妙子、君はライミストの聲譽を買得て揚々たる乎。來れ教へん、ライミストとは poor poet の義なる事を。(明治二十四年一月)



戦後の文學 (國民をして機運に乗せしめよ)

戦争は勝てり。東亞の半開國は一躍して一等國の斑に入る。是に於て文藝技術は本より社會百般の人事總て一等國たらざるべからず。若し夫れ戦争に勇にして平和の事業に怯たらば縦令全世界を屠戮し若くは征服するも畢竟土蠻の行たるのみ。戦争の爲に戦争する英雄時代は既に過去の夢となれり。戦争は——今日の意義にては——大いなる治平に進まんとする時必然生ずる衝突の顯現にして其是非利害は別問題として到底免かるべからざる人事の一なり。而して一人の心にすら意識と意識との争闘が止まざる如く列國々際の関係が今日のまゝにて繼續する以上は國民と國民との衝突は終に消滅し能はざるものあらん。是れ常に鴟梟の慾を逞ふせんとするが爲にあらざして文明に向て積極的の進行をなす時に勢

ひ平和なる手段を以て踰越し能はざる障碍の其行程に横はるを發見するが故なり。戦争は武器の精銳を試みる遊戯にあらざりて全人類の幸福を買はんが爲めに一國民か上帝に支拂ふ最も重き租税なり。此故に戦争にして一の文明を齎さざらん乎。戦争は唯殘酷なる砲烟彈雨の茶番狂言の謂たるに止まりて偶々人間の動物の根性を暴露せしに過ぎず。戦ふは殺さんが爲にあらざりて教へんが爲なり。何ぞ血を流し骨を曝すを以て其目的となさんや。大國民としての覺悟は平和の擔保者となりて文明を世界に宣傳する大教師とならざるべからず。大ナポレオン曰く劍を以て征服するは最も薄弱なるものなりと。戦争は畢竟此位置に到達する猛烈なる一手段のみ。

戦は勝てり。日本人の武勇は誤解したる世界をして其謬見を悟らしめたりき。然れども多くの財と人とを犠牲として得たる此勝利は果して若

干の文明を日本に加ふべき乎。國民は戦争に狂せり、否な國民としては勢ひ狂せざるべからざるが故に總ての冷靜なる合理的打算を外にするは素より止むを得ざれども而も是れ人間の愛すべき弱點にして全人類を掖導すべき義務と責任とを有する大國民は能く沈思して之か奴隸となるを慎まざるべからず。征清の擧が仁義の師なると否とは問ふ勿れ。戦争は全じく戦争にして到底人生の福利と逆行するものなれば之が賠償を全人類を幸ひにすべき治平の事業中より求めざるべからず。一國民に私くしする物質の填還に満足するは大國民の志にあらざるなり。戦争の勝利は國民に偉大なる勢力を興ふるが故に國民は此勢力を平和の事業に善用して圓滿なる成效を計るを以て義務と爲す。漫に祝捷に酔ふて敵國の怯を説くは沾々たる小國民の鄙情たるに過ぎず。

最近過去十餘年間の治平は維新及び鹿兒嶋戦争の獲得したる成功にし

て本と是れ一國に於ける一主義の勝利に過ぎざれば其成效の極めて小なるは勿論怪むに足らず。日本は歐羅巴が誤解したる如く日本自身を誤解し飽くまでも消極的方針を採り精神的の鎖港攘夷主義を固守し唯だ外侮を禦ぐに汲々として進んで世界の舞臺に立ち全人類の友たる権利は曾て有らざるものと思惟せり。是に於て教育も宗教も文學技藝も單に一國の概念若くは嗜好を標準として以て世界を同化するに足るべき偉大なるものを求めざりき。所謂國家主義と云ひ國粹保存といふは畢竟此自屈の精神を修飾せし外強中乾の言にして我が國風或は郷俗を以て世界を化し若くは世界の元首となり人類を統一する底の大理想より生ぜしものにあらざるなり。先年思想界をして一時沸騰せしめし教育宗教衝突問題の如き著るしく此自屈の精神を暴露せしものにして東西古今の哲學に精通すると自稱する井上博士をして猶極めて狹隘なる國家主義を説かしめしは一

般社會が蝸牛の殻を作つて深く逼息せし好證例にわらずや
然るに戦争は大なる勇氣を國民に與へたり。三千年の歴史が磨上げし大和魂は常に軍事に於てのみならず總ての事に於て優に世界の舞臺に立つべき力あるを發見せり。愛國心は日本人の獨占となれり、敵愾心は益正月の義理よりも堅く固着せり。從來大學の學士すら知らざりし北支那の地理は東京よりも更に明かに匹夫匹婦の諳んずる處となれり。日本人の概念は最早極東黒子の地に僻在せず突飛して少くも亞細亞の大陸を縦横馳騁せり。戦争よ、顯著なる効果を奏したる戦争は其文字の本來殺伐なるにも拘はらず極めて敬虔なる名の如く聞えたり。曩には内地雜居を杞憂して日本人の爲に薤露を歌ひし井上博士が「古事記」を以て「イリヤス」及び「オチセー」に比すべき世界最古の奇書(?)なりと云ひ、想像雄偉、氣象快活、理想純潔の三特質を挙げ日本人の爲に大氣焔を吐き

しは戦争が國民に勇氣を與へたる好證例にあらずや。

古來歴史の跡を索るに戦争が國の文明に大關係あるは當然の事實にして戦争夫れ自身は本より破滅的なるが故に直接の影響とし云へば勿論利益あるものにあらず。唯夫れ太平の春眠曉を覺えずして熟睡せしものが此鞭撻に驚かされ活氣頓に加はり來るが故に間接の影響は意外なる文明の進歩を助長する事頗る多し。是を文學の上に云はゞ古代の文學が多きは戦紀として殘る如き一つには幼稚なる時代の好尚は他の煩瑣なる事に牽引せらるゝ事なきが爲なれども又戦争が最も深き感情を與ふる故なりかし。フ井リツプ二世(チャールズ五世といふよりは)の西班牙全盛時代或はエリザベス朝の黄金時代の如きは其顯著なる例にして又近くはギョーテ、シルレル等を初め獨逸文學の勃興せしも國民が敗戦に奮激したる結果に歸するも強ち不當なる推斷にもあらざるべく又我が寛文延

寶前後京阪の文學隆運を効せしも争亂の影響なりといふを得べし。然れども戦争の後に文藝科學の隆興を來すといふは恰も風雨熄んで天氣快晴なりといふに同く本と自然の順序にして亂極まれば即ち治來るは特に説くを待たず。唯戦争の性質及び其結果並に國民の氣格等に依り成効の治平となり不成効の治平となる。戦後必ずしも文藝科學の隆興を來すといふを得ざるなり。クリミヤ役後の英國或は七十年戦捷後の獨逸の如きは明かに其前代より退縮せしにあらざるや。

且西班牙の全盛時代若くは英國の黄金時代等に於ける天才の出現を以て一に戦争に原由すといふは速断の甚だしきものなり。セルバンテスの如きは身自から戦場に奔馳せし軍人にして其生涯の一半は戦争の歴史なり。マルクエサシ號の甲板にては三個の砲丸の爲めに胸部より左腕を打ち貫かれ、アルギールスにては生擒せられて五年間罪囚の苦楚を忍び、其

他海陸に轉戦せし勇敢義烈の武人なり。加之渠の著作『ドンキホーテ』及び其他には是等兵馬の經驗より案出し來りしもの多しといへばセルバシテスの文學が戦争と直接の關係ありとは打消すべからざる確論たるべし。又ベン、ジョンソンが子ザラシドに出陣しフ井リツプ、シドニイがズートヴンに戦歿せし如きは牽強の辨を以てすれば猶ほ戦争が文學に及ぼせる勢力を證するに足らむ。然れどもシエークスビーヤ或はギョーアの如き天才の出現を以て戦争に多少の關係を持たしむるは極めて非なり。當時英國の西班牙と爭端を啓きしは本と宗教上の衝突に起因せしなれども一度開戦するや全英の愛國心は勃然として起り西班牙の國教カトリックを奉ずる者も今は國民の爭なれば宗教に執着すべきにあらざると新教徒と共に兵團を作りて狂奔し僧も俗も老も若も滿腔の熱誠を獻げて國事を憂ひ千五百八十七年二月十六日殉難の士シドニイの國葬を聖保

羅教殿に營みし時の如き萬千の人衆哀悼を表して無双の盛儀を極め又「アーマダ」艦隊を撃沈せしは今日の我が海軍が北洋水師を全滅せしと同じければ倫敦滿市の人民は狂氣の如く東奔西馳して其大勝利を祝せり。然るにシエークスビーヤは慥に是等の實境を目覩し煽々たる愛國熱の中に棲息したれども然も渠は冷然として更に國民の流行病に罹らざりき。沙翁劇研究者の一人ハリウエル、フ井リツプはシエークスビーヤが「アルマダ」艦隊を吊ひし短詩を發見せりと云へども疑ふらくは後人の偽作に係るものなるべし。シエークスビーヤは總ての國民が愛國者と化成せし中に獨り冷淡なる非愛國者たりしなり。ギョーテに於ても亦然り。總ての普魯西人は戦争に熱狂し全國力を盡して那破翁を破らんとしアルント、キヨルテル亞流は盛んに軍歌を作りて國民を鼓舞せんとする中に渠は獨り花月に吟咏し更に砲礮の聲を聞かざるものゝ如し。シヨオペンハ

ウエルに到つては愈々甚だしく普軍のルツツェンに破れ伯林の危殆に迫るや却て軟弱なる老人小兒と共に難を避けルードルスタートの客舎にてエナ大學に呈出する博士論文を起草しつゝありき。渠等が眼には國とは地理學上の名稱にして國民的僻見を持てる人間の棲める土地の區劃を云ふに過ぎず。何ぞ特別なる感情を牽くものならんや。素より愛國心とは人間の通有性なれば其の渠等にも存在するは特にいふ迄もなく就中シエークスビーヤに到つては屢々其作劇中に英國の美を歌へり。唯渠等は國民の偏僻に陥らず純粹愛國家としては餘りに襟懷宏量にして自國の國粹と共に他國の國粹をも容るゝに吝ならざりき。愛國心とは自國に私くしするものなりと誤解せらるゝ間は普遍的なる文藝科學に従事する徒が非愛國の傾向ありといふも又た止むを得ざるなり。而して此非愛國の傾向を有てる團躰たる文藝科學が直ちに戰爭に依て大いなる善果を收め

得たりといふは豈に速断の甚だしきものにあらずや。ジョンソン曾て俗人が軍役に就かざるを以て耻辱と考ふる事の自然なるを説きて曰く、若し大賢ソクラチーズと瑞典のチャールレス十二世と共に現はれてソクラチーズは「來れ、我が哲學の講演を聞け」と云ひチャールレス十二世は劍を揮つて「來れ、我と共に魯帝を廢せよ」と云はゞ人は皆ソクラチーズに行くを耻ぢてチャールレスの下に集るべしと。兵事は雄大及び慘惻の實現にして最も猛烈なる刺衝を興ふるが故に之に牽引せらるゝは本と自然の情にして到底沈靜なる他の文藝科學と利害を異にするものたるを免かれず。兵事と文學は等しく人事の一なれば多少の關係あるは勿論なれども戰爭を以て大いなる文學を作るの直接原因となすは本より附會の説たるべし。シエークスビーヤやゲーテが戰時に生れたるは畢竟偶然の事のみ。且つ何れの歴史を見るも百年の治平は少くして三十年毎に若くは五六十

年毎に必ず兵争を生ずるが常なれば如何なる人か直接或は間接に其影響を受けざるものあるべき。然るを偶々文豪の出でたるを以て悉く之を戦争に歸するは餘りに無造作なる臆測ならずや。人事は常に相俟つて進歩し互に相影響しつゝあるもの也。而して其近きものが互に影響する事多くして其遠きものが少きは當然の常理なり。戦争が文學に影響を與ふる事多しといふは猶ほ可なれども大いなる文學を作るといふに到ては容易に其眞なるを認むる能はず。

然らば戦争は文藝科學の爲には全く無用なる乎。然り之が爲に造兵造船等武器に關する諸科學の進歩を効し美術上には新しき資料を與ふる事少からねども特に著明なる大進歩を來すと云ふを得ざるなり。由來戦争と前後して文豪の出現したる例は乏しきにあらず。然れども全く戦争と距たりし時代に天才の技量を振ひし例も頗る多し。又大文學の戦争を材

としたる事多きは確然たる事實なり。然れども戦争以外の材料を以て成効せし大文學も決して少きにあらず。況んや戦争以後慥に退縮せし事實もあるに於ては豈に輕々しく未來の繁榮を期するを得んや。

唯智ある國民をして此機運に乗せしめよ。戦争が生ずる勢力をして文藝の上に働しめよ。戦争其れ自身は全く別事に屬すれども此機運と此勢力を善用するは人類の友たる國民としての義務なり。既に戦争に勝ちて油然として滔るゝ「ナショナル、ブライド」は平和の事業に成効して全人類に福利を與ふるにあらずんば焉んぞ大國民の責任を盡しゝものならんや。

征清の役は嚴正なる教課を國民に與へたり。日本に於る總ての調子は一變せり。壬辰以後三百年來支那に對して抱きし戦争心は初めて満足せられたり。是に於て多年墊伏せし國民の元氣は一時に汎水の堤を破る如

く滔れて今や昂然として世界に臨むの概あり。野夫も腕を扼して武を説けり。婦女も軟舌を弄して兵を談せり。日本の國民は既に支那を踢倒して氣歐洲を呑まんどす。蓋し三千年來素養せし國粹を一時に煥發して四海に布かんとする一大好機なり。軍事に於ては既に其實を現せり。赤字の旗は初めて亞細亞人の手に頼て亞細亞の陸土に耀然たる慈悲の光を輝せり。ガットリング銃やホツチキス銃や水雷艇や三十二瓏の巨彈や總て日本人の手を経て愈々其精銳を證明しぬ。

支那に優るものは單り軍事のみならず。若し彼我が文藝科學を以て比較すれば我が彼の彼に優る豈に唯百里の差に止まらんや。支那の文藝は過去の歴史に名譽を留めたれども彼の今日の精神界には一の北洋艦隊すら有たざるなり。是れ我が海陸軍は一に支那と競争して其戰鬥力を照準に取れども我が精神界に於ては眼中初めより亞細亞なく直ちに歐洲と輸贏を

決せんとする所以なり。戦争の壯觀に眩耀するものは我が精神界の進歩を以て遅れたりとなせども是れ揣量淺見の妄語にして我が精神界は支那と戦ふには餘りに多く進歩したり。唯軍事に於ては明かに敵手を殲すの目的を達したれども精神界は猶は競争者たる歐洲と實際の搦戦を爲さんとする勇氣だにあらざるなり。戦争に於ける實力は慥に世界の舞臺に立つて恥ぢざるを自覺したる國民は文藝科學に於て世界と戦を交ふるを以て大いなる冒險となすや。例へば大なる冒險とすれば之に打勝つ剛健なる志なきや。

國民は明かに兵事に就ての位置を識認したり。今や進んで文藝科學に於ける一等國たる實を收めざるべからず。科學は姑く之を置く。縦令一般の人民が——較や中等以上を占めたる人すらも「モレキエールス」や「エチルギー」の何物たるを知らざるも北里博士の微生物學に於ける石川博

士の動物學に於ける名譽は之を補ふに足るを以て姑らく之を置く。然れども文學技藝に於ける國民の伎倆及び知識は之を歐洲大陸に於ける進歩と比較して果して慚愧たる處なき乎。近頃「スペクター」記者が日本を揄揚するに當つて獨り文學技藝に於て躊躇せしは唯渠等が我が内部文明に暗き故のみにあらざるなり。

進歩する國民は死せる過去を誇る者にあらず。然ども日本が既に有せし文學技藝を討ねて未來の希望を述ぶるも全く無用にあらざるべし。日本は明かに國民が進歩的たるを證するに足る歴史を有せり。日本は日本自身が作りし本來の文明を有たざれども三韓及び隋唐近くは葡萄牙及び和蘭陀より輸入せし文明を巧に咀嚼して日本化し曾て全く化醇せる、事なかりしは確に其人種の優等なるを證するに餘りあり。而して日本に本來の文明なくして外國の文物を仰ぎしは本より一國發達の順序にして歐

洲今日の文明も遠くは印度近くは希臘羅馬より西漸せしなれば何を獨り日本のみならんや。唯だ日本は世界極東に偏在せし爲に渠等の文明に沐する事百年遅かりしは國民の不幸なりき。國の進歩は箇人の發達と同じく激烈なる競争の間に立たずんば速かなる能はず。單り遠く隔絶して列國の競争以外に立ちし者が遙に渠等に後るゝも本より止むを得ざるなりしかも國民が銳意發憤して僅々二十餘年間に此長足の大進歩を爲せしは優に日本人種がアリヤン人種に比して更に讓る處なきを誇るに足べし。然れども又物質的文明の常に移植し易くして精神的文明の輸入頗る難きは當然の理數にして日本人を信する事極めて厚き予輩も戦争に於ける如き成効を文學技藝の上に見るを得べきや否やを疑ふものなり。翻つて既往に溯れば日本の文學技藝は縦令幼稚なるものにあらざりしも決して大いなる價値を與ふるを得ざるなり。日本人種の進歩的なるは

勿論確實たりと雖も永く自から閉鎖せしが故に「ハーミット、ランド」が爲し得る限界以外に延長し能はざりしは本より必然の結果のみ。美術の事は門外漢なれば多く云ふを欲せざれども奈良及び鎌倉時代の雕像建築若くは東山時代の金工髹漆或は土佐狩野の祖先の作畫が世界隨一の製作物なりといふに到つては頗る疑はざるを得ず。亞細亞的の趣味と思想とは歐洲人には全く異様なるが故に新奇を喜ぶの念に狩られて少しく嘖々せしものを遽に信ずるは極めて迂鹵たるを免かれず。歐洲人の愼密なるは如何なる事物をも忽諸に附せず飽くまでも考案討畫するを怠らざるは其の常にして渠等が東洋美術或は東洋哲學を研究するは畢竟渠等の先人が未だ指を染めざりし新奇の問題たればなり。然るを歐洲人が研究せる一事を以て直ちに大いなる價值あるものとなすは餘りに輕率なる斷定にあらずや。我等は印度哲學に於てすら猶ほ之を疑ふ。何ぞ況んや二三

の英米人が時俗に倣する日本美術説に於ておや。美術は暫らく之を論せず。文學に於ては如何。我等は不幸にして「古事紀」を以て世界最古の奇書とする井上博士の説に雷同する能はず。假に一步を譲りて此説を是認するも「古事紀」あるが爲に日本文學に價值を加ふると云ふを得ざるなり。下つて奈良朝及び平安朝に於ける文學は由來邦人が誇る處なれども比較を當世に求むる時は本より大いなる價值を置くべきものにあらず。柿本人麿や山上憶良や又「源氏物語」や「枕草紙」や皆日本の文明が歐洲に比して頗る古きを證明するに足れども之を以て絶好の大文學とするは極めて非也。眼に外國の文字なく國文以外に何物をも知らざる所謂國學者が是等の文學を尊崇するは恰もエヴェレストやキリマンヤロオを知らざる邦人が富士山を以て山の理想となすに同じ。日本の文學の較や外國に向つて誇るに足べきは唯だ徳川文學あるのみ。

是れすら三千年來の國民が堅く籠居して常に進歩の趨勢を取りしを證するに足るだけにして世界の文學市場に列すれば小島國民の小文學なりと評價せらるゝも又止むを得ざるべし。近松門左衛門、松尾芭蕉、井原西鶴、新井白石、荻生徂徠、瀧澤馬琴及び其他の二三者は歐洲文學史の中に交ゆるも決して一團として評せらるゝものにはあらざるなり。然れども之を以てシエクスピヤーに比しウオルヅウオルスに擬しペトラークに較べヒューム、ベーコン、スコット等を以て對するは到底五月人形の前に武勇を談ずる小兒の見たるを免かるゝ能はざるなり。唯一言して云へば徒らに壯語を爲すの誹を作るに等しけれども日本に『ハムレット』ありや『フハウスト』ありや『デ井ナ、コメデイヤ』ありや『失樂園』ありや將た精神界を革新せしルーテル、カント、ダーウ井ン等の事業ありと云はば亦くも國民的僻見を有たざる眞正の愛國者は痛慨に堪へざるべし。試に日

本文學の精粹を集めたる群書類從一千卷を繙閱せよ。日本の歴史古典風俗等を知るの外に世界的文學として披露するに足るべきもの果して有りや。『萬葉集』は愛すべき且つ較や誇るに足るべき日本人の特性を現したるものあれども詞調幼稚にして文字未だ成熟せず、『懷風藻』や『凌雲集』や『本朝麗藻』の如きは畢竟擬唐の文字を塗鴉したるに過ぎず。何ぞ世界に誇るべきものならんや。

井上博士は想像雄偉を以て日本人の特性の一として數へたり。博士の説は根據あるべし。恐らく『古事記』中の一事に頼りて説を立てしにはあらざるべし。然ども何故に想像雄偉なる日本人が『古事記』以外の大文學を作り能はざりし乎。『古事記』を以て『イリヤス』及び『オヂセイ』に比するは近松門左衛門を以てシエクスピヤーなりと云ひ馬琴を以てスコットに擬すると同じ筆法に出でたる評なり。我等は寧ろ『ミカド帝國』の著

者グリツフ井スの説に従はんとす。曰く日本人は到底「メタフ井ジカル」
 或は「イマジチーチーヴ」にあらずして「シバルリツク」の人種なりと。古
 來日本人が大なる成效を現はし、は文事にあらずして常に武事にあり。
 是れ歴史に赫々たる事實にして今更に征清の成效に驚く外國人士は三千
 年來の素養を知らざるが爲なり。而して日本の精神界の基本となれるも
 のは寧ろ佛敎にあらずして此「シバルリツク」坩堝に融解せし儒敎なり。
 しかも痛嘆すべきは儒佛二敎の早くより輸入せられて頗る繁榮せしにも
 關らず未だ曾て一人の智者大師、一人の朱熹を生せざりしなり。
 我等は殊更に日本の過去を悪言せんとするものにあらず。抑も過去の満
 足に安んずるは智ある國民の爲にあらず。況んや過去に於て満足すべき
 もの少なしとすれば豈に激勵一番せざるを得んや。我等は日本人の進歩
 的なるを飽くまでも信するが故に若し憤進して止まざれば兵事に成效せ

しが如く何事にも大成すべきを疑はざるものなり。我が精神界に於ける
 偉人は過去に求むるを得ざるも必ずや未來に生すべきを信す。我等は翹
 跂して其人の來るを俟つ。
 戦争は勝てり。世界の局面は來るべき世紀に於て將に一轉せんとす。然
 れども戦争は本來破壊的にして世界の進歩と相容れざるものなれば戦争
 の賠償を平和の事業に求むるは勿論當然なれば今や戦争しつゝある日本
 人は勝利を收むると共に此義務を果さざるべからず。而も日本人が優に
 世界に濶歩せんと欲せば獨り物質界に於て最上權を握るのみならず精神
 界に於て全人類の主人とならざるべからず。十九世紀は暴君ナポレオン
 の蹂躪に初まり今や殆んど奔命に勞れて去らんとす。ランケ夙く逝きル
 ーナン辭しテーン隠れチンダル去りテニズン眠り精神界落莫として僅に
 二三の片影を認むるのみ。ギョーテ以後唯ギョーテを研究シカント以後

唯カントを繰返しユニテリアン振はずテユーピンゲン學派既に衰へ紛糾混雜して曉天の星の如く輝けるスペンサアの外猶ほ春秋に富めるハルトマンありと雖ども一方にはロンブプロゾ、クラフトエビング一流の科學者縱横し一方には新奇なる印度思想侵入し諸々の研究者は皆諸々の未定問題に悩まされて其解釋を二十世紀に求めんとす。此時に於て日本が躍然として渠等の伍に入りたるは豈に前途の爲に祝せざらんや。戦争に依て得たる勢力を以て精神界に善用せよ。予輩は戦争後に文明の進歩を來すを以て常理なりと信ずる能はず。寧ろ戦争は却て之と逆行するものなるを信せんとす。唯望む處は智ある國民をして此機運に乗せしめよ。多年鎖固して蓄積したる勢力と此新に獲得したるものとを善用せば世界に於ける精神界の主人たるも決して難からざるなり。大なる國民は僅に武力を以て敵國に勝つを以て満足すべからず。敵國をして精神

的に服従せしめずんば大いなる國民と云ふを得ず。而して此善果を收めんとすれば國民をして全人類に友たる覺悟を有たしめざるべからず。予輩は漫りに狂奔して自國の國粹を比較的過大に讚稱し傲然として弱國に臨むを以て愛國者なりと思惟する能はざるなり。戦争は勝てり。自屈の國民が自ら醒覺して世界に上るの勇氣を生じたるは戦争に向つて謝せざるべからず。願くは智ある國民をして此機運に乗せしめよ。芙蓉峯巔一朵の雲は沛然たる惠雲を送りて兵器を以て流したる血を洗ひ全人類をして世界の極東に此斷々として善を守る大いなる國民あるを知らしめよ。

(明治二十八年五月)

政治小説を作るべき好時機

●小説家よ。卿等が變愛世界に注ぐ觀察を一轉して政治界近日の大變革を見よ。十數年前流行せし所謂政治小説の蜃氣樓的架空譚今や悉く實現せられて、下宿屋の佗住居より直に大臣官邸に移轉する者、無位無官より一足飛びに内閣の椅子に座するもの、或は賃馬車を備ふて顯榮を銜ふもの、或は大禮服の算段に魂膽を凝す者、或は恭やしく官位を肩書する名刺を調達するもの、或は遽に尊大倨傲を盡して勅任を矜式するもの、若くは新裁のフロツクと金着の時計鎖とを力に、威儀堂々以て勅任とし用ゆべきを大臣の面前に示す政黨遊泳者、若くは自由民權の爲に家産を蕩盡し又は鐵窓の苦楚を試めたる履歷書を楯に大官を貪らんとする獵官餓鬼、ステツキ仕込杖を揮廻して鐵腕健脚撰擧場裡を蹂躪せし功勞を廉

に切めては多少の月給に有附かんとする渡り壯士、何れか滑稽劇の材料ならざるべき。我は作家諸子に此幾多の實例を目撃して終に筆を着けざるを怪む。

●聰明なる讀書家は屢々政治小説を小説の極致なる如く思惟して渴望す。政治小説の價値は姑らく置き、今日政治界の情勢日に益々滑稽なるを見えて轉た政治小説を作爲すべき最好機なるやを思ふ。伊陸松樵等の元老が所謂人才を頻りに拔擢せし以來兩三年政治熱は次第に活機を生じ男子畢生の功業は唯だ政治家に限れる如く妄想せられて天下の才人は悉く利に趨つて株を買ふにあらざれば權門或は政黨に出入して政治家の名を貧らんとせざるはなし。渠等は政治の知識は魯か日本現今の行政組織すら理解せず眞に邦家を憂ふるにあらずして唯だ政治家の虚名を貪り及び此虚名を利用して黄金を攫まんと欲するもの歟、然らざれば政治は匹夫匹婦も

猶ほ談じ得るが故に文藝學術の何事をも解せざる無能無識の徒輩が雷同附隨して切めては政治家と呼ばるゝを無上の榮譽とする者——畢竟此二者のみ。代議士を見よ。渠等の多くが商賈と結托して私利を擅にするは猶ほ可なり。賄賂の爲に自由に動きて少しも恥づるなく甚しきは自家の良心を競賣に附して強て高價を貪ばらんとする者すらあるにあらずや。而して立法院の會議に列する者が一丁字なくして政府の提案を理解する力なきは魯か往復書翰すら満足に認むる能はざる者すら有りといふに至つては誰か其滑稽も餘りに甚だしきに啞然たらざるを得んや。渠等が代議士たるは株屋と利益を分たん爲のみ。政府に買収せられん爲のみ。勅參或は局長の椅子に有附かん爲のみ。朴實なる郷黨を欺かん爲のみ。姦猾なる高利貸を瞞着さん爲のみ。内閣大臣の宴會に招待せられん爲のみ。公會諸宴に待遇を受けんが爲のみ。若くは政黨政治の名目に乘じて

高位高官を僥倖せん爲のみ。若くは縣知事閣下郡長閣下と列を等ふして代議士閣下の榮稱を里老田夫に傲らん爲のみ。渠等は唯だ其位置を利用し其名譽を貪らんと欲し邦家の經營、人民の休戚に於ては全く菽麥をも辨せざるなり。斯の如き代議士を中堅とする政黨が國政を宰理する現今政治社會は豈是れ一大滑稽劇ならずや。

●所謂政黨内閣の施設を見よ。渠等新進大臣は老朽元老が屢々繰返せし姑息の政務調査を再びしつゝあるにあらずや。渠等は情實政治の病根を絶つ約束を忘れて黨閥情實に動かされつゝあるにあらずや。渠等が閣議は唯だ黨人安排に勞らされつゝあるにあらずや。渠等が大袈裟に繁文褥禮を矯むると叫ぶものは區々文書上の手續を些か變革せしに止まるならずや。渠等が大改革は局課の廢合分離、吏員の遣繰、俸給の増減等のこそくり仕事に過ぎざるにあらずや。渠等は老朽せる藩閥の俗吏を追出

しつゝ同時に頻りに老朽せる黨人を登用するにあらずや。渠等は野に在りて元老の貴族的を罵りしを忘れて猶ほ正三位を拜受し護衛巡查を存置し官邸に起臥して大禮服の調達を才覺しつゝゝあるにあらずや。渠等は内閣が輿論と共に進退する憲政の妙を稱したるを忘れて苟めにも死を以て内閣を株守すると號するにあらずや。渠等は輿望を私して憲政黨員ならずんば人ならざる如く勝手氣儘に振舞ふならずや。渠等の志は初素樸摯にして正路を行きしが今は勝利に驕つて新たに黨閥を以て政府を組成しつゝゝあるにあらずや。渠等は憲政黨萬歳の聲に安心して漸く榮華に耽らんとしつゝゝあるにあらずや。渠等は恰も平手相撲が力闘に勞れて腕萎へ腰抜けて苦しき息を吐きつゝゝあるが如くならずや。渠等は恰も支那の將軍が旗鼓堂々戰場に出で、平生講説する孫吳の兵法を持餘しつゝゝあるが如くならずや。渠等は英國の政黨政治を呼號しつゝゝ實は攝家政治又は

幕府政治又は薩長政治の心を脱せざるにあらずや。渠等は曾て盛んに經綸を賣りしに係らず今は却て内閣の政綱すら示し得ざるにあらずや。渠等は曾て改革の容易に成すべきを唱へしに係らず今は却て容易に成すべからざるを言譯しつゝゝあるにあらずや。渠等は曾て盛んに藩閥政府の財政規畫と外交不振を攻撃せしにも係らず今は即ち藩閥元老の漠然たる口吻を繰返して刷新を數年後に約束するに止まるにあらずや。渠等は宿昔の議論を政治上の權變として全く實行する心なきを公言するにあらずや。渠等は攻撃の燒點にせし軍政紊亂を如何ともする能はずして陸海軍人の益々傍若無人なるを知らぬ振するに非ずや。渠等は歳入の不足を補ふ術なきに苦み地租増徴も有繫に言出しかねて終には鹽稅の窮策や造酒稅十五圓の突飛策を案じつゝゝあるにあらずや。渠等は漸く自黨の信任をすら缺きて九寸五分的改革案を頂戴せしに非ずや。渠等は曾て藩閥元老

の秘密主義を嘲りしを忘れて頻りに政府の意嚮を秘するに昂むるならずや。渠等は未練にもいや、総務委員の職を褫がれしにならずや。渠等は自黨の機關新聞にすら時として冷嘲せらるゝにならずや。渠等は一星の歸朝に狼狽周章し一外山正一に椰揄翻弄せられしにならずや。渠等は消極的干涉の緊急勅令を倅ひして僅に多數の代議士を獲たるにならずや。渠等は内閣以外に多數の相談役或は監査役を有して事毎に干涉せられ土崩瓦解の決して遠からぬをお味方黨にすら豫言せらるゝにならずや。渠等は唯だ官邸に賃馬車に禮帽に扁幅を飾つて言語舉措を尊大にし只管大臣若くは勅任の威嚴を装ふに汲々たる恰も孔雀の羽毛を飾るエソツフの鴉に似たるにならずや。而して渠等は既に氣充ち意驕りて十年乃至十五年内閣を繼續し得べしと太平樂を歌ふにならずや。而して渠等は既に内訌の生ずるを豫期して互に睨合つて相陥穽しつゝ、一手に權力を握

る準備を爲すにあらざるや。——以上斯の如く堂々たる憲政黨國務大臣を罵る敵派の汚なき嫉妬心は何ぼう笑止の限りならずや。罵る者も罵らるる者も畢竟團栗の脊競べにして無策無經綸を輿論の聲に包んでお茶を濁す喻へば空囊の互に相倚て漸く立つに等しく自らは滑稽の凝塊なれば其舉措云爲總て絶好の材料にして所謂第二維新が幾多の作劇より更に絶倒すべき實例を示したるを喜ぶ。

●グラットストーン及びビスマルクの二巨人相續いで逝き、十九世紀は唯だ殘滓の沈澱するを見るのみ。恰も芝居が場を閉づる時ツ、リ狂言をやる如く十九世紀の幕落ちんとするに臨みて鶴屋團十郎は明治座に悪じやれを吐きちらし憲政黨は内閣を組織し政治界は俄に亂調子となる。我冠裝劍金紫燦爛たる貴顯が兵兒帶浴衣となりて盛んに政府を攻撃し、フロツク一枚に伊達を飾りし平民が却て傲然として本大臣と稱し、且て探

偵となつて附纏ひし警吏は即護衛となつて隨從し、曾て回護の筆を揮ひし御味方新聞は忽ち鋒を逆まにして政府攻撃軍となり、勳章胸間に燦めく殿様は色を喪つて馬車に帆掛けて逃出し、新進の勅任人材は革靴一つの身代を腕車に載せて揚々と官邸に乘込み、江湖に落魄するを名譽とする浮浪壯士は青雲を夢みて俄に美服を調達し、初めて野に下りたる縉紳は瘦我慢に粗服を纏ふて平民を氣取る。何等の奇現象ぞや、何等の滑稽ぞや。作家諸子は何ぞ這般活ける滑稽を逸し去らんとするや。

● 遮莫れ總ての改革は新空氣を入れる、が故に何人も必ず仰山らしく歓迎せざるべからず。七大臣が揃つて一臺の馬車に積込まれたる如き、大臣が撰擧の應援演説に出掛ける如き、大臣が偶々自邸の門衛に誤まらるゝほどお粗末なる如き皆是れ新奇の事例にして大臣閣下を初め新進勅任の大官等が日に益々小説的材料

料を供せらるゝは殊に深く感謝せざるべからず。

● 政治小説を頻りに唱道するものは多く今の小説家が淺弱なる戀愛の外筆を着けざるを難じて之に替ゆるに拔山翻海の雄大なる趣向を以てせよと云ふ。されど古英雄豪傑を材とする歴史小説ならば知らず、今の政治界を寫實せんとせば滑稽小説の外案じがたきを如何。撰擧場裡の奮闘激戦は町奴的にして浪六子の材たるべく、議會の大演説は賣藥屋の口上のにして南翠子の材たるべく、渠等が東洋策は愉快ふしとして壯士に歌はすに足るべく、渠等が教育案は代用小學の授業生にさへ嘲けらるべく、渠等が財政論は株屋にすらへ、コ、マ、さるゝに非ずや。政治家即ち偉丈夫と直ちに早合點するものは一に政治家を材とする所謂政治小説をもて壯大雄偉の立案なる如く考ふれども今の政治的現象を描いて一幅のパノラマとなせば誰か捧腹絶倒するを禁せざらんや。されど又此意味に於て我は

4

今の作家諸子が奮つて政治小説を作つて幸ひに稽滑文字の頗る缺けたるを補はん事を欲す。

●所謂策士といひ説客と云ひ合縦連衡といひ此類の言葉頻りに行はれて門には食客を養ひ謀士を帷幕に引く、壯士匕首を懐にして易水風寒く、暗夜帳中に會して反間苦肉の詭計を畫す。政治界の事何ぞ戰國策的なるや革命史的なるや。今の新進大臣を初め新進勅任官及び在野屈指の政治家を見るに小チスレリイ君はあり小マキアベリイ君はあり小ロベスピール君はあり、謀將策士雲の如く多けれどもリンコルンの如きブライトの如きコブデンの如き果して望み得べきや。三十年間日本は長足の進歩をなしたれども物質上には那智の瀧の水力を利用せんとし若くは琵琶湖を通じて本州を横断する大カナルを開鑿せんと設計するほど較や突飛的なるにも係らず思想上は依然封建の内容を覆ふに文明の外皮を以てする

に過ぎざるなり。所謂政治家が浮世の朝三暮四を外に見て東奔西走し終に止むなくも演説或は政論を賣て糊口するは武士は喰はず高揚枝の封建根性にして其言動議論は鎖港攘夷の志士と相肖たる者頗る多し。唯だ似て非なるは株屋と結托して利益の分配に浴恩し賄賂に煖まりて良心の切賣を耻ぢざる汚なき流弊なれども、是れ畢竟文明のパチルスに殘害せられし結果に外ならず。渠等は唯だ慷慨し壯語し隱謀密計を工みて朋黨相争ふを政治家の本領とし國家百年の計を立つる經綸は全く之を缺く。渠等は唯だ壯士なり演説遣ひなり新聞社説書きなり政治小賣人なり隈伯の所謂ポリチシアンにもステーツマンにもあらずして必竟目的は政府の權能をもて私慾を行ひ得べき椅子に座して人民に威張らんとするにあるのみ。渠等は大臣、次官、局長の名の下に御老中お奉行様の權力を揮はんと欲するのみ。渠等は自箇の政治が邦家を幸ひすべきや否やを考へずし

て先づ人民を服従せしむるを喜ぶのみ。夫れ斯の如く能狂言の大名然たる心をも人民政治を口にするが故に其舉措動作惣て滑稽の氣味ならざるなし。我は此點に於て日本の物質的文明と精神的文明とが太く乖離したる滑稽を殊に著るしく活現したるものとして作家諸君が指を政治小説に染めん事を欲す。

●今より十三四年前政治小説なるもの盛んに出でたり。文部大臣尾崎行雄君の『新日本』、農商務次官柴四郎君の『佳人之奇遇』、特命全權公使矢野文雄君の『浮城物語』、亡末廣重恭君の『雪中梅』等其尤なるものにして當時既に嘖々せられしが其名聲の高さに比して其理想の狹隘且つ淺膚なるを疑ひしものも亦少からざりき。されど今にして思ふ。身政治界に在りて其内情に熟するが故に殊更に狹隘且つ淺膚なる脚色を立案せられしにあらずや。今の政治家なるものを見るに唯だ權謀術數を重んずる投

機的策士、唯だ虚喝脅嚇を専らにする法螺的英雄、唯だ慷慨悲憤する芝居的壯士の類ひに非ざれば魯直朴實以外何物もなき田舎親爺歟、若くは似而非正義、似而非人道に文明を銜ふ當世風紳士歟、若くは熱罵し絶叫し次團太踏みつゝ破鐘聲出すを賣物にする黒旋風の豪傑のみにして無能無學無策無經驗は殆んど政治家を一貫する特質なり。恰も學堂、東海散士、龍溪等今の朝廷の大臣が著作せる政治小説中のアンチモイ細工的燦爛妍緻を極めたる大結構と大人物とに頗る似たるものあれば以て當世の錚々たる福利の立者たる大臣君、次官君、勅參君、局長君、總務委員君、代議士君、憲政黨員君を知るに足ると思ふと共に從來の政治小説が最も能く政治界を寫實し得たるに感服す。

●此故に我は政治小説を作らんとする者に注意す。先づ大政治家君の政治小説を讀んで略ぼ政治家特有の理想や希望や趣味やを精かにして後、

空論空説に勞れ撰擧運動に勞れ外見坊に倒れ高利貸に責められ幾度か結
 托し同盟し分離し賣收せられ蹂躪せられ同儕相陥穽し肝膽相照し其間泣
 くべく笑ふべく悲むべく憤るべき消息を觀察せよ。而して策士君、豪傑
 君、壯士君、才子君、紳士君と美人君、令嬢君、藝者君、待合のおかみ
 君、女丈夫君とを配合し艱難と艷福とを経緯とし保安條例に初まりて政
 黨内閣に終る大々的脚色を立案せば恐らくは今の沈靜なる文壇の寂寥を
 破るに足るべく、且つ内閣諸公の優渥なる知遇を忝ふするを得て貴族院
 議員に推薦せらるゝ歟、或は學士會院會員に登用せらるゝ歟若しくは他
 日新設せらるべき皇室文藝員に推薦せらるべし。されど我は切に警告す。
 忘れてもユーゴオを學ぶ勿れ、デスレリイを擬る勿れ、デユマにすら倣
 ふ勿れ、況してやスヰフトの如く政治家及び現代社會を罵るに於ては全
 く無用なり。謹みて學堂先生や東海散士君の慷慨熱憤を學び案を拍いて

朗々誦すべき日星河嶽の大文章を以て憲政黨が過去の功勳を頌し將來の
 全盛を祝するにあらざれば焉ぞ富貴顯榮の職を獲得するを得べき。文壇
 功名を成すべきは唯だ憲政黨頌德的の政治小説あるのみ。

●政治小説なる哉、政治小説なる哉、必ず成効を保證すべきは政治小説
 なる哉。獨り文事の功勞をもて榮譽ある閑職を買得るのみならず人材の
 拔擢が撰擧地方にすら信認なき犬骨的政治家に及べるを見て今の小説家
 諸子の學才力量猶ほ優に勅任相當官たるべき權利あるを思ふ。弦齋子
 をして文部大臣たらしめ浪六子をして北海道長官たらしめ故思軒子を
 地下に起して外務大臣たらしめ抱一庵子をして遣外公使たらしむる如き
 最も妙ならずや。我は此點に於て小説家諸子が榮達の手段として政治小
 説に手を着くべきを切に警告す。

●川上音次郎すら教育の爲め芝居をすると聲言し政見を廻附して候補に

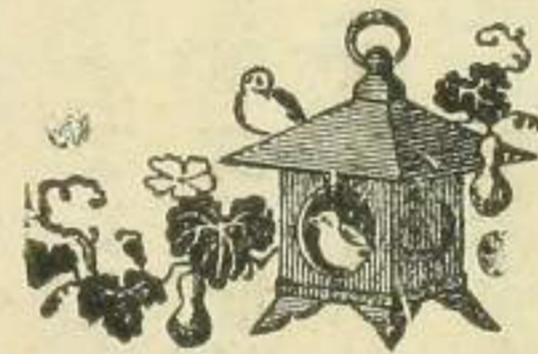
立ちしにあらざるや。堂々たる現今の小説家豈に邦家を幸ひする經綸なからんや。我は小説家中未だ一人の政治を論せしものなく、代議士たらんとするものなく、大臣せめては勅參位に有附かんとする者なく、天下の國政に參して經綸を行はんとするものなきを見て小説家が餘りに政治界を輕蔑し厭惡し忌避して戀愛や通や粹やに韜晦するを確信すると共に今少しく世間的俗人となりて切めては政治小説に指を染ん事を欲す。政治界今や活潑々地となりて憲政黨が滔天の勢は鯀寄る宗谷の岬よりマラリヤ流行る臺灣の土まで漲りて英吉利のエフ、アル、エスよりも獨逸のブロフエツツアよりも憲政黨員の肩書を重しとするに到りぬ。小説家よ、此好機を利用して先づ憲政黨に加入し、憲政黨員の名を以て大々的政治小説を作れよ。我は卿等が成効を信じて憲政黨御用詩人の月桂冠を拜受し必ず榮階榮爵を以て酬はるゝを疑はざるなり。

●されど我が政治界の恰も鱈や鮒がかいばりせられて泥に躍り跳る如き現象を見て直ちに鶴屋團十郎がすなる大演劇を作らんとする勿れ。斯る處世の哲學家が寫眞のレンズを學びて世間を逆睹する秘訣に擬ふて此政治界を大よそに觀察せよ。我は作家諸子が未だ曾て試みざるをもて多少煩はしきに堪へざるを思ふて些か秘訣を傳へんとす。必ず成効すべき政治小説は從來作家諸子が慣用する艶福艶禍に富める才子をして憲政黨に屬する政治家ならしめ其言語動作を少しく政治的臭味あらしむるのみ。而して唯だ忘るべからざる一事あり。他なし、其人をして失戀せしむる勿れ、必ず其演説に感ずる憂國の女丈夫との戀愛を成効せしむると共に國務大臣たらしむるを忘るゝ勿れ。

○此故に我は作家諸子がまゝ世好の低きを嘆ずる時間をもて憲政黨御用小説を作つて政治的男子の渴望を醫する歟、然らずんば滑稽文學の缺け

たるを補ふ意味に就て政治小説を作る歟、左に右に諸氏が以て試むべき好機は今を逸して何れの時ぞ。作家諸子よ。暫らく神聖なる戀愛の天地を離れて此紛糾雜還喧然沓然たる政治界に遊んで先づ政治小説を作れ。必ずしもユーゴオ或はヂスレリイたらざるも可なり。唯だ學堂大臣君と東海次官君とを學べは即ち成効すべきを思ふ。

(明治三十一年九月)



如 是 放 語

○文壇寂寥の聲所在に喧しけれども文壇寂寥乎、讀者寂寥乎、遽に定めがたし。文學の書を讀むよりは産業の道を學べよと教へ産業の道を學ぶよりは投機の説を聞けよと慫慂し投機の説を聞くよりは先づ兜町米屋町に駈附けるを早道とし何事も二一天作の五から割出して質面倒なる人生沙汰は久離切つて勘當したる滔々才子揃ひの炭鑛や郵船の騰落に腸を斷る株魂には如何なる幽奥博大の詩想も土芥塵泥一般にしてゲーテやトルストイも猶ほ到底濟度しがたきに我を折るべし。坪内逍遙子が沙翁の該撤を紹介してより僅に十五年、我は寧ろ文壇が百ダース以上の天才を輩出して祝捷祭の如く奠都祭の如く餘りに賑か過ぎて混殺狼籍大に寂寥ならざる事を憂ふ。而して又近ざる文壇寂寥の聲を聞く度に爾かく寂

寥ならざる文壇をも猶ほ寂寥なりと咳ける讀書社會の却て偶々寂寥索漠たるを證するにあらざる乎を思ふ。されど又比沼山の歌は立消となり日出島は漸く終らんとし文淵子の審美説久しく聞えず思案子の滑稽小説暫らく絶えたるは文壇一割の景氣を損じたる感なき能はざるなり。

○文壇果して寂寥なる乎、紅露道鷗以下の諸氏が崛起せし十年前は云はずもがな。所謂新進作家と目さる、諸秀才は詩品優尚辭藻豊麗にして佳篇名汁湧くが如く恰も奠都祭に於ける旗幟紅燈大名行列奥女中行列と同じく以て豊盛なる帝都の文明を飾る壯觀ならずや。且之をしも寂寥なりと號呼するは多くは是れ堂堂博學宏識の大學々士にして無際涯の蒼窮より無盡底の深淵に徹する大哲眼を以て夙に諸君子が所謂憐れむべき小文壇を睨破し日星河嶽の大文章彬々日に益々衰へず闡幽顯微の大議論譎々日に愈々盛んに天下の魑魅魍魎をして影を潜ましむるも猶ほ止まざる

は豈に前代未聞の大盛事ならずや。例へば深夜に危座しつゝあるが如し。更闌はに油燼さんとする時、天井を奔る鼠は雷霆の怒る如く春戸に鳴く蛙は驟雨のブリキ屋根を叩く如く、鼯に襲はれたる雞は厭世詩人の泣く如く、月に寐惚れたる鴉は樂天詩人の浮れたる如く、玄關番が反側は全家に轟き厨婢が寐言は隣壁を驚かし鼯齒切千音萬響、我は未だ之を寂寥なりといふ能はざるなり。

○然れども讀書社會は穩健巧妙なる弦齋子、或は壯大雄麗なる浪六子にすら猶ほ慊らずして更に愈々宏偉なる燕林、凌潮若くは益々富麗なる圓朝、燕枝の辭藻を味はずんば止まざらんとす。斯の如き讀書社會にはゲ一テやトルストイは敬して遠けられて神棚のお札より尊からず紅露道鷗の篇什はお兎の足にもならねば三世相ほどに嬉しがられず所謂新進作家は評者の能書澤山だけに少しは陳重されても迎も萬金丹反魂丹五臟圓

滋強丸ほどに有がたがらる、氣遣ひなし。今更に帝國文庫の目録を見て八犬傳や田舎源氏ならまだしもお家騒動や仇討物を珍らしがる様ではゲ一テ、シルレル、西鶴、門左、風來、馬琴、ゾラ、トルストイの輩轡を駢べて砂塵を捲來るも洪飈は能く天を摩する大木を倒すも終に地を這ふ草の根を抜き得ざると同じかるべし。此故に我は文壇の寂寥なるを少しも憂へずして寧ろ讀者の寂寥なるを大に憾となす。

○人は往々文壇に大作傑作名作なきを説きて文壇の饑饉となす。然れども饑饉に斃死するものは人間、續きては家畜にして其他の禽獸蟲魚は曾て之か爲に亡びざるなり。お家騒動、仇討物、軍記實録さては地方新聞の續き物、講談落語の筆記物一として大作傑作名作ならざるはなく讀んで飽かず盡きざれば縦全文壇は饑饉なりとも讀書社會は常に食傷しつゝ、あれば毫も饑饉たるを憂へざるなり。況してや數百種の新聞雜誌は日に

大作傑作名作を紹介しつゝ、あれば千歳の後限りなく榮えて長へに寂寥の感なかるべし。

○書肆は常に小説及び雜誌の賣高少きを説いて憂ふ。然れども我は餘りに多きに過ぐるを聞いて憂ふ。さしも大作傑作名作と有がたがらるゝものが十錢乃至二十錢にて得らるゝ故とは云へ端多錢にて良心の切賣りする社會が少くも二千三千を買ふて呉るゝは何等の風流ぞ、何等の贅澤ぞ、何等の義俠ぞ。斯の如き風流心、贅澤心、義俠心を有する讀書社會をして高價を拂はしむるは悖理にあらざれば徒らに地租を増徴して朴實なる農民を苦むるよりは、我は寧ろ禁止税に等しき苛税を雜誌屋店頭に堆き大作傑作名作に課するを上策なりと思ふ。

○教育家往々小説の害を數へて廢娼禁酒と共に禁小説を論ず。女色及び飲酒に於ける慾望や恰も渴者の飲を欲する甚だしき竟には毒泉を嫌はざ

ると同じきものあれば廢娼禁酒共に一分の眞理を藏す。然れども讀書社會の小説を求むる本と初めより斯の如く熾んならずして而も今の大作傑作名作は淡々白湯を呑むに同じければ特に禁小説を説くほどの害毒あるにわらず。我は却て猛烈なる毒霧人を蓋ふて正に頭を抱へて後へに逡巡する百歩、八萬四千の毛孔惻然として粟を生ずる底の惡毒小説の出で、有繋に寛量大度なる讀書社會をして辟易却走せしめん事を欲す。

○詩人小説家が欲る處は不朽の作にして望む處は文學史上の空名なり。然れども思へ。渠等が繰返し讀んで飽かざるものは榮泉社、鶴聲社、上田屋、金櫻堂等の書肆が幾度何萬部を供給しても猶ほ足らず、都下及び地方百千の貸本屋が天保時代より續いで讀者を絶さざるはお家騷動、仇討物、軍記實録等にして是等即ち不朽の作ならずや。且つ今の文學を評するもの即ち他日の文學史著者若くは文學史家に材料を供するものは

唯だ作家の苦心談を尋ね處女作を質問し脚色の梗概を紹介し逸事談柄を蒐集し或は過褒し或は過貶し然らざれば恰も經濟策を講ずる如く統計的に字數頁數賣高部數を調査し、一層巧者なるは某山人のは理想何分寫實何分、某氏のは戀何分冒險何分、某子のは失戀何分光明何分など化學的に分析し、更に一層巧者なるは五行並び下つて僅に數頁を讀破し唯だ嘆息し慷慨し熱罵し冷笑する歟或は驚嘆し賞嘆し敬服し閉口するを常とす。斯の如き斬新奇拔を重んずる評家の手に成り若くは斯の如き統計的分析的材料を参照して編輯されたる文學史上の名譽夫れ幾何ぞや。我は寧ろ廣告上の空名を以て詩人小説家が究竟目的となすを擇ばん乎。

○一ト頃苦心談なるもの流行せり。皮肉なる友なにかしは頻に呷いて曰く、苦心なる乎、苦心なる乎、涸れたる詩腦より脚色を編み出すも苦心なる哉、古人の金句麗語を補綴するも苦心なる哉、古めかしき結構を

潤色するも苦心なる哉、金スピレーションに餘義なく筆を採るも苦心なる哉、原稿料の都合で頁数を増加するも苦心なる哉、本屋の主人を談判する駈引も苦心なる哉、批評家除の白痴おとしに苦心談を語るも苦心なる哉と。我れ叱して曰く、咄、咄、勿れ、足下も作者の班にあるもの我も亦最々新々進作家の片隅に列す、既往の閱歴に遡れば天水桶の泥の海に千年、道普請の砂利の山に千年、或時は土鼠の土に踏し或時は蜘蛛の天に跼まり或時は空中樓閣に傲嘯し或時は盧生の夢に駈廻り艱難細さに嘗め盡して終に勝手氣儘の人生を製造する神通力を得しなれば抑も作者となりしが第一の苦心にあらざる乎と。

○客あり曰く、ユゴオは帝政に慷慨し、トルストイは教理に發憤しドストエフスキエは人道の爲に泣憤しゾラは猶太人の爲に氣焔を吐きぬ。知らず我が作家も亦怒憤憂悶する處あるやと。我れ語るらく、有り、大に

有り、戀愛の衰へたるに泣き大通の廢れたるに憤る、或は狹斜の爲に慷慨し或は流行の爲に氣焔を吐く。紅葉の毒饅頭、柳浪の非國民、青軒の墮落及び祈禱等は宗教の腐敗に激昂し、紅葉の金色夜叉、柳浪の畜生腹は共に人道の頽廢に憤慨して而して成れるものにあらずや。

○罵に巧みなるものは今の小説家が社會に密接せざるを難す。然れども小説家は常に洗湯、斬髮處に出入し淺草上野に散策し料理店に飲み玉突場に遊び或者は確に狹斜の巷にすら忍んで風俗の觀光を貪るを怠らず。何ぞ社會に密接せずと云はんや。若し小説家が未だ東洋問題に嘴を容れず増税案に就て可否の見を吐かず私設鐵道買上に就て全く知らざるが如く選舉法改正に説なきを以て社會に密接せずと云は、我は之を以て小説家が政事家實業家よりは遙に高尚純潔なる證左なりと云はん。我は寧ろ小説家が黨人の犠牲となりて是等諸問題に絶えて容喙せざるを多とし

て喜ぶ。
 ○理に敏き者侃々辨ずらく、今の小説家は絶えて日本國民の特性を描かず。然らば我れ小説家に教へん、卿等が燃犀の眼を以て細に今の社會を観察し所謂我が國民性を發揮するに勉めよや。我は我が國民が曾て楠公を生じ豊太閤を生じ二宮尊徳、間宮林藏、大鹽平八、鹽原多助、天忠組、彰義隊、福島事件、日清戦争を生じたるを知る。我は新羅王我が唇を啗へと絶叫したる烈士、唐朝の翰林に才名を轟かしたる詩博士、百萬の蒙古勢を一掃したる伊勢の神風、孤劍飄然南荒を征服したる勇士、降るあめりかに袖を濡らさじと憤死したる遊女、近くは雜誌日本主義に侃侃譎々敷島の太和魂を勇ましく鼓吹する忠君愛國の論客あるを知る。されど是等日本人が能く自ら知るもの、外に我は猶ほ一二の特性あるを數へんとす。

○現時の日本人が特長は株魂なる哉。焦眉の急に迫れる東洋問題をも輕しとし僅に黨勢の駆引より生ずる外交軟弱の抗議をすら沈壓するものは株魂なる哉、實業の聲盛んなると共に政治家も宗教家も軍人も學者も皆争つて銀行の重役となり會社の創立委員となりぬ而して實業の振作したる實何れにありや。雨後の茸の如く簇生したる會社は何物をも生産せざる中發起人は影を潜し創立委員は消えて了ひ、あたら東洋工業國の空株券は所在に堆く遺物となりて猶ほ其上に増株を募り社債を募り農工銀行を囁着し勸業銀行を犠牲にせんとし外資輸入を唱道し株券所有を外人に許すの議を起し私設鐵道買上を政府に迫り輸入は輸出を超加して金貨國に金貨を見ず半年に二千萬圓の外國米を喰潰して而して會社の惣資本六億に垂んとす。日本人を帥ゆるものは株魂にして日本國は即ち株國なる哉。我は實業界の消息に接する毎に總ての經營が事業の消長よ

り來らずして常に株の騰落に本づくを見、新聞紙面の商況及び實業通信が畢竟株況及び株通信なるを見、政事家宗教家軍人學者等相率ひて投ずるは實業界にあらで株界なるを見、天下を擧げて涎を垂れて其利を羨むは事業の成效にあらで株式の賣買なるを見、店持商人が眼を皿にして東奔西走萬金を攫まんと喘ぐは貨物の取引にあらで株相場なるを見、拜金先生が文明の宗教として舌を鼓するは實業萬能にあらで株式萬能なるを見、商人が衣裳持物に數寄を凝して學ぶ處は株屋の風采なるを見、商業學校の青年を集めて演説するものが株界の大先達なるを見、堂々たる經世經國の先輩が輸贏を瞬間に決する男らしき快事業として株式投機を奨勵するを見、東亞策や倫理説や哲學書や神學書や總ての治國平天下の書架に株式相場表が墊伏するを見、日本のロンバード、ストリートが株屋を中心とし産業の發達を願はずして却て株式の暴騰暴落を庶幾する

に於ては我は株魂が大和魂と參勤交代したるを信ず。爰に於て乎無頼の少年一夜に萬金の主人となり、昨日まで十錢二十錢の工面に差支へしものが今日は資本巨萬の大會社の重役となり、或は堂々たる商界の巨人邊に尾羽打枯らしたる素浪人となり、尅々たる男爵の將軍忽ち産を揮つて執達吏に押へられ、彼の縊縷は黄金に飾られて是の金庫は古新聞にて充滿す、金屋の主人は高利貸に低頭し落第の學士は仲買に傲り、忠君愛國の道德先生は頭金の調達に奔走し、社會共產の平民先生は買占の魂膽に勞らされ、終には花骨牌となり取扱無盡となり南京賭博となり私書偽造となり欺偽取財となり出奔となり重禁錮となる。且つ憐むべきは誠實律義なる賈人、純良無垢なる青年、細心翼翼たる循吏朴直一遍の農民、温良恭儉の學士、赤心報國に志す武人、敬虔なる信仰篤き宗教家等が偶々此株毒に觸れて終に不起の廢人となる例決して少からず。

而も毒霧に包まれて次第に衰老するを知らず、待合の榮華に驕りて良心の麻痺したるを疎かにし、利慾の馬に鞭打つて墮落の淵に疾走する運命は豈に是れ小説家が絶好材料にあらずや。

○更に現時の國民が特性として數ふべきは無信仰なり佛説は聞かれず基督敎は冷笑せられ神道は奮はず儒敎は全く甘睡せり。天理の祠は葦高く陶宮のお席は隙間なく充つれども國民の多數は彌陀に救はるゝ外は頼る處なくして聰明なる君子は無信仰を以て大いなる哲學とし安心立命の基礎となす。爰に於て尊王論は立身の方便となり倫常道德は處世の術數となり哲學説は術學の道具となり佛耶の敎を奉ずるものすら報酬の爲に傳道し生活の爲に説法し信仰を以て廣告となし濟度を以て商標となし甚だしきは信仰告白を君子の辱として強て自ら矯めて無信仰顔をするものすら有り。西人が無信仰の本家本元とするインガソルの如き實は堅實拔

くべからざる確心と熱誠とを有する一種の宗教家なるは敵者も亦許す處なり。然るに我が現時の國民は「我は何事をも信仰せず」と大膽に告白するほどの確信すらなくして徒らに浮泛なる凡神説と淺薄なる忠君愛國主義を覺束なげに擔廻るだけにて、而も時尚の流行に連れて時に其主義を斟酌し融和し折衷し終には全く變形して根本まで推移したるを忘れたるが如し。曾て生存競争の恐るべき理由よりして日本亡滅を唱へたる甚深甚大の學者が期年ならずして日本人種の優等種屬なるを説き俄に國民膨脹を叫びたる如き、又曾て夙にヒューマニタリオンを説き國家主義とも戦ひ基督敎オルソドックスとも衝突したる偉大なる教育家が近日忽ち日本主義化したる如き、聰明なる君子すら頼る處なくして流に漂ふ萍の浪のうねゝ西に東に行くと同じ。若し夫れ宗教家が晨に敎職を退けば夕に非宗教を唱ふる如き或は現に敎職を奉ずる者が講壇に立つ時と書

齋に在る時と信仰を異にする如きに到ては指を折るに違わらざるべし。十九世紀は研究時代なりとは云へ、研究に安んぜずして無信仰に安んじ宗教を冷嘲し聖賢を侮蔑し道徳を愚弄し哲學を玩弄し人生を藐視して唯だ生活の術を磨くに齷齪す。王荊公の所謂賢者は道を行ふ事を得ず不肖者は無道を行ふ事を得、賤者は禮を行ふ事を得ず貴者は無禮を行ふ事を得るもの即ち現時の風俗にして誠に無研究無信仰の結果なれば白日揚々市に傲る者は姦滑の智者乎、輕薄の才子乎、若くは浮世三分五厘と廉く澄して色と酒とに身を持壞す醉生夢死黨乎。此故に政治家は主義を質入れし代議士は良心を切賣し宗教家は信仰を斥賣し學者は學説を市鬻し主義信仰の森然として亂れず嚴然として動かざるを恥辱とし各々圓轉滑脱して俗惡世間と密着せん事を欲し清節を以て無能の商標とし信仰を以て愚人の看板とし研究を以て白痴の廣告とし主義を堅持して屈せざるを以

て膠柱彈琴として冷笑し巧みに世俗を迎合して流蕩阿順し模稜混殺彼方にも此方にも粘着して君子となり大人となり英雄となり豪傑となる。まことや日本を東洋地震國と云へば斯の如き瓢箪鯨が到る處にゆらくし硬性の者は墜落して險詐となり暴戾となり薄志の者は喪魂して厭世となり淫蕩となり泣憤し狂悶し自殺して終る。石川五右衛門とならん乎、丹治郎とならん乎、安祿山とならん乎、彌衡とならん乎、或は幫間となりて狹斜の巷に隠れん乎、或はバンヂットとなりて清韓の海岸に出沒せん乎、寧ろ志道軒となりて色道を説法せん乎、寧ろ蘆原將軍となりて天下の大事を議せん乎は今の青年が岐路に彷徨して沈吟する處にして一度門を出で賣節は賣節と衝突し曲學は曲學と争鬪し策士は横行し壯士は跋扈し天下悉く曖昧糲糊を盡して煤烟地に這ひ土芥天に舞ふを見て誰か此感を同ふせざらんや。小説家よ、卿等が狹斜に注ぐの眼と戀愛に泣

くの情を一轉して此懷疑墮落無信仰の社會を觀察せよ。幾多の可憐なる材料は卿等が熟練なる庖丁に解かれんとて俎上に躍り來るにあらざるや。○我は亦國民の特性として遊藝癖を數ふ。何れの國民も——社會が文明に進めば進むほど音樂の趣味を長じ來るは當然なれども日本は平安朝の往昔大堰川に管絃の御遊ありし時代より平家は福原に全盛を盡し東山殿は銀閣寺に風流を極め降りて元祿寶永の大盡は大夫狂ひに紙衣姿を耻とせず天明寛政の大通は本田鬻の銀元結を榮とし茶湯、香、花、歌俳諧、小唄、三味線、舞のひと手、笛鼓の嗜までなければ一人前の紳士の資格なきが如き感あるは明治三十一年の今日唯今まで相變らざる流行なり此故に上は大臣公爵勳一等より下は慈善會のお恵みに預かる貧民に到るまで夫れ相當の遊藝の嗜決して尋常にあらず。昔は深編笠の浪人橋の袂に小謠を謠ひ大店の旦那衆密に市に三味線を流し、今は焼芋屋の二階

に爪琴の音色床しく鬚だらけの殿様が義太夫のさはりを器用に歌ふは猶だしも——見よ、其特性の著るしく現はれたる、書生は學課より尺八を勉強し官吏は執務より謠曲に出精し商賈は算盤を知らざるも歌澤に巧者にして大臣は事務に暗きも義太夫に精しく而して之を嗜むや忽ち高慢増長して名人顔をするを常とす。新聞に素人義太夫の投票あつて待合に天狗連の催し頻りなり。町内一ダースの稽古場は小娘よりは若衆の弟子多く下宿屋樓上チエストの聲と共に月琴尺八清笛の調子面白く、謠曲の流行は上下おしなべて平一面に及ぼし堂々たる紳士が謠曲俱樂部てふ不思議な結社を起したれば此勢では能役者保險を創むるものすら必ず有るべし。妙齡の婦女は家政を齊ふる才あるよりも遊藝三十六般に通せざれば嫁入の口遠く有爲の青年は篤學謹厚なるよりも義太夫謠曲の一とくさりを諳んじ月琴尺八の一と手をかぢらざれば出世のほど覺束なく官吏は

長官の機嫌を取らん爲に謠講に列し商賈は顧客を殖さん爲に義太夫會
 に出席し今や天下を擧げて義太夫國或は謠曲國たらんとす。さる故に三
 國は豺狼の牙を隣邦に加ふる時滿都は藤間の舞踊と杵屋の三味線とに浮
 れ綽々として餘裕が有り過ぎるほどの馬鹿騒ぎをしてのけたり。一と頃
 臥薪嘗膽の流行言葉ありしが今は怯懦風に吹かれて青鼻汁垂らした病國
 の熱が長じての謔言に耻かしくもなく調子外れの胴魔聲を振擗つて三石
 六斗ほどの膩汗を流す。是程の膩汗を切めて百人も流したなら高がルー
 リツクやナヒーモフ位を微塵に粉碎く事が出来さうなものなり。謠曲の
 文句で天下の大勢を論じ長唄や義太夫で頽風汚俗を救はんとし月琴や尺
 八で列國の雲行を遏め東洋の波濤を鎮めんとするは空前の珍事にして今
 や劇場は常に大入にて寄席はいつも客止なりホーカイ節に實入多く女義
 太夫は福々たり東京の中央に浪花節の寄席ビラ見えて裏店の悪太郎ハ

モニカを翫弄にす大道の齒磨賣は手風琴を奏して代議士の衣兜には謠本
 を潜ます。誠や東海遊藝國の大全盛にして我國民は歌舞の菩薩を理想の
 本尊とし隨喜渴仰し遠くは淨瑠璃御前が天樂の舞、阿古屋が琴の調、高
 時が田樂舞、空也坊主の鉢敲より近くは金龍山のどられん坊、橋町の
 二朱判吉兵衛、修驗者上りの山彦源四郎、お納屋の小忰の藤十郎、さて
 は如電粹士の園八節、平岡大盡の河東節、四光太夫の淨瑠璃等は無上の風
 雅として有がたがられ諸國益踊七夕踊豊年踊津々浦々まで金冠紫綬の
 高位顯官も垢面縷の窮民乞食も聲枯るゝまで歌ひ足折るゝまで踊つて
 止まざらんとす。我が泣上戸の小説家よ。須らく涕涙を拭ふて此絃聲を
 聞き此亂舞を見よ。貴賤上下おしなべて謠曲に夢中となり義太夫に浮れ
 尺八や月琴や琴や笛に餘念なき間に迅雷疾風耳を覆ふに違あらざる中何
 十萬噸の敵艦は怒濤を破り三十三吋の巨砲は黒雲を劈きて俄に周章狼狽

する滑稽的走馬燈は聽て卿等が眼前に躍動せんとするにあらざるや。

○我は猶ほ外人をして頻りに垂涎せしむる日本ムスメの賣色癖あるを認む。又所謂粹と呼び通と云ふ語が狹斜に生ぜしより推して日本紳士の理想が折花攀柳の情事にあるを認めざるを得ず。○桑港、浦鹽、孟買、新嘉坡の出稼婦人が陸離たる光彩を發揮すると共に圓山の美人は東洋の名物と稱へられ祇園の麗容艷色は日本隨一の國粹と賞でられナンバー、ナインの名はチヨンキナと共に東洋諸港に喧傳す。獨り東京に就て云ふも新柳芳洲の電氣燈は炳然として輝き帝都人口の殆んど一割が此色界に糊口すと云は、誰か其盛んなるに驚かざらんや。○小説家よ。卿等は深く狹斜の事情に通じて假紅倚翠の韵事を巧に傳ふれども我は更に一步を進めて墮落の真相、暗黒の半面、悔懺の消息、衰殘の末路及び病的の生涯を細に剖拆し來らば淫靡輕薄なる標客をして寒からしむる人生の教訓となつ

て一知半解なる廢娼論者の荒肝を挫ぐに足るものあるを信ず。

○更に又我が國民の特質を驗め來らば怨嗟、慨嘆、怆懦、輕動、善忘等中々に多かるべし。且最近三十年間に物質と思想との行徑は殆んど逆比例をなし鐵道三千哩、銀行會社四千に垂んとする今日愛國者は威丈高に忠君愛國を辨じ佛徒は珍らしさうに五戒十善を說法し基督教徒は有がたさうに三位一体を教へ風教日に廢れて嚴師なく畏友なく私曲賄賂公行し諂佞阿諛縱横し策士は經綸に乏しく吏人は事務に通せず宗教家は閑窓に眠つて學者は待合に醉ふ。○小説家よ、卿等が燃犀の眼を此溷亂紛糾せる社會の黒面に徹して太平に中毒する泥塑的懶民を鞭笞つて攪醒せしむると共に太平を蠹蝕する微菌的撥賊を磕碎する底の作を試みよ。○文壇寂寥の聲に驚く勿れ、大作名作傑作なしといふ聲に恐るゝ勿れ、批評家の叱咤に臆する勿れ、讀者の不平に怨む勿れ、所謂聰明なる政事家教育家參

事官じくわんの婦人商家ふじんしやかの娘等むすめらの局外きやくぐわい觀くわんに呆あきる、勿なれ、所謂いはゆる不朽ふくしやうの作さくを望のぞむ勿なれ、所謂いはゆる文學ぶんがく史上しじやうの空名くうめいを欲ほつする勿なれ、所謂いはゆる苦心くしん談だんに内幕うちまくを見透みすかさる、勿なれ、唯ただ直前ちきぜん驀進もくしん、人生じんせい諸般しよはんの問題もんだいを探究たんきやうして所謂いはゆる名作傑めいさくげつさく大作だいさく以外ぐわいの案あんを立てよ。我われは寧むしろ文壇ぶんだんが奠都祭てんごさいの如ごとく餘あまりに賑にぎや過ぎて名作傑めいさくげつさく外ぐわいの案あんを立てよ。我われは寧むしろ文壇ぶんだんが奠都祭てんごさいの如ごとく餘あまりに賑にぎや過ぎて名作傑めいさくげつさく大作山だいさくやまの如ごとく堆うづたかく批評家ひひやかの叱咤しつたすご頗よく讀者さくしやの不平ふへいきは極めて乏ことばしく所謂いはゆる聰明ちやうめいなる局外きやくぐわい觀くわんの迂濶うくわつせんはん千萬せんばんにして而しかうして今の作家さくか諸子しよしが正直律義しやうちきりちぎ一方ひやくに不朽ふくしやうの作さくと文學史上ぶんがくしじやうの名なとかを欲ほつする餘あまりに其大苦心ちのだいくしんを容易よういに披露ひやくろしたるを惜をしむ。誰たれか文壇ぶんだんを寂寥せきせうなりといふ。作家さくかは矢繼やつきは早はやに名作めいさくを持出もちだし評家ひやうかは盛さかんに嘆息たんそくを持出もちだし讀者さくしやは連しりに注文ちゆうもんを持出もちだす。我われは寧むしろ大盛だせい大繁昌だいはんじやうを極きまめて絮々叨々じよくたうくなんく喋々てふくの頗よく煩わづらはしきに堪たへずといふ。

(明治三十一年六月)

市川白猿

ジョンソンが統率ごうらつしたる文學會ぶんがくかいには當時たうじの名流めいりゆう盡つぎく集あつりたり。ゴルドスミスは詩文歌曲しぶんかききく、パークは政治哲理せいぢてつり、レイノールツは美術びじゆつ、ギツボンは史學しがくと、各々おの／＼其長處そのちやうしよを代表だいへうして一世せいを風靡ふうひせしが、特殊とくしゆの技藝ぎげいを以もつて是等名流これらめいりゆうの間に並ならびしはガールリツクなり。ガールリツクは初めジョンソンに師事しじして得うる處ところ頗おほく獨ひごり技藝ぎげいに精妙せいめうなるのみならず才學さいがくを以もつて古今ここんに聞きえ自ら持もつる處ところ高たかかりしかば終つひに當時たうじの梨園りえんに重おもきを加くへたり。

前年來演劇ぜんねんらいえんげきを獎勵しょうらいする聲高こゑたかく終つひに俳優はいゆうを以もつて教導職けうだうしやくに補任ほにんしたれども全く倫理りんりの何物なにものたるを解かいせざる輩はいが果はたして能よく教導けうだうの任にんに堪たゆべきや。滑稽ごつげいも又甚またはなはだしい哉かな。蓋けだし今の俳優はいゆうの多おほくは無學無識むがくむしきにして甚はなはだしきは

書ぬきの稽古にすら振假名の力を借りて漸く辨ずるほどなれば縦令獎勵するも改良の實を擧げがたきを如何すべき。昔しは作者壇に近松、竹田、下つて左交、南北の名手あり、而して梨園社會には即ち五代目市川白猿の最も欽仰すべきあり。

今こゝに團十郎や鬼は外——是れ其角が畫贊にして市川家代々名人と云はれ元祖段十郎以來連綿として一人の祖先を辱かしたる者なし。就中五代目は技藝才學品行共に備はりて凡そ日本に俳優多しども能く是人に凌駕するものなかるべし。白猿在世の日は日本文壇の旺盛を極めたる時にして京傳、馬琴、馬馬、三馬、蜀山、六樹園、眞顔、京山等の名流濟々たりし事猶ほジョンソン時代の如く、白猿が是人々と交を厚ふせしはガリツクが文學會に於けると同じ。しかも才德藝の三者に於て能くガリツクに劣らざるを見る。

白猿の技藝は世人よく是を知る。馬琴の戲子名所圖會に「江戸の鼻」として「江戸見ては外に名所もなかりけり團十郎がはなの三月」とあり。是だけにても無類の名人なりし事を知るに足る。市川家は役者世界の門閥にて評判記には惣巻軸の坐を占むるを例となせども白猿の如く常に同じ好評を博したるはなし。殊更品行を謹しみて當時の男地獄全様に目されたる他の役者とは大に見識を殊にし文雅を専らとし、劇場より家に歸れば役者らしくなき様に身を持つを以て常とせり。錦着て疊の上の乞食哉——是れ白猿が見識にして今の外國俳優の消息を生嚙りして而して品藻を缺ける輕薄者の針鉦となすべし。蜘蛛の糸巻に「きのふも顔に白粉つけさせながら涙を落し候それは如何とならば御素人様ならば悴へ家業を譲り隠居をもなすべき歳なり然るにいやしき役者の家に生れし故歳にも恥ぢず女の眞似するはいかなる因果ぞと落涙いたし候」とあり。又隠居

の後寛政十年霜月顔見勢に出座して述べたる口上に「(上 畧) どうぞ貴様大義ながら來年一ツぱい又役者に成て助ては呉れまいかとの頼でムりまするが私も氣の毒には存じましたか一旦何れも様へ仕舞ますると申上た詞が鐵石より重ふムりますれば斷を申しましたれば勘三郎も不興氣に立歸りましたが又々十月の初めつかたに弟半四郎悴團十郎全道にて勘三郎私方へ見えましてそんなら一年とはいふまい程にどうぞ此顔見勢を三十日すけて呉れいとの義でムるが夫も何れも様へ義理が重い故目を眠つて又斷を申しましたれば半四郎申しまするにはそんなら是非がない顔見勢を三十日休むがよからふ春になつて下りを呼寄せ御機嫌直しの興行を致すがよからふと申しましたれば勘三郎がイヤ々此顔見勢を三十日休まれては春になつて櫓ををろさねばならぬ折角去々年再興した櫓を春ぢきにたいてんさせては第一何れも様第二先祖へどうも云譯がたゝぬ

とふぞ仕様は有まいかどの事でムるそれ故半四郎申すしの了簡にてそんなら兄貴ぞうぞ三十日口上ばかり云ふて下されいその仔細は甥の團十郎をわしが乳母になり母親になつてもり育て何れも様の思召をも顧みず曲りなりに世話をやいても見ませうが不座の芝居を餘りあつかましい世話のやきやうをしをると何れも様のおつもりも恐入るほどにどうぞこなた年役にそのお詫の口上、申上て呉れいとの頼でござる(中略)何れも様へ一旦しまひますると申上げた詞にいつはりならぬ證據は役者にはなりませぬ今日出ましても役者でござらぬ證據は白粉をわけませずかづらをかけず衣裳を着ませず唯はげ天窓に上下をひつかけます成田屋七左衛門と申すおやじがお開帳の取持に出ましたと思召て下されよせう(中畧)私も當年五十八歳になりまするが扱々役者はくらうな家業殊に座頭は氣のいたむもの畢竟いづれも様のおかけ先祖のかけで赤下手な私が三十年

の餘も座頭をいたし身退たる上からはモウふつ〜舞臺へは出まいぞと
あきらめてござりましたが「云々とあり、是を見ても白猿が志のある處
を知るべく又俳優に珍らしき氣象あるを知るべし。猶更此口上を聞かん
とて都人競ふて見物し前後に稀なる大入なりしと云へば當時の人氣皆
白猿に向ひしを知るべし。此口上の後義理に迫られて出勤せし事三度あ
り。享和二年春狂言に祐經と景清を勤む。諸人大評判にて本場の親玉(四
代目團十郎五粒と號す)の再來ならんととりぐの噂なりしが是を納
めとして牛島に退き、五年の間風流を樂しみ月雪花に山ほとゝぎすを友
とし文化三寅年十月晦日を以て歿す。法名還譽淨本臺遊法子、行年六十
六歳。其前日句あり「木がらしに雨もつ雲の行衛かな」此句はかなくも
其辭世となりぬ。

白猿の技藝元より非凡なれども技藝に於ては前に二代目栢筵四代目五

粒山中平九郎等あり、後に七代目白猿松本幸四郎尾上松緑等ありて容
易に甲乙を判すべからず。されど彼が行狀と才筆とは殆んど無双にて
梨園社會の模範となすに足る。其牛島に閑居するや一ヶ月の雜費を二分
とさだめ、極めて質朴に日を送り、隱宅は人の孫店にて六疊に勝手ある
のみにて天井をも張らず、草屋根の裏見ゆれを少しも恥づる躰なく、却
て世の役者は隱居すべき年でもをぐる心を捨てざる故にいつまでも顔を
塗るなりと憫笑せり。其作狂歌二三を抄録せんに、

隅田川漁父にもあはず風引て白猿ひとりはなたれにけり
長き夜の草のいほりの樂みは酒もいつ升ありあけのつき
髪ゆはず月代すら湯浴せず無情不滅のほどけとぞなる
唐こしの五岳と富士の首引にいざ白雲をつなぎあはせて
右の外「友なし猿(白猿著述)を繕けば一唱三歎のもの頗る多く、殊に

卷未白猿獨語の如きは兼好元政の風骨を備へて所謂河原者の作にあらざるなり。以て其生平を知り清飄真逸の風采を想像するに足る。ジヨンソンの門にガリーリツクを出すは元より怪しむに足らず。唯だ此敗徳亂離を専らとする當時の河原乞食社會に生れて斯の如く高潔なるは試に不思議なる哉。今の教導職俳優先生即ち以て如何となす。

(明治二十二年八月)

東 花 坊 支 考

蕉門に一箇の怪物あり。花に嘯き月に戯れ老莊儒佛を掌上に弄し、宇宙を喝破し人生を達觀し、獨り罵り獨り諶して好んで出世間の文詞に隠れ、ある時は醒むるが如く、ある時は醉ふが如く、忽ちに罵り、忽ちに笑ひ、毅然として天下の師を以て任じ、昂然として市井の隱を以て居る、彼れ個儻任俠の士なるが如し、彼れ瑰偉權奇の徒なるが如し、彼を以て放蕩無賴と爲すも説あり、彼を以て偏執固陋と爲すも理あり、カアライルの所謂「スフィンクス」なるもの僅かに一小世界獅子門に光明を現じたりしが人は目するに唯の一文士を以てす。縦令彼を以てリ、ツバットの住人となすも一滴の水中に相呑噬する幾億萬の微動物ならんや。彼常に芭蕉に従ひ、其奉ずるや極めて恭謙にして、四方に隨伴して終に

惟然と共に枯野を廻る翁の夢に侍して花屋に針薬の給仕をなしぬ。誠に篤行忠實の君子能く昂て芭蕉の徳に膺へれるが如し。しかも其歿するや、義仲寺の讀經なほ風に傳はりて、滅せざる中に忽ち古今抄俳諧十論を著し蕉門の阿難顔淵を以て任じ辯難論議餘す處なし。彦城の許六豪放卓落氣能く天下を呑むの慨あつて猶支考に憤り荐に是を罵りしは即ち其俳壇に勢威を逞ふせしを知るに足らむ。彼が渡吾仲の名を假て草せし吊許六文に「我師東花坊は本より方外の友にして我師は作意の流行ならんには作はつくる日の流行をいひ其人は作意の無盡なれば是を故翁の直指なりとあらそふ例へば黃梅の即心即佛なるを馬祖は非心非佛とあらそへる如く我師はその人の好處を破するのみ何かは言語の作不作をあらそはむ」とあるを見れば生前に説を異にして相難せし一斑を窺ふべし。許六は又支考を評して曰く、

「(上畧)翁はかれの佞なる生得を見届け給へども彼は推する事あたはず前にも申す如く行末いかゞ覺束なし發句さして手柄ある句見えず俳諧はたしかに血脈を得たり文章を書せても聞事なり、しかれども趣意が通らずかたはしいや味を書けり(中畧)其質かしく隨分利根なる故人を迷はす所の罪甚だしく」云々
思ふに許六が此酷烈なる批評も甚だしく支考を誣妄せしにあらで較穿ち得たる處あるが如し。支考漫に方外の文字を擅にして挿天拔地の勢を以て世を嘲罵し、言を滑稽に假りて滿腔の不平を訴ふ。彼れ荐りに莊老の高遠を説く、又盛んに儒佛の虚實を講ず。莊老の高遠儒佛の虚實素より彼れの喜びし處ならんが、彼は愛好せしよりは寧ろ是を好武器となし以て自己の奇矯を筆端に馳せて快を買ひ、空涌せる才思を一毫の下に集め、落々たる胸懷能く宇宙を包藏し日月を吞吐するの概を粧ふて、花を見るも

月を瞻るも猫に對するも蚤を捻るも朝寐晝寐戀無常、萬物平等に見て嗚
然として大笑し談話の中に隠れて内界の苦を蔽ふ。是故に澹々たる飄逸
文字中まゝ苦惱煩悶慷慨激憤の跡を殘せしを以て世往々支考を目して名
利の妄執を斷ずるに怯なる徒となす。然り彼は嘗だ怯なりしのみならず
功名の奴隸となりて東花西花野盤子苗宰陀甚しきは獅子門の弟子蓮二房
また渡白狂と假名して自讚の辨を逞ふす。古今卓犖不羈の士時に此癖あ
りと雖も虎嘯風生の筆を奮つてまざしくも生前に獅子庵遺稿と題し
自ら弟子と名乗て無上の褒辭を陳ね時に蕉門の阿難顏淵を以て自任すれ
ども鑑塔の銘には文章の巧妙は芭蕉も及ばずと自讚せり。許六の所謂い
や味を含蓄する文字なれども其豪放にして眼中芭蕉をも没する概は時の
傍若無人なる菊阿も亦及ぶ所ならんや。
蓋し元祿時代は昌平無事にして上下學に勤しと雖も僅に惺窩羅山の流

を汲し者のみにして徂徠仁齋の學說未だ遍からず國學に契仲長流ありし
も徒を水戸に集めしばかりにて廣く通せず、況してや俳諧壇は宗因の唾
を舐る淺膚なる談林者流若くは芭蕉の粕を喰ふ無識なる風流漢にして瑣
々たる章句に功名を競ふ者のみ。偶々絶代の才敏をもて鳴りしも是等は
皆ジエニアスにして、素より單純なる社會なりしかば沈痛峻刻深く考へ
深く味ふの士に乏しかりき。獨り支考此間に立つて機敏なる眼光と卓絶
せる識見とを有し古今抄に俳諧十論に爲辨抄に續五論に警拔なる文字を
もて俳諧の意義を細述す。その正非深淺は兎にかく講文談詩に極めて鹵
蒙なりし時代に能く此評論を試みしは又以て彼れが尋常俳諧師にあらざ
るを知るに足らむ。
されば彼が這箇眼光を以て儕輩を見て已れが其伍中にあるを苦んで自
然自讚を逞ふせしも又甚だしく咎べからず。素より達識の爲す所にあら

ざれども此一點を執つて彼を冷罵するに忍びざるなり。縦令彼自己が功
名を貪る爲なりしも、俳道の爲に萬斛の墨を費し祖翁の法筵を開き双林
寺に假名の碑を残す。其一代に盡せし功業通常俳人の比にあらず。誠に斯
道に死したるものといふべし。畢竟渠が自讃を逞ふせしも心中密に誇負
する處ありし所以にして豈寸功なくして徒らに誇大の言を擅にする亞流
ならんや。

報恩表に先づ師恩を叙して後、

「さればや東花坊はむかし佛法の師をはなれて佛門の人のそしりをかへ
り見ず此俳諧にあそぶ日より高く師徳をかゝげむ事を思ふ是たゞ報恩
の一にもあらんか、弟子曾て双親を失て後は師を木曾寺におくり置て
花の露に泣きし日よりその日々に香華を忘す父母の敬禮にも先だて
るは是たゞ鹽醬を忘るまじき報恩の其二にもあらんか、弟子かつて七

年の魂を祭りて木曾寺に十百の巻を具へ今年は双林寺に百々の韻をつ
いで三日夜の法樂をなさむとするに身貧にして其志を遂ざらんとす
伊勢が家賣ふちせにはあらねど宗祇の質といふもの置給へる風雅のた
めしもありと聞ば寧一山の自畫自讃など其外に五品の物をしるなして
爰の供養のあるじとはなれり是れたゞ報恩の其三にもあらんか」云々
また通夜物語表には、

「そもや我師の德行を表せば祖翁の一道を天下にかゝげて滅往三年の法
會より七年には湖南の木曾寺に二日千句の追善を修せしに遠近二十ヶ
國の門葉を催はし十三年には洛の双林寺に一萬句の法筵をのふるに西
は中國四國より白縫の筑紫にひゞき北は三越の國々を経て奥羽のはて
なき千島までも況して武洛の古門人は感仰の意を運べるよりそは三
日夜の法樂をつくせり扱十七年には假名の碑を製してそを双林寺に造

立せしが其時は自門他門をえらばず洛陽の名ある宗匠をまねきて詩歌
 連俳の風雅をまじへ一山の僧徒は法燈をかゝげて薰香拈花の法養をつ
 くせば所は名にあふ双樹の林に花は極樂の臺にひらき鳥は笙歌の雲に
 あそぶ左るは彌生の半なれば也」云々
 此二節は即ち支考が發願文に阿誰話に鑑塔銘に葛の松原に繰返し物
 に寓し事に寄せて世に訴へし功業なり。彼れ名利を貪らんが爲め特に此
 文字を作りしか、將た其功德の人に知られざりしを憤つて此文字を爲せ
 しか。兎にかく彼が同門諸子に容れられずして熱罵憤激せしもの其因蓋
 し爰に存せり。彼れ曾て白狂傳を作り狂の字を解釋して曰く、
 「釋尊は佛法に狂ひ孔子は儒法に狂ひ給へと遊戯自在にして歸る道を忘
 れず莊周はちと狂ひ過してその世の人には憎まれたるよし左れと狂ふ
 事を得ざる人は其狂ふ人を憎めるなるべし詩人は詩に狂ひ歌人は歌に

狂ふ」云々

是れ彼が懊惱を吐きし語にして支考實に俳諧に狂ひ過し狂ふ事を得ざる
 人に憎まれしなり。當時の優柔不斷何事を爲すにも躊躇逡巡する輩は
 勇猛奮進少しも顧慮せざる支考を罵るも笑ふも素より必然にして怪む
 に足らず、畢竟淺薄にして輕忽なる凡俗の眼は情焰熾んなる白熱詩人を
 影する能はざるをもて或は冷淡と罵り或は偏僻と嘲けるも此冷淡の中此
 偏僻の背後に無量の涙あるを知らざるなり。

我等勿論支考が爲せし處を喜ぶものにあらざれども若し彼が域に投じ
 て淺近なる他の輕忽者に斥けられし彼が苦惱を推想すれば、數奇にして
 人に知られず、偶々一二盲眼者に尊崇せられしも俳壇の代表者たる同門
 諸子に嫌忌せらるゝを憐まざらんや。さればすゝるに其不遇を悲んで世
 に訴へて曰く、

「我は元より異境の田家に生れて貴高の門に膝を屈め富饒の人の手をま
ぶりて人に下れば諂ふに近く人を敬へば賣るに似たり爰に知るべし孔
子も相國の位を喜びて人は上に居て下にくだる事を樂まずやとさるは
官祿をよろこぶにはあらで其道に於て其徳をひろむるには人をなびけ
て自在なる故なり我はたま〜芭蕉門に入て俳諧の一脈を傳ふるより
天下すべて我が理論に推されて眼前に我をあざむく人もなければ自ら
人の上によちのぼりて四方の判者を蚊虻に聞なし一座の連衆をも兒女
に見置たるは纔に一寸の片唇を動かして天下の人を舌頭に挫斷すとい
ふべし、然れば其道は得も得たらんが其徳は日夜に油盡きまして先翁
の餘光をさへ是が爲にかゝげ盡くしぬべし誠に恐るべく誠に悔むべく
是をも勤めざらんや是をも謹まざらんや是れ我が發願の素意なればな
り我師やすでに二十年の腸をくだきて俳諧には三十餘集の模様をつく

し徒然の讚には十五抄の註者をひしぎ爰の木曾寺には十間韻の手向を
殘し洛の双林寺には七字の碑の供養を遂げたるに世の人はその功を數
へずして常に利名をむさぼりてその身を飾る人なりと毀れり云々(發
願文)

苟くも事を世に爲さんとして猛進身を忘るゝものまゝ此不平を免かるゝ
能はず、心あるもの何人か涙の滴るを覺えざらんや。支考は實にその尊
崇する莊周の如く狂ひに狂ひ過して歸る道を忘れしものなり。名利の妄
執を斷つ勇に乏しかりしも、彼が胸裡に入つて推想すれば、強ちに名
利の奴隸となりて自己の功名を買はんには何事を爲すも躊躇せざる没徳
漢にあらざるなり。畢竟幾多の假名を作りて功名を顯はすに汲々たりし
も又た憐れむべし。好丈夫、祖翁の油を盡して傳燈の功を空ふす。惜む
べし惜むべし。若し彼にして芭蕉が最後に其集を編むを許さざりし不説

の訓誡を忘れざらしめば必ずや此狂に陥らざりしものを。
然れども支考は能く莊周が狂ひ過して世に忘れしを知つて自身が亦周の轍を履みしを悟らず。その功業の世に知られざるを憤りて不平の言を繰返せしも其狂不狂毫も省みざりしなり。彼れ双ヶ岡の法師を評して「本より兼好の本情は書て自ら書かずとも云ふべく書かずして自ら書いたりとも云ふべしさるは人間の是非に能く遊ひて今日の變化に自在なれば天下の人の褒貶に任せたるなるべし」とあるは兼好を假りて自家胸中を現示せしものにして、彼れ常に蓮二房或は渡白狂の名を以て其不平を暴露したれども、念頭期する處凡常の上に出で紛々たる天下の毀譽褒貶唯爲すがまゝに任せるなり。
曾て麥林の會に於て乙由先づ句を案す。「老僧の顔を佛師に見せて置く」。判者釋教に障合なりと爲して是を退く。輪回支考に到りし時此の句を其

儘に盗み、冷然として一座の啞然たるを制して曰く判者識なくして此佳句を没す我れ拾ふて以て我句と爲す諸君何の怪む處ぞト。事頭陀物語に見ゆ。眞偽頗る疑ふべしと雖ども彼が文字に狂なりしを知るに足る逸話也。支考享保十六年四月七日を以て歿す年六十七。所謂美濃派の祖なり。

(明治二十四年五月)

因に云ふ支考に就きては余が
芭蕉後傳を参考せよ俳諧文庫
素堂鬼貫全集の巻尾に載す

『ラセラス』傳の作者

東京の諸學校は英語の教科書として『ラセラス傳』を用ゆ。此故にサミ
ユール、ジョンソンの名はマカウレイと共に早くより諸生の間に喧傳
せらる。ジョンソンは實に我が文海を乗切て英國文學の先登をなし、佐
々木四郎高綱なり。

『ラセラス傳』の奇構と妙想は僅に第三讀本を終りし者猶ほ且つ之を知
る。而して此小冊子の作者及び名高き字書の編纂者として我が學界にジ
ョンソンの盛んに噴々せらるゝはニュートン、ガリレオ、カント等と同
じく邊陲の老學究すら能く其名を諳んず。然るに余が今更に物珍らしげ
に之を紹介する所以のもの深くジョンソンの生涯に鑑みて我が今日の文
學界に慨する處多ければなり。

傳に曰く千七百五十九年一月ジョンソンの母病んでリツチフ井ールド
に歿す。時に渠は倫敦に在て恰も究困の域に齷齪したれば此悲報に接す
るも郷に歸るを得ざりしのみならず其の埋葬の費用をだに送る能はざり
き。此に於て渠は遽に哀悼の涙を押へて筆を執り一週間ならずして其稿
を脱しぬ。是れ即ち『ラセラス傳』にして直ちに書流しのみ、印刷に附し
終に一回の復讀をも爲さざりしといふ。

『ラセラス傳』の價値に就ては爰に説くを要せず。唯此冊子が死せる母
の葬式入費を償ふ爲に成りし一事を見て渠が當時の窮乏を想像するに足
る。是より前有名なる字典は既に出版せられて巨額の報酬は其手に入り
しが、八年前の苦辛に費せし衣食の料に差引すれば殆んど囊中餘す處な
く忽ちリチャードソンを煩はして二度まで負債を辨償し、續いて操觚の
業を怠らざりしに、越えて四年また此厄に會ふ。噫、ジョンソンは實に

饑窟きくつに出入しゆつにふする窮兒きうじなりき。而しかうして母はを葬はうむる費用ひように差支さしつかへし其時そのときを問こへば渠かれが春秋しゆんしゆ既に五十さい歳。

其人そのひとは五十たつに達たつせる半白はんぱくの翁おきななり、オックスフォールドの法學博士ドクトル、オプロオなり、
『アイドアラ』及び『ランブラア』の主筆しゆひつにして且かつ空前くうぜんの大字書だいじの編者へんしやなり、
況いはんや其人そのひとはサヴェージ或あるひはオートウェイの如ごとく放蕩無頼はうたうぶらいなるにあ
らずして謹嚴方正きんげんほうせいの君子くんしなり。然しかるに僅々きんくすう十數磅ほんざさうひの葬費さうひに當惑たうわくせしは抑
も渠かれが清貧せいひんに安んじたる故ゆゑなるべけれども社會しゃくわいに優遇いうぐわうせられべき權利けんりあ
る人ひととして又また甚はなはだしき困乏こんぱふにあらずや。

ジョンソンの生涯しやうがを案ずるに渠かれは "shams and windy sentimentalities" の十八世紀せいせきに卓然たくぜんとして獨ひとり醇厚じゆんこう刻廉こくけん堅かたく高節かうせつを持ぢして絶たえて世俗せぞくに下くだる事ことを爲なさず。此故このゆゑに不羈ふき卓落たくらく一世せいを睥睨へいげいしたれども貧ひんは常つねに渠かれが身みを離はなれずして五十三歳さいの時ときゼオルヂ三世せいより三百磅ほんざの年金ねんきんを受けし迄までは殆ほと

んど朝三暮四てうさんぼしの生計せいけいに迫おはれたりき。

實げにや渠かれの生涯しやうがは『高節かうせつ』と『貧苦ひんく』との戰爭せんそうにして節せつを屈くつして富とみを得えん乎か、寧むしろ貧ひんに居みて毅然きぜんたらん乎かとの争あらひは中々なか／＼に絶たえざりしなるべし。
渠かれは必かならずしも富とみを欲ほつするにあらず。三百磅ほんざの年金下賜ねんきんかしの命下めいくだりし時とき、渠かれは宮廷きやうていの大臣だいじんに謁えつして曰いはく『王わうは我が心こころを買かはんとする乎か、然しからば之これを受領じゆれうするを屑いさぎよしとせず』と。以もつて其意氣そのいきの盛さかなるを知るしに足たる。唯たゞ併しかしながら其思想そのしやうを公おほけにして世道せいどうを補おぎなはんとすれば勢いきほひ多少たせうの富とみを以もつて衣食いしょくを支さへざるべからず。二十六の年とし初めて『アビシニヤ航海記かうかいき』を翻譯ほんやくせしより七十五にして永眠えいみんせしまで筆硯ひつけんを休やすめざりしはすべての操さう觚者こしやの如ごとく世よに live せんが爲ためにあらずして stand せんと欲ほつし、故ゆゑなりかし。されば貧不ひんふ苦く人々ひと苦く貧ひんと歌うたひし賣茶ばいさならねども渠かれの堅實けんじつなる操さう行かうは皮膚ひふに徹てつする饑寒きかんの中うちに在あつてすら平和へいわを樂たのむを得えたりき。千七百八

十二年三月二十八日ボスウエルに與へし手紙の一節に云へらく、「貧は大いなる災殃にして多くの誘惑と多くの悲惨とを以て妊めば切に君が其の陥穽に落つるなからん事を望む」云々。渠が謹行以て見るべし。

十八世紀は浮華虚飾の時代にして所謂「クラブ街の操觚者」なる套語は無頼漢の代名詞として用ゐられたりき。樸直なるゴールドスミツスすら黄金の釦鈕を穿めし紫天鷲絨の衣を着て昂然たりしを思へば、如何に當時の生物識のものが悪詩悪文を賣て美衣をひけらかし美食に舌鼓打ち「to sleep away days and drink away nights」に沈溺し而して再び其懐を空ふせば忽ち襪縷を纏ふて市に彷徨せしかを推想するを得。ジョンン此間に立つて親しく其現象を見、初めには「Vanity of Human Wish-」を作り後には「ラセラス傳」を編みしもの豈に夫れ偶然ならんや。

今の我が文學界の如きは全く之に反して幸に道義を執持する事堅く著作

に精勵拮据するをもてオートウエイ流の放埒に陥る者少なく殊に社會は不相應に之を厚待して縦令宰相は接するの禮を以て迎へざるも目するに平民的博士を以てし優遇決して等閑にあらず。人は往々帝室技藝員を置くの政府が文學者を見るに厚からざるを説けども是れ恰も衣冠せる沐猴が猶ほ飽足らずして帝座を侵さんとするに同じ。

ドライデンの盛名と事業とを以てすら終に饑餓に瀕して去りぬ。抑も「Drudgery」(賃仕事)の爲に二三の小冊子若くは叢書類を著はし、ものが「文學者」なる榮名を以て呼ばれ苦學十年の博士と共に並稱せらる、之を不相應なる優待と云はずして何ぞ。然るに今の所謂文學者なるものはこの優遇に狎れて縦令「クラブ街の操觚者」の如く墮落せざるも小成に安んじて駄詩を作り醉生夢死を主義として而して妄想の紫微宮より月桂冠を與へらるゝを待つ。

渠等は何を爲しつゝありや。請ふ「ダンシアッド」に於て之を見よ。十八世紀の「グランプ街」が東京の文學界に同じきや否や、カアライルの「Sham」が我が文壇を横行しつゝありや否や、ジョンソンの「cheated nation」が文學萬歳を喚呼するや否や、總ての事余之を知らざれどもジョンソンの傳を讀みて竊に今の文學界に慄焉たる處多きを覺ゆ。

ジョンソンが文學上に於ける事業は如何に。渠は八年の星霜を費して字書を編纂せり。然れども作字彙者としては大槻文彦、落合直文諸氏すらも私淑し得るほどの事業なり。曾て「倫敦」なる詩を作つてポープを駭かしたれども「Vanity of Human Wishes」に到つては明らかに生硬蠟を嚼むの評を免かれず。又曾て悲劇「アイリーン」を著はせしが其技倆に於ては本よりシエリダン亞流に一等を輸す。偶々「ラセラス傳」の名想を發揮したるものもあるも小説家としては勿論チツケンスに及ばざる

事遠し。其他「アイドラー」と「ランブラア」とに於て論議せし處多けれ共未だ遽に當時の文豪以上に在りといふを得ず。然るに此割合に文學上の功績に乏しきジョンソンが十八世紀の文壇の覇權を握りて「羅馬滅亡史」の著者ギツボン、政治哲學を以て鳴るバルク、大美術家とし尊まる、レイノオルツ等をすら推服せしめしもの職として渠が品性と識見の高く衆人の上に超出せしに依る。

余は本より行實と著作とを混同するものにあらず。行實に瑕瑾多き爲に著作を没するものにあらず。然り、文學に於ける神とし崇めらるゝシエークスビーヤとギョオテとの素行に最も缺點多きを知るものなり。否な、ジョンソンを以て聖人とし尊とむものにあらず。然れども假に今の文學界に「失樂園」を凌ぐの詩「ハムレット」の壘を磨する戯曲「ラセラス」に優る小話「ウェーバライ」を踢倒する小説ありとするも、獨り

ジョンソンの品性と識見とに到つては之を缺くやを疑ふ。
 カアライルがジョンソンを論ずるに當て引用せし逸事は最も渠が生涯の性行を代表するに足る。渠がオックスフォードの「サーヴントア」(熟僕に似たりし時常にズタズタに破れし古靴を引摺るを憫みて富める一學生新らしき靴を其部屋に置きしに渠は手に取りて訝かしげなる面地して瞻視めたりしが忽ち窓外に投捨てたりといふ。足は濡れ、泥に汚れ、寒氣に凍へ、饑餓に迫るもまに〜となり、并は決して『乞丐』にあらざればなり。簡撲にして頑硬なる自助心以て獨往すべし。我は『乞食』の伍たるを恥づ。襤褸、賤陋、窮乏、慘苦の中に包まるゝも儘よ、堅く高節を保持して飽くまでも不羈卓落たるべし。ジョンソンの心事は實に此に存ず。渠は華美なる靴を穿かんよりは寧ろ破靴を引摺つて獨立の人たるを喜びたり。 An original man ; — not a secondhand, borrowing or begging

man — 此語即ちジョンソンの生涯を評し得たる句なり。
 ジョンソンも初めは『グラッブ街』の一人にして、曾て一夜の宿泊料すら得る能はずサヴェージと共に終夜市に彷徨せし事さへありき。たゞ併しながら渠が獨立獨往の精神はサヴェージの恐劇を演ずる事を爲さずして竟に十八世紀を振蕩せし『俱樂部』の牛耳を取るを得たり。思ふに後年『詩人傳』を編みし時渠は苦々しげに且つ涙を揮つて曾て無宿の苦を分ちし故友の末路に筆を澁らせしならん。
 貧と戦ひし人は多し。文學者は貧と戦ふ爲に決して尊からず。唯ジョンソンに於て推服すべきは如何なる悲境に沈淪するも卓然として雄風高節を持する大人の氣魄を失はざるにあり。負債に苦めらるゝ時も饑渴に責めらるゝ時も包藏せる元氣は毫も沮喪せずして失意に失意を重ねる度に、恰も不幸が渠の尊嚴を増加するかの如く感じて、愈々蔚若として

地に立てる巨人の姿を現じたりき。渠は實に“the greatest soul”(偉靈)なり。

文學者は宇宙の子なり。人生を研究して其病を醫す覺悟なかるべからず。然るに十八世紀の所謂「グラップ街の操觚者」は廢語を吐き惡詩を吟じ飲酒放浪に耽つて生涯を夢寐の間に暮して腐れ死をなす。渠等必ずしも文學者の任重きを知らざるにあらず。否な、餘りに知り過ぎたるが故に社會に伴ふを以て不神聖なりと誤想して却て俗腸を「アルコオル」に腐らして得意となす。しかも浮れくして歸るを忘る、狂蝴蝶の如く不平の聲を洩すの外は何事も忘れて嗜慾に迷溺す。ジョンソンは則ち然らず、「ラセラス傳」に於て反て是等の樂天亡者を訓誡したりき。

樂天亡者は文學に寄生する「バチルレン」なり。己が妄想を吟咏する「ヘドニズム」の時代は既に過ぎ去れり。縱令其行實は其述作の價値を増減

せざるも文學者は決して飲酒放浪以て生涯を終るものにあらず。苟くも一面に於ては社會の師表たるべき義務を有する文學者は其性行識見に於て高く衆人の上に標置する處なかるべからず。勿論文學者に向て聖人たれといふは畢竟無益に屬する注文なれども少くも大人の行爲なくんば恐らくは文學の神聖を瀆すの憂あるべし。乞ふ、ジョンソンの生涯に爾の耳を傾けよ。

ジョンソンは儉謹節約の人なり。貧に居る故に止むを得ず儉謹を守りしにあらずして何事にも自己一身の嗜慾を充たさんとして浪費せし事なかりき。渠が新たに倫敦の文學社會に身を投じ、時一年三十磅の收入あれば躰面を全ふするを得べしと知人に語りぬ。渠が倫敦の社會に於ける殆んど想像外なる最低の生計費三十磅に甘んせしは全く一日の最上佳膳たる晚餐を廢する決心ありしが故なりかし。然れども渠は此三十磅すら得

る能はざりき。

“Live on what you have” 君が有つだけを以て生活せよ、虚榮或は娛樂の爲め負債を起す勿れ——とは渠がボスウエルに與へし訓誡なり。一年僅に卅磅の豫算すら失敗せし渠が幾度か苦境に落ちて猶ほ大人の心を失はざりしは主として自ら此言を守りしに依る。顧みて今の文界を見るに虚榮或は歡樂の爲め苦めらるゝ人果してなきや如何。

渠は元來謹嚴醇厚の士なり。而して偶々倫理の綱紀弛廢せし十八世紀に生れ舉世悉く浮華虚榮の奴隸と爲て詩酒放浪に日を送るを痛く憤慨して反抗の旗を翻へしたりき。渠は十二椀の茶を喫してカンバーランドを啞然たらしめし無類の茶癖にして且つ宴席に連なる時は冷水を以て酒に代用せし奇人なれども、初めグラツプ街に彷徨せし時は同じく是れ醉顔を風に吹かせて快哉を呼ぶの酒家にてありき。夫れグラツプ街に

於ける好酒家如何にして暫時の間に蛇蝎の如く之を嫌ふの人となれるや。ボスウエルは次の一夕話を傳へて渠の消息を洩しぬ。

ジョンソン飲酒に關してスポツチスウード及び其他の人の間に答ふるく、「飲酒は娛樂を人に與ふ。又總ての娛樂夫れ自身は決して惡ならず。然れども飲酒を不可とするは之に依て與へらるゝ娛樂を得んよりは寧ろ拒絶すべき確固の理あればなり。酒は娛樂を人に與ふれども自身を樂ましむるもの必ずしも他人を樂ましむるにあらず。否な、却て不快を與ふる事すら多し。殊に飲酒に恐るべきは平和の心を錯亂昏迷せしめて己れが神經を痴鈍ならしむる故に自身は有頂天になりて平生の苦辛を忘るゝと雖共之が爲に他をして愈々不快の念あらしむるにあり。サア、ジョンソニアは拂曉床を出で、朝暾を見るに等しき快味あるを説け共是れ中々に非なり。若し夫れ一杯一杯にして止まば或は此愉快を覺ゆる事あるべし。

然れども節酒は世に難きものなく一杯更に一杯と重なる中に自制力を失ふが則ち酒の魔力にして禮讓を亂し恒心を破り人を欸待せんとして却て非禮を加ふに到る。又或人は酒を以て憂慮を拂ひ心意を快活にするの具となせども酒の心意を快活にするといふは畢竟愼密を缺くの謂にして粗暴狂亂卑陋野蠻に陷るるの嫌あり。又或人は交際を圓滑にすと云へども是れ禮を破が故にして真正の情誼にわらず。又或人は談話を流暢ならしむるの効を數ふれども是れ贅言囁語を多からしむるといふに等し。試に思へ、酔へる時と醒める時と何れか智識を獲得し考慮を費し得るや、开は勿論云ふ迄もなかるべし。平生訥辯なる者が饒舌を弄し温厚なるものが潤達となるの効果儘に在れども皆是れ噪狂鹵蒙の變形にして以て酒徳の頌を作るべからず。稀には酒の爲に精神を鼓舞し勇氣を増す者なきにあらねど酒力を借りて漸くに元氣を添ゆるものは下劣鈍根の怯

者にして我が此くの如き人ありといふをだに嫌ふ處なり」云々。

渠は又ボスウエルが「飲酒は畢竟朋友の情に出づるにあらずや」と説けるを斥けていへらく、「否な然らず、若し朋友の情に出づるとせば彼我の心に娛樂を感じるものならざるべからず。飲酒果して然る乎、余大に之を疑ふ。かの狂語を吐き冗辯を弄し濫酔して喜ぶもの、如きは眞の交友を以て目すべからず。況んや飲を好まざる者が交誼の爲に三杯を傾くるに到ては己の弱性を披露するに同じ」と又ジョンソンが言は陶然として樂しげに酔へる酒家を嫉むより出づとサア、ジョシユアは吐きたりしが反響の聲は「嫉むにわらず賤むなり」と答へられき。冷水を喫つて満足する者は未だ酒味を語るに足らずとボスウエルは嘲りたれどもジョンソンが飲酒を斥くるは其味を嫌ふにあらずして其害を恐るゝなり。飲酒の利害は姑らく措き兎に角十八世紀の無頼なる操觚者に反抗せし

ジョンソンが心事は明了にして渠が残酷なる偏見より畧ぼ當時の作家を想像すべし。今の我が文界にジョンソンの痛罵を値ひする作者の有りや無しやを知らざれども時世に反抗する人竟に出でざるを怪しむ。

既に飲酒の娛樂を斥く。ジョンソンは何を以て渠自身を樂ましめしや。渠は元來『娛樂』なる文字を嫌ふて常に娛樂の必ずしも幸福と伴はざるを説けり。此の故に他の碌々たる文士の如く娛樂を追ふ事を爲さずして繁忙なる操觚に従事する傍ら曾て心意の修養を怠らざりき。渠は化學の試験或は生物の攻究を愛好する事糖蜜の如く多少の時間を窃んで此が犠牲となしぬ。ボスウエルが引證せし日記の一節に曰く『千七百八十三年八月十五日。葡萄の葉四十一枚重量五「オンス」半と八「スクルーブル」なるものを採り之を架上に置く。开は乾枯して後の減量を試験せんが爲なり』云々。渠は此一點に於て本よりギョーテに及ばざる事遠しといへ

ども又尋常文士と大に其嗜癖を異にす

渠は獨り科學の研究に耽しのみならず仁惠救濟を以て第一の娛樂となしたりき。サヴェージ、ゴルドスミス等諸友の爲に盡力せしは云ふ迄もなし。道に乞食に遇へば必らず囊裡の錢を攫んで之に與ふ。渠は勤勉を愛して怠慢を嫌ふが故に乞食は最も忌避せるにも關らず縊縷の人を見れば我知らず錢を投ず。或人諫めて曰く渠等乞食は「ジン」或は烟草に耽るの遊民なれば錢を與ふも何の甲斐あらんやと。ジョンソンは肅然として答ふらく『然り乞食も亦人の子なれば夫程の娛樂なくんばあらず。』

「ジン」或は烟草に耽るが故に愈々錢を與ふるの必要あり』と。

スレール夫人盛夏の日偶々溽暑の堪へがたきを説きしにジョンソン嚴然として夫人を叱して曰く『貧民は暑さが爲に幸福なり。縦令裸躰となるも幸ひに渠等が凍死の厄運を免がるゝは則ち夏の賜物にあらずや。暑

しとて何をか吐くべき」と。渠は寛量にして輕々しく人と争はず、殊に夫人とは親交頗る厚くして而して談貧民に及べば激昂此くの如し。一夕道に將に餓死せんとする婦人を見、渠は其家に伴ひ歸りて厚く醫療を加へ湯藥を進め種々手を盡せし末偶然其婦人が不道德の職業を營むものなるを知りたり。英國の風習として斯る婦人を其家に留むるは家内の清淨を汚すの恐ありとて痛く之を忌嫌す。然るにジョンソンは此無慈悲を爲さずして健全體に復するを待ちて懇々訓誡を加へ終に正業に就くを得せしめたりといふ。

凡そ此等の逸事は古今の文士に於て稀に見る處なり。若夫れ乞食を一屋の内に養ふて日曜日毎に肉を土産にして之を訪問し卓を共にして食事を爲し、のち道義の教を説くに到つては純一なる慈善家も猶ほ後へに墮若せざるを得ず。親友エドワーズ其親戚に貧しき者多くして費途に苦

めるを吐きし時ジョンソン祝して云へらく、「天は數多の慶事を君に恵めり、*To live rich rather than to die rich*」富んで死なんよりは寧ろ富んで生計せよ」と。噫、今の我が文學界——獨り文學界のみならず圓滿を説き純潔を辨じ禁酒廢娼を論じ「ヒューマニテイ」を颺言する道德屋先生にも其匹儔を求め得べきや否や、余大に惑ふ。

殊にジョンソンに於て最も推服すべきは渠が巍然として丘陵の間に聳る大山の如く曾て其見識を失はざりし一事なり。人はジョンソンの傲岸不遜を説く。然り、渠が當時の文學社會に憚かられしは自由黨に於ける星亨よりも甚だしくギツボン、レイノオルズ、バーナード、パーク等より「ラウンド・ロツピン」の表を捧げしめし如き英國文學史中其例を見ず。然れども是れ渠が自信の念深厚なりし所以にして其諸友の勸告を謝して猶ほ用ひざりしは偶々堅持する處ありし故のみ。

字書成りし時渠はチエスターフ井ールドの諛評に答へて曰、「人あり水に溺れんとする男の救を乞ふも冷然として顧みず漸く岸に達する時遽に愴惶して救助を與へんとす。閣下は此人を以て仁者となすや。閣下が余の事業を推奨する言若し早かりせば極めてよし。然れども時既に遅し、閣下の千言何ぞ聞くを要せん。一恩をも受けざる義理を結んで、天が余一身をして爲さしめし事業を以て仁者の恩澤に成りしと天下の公衆に誤想せしむるは余が欲せざる處なり」云々(是は極めて不完)。其堂々として豪氣侯伯を吞むの概は豈夫れ退之が三度哀を宰相に乞ふの文と同一ならんや。

渠が豪宕卓落一世を蓋ふ英髦たりしはゼオルヂ王との會見を以て知るべし。羊質にして虚文を飾るものは徒らに大言壯語して止む、畢竟其實價を現はさん事を恐るればなり。「朕は卿が著述を讀んで益を受くる事多

し」どの王の勅語に對して「臣は文を賣て口を糊するのみ」と答へし渠が謙遜は如何にチエスターフ井ールドに復書せし剛愎と異なるや。是れジョンソンの眞面目にして當時の文豪を其大席の下に集めし所以なり。而して渠が尊貴に枉屈せざる氣節は一時間有餘の對話に毫も生平の快辯を濫らし、跡なかりき。「余は能はず、王の前に出づれば余は絶倒すべし」と叫破せしは魯直なるゴオルドスマミスなれども誰か突然王者の謁を給はりてジョンソンの如く慎重沈毅なるを得べき。今の文學界には斯くの如き剛毅と沈着とを有して高く踔絶するもありや否や、余頗る之に苦む。

ジョンソンは聖人にあらず。此故に百の瑕疵に富めりといへども唯その一世を蓋ふ氣魄に到つては吾人が學ばんと欲して未だ達し得ざるものなり。詩人としてはポーブに及ばず、小説家としてはフ井ールディングに

如かず、批評家としてはハズリツト或はコルリツチに輸す。縦合ケンリツクの悪語なきも渠がシエークスピーヤ論は坪内氏が十分一の價値だにもなかるべし。然れどもジョンソンの價値は小説家、詩人、若くは批評家としてのものにあらず。渠は偉大なる豫言者なり。煽ゆる心を壓して沈鬱せるハルキユールスなり。渠は曾てボスウエルに語るらく、「人は世界の人となるの覺悟なかるべからず夫の何事にも怠慢にして熱意を生ぜざる輩は余の伍するを恥する處なり」と。

日暮るれば酒を飲み濫醉して放歌狂舞に勞れ假寢の夢覺めては淫市を彷徨し妖婦に戯る。偶々筆を採れば悪詩を作つて之を賣らんが爲に書肆に阿附し匹夫だに屑よしとせざる諂佞を以て其意を迎ふ。秩序なく徳義なく信仰なく主義なく唯ふらくと浮れ狂ふて生涯を空ふす。是れ十八世紀に於ける英國文學の半面なり。幸ひにして今の文學界には這般の現象を見ず。

象を見ず。

ジョンソン此間に生れ殊に無頼なるグラツプ街に出入して獨り其汚俗に浸染せざりしのみならず却て之に反抗せしは渠が卓落なる氣慨の然らしめしものにして天此人を下し、は英國文學の幸福なりといふべし。今の我が文學界は本よりグラツプ街の猥雜卑裡に陥らず自ら氣格を備へ品性を重んずるもの多し。唯曩時戯作的性質を存するが上に、革新時代の常として確固たる信仰なきを以て、其文字は愈々繊細に走りて輕浮となり益々巧麗に趣きて終に虚偽となる。是れ必ずしも憂ふべからざるに似たれども若し今にして一點の靈水之に注ぐなくんば極する處或は一二年にしてグラツプ街を現するなきやを保せず。

サミュエル、ジョンソン何人ぞ。オックスフォールドの大學に弊靴を引摺て憚らず傲然として人の惠みし靴を窓外に放擲せし貧乏書生なりき。

而して不屈不撓、飽くまでも衆人の上に超越して流俗の奴隷とならず却つて時世を指導するをもて其任となし、小にしてはグラップ街の猥陋なる習俗を矯正し大にしては十八世紀を蒙蔽せる懐疑の暗雲を掃蕩したり

“Clear your mind of Cant!” “—是れジョンソンが浮華と虚榮とに充てる當世に向て教へたる格言なり。『ラセラス傳』も “Vanity of Human Wishes” も『ランブリア』に『アイドラア』に侃々せし諸篇も皆此信仰なき輕薄時代を諷刺せしにあらざるはなし。渠は實に一大傳道者なり。コオテテイは此傳道者を讃して曰く、

Nor was his energy confin'd alone
To his friends around his philosophic throne;
Its influence wide improv'd our letter'd isle,

And lucid vigour mark'd the general style :
As Nile's proud waves, swoln from their oozy bed
First o'er the neighboring meads magestic spread ;
Will gathering force, they more and more expand,
And with new virtue fertilize the land.

實にやナイルの河が汎濫する如く渠の哲學はグラップ街の朋友より引て全英に及び歐洲に到る迄風靡せし其功偉なりといふべし。來れ、我はジョンソンを招かんとす。今の我が文學界は恰もジョンソンの沈毅なる精神と寛容なる心性とを要するものなり

『ラセラス傳』出版せられし時恰もヴォルテールの『カンディッド』出づ。殆んど異曲同巧にして其着想も略ぼ符節を合すが如し。ヴォルテールの原文は之を知らず。英譯文に就て云はゞ文章の良否は兎に角他の諸

點に於て「ラセラス傳」を推さざるを得ず。英佛の兩大家期せずして同時に輕浮なる樂天主義に一棒を下す。十八世紀の空氣畧は推知すべし。

(明治二十七年四月〇余がジヨンソン傳は別に民友社より出版ヲ参照すべし)

ブラジルの文豪シル井オ、デイナルテ

《其傑作「インノーセンシャ」》

南米の事情多く知られず。一ト度白露銀山に失敗し再びブラジル移民送遣に失敗せし以來、偶々都市の美觀或は土地の富饒を傳ふるものもあるも南米は獨り冒險者が投機を試むるに適する半野蠻の地とし認められて其風俗歴史の如き絶えて尋究するものなし。何ぞ知らん鮫鱈の出沒するアマゾンの大澤より九穀果蔬耕さずして自ら生ずるサンポーロの沃野に到る三百萬方里のブラジルは唯だ珈琲カ、オを供する麥帽裸足の農民國にあらずして盛んに歐米斯壇の豪傑と光芒を争ふ衆多の文星羅布して連りに名篇佳什を世界に貢獻するものあらんとは。

余の寡聞なる其名を聞いて未だ其作を知らざれども試に二三を云はん

乎。ブラジルのスコットと云はるゝアレнкаの如き其傑作「グワラニ
 イ」は教授カーロース、ゴメスの手に頼りて作曲に作られ遠く歐羅巴に
 傳はつて其秀絶なる妙想を盛んに噴々せられたりき。其他所謂三大詩人
 と呼ばるゝゴンサルブス、デアアス。マガレエス。アルブレ、ド、ア
 ゲエドオの如き又マセドオ、アルイジオ。アゼエドオ。コエロオ、子ッ
 トオ。マシヤドオ、ド、アツシス等の小説家或は又シルポオ、ボメロオ。
 ブイ、バルボサ等の學術又政治論文家等の如き獨りブラジル國內に噴々
 の名あるのみならず其著述は歐米諸國の讀書界に廣く讀まれて其伎倆と
 其聲譽とは他の歐米の諸文豪等と相馳騁するに足るものありといふ。是
 れブラジル公使リスボア君より聞く處也。
 是等の諸文豪と力量聲望を等ふる當今隨一の作家シルポオ、テイナ
 ルテ (Sylvio Dinarte) あり。昔はブラジルの近世史を飾るべき赫々の

勳功を奏せし武人又政治家なりしが今は即ち藝苑に隠れて操觚を専らと
 し聲名遠く歐羅巴に馳せ南米一流の詩宗と仰がれて陸離たる異彩をブラ
 ジルの思想界に放つ。其人は今を去る五十五年前ブラジル國サン、カテ
 リー子州に生れ、其祖は佛人にしてタウチイ子爵といふ。シルポオ、デ
 ナルテは述作の時の雅名なり。初め士官學校に學び、業卒つて軍役に就
 きパラゲイ戦争に従つて有名なるラグナの退軍に大功名を顯はしたりき。
 此退軍記事は氏自ら佛蘭西文を以て著はし其文章の妙と其紀事の秀拔な
 るとは氏の大功名と共に歐洲各國に稱讚せられ今猶ほ不朽の書として頗
 る重せらる。戦熄んで後暫らくブラジル帝位の繼續者たる皇女の配ヅ
 イ伯爵の秘書官に任じ、次第に顯榮を極めて或は衆議院議員に撰ばれ或
 は貴族院に推選せられ或は各州知事に歴任し、勳功に依りて特に子爵を賜
 はり最も功勞ある軍人、最も名譽ある政治家として尊崇せられ、其間屢

と絢繡壯重の筆を揮つて詩賦小説或ひは戯曲を著はし有力の作家として
次第に頭角を現はし、帝政顛覆以後は亡朝の忠臣たりし身の味氣なき共
和政下に再び官府の顯榮を貪るを屑しとせず浮世を高踏して全く著作に
隠れ今猶ほブラジル科學院の誠實なる會員として科學上の論文を公けに
し或は院本小説の創作を専らとせしかば、文名愈々籍甚して曾て馬上に
劍を揮つて號令せし將軍は終に自然を吟じ人情を歌ふ詩人となりてブラ
ジル現時の文學をして世界に重からしめたり。由來武人若くは政治家よ
り出で、藝苑に名を揚げし士少からず。レルモンドフの如きキヨル子ル
の如き近くはマルリアットの如きロチーの如き皆此例なり。シル井オ、
デイナルテも亦此一人にして加之も歐洲に於ける一流の作家と角逐して
遜色なきまでに成効せしは其國の南米なるが故に愈々珍なりといふべ
し。

シル井オ、デイナルテの著述等身に過ぐ。其傑作にして英佛獨伊西瑞
等各國語に翻譯せられ殊に嘖々傳唱せられて到る處數版を重ねしもの
「インノーセンシヤ」(Innocencia)といふ。其結構意想は今の最新なる自
然派を學びて而も優尙高潔なる筆路頗る見るべきもの多く殆んどゾラ、
イブセン等の壘を摩せんとする。ブラツク、ステベンソン、デユモオリエ
一輩の如き其名東西に聞ゆれども若し眞價を論ずれば遙に其の後へに瞠
若せざるを得ず。十九世紀の豪傑次第に凋零すると共に文星漸く光を
喪ひて前後相踵いで永へに去る時世界の南陲に此文豪を有するは豈に一
異觀にあらずや。余竊に惟ふ、方今の文壇彬々として秀才を輩出し西鶴
以外、三馬以外、京傳以外、馬琴以外一旗幟を建つるもの頗る多く批評
家先生より深刻又幽縵又警拔又秀麗を以て許され或は百年稀に見る天才
なるが如く口を極めて賞讃せらるゝもの當だ二三者に留まらざるに係ら

ず僅に、連山人のメールヘン一二篇及び他の諸家の數頁の短篇二三篇が
 偶々好奇なる外國人に依て翻譯せられ而もミットフォルドの四十七
 浪人よりはより少く讀まれて終に謹嚴の批評あるを聞かざるは何故ぞや。
 人は一等甲鐵艦の増加と電話線路の延長とをもて富國強兵を誇れども唯
 だ十七字の俳句、數頁の新詩體、數頁の小説以外に於て世界に誇るべき
 一文學だになきは果して眞箇の文明なる乎。平生半開國視する南米に此
 文豪と此傑作とあるを見れば心あるもの誰か慚愧たらざるを得んや。
 「インノーセンシャ」の英譯本に譯者自ら叙して曰く、初め之を讀みし時
 翻譯し又公刊する念慮毛頭有らざりしが次第に紙數を重ねていつしか興
 趣を生せしは獨り其物語の奇異なる爲めのみにあらでブラジル土民の風
 俗性質と其林泉郊野の風景とを活ける如く描寫し其國の地理紀行千百卷
 を讀むよりは一層明かに且の精かにブラジル國內部の風土生活を知り得

べきを以てなり、初めて南米の小説を讀むものは此「インノーセンシャ」
 を見て其人物の奇怪なるど其習俗の異なるに驚くべしと雖ども是れ
 余が親しくブラジル青年と接して屢々聞睹する處のものにして即ちブラ
 ジルの活動寫眞なりと。

譯者は又有名なる「アマゾン河に於ける博物學者」の著者にして王立
 地理學會の書記なるベーツ氏に譯本を示して其批評を乞ひたり。其批評
 文に曰く、恰も今讀小説季節にして連りに英佛米の諸小説を涉獵し較や
 倦厭したれども此「インノーセンシャ」に接して俄に懶眠より覺めて新
 たなる興趣を生せしは此物語の毫も作り物めきたる痕跡なく頗る自然に
 描出せられて用意周匝布置整然たるに加へて其人物其脚色共に嶄新奇
 巧を極めたればなり。且殊に勝れたるはブラジルの風土生活人物等を
 驚くべきほど眞に逼りて描寫したるにあり云々。

「インノーセンシャ」の妙處は實に此秀拔なる逼真の描寫にあり。其脚色は單純にして變化較や乏しけれども頗る戲曲的にして其間細さに悲哀の情を盡したれば感興の度決して少からず。此頃歐米に持てはやさるゝと聞く「トリルビー」の作者輩若くは我が弦齋一流の唯だ趣向の新奇なるを喜び終には殆んど滑稽に類するまで馬鹿らしく淺膚なる想像を弄せし幼稚なる作と同一にあらざるなり。殊に今の自然派の長處を學びて悲劇の憐むべき行路を叙する間自からブラジルの風土生活を髣髴せしめたれば脚色は餘り複雑ならざれども悲劇を構成する諸因縁は全く風俗習慣を異にする南米の事跡なるが故に自から新奇の感あるもの頗る多し。是れ一つには歐羅巴の讀書界に珍重せらるゝ所以にして斯の如くライフライクに南米の山川風土と人情生活とを描寫したる伎倆豈に決して尋常ならんや。

爰に余は此珍奇なる作の梗概と特に勝れたる一二章とを擧げて南米詩人の特色を我が文界に紹介せん。

「インノーセンシャ」の事跡は今より三十年前千八百六十年七月十五日を以て始め千八百六十三年八月十八日を以て局を結ぶ。其土地はブラジルの極南サンパウロ州より下つてパラグエー國に接するマトグロッソ州東南に横はる廣原なり。サンパウロ州は我が邦人が一ト度移住を試みんとせし珈琲及びカ、オの産地にしてブラジル國中最も土壤の饒かなるをもて冠たり。此サンパウロ州とミナゲラエス、ゴヤーツ、マトグロッソオ等諸州の境界なるサンタンナ、ド、バラナヒバ市より百六十哩を距つるスクリュー河に到るまでは人家疎らに散在して村落より村落へ旅するを得れども此河を渡れば全く寥廓として聽て一日の旅路を経てヨセ、ペレイラの小屋に着くまでは人影をだに見るとなし、爰に手厚く管待さ

れて更に索漠たる長路を行く用意を整へてバラグエイ下部に接するミラ
 ンダ、ニオーアク等の茫々として涯りなき荒原に出づれば人跡全く絶え
 て唯だ蓬生の果もなく生茂るを見るばかりなり。ブラジルの土語之をセ
 ルタツ、ブルート（曠野）といふ。元來ブラジルは廣袤支那に次ぎて
 日本を二十餘倍にしたる大國なれども人口は却て我が四分之一に過ぎざ
 れば北部概ね山岳起伏し加ふるにアマゾンの大流横斷して密林鬱蒼し野
 獸群棲し土地多く拓けず、其の僅に開拓されたるポリギヤ及びバラグエ
 イの國境に接する東南豊沃の地すら部落と部落との間は廣漠たる原野に
 して數日の行程一の人煙を見ざる事少からず。此故に村落又は都市に住
 するもの、外大半は原野若くは森林に大小屋を作りて土地を開墾し木材
 を伐採し種畜を飼養し或は唯だ人跡の達せざる河源森林丘陵深澤等未開
 の地を探検するを樂みて原野より原野へ常に移動するものなればブラジ

ル人の眞面目は都市よりは田園に、田園よりは寧ろ原野に見るを得る「イ
 ンノーセンシャ」は即ち此特異なる原野生活を描寫せしものなり。其脚
 色及び筆路は勿論異なれども其趣味の較や同じき處是れ豈にブラジルの
 「井カア、オブ、ウエーキフ、井ールド」にあらざるや。

ブラジルの土俗、恰も清韓ペルシャ土耳其等東洋諸國と同じく婦人の
 自由を許さずして未婚の處女は固く内房に閉鎖し決して男子と相見せし
 めず。曰く、女は唯だ子を産み養育する義務ありて男と相見て談話する
 權利なしと。而して婚姻の如き父兄の意志の欲するまゝ、幼時より定まり
 て自ら夫婿を擇む權利なく一旦父兄の定めし縁は決して破るを得ざるな
 り。是れ未開國及び半開國に於て屢々見る風俗にして此作者シル井オ、
 デイナルテは此惡風俗の犠牲となれるもの、果敢なき運命をブラジルの
 原野生活中に發見して即ち「インノーセンシャ」の一編を作る。「インノ

「センシヤ」は篇中主人公の名にしてマドグロツソオ原野に住めるマルチノオ、ド、サント、ペレイラの一人娘なり。之に配する男主人公はウロオ、プレトオ市の藥劑學士シリノ、フレイラ、ド、カンポにして此二者の情事より成れる悲劇なり。即ち沙翁の「ロミオ、エンド、ジュリエット」、デユマの椿姫、或は近松の諸心中物と其趣を同ふす。

物語の筋は下の如し。此物語の主人公インノーセンシヤの父ペライラなる者、本と相應の資財ある家の子にして父の没後七人の兄弟と共に産を分ち、初めデイヤマンチナ市に店を開き妻を娶りて稼業に油断なかりしが幾何もなく妻のみまかりてのちピウムヒイに移り再びウベラバに轉じたれども最惜しき妻の別れに落嘆し味氣なき浮世を果敢なみて迎も面白からぬ世に忙しき牙籌を營みて渡らんよりはと家を疊みて亡き妻が忘れ形見の一人娘インノーセンシヤと共に三人の僮僕を伴ひてブラジル人

のすなる原野生活に韜晦する事終に十二年。自ら云ふ「我は浮世を見限りたれば聲譽名利更に望みなく野末の小屋に埋もるゝも憾みなし、N.O.A.O. Senhor Jesus Christo によま我を守り給へば我れ將た何をか悲しまんや」と斯くて牛豚犬鶏を飼ひ豆麥を作つて唯だ一人の娘の未來を樂みて暮す中、端なくも可愛き娘が土地に流行りし瘡に襲はれたれば太く憂ひて遙々とサンタンナの町まで下熱の幾那を求めに出掛けたり。然るに其病恰も流行して市中の藥館は品切れなれば心細くも悄然と家路に戻る路すがら計らずも馬上の旅客が後より來れるに會ひたり。其旅客は旅から旅を歴回りて病を癒すを職務とする藥師にして其名をシリノ、フレイラ、ド、カンポといふ。

シリノは本とサンポロ州カサブランカ市の藥舖兼郵便局長の子なりしが十二歳の頃よりウーロ、プレトオ市に住める奇怪なる性質の伯父

の家に養はれて教育を受け初め宗教學校に入りて神學を學び中ごろ學校を辭し藥舖に入り調劑の手傳をなせしに天性伶俐なれば畧ぼ其術に長じ人より醫道の士を以て目さるゝに及んで終にウーロ、プレトオの藥學校に入つて藥學を修め州知事より化學士兼藥劑士の免狀を得たり。シリノが初め藥學を修めしはチエルノ井ツツの著書にして藥學校卒業後も猶ほ巾箱の秘書として深く之を珍重し疑議ある毎に必ずチエルノ井ツツを繙いて一々參考す。チエルノ井ツツの説は既に陳腐にして採るに足らざる事今日の定論なれ共今より三十年前のブラジル内地に於て其の尊かりし事は豈に我が傷寒論の比ならんや。斯の如き伶俐の才子にして畧ぼ病を診治し深くチエルノ井ツツに熟通すれば當時に於ては屈竟の博士として諸人の信仰決して尋常ならざりしなり。ペレイラ既に藥を得ずして悄然として歸る。途上偶然此學士に邂逅す。

渠れ焉んぞ狂喜せざるを得んや。シリノが他の市邑に行かんとするを切に請ふて我が家に招き娘が病を見る事を求めたり。シリノは固より己れが職分にて遙々と旅の空を瞻めて處定めず歴巡るも我が術を施して不幸の人を助ける本願なれば快くペレイラが請を容れて馬を駢べて其家を尋ねたりき。然るにペレイラは折角藥博士を請じ來りしもの、ブラジルの國風とて可愛き娘を他人に見せしむるは好まず第一又病氣なればとて妙齡の娘を生若き男に見せるは危険千萬なりと暫らくは躊躇したり。インノーセンシャは芳紀十八歳の玉を雕れる如き美人にして都の女臈にも優りて氣高く麗はしく匂ひこぼるゝばかりなれば去らぬだに母なし子のいとしきに加へて父ペレイラの鍾愛一と方ならず掌中の珠とめでいつくしみて襖の隙洩る風にもあてじと愛惜しがりしが、嫁入盛りの是非なければ親の眼鏡にてミチカウといふ屈竟の若者を擇びて未來は結婚す

べしと堅き約束をなしたり。されば綻びやすき妙齡のものなる上に世に匹儔なき美貌といひ況してや既に王上の點と許せし人さへあれば父ペレイラは愈が上に大切がりて縦令醫博士なりとも容易くは娘が内房に入るを諾はざりき。

されど病なれば是非もなし。左つおいつ種々に思案せし後終に娘が勿體なくも處女マリヤの御姿に肖たるほど美しくくあまつさへ既に定まれる約婚者ありと秘密話を打明け、左れば吳々も病人を見るに留めて必ず娘を見給ふ勿と固く約して漸くに娘の部屋に案内しける。

シリノは念入りたるペレイラの心配に呆れて、本より醫師なれば常人の家の婦人とも交りて秘密に立入るが職務なり。斯る由なき心配はかまへて無用なりと男らしく誓ひて終に娘の病室に入りて病を診たりき。然るに娘インノーセンシヤはシリノが思設けしよりは遙に勝れて瓜核

顔の豊やかなる愛らしきに加へて氣品高く神々しく宛がら描けるマドナの像の抜出たるが如くにて病に瘦れたる色さへなければ、シリノは一見恍惚として今更男らしく誓ひしを忘れて尋常ならぬ情を動かしけり。されど伶俐なる思慮深き男の心に秘めて穂に出さねば扑實なる父ペレイラは夢にも心附かで只管にシリノが伎倆と親切とを喜びけり。

若き女の情はど油断なりがたし。況してやブラジルの國俗が深窓に垂籠めて人と顔合はするを許さざる上に物堅き父親の厳しき監督を受けて我が家に召仕ふ僮僕の外に男の顔を見たる事なければ、左らでも物珍らしき折から才賢く貌秀れて心柔しきシリノを見て焉で心を動かさざらんや。猶だ戀知らぬ處女の俄に夜もおちくと眠られぬほど心淋しき物思ひに沈んで、二人は何時か繁き人目を忍びて互に未來を語らふ深き交となりぬ。

されどインノーセンシャには親が許せし約婚の良人ミチカウあり。己
れは初より好みしにあらねどブラジルの國風とて乙女が自ら夫定めする
權利なく親の命令に是非なくも一旦良人と定めしからは疎かに破りがた
く、況してや親の心に背きて他し人と戀するは縦令淫らな契なきも不義
野合と同じく見られて所詮身を亡すより外に道なければ人目の關を忍ぶ
逢瀬の度ごとに頼少なき悪縁を歎ちしが、有繋に男の思慮分別ありて迎
も無益の繰言を繰返すよりは打ちつけに父ペレイラに二人が割なき交を
聞えて出來ぬまでも口説いて見ばやと思立てば、娘は常より父が一徹な
る氣性を合點みて中々思も寄らずと首打掉りける。それよりは寧ろサン
タンナ市に住める名附親のセサリオは我身の一生を見る責任あれば此セ
サリオに泣付いて父が頑固なる心を動かすが却て上分別なりと説付け、
る。シリノは手を拍ちて其策を得たるを喜び、或る日終に決心して事に

托して爰より六七十哩を距つるサンタンナ市のセサリオ許を訪れんと
て旅立けり。

此より先、獨逸の博物學者メーエル博士動物採集の爲め南米に漫遊し
ペレイラが四十年前に別れし兄弟の紹介状を携へてペレイラを訪ね來
りしかば、ペレイラは生別れし兄弟に再會したる心地して太く歡待し決
して他人視せざる證據にブラジルの國風とて人には見せざる大切の秘藏
娘に遇はせたり。然るにメーエル博士は社交に慣れたる歐羅巴人の常と
て一度インノーセンシャを見るや面のあたりには其美貌を嘖々して止まざ
れば、斯る辭禮に嫻はで苟めにも深窓に秘する娘が他し人の口の端に上
るを深く惶る、ブラジル人として忽ち博士の心根を邪推し、初めは生別れ
せし兄弟の消息に四十年振にて接せし嬉しさに狂喜して例になく大切の
娘を見せたりしに、今は博士が心の底を疑ひし我が輕卒の振舞を悔ひ、

其以後は俄に外々しく他人行義に待遇ひて幾度か博士が再び娘を見るを
 請ふをも諾かで一日も早く敬して遠くる工風を廻らしたり。
 眞率磊落なる博士はブラジルの風俗習慣は本より老ひたるペレイラの
 心の蟠りを更に悟らずして幾度ペレイラより苦き顔さるゝをも一向無
 頓着にてペレイラを見る度ごとに娘の健康を問ひて必ず其美貌を嘖々し
 殆んど口を絶たざればペレイラは益々苦々しく思ふて兎角は遠くる算段
 のみ廻らしけるが、博士は日々に動物採集に出掛ける中計らずも此ブ
 ラジル原野に蝶の一種屬を發見し、太く満足して之を南米旅行第一の土
 産として歸國すべしと幾程もなく恰もシリノがサタンナ市に赴く少し以
 前にペレイラの許を辭しぬ。そこに猶ほ又氣に喰はぬは南米の美人を見
 たる紀念として新たに發見したる蝶に命名するにインノーセンシヤの名
 を以てしたる事なり。

爰にインノーセンシヤが約婚の良人ミ子カウは常に牛馬を市場に運輸
 するを生業とする男にして能く一人の力をもて數十頭を督使するをもて
 名あり。シリノ及び博士メーエルが滯留中恰も近くの市邑に稼ぎに出掛
 たりしが都の女孌耻かしき美人を妻とするを喜びて歸と直ちにペレイラ
 を訪ひ、ペレイラもまた待草臥れたれば急ぎ請じて早速婚禮の一條を相
 談し、若き娘はいつまで預かるも心配なれば一日も早く合意濟まして安
 心したしと云出せば、本より其了簡なるミ子カウ何條異議あるべき、相
 談どみに纏まりて扱てインノーセンシヤを招き二人して其趣きを語りし
 に、思ひきやインノーセンシヤは膠もなく否と首を掉りぬ。
 ペレイラは怒氣心頭より起つていきまき荒く嚇しつけ、ミ子カウもま
 た夜叉の如き顔して睨みつけたれどもインノーセンシヤは平然として恐
 るゝ色なく傑氣にも二人の相談を退けて終に従はざりき。

ペレイラ曰く、是れ獨逸の博士が仕業ならめど。此好色なる奇怪の學士が逗留中朝な夕な常に娘が美貌を煩さきまで褒め稱へて止まざりし一伍一什を物語りて、斯る鳥辭の曲者は御身の爲に戀の仇なれば追掛けて一撃の下に殺すべしと罵り、ミ子カウも渾身遺恨に充ちて腕節のムヅがゆき心地するに堪兼ねてやはか獨逸の博士を追はんとする時、常にインノーセンシヤの傍近く侍する不具の矮人テイコと呼べる白癡あり、此テイコ部屋の間よりムクムクと飛出し身振交りの廻らぬ舌にて喧嘩の對手は獨逸の學士にあらで若き醫師シリノなるを告げれば、是までシリノを厚く信せしペレイラの驚き一と方ならず、扱ては親切顔に誑かされて思掛けなき油斷を仕てやられたりと切齒して口惜しがり、ミ子カウは聞くに直ぐに馬に鞭ちシリノが行きしといふサンタンナの市をさして急ぎ行きぬ。

シリノは斯くとは夢にも知らず、サンタンナ市にて殆んど生命を賭物にしてセサリオを口説き落し兎も角も一應の盡力をすべしといふ相談成りて半ば成效したる心地にて少しも早くインノーセンシヤを喜ばさばやと路を急ぎて早やペレイラの家間近く來りし時思掛けなくミ子カウに待伏せられ、互に名乗合つて一と言二タ言語らふ間なく忽ちミ子カウの短銃にて敢なき最期を遂げぬ。インドーセンシヤは豫てより萬一の場合は共に死なんと覺悟したればシリノが非命に殞れて間もなくサンタンナ、ド、バラナヒバの野原に美しき骸を永へに埋めたりき。

物語は獨逸の博物學者ウ井ルヘルム、メーエルが本國マゲブルヒに於ける歓迎を以て局を結びたり。渠は普く南米の内地を跋涉せし有名な採集家シモン、シロツプが足跡未だ及ばざる地を深く搜りしのみならず、蝶の新種屬を發見したるは科學上の大功蹟なりと賞賛せられ且つ新

たに発見したる蝶の名 Papilio Innocentia はブラジルのマトグロッソ
 原野即ち蝶の発見地に住める土民の娘インノーセンシャの勝れたる美貌
 に因みしなりと噂どりに傳稱せられしといふ。
 物語の大意は斯の如く唯だ荒筋を云へば餘り索然たれども其間の妙味
 掬すべき處少からず。殊に獨逸の博士メーエルの磊落物に拘せざる學
 者氣質、老實頑硬一遍なるペレイラが武骨のブラジル人氣質、純良無
 垢にして未だ戀の何物たるを知らず無意識の戀するインノーセンシャの
 處女氣質、秀才シリノの清白温良なれども偏に情の焰ゆるまゝに任じて
 顧みざる情人氣質、若くは人よりは猿に肖たる侏儒テイコ、頻りに佛語
 を操りて (Mochu) 〱と呼びて得意がる博士の從者等各人の性格一々
 顯照と描き得たるは頗る面白し。唯だ此一事優に一方の鎮たるべき伎倆
 十分なりといふを得べし。

作者が最も精力を費し加之も最も成効したるはブラジルの野人を代表
 するペレイラの性格なるべし。渠はブラジル以外インノーセンシャ以外
 に何物あるをも知らざる野人にして獨逸の博士が蝶類を採集するを見て
 世にも珍らしき商業するものもありと怪しみ、倫敦巴里伯林等世界の
 都に年々餓死者を出すと聞きてブラジルは世界に珈琲カ、オを供し山野
 到處處菜蔬果實あれば終に餓死せんと欲するも得べからずと大氣焰を吐
 き、浮世の榮辱利害を外に見たる一種の樂世觀に安身立命して唯だ娘の
 爲に或は狂喜し或は慳感する狀躍動して見るが如し。
 最も笑止しきは矮人テイコなり。身長三尺にも足らざる侏儒にして座
 隅に蹲まる時は犬猫と同じ大きな黒團にして臆てムクムクと蠢めく時
 は人の狀したる怪物なり。口能く語るを得ずして手を掉り首を動かして
 漸くに辯ずるを得。ブラジル國果して眞に這般の奇物を多く見るを得る

や。恐らくは好んで斯る材を用ゆる理想派の狡獪を學びたるものなるべし。而も能く巧みに活動せしめたるに於ては作者が心憎き伎倆を認めざるを得ず。

最も叙事に巧みなるは第一回ブラジル荒野の景を叙したる邊に見はる。殊に野火事を叙したる條は滔々數十百行、旅人が煙草の燂えさしより起つて廣袤數十里の廣原を幾日となく風の吹くに随つて燎拂ふ物凄まじき或時は地を這つて毒蟲惡蛇を共に焼き或時は森に燂え移つて紅煙天を焦がし無人の原頭に兇猛を逞ふするさま能く描き得て爆發の音を聞くが如し。勁健奇抜の詩筆決して尋常にあらざるなり。

之を當今の名家に比ぶるに未だトルストイ或はゾラの班たるを望み能はずといへども遙にキツプリング、ステゼンソン一輩の上に擢んず。誠に得易からざるの才なり。而して此文豪を邦人が常に投機者が殖利を貪

るべき地とし半開國視する世界の南陲に出ずに於ては豈に奇ならずや。誰か計らん、二十何萬噸の海軍力を有すと誇稱する極東の大帝國は區々たる兎園冊子が好奇心をもて迎へられし外未だ歐洲文壇に嘖々傳稱せらる、傑作なきにあらざるや。嗚呼、是れ偏に國語の罪なる耶、否。

斯く評し終りし時恰も通信あり、曰く「インノーセンシャ」の作者は目下糖尿病に犯されて薜に呻吟すと。昔しはブラジル先朝の功臣にして今は南米の文學を代表するタウチイ子爵春秋猶は五十五齡なり。方今文豪連りに相踵いで凋零する時幸ひに加餐して益々南米に奮ふ事我ら「インノーセンシャ」を讀みしもの、等しく祈る所なり。

(明治卅二年二月四日)

(附記、此文を草して後此作者は一月二十五日即ち恰も二週日前よりオシヤチイロ市にて終に永眠したる旨公使リスポア氏より通知ありたり。)

饗庭篁村氏

ひら竹二十卷完備す。是れ篁村氏の全集にして凡そ氏が文字は小説どなく紀行どなく傳記隨筆等に到るまで備はらざるなし。明治以降文壇に馳騁して名聲ありしもの多しといへども苟くも後世に傳ふべきものなく此多きに達せしは勿りき。放翁の詩は一萬を越え馬琴の作は三百種に達す。強ちに多きを以て價値を定めがたけれども明治文壇の日猶は淺きに關らず、氏が年齒未だ傾かざる内、此龐然たる全集を成効せしもの、獨り氏一人の爲めのみならずまた文壇の一成效として大白を擧げざるを得んや。

其一

今より十年前讀賣新聞紙上に眞節、晴雪、康樂等の投書家縦横自在

なる才筆を揮つて名篇佳什を競ひし中に、嶄然頭角を現はし流麗輕快以て儕輩を凌ぎしものあり。龍泉居士又は大阿居士といふ。即ち今の饗庭篁村氏の別號なり。氏が一朝忽然として大名をなし天下に篁村宗の名を歌はれしは實は此冥々の間に養ひ來りしものにして讀賣新聞が高尚に過ぎず卑野に流れず上下を通じて聲價ありしは即ち氏が功蹟といふべし。商人氣質發賣の後數週日なりき。偶然本郷の一書肆に當世商人氣質と題する寫本を見る。謂へらく是れ其碩逸文の世人に知られざるものにして篁村氏の作の基く處にあらざる乎と、取つて之を緝けば思ひきや是れ實に篁村氏の作を寫録せしものなりき。余は曾て河竹一門の合作脚本及び古川魁蕃の淺尾岩切眞實競を寫せしものありと聞きしが、是等は俗耳に入り易き故に怪まざりしが、篁村氏が斯の如き熱心なるアドマイヤラ一を有するとは誠に思掛けざりき。蓋し氏は世人が繪入新聞の續き物に

心酔し八文字屋を黒表紙作者として記憶する間に西鶴其碩以下の諸作を
 涉獵し深く元祿前後の隨筆及び小説に熟し江島屋の文脈を傳へたれば一
 般操觚者が八犬傳、梅曆、若くは八笑人の餘唾を舐れる中に獨り嶄然た
 りしは當然にして、暫らく幼稚なる讀者に其眞價を認められず、漸く元
 祿文學復興の機に乗じて一時に名聲噪がしくなりしも亦た宜なり。氏は
 明治の初年より操觚者社會に投じ魯文、應賀、魁菴、春水(二世染崎氏)
 等と相追隨せしが、文運復興の時忽ち他を壓倒し去りしもの主として氏
 が造詣の深きに由る。馬琴、京傳亞流が暫らく天下を風靡する際、此造
 詣ありしは以て氏が眼識の高きを見るべし。
 世間往々氏を目して明治の其碩なりと云ふ。表面より見れば是れ極め
 て穿ちたる比較なれども其想の異なると共に文章も較や趣味を同ふせ
 ずして其碩以外に一派を開きたるを分明に認むるを得べし。曾て時の用

(叢竹第九卷にあり)なる一篇を讀賣新聞紙上に讀みし時は或は享保
 時代の文字を剽竊せしにあらざるかと疑ひたりしは文章結構共に其碩
 の臭味あるを覺えたりき。然れども是れ却て氏が本領を示したるものに
 あらずして他の蓮葉娘、魂膽、苦樂等を見れば江湖が篁村宗なる名目を
 設けしも無理ならぬを知るべし。思ふに氏が作才と文章とは元録の造詣
 に發達し殊に其碩を以て礎と爲したるならんが、其碩と氏との關係は恰
 もフ井ールデングに於けるチッケンスの如く學び得し處なきにあらざる
 も二家自ら特殊の妙を有す。是を木と竹の如く異なりとなすを得ざれど
 も松と柏の互に鬱然として霜姿秀葉を争ふに似たりと曰はん。
 其碩は我が國中興の名家なり。素より西鶴を學びし者なりと雖も別に
 門地を作り西鶴外に一家を爲せり。團水文流等は畢竟西鶴を學んで其神
 を奪ふを得ず所謂猫に類する虎を描きしに過ぎざれども其碩は即ち冷水

の如き犀利の眼をもて世のさまじくを觀察し社會の缺點を見るに極めて
 銳利なりし事、寧ろ西鶴の上に出でしが如し。彼が傑作の一なる傾城卯
 子酒の如きは西鶴が皮相を摸せしと云ふも誤りなからんが、其本領を示
 せる禁短氣に到ては徹頭徹尾嘲罵誹毀を盡して骨を刺すにあらざるなし
 其銳利且巧妙なる筆力は團水、文流等は勿論西鶴に於ても見るを得ざる
 なり。殊に八文字屋物と稱するかの氣質類に到つては流麗明快、唯文字
 の上より見れば毫も精銳なる字句を用ゐずと雖も平坦淡味なる文字の下
 に無數の針鋒を藏し閃電の如く讀者を恐れしむる妙は學ばんとするも能
 ふ處ならんや。世人漫に自墮落、風來、京傳、三馬等の妙を稱す。甚し
 きに至ては一九鯉丈を推して我が滑稽作者の代表者となす。彼等素より
 尋常作者に超ゆる作才なきにあらねども勁健なるユーモリストとして成
 効せるものを求めば即ち西鶴と並んで一家を爲せる其積を推さざるべか

らす。文字の勁健なるは秋成に如かず、語句流麗なるは殘口に及ばず、
 諷刺の酷烈なるは風來に過ぎず、觀察の穿細なるは京傳に超えず、唯彼
 が能く社會の裏面を窺ひ人間の暗冥を照し冷然として苦笑し恰も動物學
 者が蟻蜂の生活を談する如く虚心に平淡なる文字の中に諷せし能力に於
 ては蓋し何人も及ばざるなり。マコーレーが曾てアチソンの機智を評し
 て「是れ紳士の頓才にして機敏なる其談話は常に良性質と良生活とより
 生ぜらるゝものなり」と云ひしは又移して其積を評するに足るべし。
 其積の諷刺は實に斯の如く秀麗なりしが猶ほアチソンの如く道德的諷
 刺家と云ふを得ず。彼れ好んで、否好みにあらざるも觀察の銳利なる
 は人生の醜を暴露するを止むるを得ざりき。アチソン素より人間心裡の
 醜惡なるを知れども温良なる彼はスウ井フトの如く鞭撻を加ふるに忍
 びず其善美とを併寫して比照反省せしむるを力めたり。是れアチソンが

宗教家に愛せらるゝ所以にして其積が往々輕浮なりと退けらるゝ理由なりとす。其積が自笑と争ひて黄表紙の評判記を作りし説の眞偽、又彼が果して多田南嶺子なるや否や余是等を詳かにせず。唯彼が觀察銳利なりしも偏見狭心にして人生の醜を見るも美を見るを得ざりしは一代の述作能く證すべく、是れ彼が同じく機敏なる紳士の談話を弄せしもアヂソンに及ばざりし一點とす。余は世間の宗教家の如くアヂソンを信仰篤き基督教徒なりとて他の一切を拋棄して讚嘆する者にあらねどもサア、ロージアの如き平穩なる郷紳士は偏見なる其積の心鏡に映せざるを信ず。其積を以て標準と爲すは牛を相するに馬經を以てするに全じけれども叢竹二十卷讀了つて忽ち其積を想起するは氏が創作腦の根蒂其積にあるを證するに足らむ。世評氏が傑作と認むる當世商人氣質は當に廣告の意匠の

みならず文字構作宛然たる其積といふも不可なきなり、然れども是れ却つて氏が本來にあらざして——氏自らは甘んぜざるも——篁村宗の面目を示したるは叢竹に散見せる氏が最も力を費さるる短篇數種にありとす。氏が親しく余に語りし處を以てするも又曾て國民之友に寄せし嗜好書目十種を以てするも、氏が愛讀する處は其積にあらざして菓林子なり、月尋堂なり、無腸翁なり、其積は寧ろ氏が十數年前の愛讀書にして今は秋風扇の感あるに似たれども氏が其積を踏へて爛熳たる才を奮ひしは歴然たり。唯商人氣質の如く其體面までも學びしに到つては精神字句悉く其積と爲つて篁村の實を失ひしやの憾あり。由來時を全ふせず觀念を異にせるの二者全じからんと欲するも豈得べけんや。全じからざるは素より必然の道理にして、輕卒に明治の其積なりと判定するは即ち不可なり。さるを篁村宗の開山たる氏を論ずるに最も其積を學びたる商人氣質を傑

作なりとし其積を標準とし批判するは氏の本來を認めたるものにあらず
 唯文字の面を読み得たるのみ。篁村氏の傑作は商人氣質にあらず勝閑に
 あらず堀出し物にあらず良夜にあらず、却つて氏自身も世間も等閑視せ
 る叢竹中に發見するを得べし。而して是等叢竹中の短篇は其積の臭味毫
 もなく篁村一家の特色炳然として遠く秋成其積は魯か西鶴巢林子の光彩
 をすら蔽はんとするものあり。斯くてこそ眞箇に篁村宗の開山なり。明
 治の其積と云ふもの、如き未だ能く氏を知れるもの、評にあらず。是れ
 畢竟皮相上の見解に過ぎざればなり。

さはれ氏が根帯はもと其積なれば其積に似たる處又少からず。彼が禁
 短氣は筆法頗る銳利にして較や風來に近きの傾きあれども、是銳利は西
 鶴が一代男の平易にして冷灰の如き談話に及ばざれば、長處却つて是に
 存せずして他の氣質物にあるが如し。マコーレーの所謂紳士的の談話は

其積の徳川文學に名を残せし要素にして、篁村氏の彼に類するの點も又
 爰にあり。唯其積が偏見にして人生の美に同感せざりし一點に於ては篁
 村氏大に異なれり。左りとて氏を以てアチソンの如く道德的諷刺家と呼
 ぶを得ざれども、嘲諷冷笑の下必ず儒教的道德の藏るゝを見るは決し
 て其積と同一にあらず。叢竹第二十卷の藻鹽草數篇は即ち氏の倫理思想
 を示し其作は此思想を活社會に住する性格に實現せしものなり。馬琴の
 如く仁義八行を以て人間を作る法を學ばざりしと雖も氏が構作往々勸
 懲に傾くものあるは明かに其積と異なるを知るべく氏が堀出し物(新
 著百種)及今の俳昔の夢(女學雜誌)の如きは最も其弊の甚しきもの
 にして殊更に勸懲を寓せんとせし痕跡ありと見え、他の諸篇に到つ
 ても人物の配置又其倫理思想に基きたるを能く認め得べし。苦樂、蓮葉
 娘、川添柳等の如き是なり。

其二

旬餘病に臥し全く筆硯を廢す。枕上積むところ新刊の小説多くは流讀一遍すれば再讀を欲せざるもの、獨り叢竹に到ては一讀又二讀、興益と熟して倦厭終に來らず。初め思へらく其碩の趣ありと。畢竟氏の文調彼に似たるをもて其感ありしなれども漸く熟讀するに到つて氏が其碩外に一派を爲したるを分明に認め得たり。氏が文字は其碩にあらず秋成にあらず近松にあらず柳亭にあらず唯是一個の饗庭篁村なり。是れ字句の末のみにあらで想到に於て既に他と異なる處あり。其碩は前に是を述べたり。秋成は余多く知らざるも雨月物語の一節を以て推せば典麗なる文字を銜ひし世の所謂文章家ののみ。柳亭は巧作奇構徒に兒女の歡を買得るに止まる、畢竟お伽草子の較や進歩せしに過ぎず。皆是れ篁村氏が愛好せし處

なれども氏自身の作と相較ふれば寧ろ一段の下級にあるが如し。秋成が幽渺にして健勁なる柳亭が流麗にして簡雅なる氏又彷彿する處なきにあらず。一家の妙を供ふ、豈に他の徒らに倣古を以て慢るの比ならんや。氏が本面目の存する處實に短篇にありとす。最も精密に云へば二十卷の叢竹凡そ百篇の多さに上れども一のノールベルと目すべきほどの完作なし。然れども其深酷なる冷罵は能く京傳三馬と雁行すべし。叢竹第四卷に「三筋町の通人」なる一篇あり、其第二回の一節に、
 「(上略) 石榴はポント膝をはたいて其手で腰の烟草入を抜きトキニと云ふをキツカケに、音のする角彫の筒より早いを自慢が脂止め烟管を取出しソレ君も御承知のと云ひかけて手熨りの火鉢を引寄せ例の隠れ家へねで切つて煙草を吸ひ附け火鉢の縁をトント叩いてドウモ君に

見せたい嬋娟窈窕たる者が顯はれやした實にお目には掛けたいよと云つて羽織の紐を結び直す眞似をしてわざと跡を言はずに澄し切つて居るといふ（中畧）水無瀬もグット落付き自慢是は石榴子のお詞とも思はれず我輩に見せたいとは定めて古鏡玉の奇品ならんと存せしに凡俗を脱せぬ婦人の醜美などを論つらひ玉はんに宮戸川の流で耳が洗ひたひ云々

世の游蕩者流腦中一物もなく唯耳學問に安んじて古器古書畫に風雅を街ひ變物畸人と呼ばれん事を願ひ少壯努力せずして遊戯放縱に流るゝ所謂半可通なるもの之を讀んで赧然たらざらんや。是れ實に京傳の馬骨、三馬の山鳥子、サツカレーの紳士スノップと殆んど同巧のものなり。其冷々然たる平淡の中に彼等半熟の通人亞流を罵倒するの文字爰に到つて精を極めたりと云ふべし。

唯「三筋町の通人」なる一篇のみならず、氏が世の半可通を描寫するに敏妙なるは第五卷の「駢落の駢落」第六卷の「俳諧季違ひ」及「藝が身の毒」第十卷の「文の間ちがひ」第十一卷の「俳優氣質」等を以て分明に是を證するを得べし。就中「俳諧季違ひ」は大に寫實の趣を缺け共皮肉なる嘲罵殆んど文字外に漲らんとす。然れども「俳諧季違ひ」の主人公たる俳諧狂人は本町庵の材料となりし骨董、牛骨が比にあらざるが如し。昔し風羅坊は狂を以て任せり、東花坊も亦狂を以て甘んせり。彼等ミルトンの如きバイロンの如き皆詩狂を以て目せられしなり。篁村氏が冷笑の中に捲込みし屑屋詩人は元より是等諸詩人と匹儔すべきにあらねども又尋常俳諧を喜ぶもの、飽食暖衣して木枯初時雨の味を俳諧五百題に悟る亞流にあらざる如し。左るを氏が其の半熟俳諧者を見る眼をもて之を描きし故に大に同情を缺くは頗る惜むべし。本年一月以來の朝日新

聞に氏が「雪達摩」を載す。主人公中宮得三郎なるもの初め軽浮なる愛に溺れ其後小やかなる失望に憤り紅塵を蹴つて都を去り浮世の辛酸を味ふて再び花の春を迎ふる結構なり。中宮得三郎は元よりスウ井フト或はパイロンの如きミサンスロピストにあらで畢竟陋劣なる肉慾を満足するを得ざるを憤りしに過ぎざれば篁村氏の觀察又決して誤まれるにあらざるべし。然れども篁村氏は實に世の粉々たる屑屋詩人の如き俳諧狂又中宮得三郎の如きミサンスロピストを觀察し且描寫し得たれども終に峻酷凄烈にして黄金若くは肉慾或は通常の人情をもて醫しがたきほど深き根蒂を腦中に作りし狂詩人又厭人者に及ばざりしなり。再言すれば篁村氏は唯一箇の活人物を認めて之を深く嫌ひ深く嘲り唯一箇の理想人物を作りて只管世間に紹介せん事を勤めたり。前者は即ち氏が最も得意として描寫する處の半熟通人なり後者は世の辛酸快樂をも

詳かにせず卑近なる平凡道徳を墨守して淺薄なる美術嗜好するを有少年なり。半熟通人にも種類多し、豈獨り犬悅馬骨のみならむや。墓六も龜篠も彌次郎兵衛も喜多八も皆是れ半熟通人なり。若し諷刺家の酷烈なる眼を以て見れば米八も丹次郎も信乃も小文吾も亦半熟通人たらざらんや。されど斯は極端説なり。狭き情寰の半可黨に限るも篁村氏の描寫は猶ほ一部の性格に過ぎず。之をサツカレーのセツドレイを又ペンデニスを描きし手腕に比ぶれば篁村未だ及ばずと曰はざるを得ず。然れども縦令一種類にもせよ氏は能く半可通の微を穿つて餘さざりしは他の萬象の表面を平叙して其能を慢る似而非作者の比ならんや。次に他の理想人物を取て驗すれば第一卷「窓の月」の梅次郎、第三卷「聲撰み」の庄次郎、第十四卷「縁の糸」の安之助、第十六卷「苦樂」の新次郎、第十八卷「對扇」の小三郎等皆同人物にして是等の男性に對す

る女性お仲お樂お常お花お葉も亦同人物なり。よし外面はスコッチの背
廣を着するもダンスに髪を束ぬるも依然たる封建時代の町家氣質、此以
外に一人もなし。氏は庄次郎を叙して曰く、

「(上略)今時の若い者には似ぬ内氣の性質にて好む事とて算術は和洋と
も能く出来讀書もまた中等の教育は十分に受け狂齋翁に摸本を貰ひて
器用に畫さへかくばかり揃ひし上に色白の優方なれば」云々(第三卷

九頁)

又新次郎を叙して曰く、

「(上略)男振よく應對よく仁心あつて學問好き沈みたる氣質ならねと浮
歌舞伎でなく道樂といふも茶の湯俳諧父が外出の時は帳場格子の中に
居て麻靡をさらさず父が店にある時は折々の氣延し」云々(第六卷三頁)
此二者を合すれば即ち篁村氏が圓滿なる理想の好丈夫となるが如し。其

女性に於けるも亦同じ。遠慮なく云へば氏は自身の實驗外に物あるを知
らずして其實験内に於てのみ社會の裏面を推究したるが如し。氏が社會
の好男子なりと喜んで紹介せらるゝものに僅々分釐の活現力を與ふれば
忽ち是れ半熟通人即ち三筋町の通人と化成す。前者は木偶人の如けれ
ども後者は活人間にして活現するとせざるとが相違をなせども畢竟二者
是れ一人物也。篁村氏は唯一箇性格を描寫し得たりと云ふべし。「萬人
の心」と異名せられたるシエークスピヤすらも細かに窮むれば二十人
又十人と爲るべし。ドイツケンスもドストエーフスキも巢林子も窮極
する處三四人を知りしに過ぎざれば、社會現象の皮相を描寫して満足す
る滔々たる作者間に縦令一人なりとも若し之に同情して深く穿ち得たり
しならば又以て多とするに足る。然れども篁村氏は果して能く此一箇の
全體を知り且描き得たる乎。未だ遽に點頭くを得ざるなり。篁村氏能く

添田新次郎を知る。又三筋町の通人を知る。唯併しながら通人社會を貫く心裡の弊竇及び生涯の運命に到つては未だ全く盡さざるものあり。忌憚なく云へば篁村氏は唯だ一箇性格をだに猶ほ透徹して洞察する識を養はざりしなり。

第二卷「他山の石」の山田秋吉及「松の雨」の小林何某、第九卷「時の用」の東麓、第十三卷「煩惱の月」の川名正躬等は異人物なれども皆篁村氏の觀察外にあり。曾て友と共に爲永春水を論じて曰く春水の理想は恐らく藤兵衛ならんが彼が人物は藤兵衛以下なれば藤兵衛を知るを得ずして僅に丹次郎判次郎を描寫し得たるなりと。春水が觀察を特に鈍しと云はず、唯彼が理想の高からざるを悲むなり。彼れ人情本の元祖と目せざる、春水の文字が終に娘節用にも二筋道にも及ばざりしは輒ち是なり。

其 三

げに篁村氏が觀察し得し處唯一箇性格なり。唯一箇性格の異なる半面を描寫して或は同情し或は嘲罵するのみなりき。請ふ二十卷の叢竹を細閱して氏が善惡邪正是非禍福を考ふる處を驗せよ。シエークスピーヤは實在のまゝの自然界を摸本として寸毫も自家の觀念を表示せず巧に造化の活劇を躍動せしめ全く理想の痕跡を留めず今に到つて猶ほ批判家をして理想の摸稜たるに苦ましむれども、此翁以下の諸詩人に於ては所謂實際派即ち自然描寫を本來の目的とする名譽の實際派すら其好んで選擇する詩材を以て其概念をトし得べし。況してや直ちに理想を説明し若くは體現する理想派に於て露骨の概念を窺得べきは怪むに足らず。篁村氏は今の所謂實際派にもあらず又馬琴一輩の理想派にもあざれども、氏が

この好んで選擇せる材料の範圍を見て氏が概念を窺ふも又甚だしき過謬にあらざるべし。試に云はん乎。

悪人——氏が悪人として讀者に紹介せし者を見よ。第一卷の「玉簾」に忠助松藏の二人あり、共に是れ主人の暗愚を利し百方術計を凝して終に倒産せしめ猶は厭き足らで零落の境に陥りしものを欺きて以て自家腹中を利せんとす。第二卷の「走馬燈」に源七なるものあり、初め富家の子に阿諛して其恩を蒙り後ち其家を出で窮乏するや冷待嘲弄殆んど人情なし。第四卷の「藪椿」に鬼島昆山なる繪師あり、我が短を悟らずして他の短を罵却するのみか同朋の幸運を嫉んで事を設けて是を陥れんとす。其他「水の流れ」に「今年竹」に「苦藥」に幾多の悪漢ありと雖も悉く是れ尋常一般の小人にして悪人と云はるゝほど兇惡無殘なる險峻の手段と酷薄の情とを抱く者にあらず。畢竟黠鼠の狡才を學ぶを知つて鮫鱈豺狼の惡

辣手段は敢て爲し能はざるなり。黠鼠の狡智は憎むべしと雖も大度の人には却て之を愍れむ。然るに篁村氏は唯愍れむべき黠鼠を大奸視して之に鞭撻を加へたりしも白日横行人を惱ますの獐惡兇險なる鮫鱈豺狼の徒は全く忘れたる如し。

善人——氏が善人として造りし典型も又悪人と同じく、善事を積まざる善人即ち世の所謂好人物たるに過ぎず。第五卷の「水の流れ」の久三、第九卷の「跡取息子」の總太郎の如きはヤ、異なりたれども未だ全く描き得たるものにあらず。

斷言すれば氏は善人らしき善人の外に善人あるを知らず、悪人らしき悪人の外に悪人あるを知らざりしなり。更に曰へば小智を有する者は悪人にして小智だに有せざるものは善人なり。篁村氏が教へし處唯是のみにして此以外に善なし又悪なし。善中の惡、惡中の善に到つては氏終に

教ふる處なし。

氏が描寫せし女性を見るも又前に同じ感あり。第一卷の「下宿屋」に點出せしお花は氏が所謂毒婦を代表するものにして此以上の毒婦は全く氏が觀察外にあるが如し。有名なる「蓮葉娘」(第十七卷)は第一傑作とまで傳稱せられて世評嘖々たりしが唯僅かに淫奔輕浮なる無節操の女性が皮相を摸寫せしのみ。人往々鶴の一代女に比すれども鶴の作は當時の婦人の暗黒面を悉く剔抉せし上に「夜發の附聲」及び「皆謂はくの五百羅漢」の二篇に人生の秘奥を洩したるは豈に「蓮葉娘」の三面雜報的のものと同ーならんや。外界に就ての觀察は富みたれども内界の變化に至つては毫も觀察せし跡なきが如し。

蓋し氏は封建舊時代と此新時代との間に生れ腦中に根蔕を作れる舊時代の理想をもて今の社會を觀察する故に往々誤る處なきにあらず。第四卷

の「藪椿」のお梅の如き正しく今日の女權論を主張する婦人なるに係らず戀には脆きが當然ながら他のお仲「窓の月」お光「苦樂」等と分釐の差なきは怪むべし。是れ篁村氏が舊時代のお仲お光等を見る眼あるも新時代のお梅を知得る明を有たざるが故なり。或はお花と云ひお葉と云ひお玉と云ひお瀧と云ふも皆是れ外飾を異にするのみにして宛然たる舊時代即ち爲永時代の乙女なり。第一卷の「窓の月」に梅次郎が認めし求婚廣告の婦人資格は分明に篁村氏が圓滑なる婦人の特性を現せしものなるべし。是資格に投ずる婦人の是非良惡如何は余の知る處にあらねども唯今日の妙齡女性の希望にあらざるを知る。此理想を以て全く反對したる今の女性を寫さんとす。其觀察を誤るも又無理ならんや。リチャードソンのパメラの如き又フールデングのアメリヤの如き區々の評を免かれざれども猶ほ篁村氏が今の教育ある妙齡女性を寫せし比にあらざるな

り。
余が初めに論せし如く氏は京傳三馬にも劣らざる機敏なる眼光と西鶴
其碩とも雁行すべき麗妙なるユーモアとを蓄へたり。然れども往々儒教
的のコンモンセンスより割出したる偏狹なる勸懲主義を寓して強て其特
有の長技を一小倫理界に窘束する傾きあり。見よ、氏が善人は悉く幸運
なり氏が悪人は皆不成効に終る。氏が若檀那は大抵美男子にして意氣で
高等で人品で筆算を能くし歌俳諧に暗からで古器古書畫と俳諧とを愛す
るものなり。氏がお嬢様は概ね美婦人にしてアドケなく甘たるき詞を用
ひ友達に執拗て兄弟の朋友を戀ふるものなり。其他悪人善人君子義士小
人匹夫悉く全一の摸型を採つて作りしが如し。此億萬の人間皆各自一
個の相貌と心識とを有するに係らず五右衛門も太閤も清正も曾呂利も悉
く一熔爐に投入して同躰の形を作るに到つては何を以て區別するを得ん

や。然れども美術の神なる沙翁すら猶は僅々二三十の人間を描寫せしに
過ぎざれば是をもて痛く篁村氏を責むる事の元より酷なるを知る。余は
既に篁村氏が唯一箇性格の光明なる側面と暗黒なる側面とに善人悪人
小人君子佳人才子の名を與へて描寫せるを云ふ。源語以來我國作家に乏
しからねども、唯一箇性格すら深く觀察し得し者は誠に五指を屈するに
足らず。巢林子、西鶴は姑らく措き京傳三馬の如きは一境域に躍動する
性格を仄かせしに過ぎず。其他春水、鯉丈、一九、種彦、京山等は全く
論ずるに足らず。篁村氏此貧しき文學國に生れ縦令一個性格なりとも能
く觀察し得たらんには即ち重きを置くに足る。然り、氏は實に一個性格
を餘りに能く觀察し得たる故に氏が描出せし貴人高士節婦愚者惡漢猾奴
等他の平凡作家と異なりて悉く活動すれども皆同一性格と爲つて活動せ
り。第一卷「玉簾」第六回に描出せられし子僧新吉を見よ。殆んど紙面に

躍出する妙あれども小僧新吉として躍出せず却て「三筋町の通人」として躍出せり。其他俳諧季違ひも小林何某も駿河屋清次郎も法慶悻宗太郎も瓢箪屋成三郎も骨董屋茶平も消極的に若くは積極的に多少の度を異にして悉く「三筋町の通人」ならざるはなし。凡そ氏が描出せし人物は活ける「三筋町の通人」ならずんば輒ち生命なき木偶人のみ畫像のみ。第二十卷に紀行數篇を載す。亦三筋町通人的性格の躍動するを見るべし。讀者先づ此紀行文を熟讀して然る後に他の創作諸篇に及ばし思ひ半ばに過ぎむ。

此の如く篁村氏は能く唯一個性格を描寫し得て逼真の妙を盡したり。然れども憾むらくは唯だ表面の觀察に限られて裏面に徹せざるなり。若し夫れ更に深く尋ねて此の如き性格が失墜する箇中の消息を洩せしならんには其成效は決して叢竹諸篇に止まらざるなり。

余が篁村氏を愛讀する所以は恰も京傳或は三馬が其時代の半可通犬悦馬骨一輩の皮骨をえぐりしを感服すると同じ意味なり。唯夫れ氏が今日にあつて宛然たる文化文政度の半可通子以上に及ばざるは深く遺憾とする處なり。敢て一步を進めて觀察の範圍を廣むる事を欲するは獨り我らが望蜀の念にあらざるべし。

其四

英語のユーモアを譯して滑稽といふは少しく穩當を缺く。蓋し我が滑稽と命ずるものは一九、鯉丈の如き可笑を唯一の目的とする茶番狂言類似の卑俚猥雜なる方外の脚色を云ふ。ユーモアは之に反して極めて眞摯なる筆を以て人間が必ず有する半面の缺陷を描寫し以て反省せしむるを一方の目的としたれば八笑人の類と全く同一ならず。此故にユーモアの

眞味は一九輩の作よりは却て他の眞面目なる側面に於て見るべし。即ち遠くは枕草子又は徒然草の如き或は芭蕉、其角の作には頗る穩健なるユ一モアを見るを得。其他小説壇には西鶴、其傾を初め京傳、三馬等の作は最も新奇なるユ一モアに富めども、邦人の滑稽を説くや直ちに一九、鯉丈等を擧ぐるは何故ぞや。蓋し眞のユ一モアの妙趣を解得するもの頗る少なき故なるべし。

篁村氏のユ一モアを論ずるに先だち英國に於けるユ一モリストを少しく説かんとす。

滑稽及諷刺に名を得たる英國の二大家は一をアヂソンと云ひ一をスウ井フトと云ふ。二者各々其得色を異にして滅後に到るまで光明赫灼として滅せず。アヂソンは平穩恭謙の樂天詩人なり。其機敏なる眼光は能く人間の弱點を看破して諸々の篇中に巧妙なる諷諭を寓して嘲りたれ

彼が謙讓と忠實心とは恰も我子弟を諄々として諭すが如くに人間の弱點を世に披露したりき。彼曾て曰く最も能く戯る、人は最も能く仁愛を悟得せし人なりと。此言の不可は姑らく云はず、唯アヂソンが自ら任せし處以て知るべきなり。彼は世の所謂滑稽家と同じく漫に讀者の笑を買ふをもて足れりとせずして進んで世間を教へんとせり。此故に彼は談話ならんよりは寧ろ眞摯ならんを欲し觀察者たると共に教導者たらん事を望み、一言一行必ず師表たらん事を求めて只管世を誤るを恐るゝもの、如し。此故にサラマンダスを諷刺したるもベツチーを紹介したるも極めて寛極めて裕、是をもて我が三馬若くは京傳の鄙しき嘲諷に比すれば彼何故に諷刺家なるやの惑なき能はず。彼は冷然として少しも悲しまざりしが如し。然れども彼は人間の弱點に鞭撻を加ふるに忍びず其創痍を撫して温言是を慰め又戒めんとせり。畢竟彼が長所として宗教

家に愛好せらるゝは此故なり。又漫に峻酷犀利なる文字を喜ぶものゝ爲に生緩しとして退けらるゝは是れなり。彼は基督教を奉じ深く其理想を感得したるが故に非基督教者より見れば往々首肯しがたき宗教臭味あるを免かれざれども猶ほ「ビジョン、オブ、マーザ」若くは「コート、オブ、ヘブン」等を見れば又尋常作家にあらざるを知るべし。素より彼が宗教上の意見はグリーン(?)が云ひしが如く既に陳腐に屬して分釐の價値を有せずと雖ども「オン、レリジヤス、メラニコリー」の如き又以て我が今日の尋常牧師に十倍するの見識あるを證すべし。

スウ井フトは全くアチソンと異なり人生を戲謔の演劇として一笑に附し去りし深酷なる厭人者なり。彼は少時より失意に失意を重ね人生樂の一端をだに窺ふを得ず痛苦の塊物と悟つて世を憤怒し、客觀的の眼を睜つて最も冷かに世相を見、苦笑苦吟して以て自ら慰む。彼れ嘲弄罵詈訛

らざるなく悪言語刺餘す處なし。然れども渠は其不完全を繡縫せんとせする熱意あるにあらすして唯極めて冷淡に世を睥睨せしのみ。渠れ曰く「過去の戦争論議等を顧みよ、如何に人間が小事に營々たるを驚かむ、現在に於ても然り、唯渠等は少しも之を怪まず」と。スウ井フトの社會人事を見る能く此一句を以て徴すべし。紛々たる世上の毀譽褒貶善惡利害毫もその耳朶に達せず、生涯唯一箇の肩書だに有せざらん事を本願として官位勳爵唾棄して土芥の如し。彼は基督教徒——實に基督教の牧師を以て一生を送りし人なり。然るに其奉ずる處の宗教すら猶ほ其眼中に置かずして其廢教不可論に最も皮肉なる反語を用ひ終には「兎に角此宗教を廢せんには是まで世上幾多の學者が功名の犠牲と爲せし好題目を失ふべし」とまで最も冷かに此神聖にして侵すべからざる宗教を一笑し去れり。渠が宗教家に厭はるゝは此故なるべし。然るに渠が世事一切を嘲

弄せんとするや、其深刻なる偏僻心と鋭利なる觀察力とは璧玉の微瑕をすら容易に發見して瓦礫視する癖あるを免かれず、此不完全なる人寰を恰も白雲に坐して瞰下するが如き心をもて觀察し暗黒なる半面の外に美はしき人生あるを知らざりき。渠は人生を嘲つて人形芝居と爲し王侯將相奴隸匹夫皆是れ木偶視して僅に肉と血に依つて動き得る無知覺の木片と冷罵し小にしては「ゼ、ロンヂアンス、レヒューテッド」を作り大にしてはガリバル巡島記を著せり。ガリバル巡島記は其外面頗る家庭文學或は穉物語に類し殊にジョンソンの「ラセラス」の如く深き趣味あるにあらざれば一讀大に幼稚らしき感あれども直に此一事を以てスウ井フトを退くるは未だ全く渠を知るものにあらず。一哀一苦の爲に最も容易に感激する人間のひととしてスウ井フトが其眼に厭はしき此世界を見る事の如何に冷かなりしかを見よ。世には渠の如く人生を冷視するものな

きにあらざれども斯の如く深酷猛烈を盡して加之も外極めて冷靜沈着を粧ひ笑つて舌を吐く底の冷刺を爲せしものは眞に匹儔なき也。是二人は諷刺を以て最も名ある英國詩人なり。一は深く隠れたる人性の美に感得するを欲し、他は人間爲す處兒戯たるを笑ふて快を貪ぼりしものなり。互に其志す處を同ふせずして相對して文學史上の好伴侶又好敵手たり。然れども場外に立つて此二者を軒輊すればアヂソンは性平穩なるを以て人に激動を與ふるよりは寧ろ利益を惠むの良手段たるに如かずと云ひ荐りに人性の美を説て我自身をも渾身破綻なからん事を欲せしも時に又た極めて冷淡に社會を見世物と同一視する事あるが如し。スウ井フトは厭人の極に陥りて眼底涙なきかと怪まるゝまで冷々索々たりしが猶ほ熱憤熱罵口を衝て迸はしる事少からず。二者畢竟生育の境遇を異にして此反對なる傾向を生じ來りしも本と同じ賦性を稟けたるもの

なるべし。惣じて主我的に世を觀じて同情を缺く者が偏僻となり公平を失し冷淡無頓着に陥る恰もスウ・フトの如きは決して珍らしからず。唯渠は日本の厭世者流の如く世を憤りしも世を遁れず世を嘲りしも世を捨てずして熱情溢るゝ處、倏忽の間も世事を忘れず、新古學派の衝突を蝸牛角上の争と冷視して猶ほ「ゼ、バトル、オブ、ゼ、ブックス」を著はし、或は宗教を無用視し偽善の本源と熱罵して却て「エ、テール、オブ、エ、タツブ」を作れり。是れ極めて冷淡なるが如くして而も社會を忘れざるにあらずや。

其他十八世紀に重せらるゝ英國諷刺家、ポープ、ジョンソン、バットレルの作中萬世を通じて人間の針砭たるもの頗る多し。ポープの「ダンシアッド」及び「エッセイ、オン、マン」、ジョンソンのラセラス傳及「ヴァニチー、オブ、ヒューマン、ウヰツシエス」、バットレルの「ヒューチブ

ラス」等一讀腦裡に浸染して何人も其妙味を忘るゝ能はざるべし。是等は畢竟人間皮相の弱點を嘲りしにあらで深く其心内の機微を洩せしものなれば誰か之を讀んで赧然たらざるを得んや。スコット曾てジョンソンの作を評して曰く、千百度説教を聞かんよりは寧ろ渠が作の一を讀むに如かず、篇々悉く感に迫つて落涙を禁ずる能はざるなりと。

是等の作を一々數へ來れば明治の諷刺家の隨一と推さるゝ、篁村氏も亦一步を譲る如し。余は明かに忌憚なく直言す。篁村氏の作には讀んで眼底に涙を催ふし來るものを見ず、又極めて冷酷に根強く人間を痛罵せしものあるを知らず。又人間の最も美しくしき側面若くは其理想世界を描出せしものあるを見ず。篁村宗の開山祖師も畢竟三筋町の通人先生に過ぎざるなり。

其五

曾てチツケンス又たサツカレ一の旅行記を讀む。其觀察の穿細機敏にして文字の深刻銳利なる時に冷嘲時に好謔、他の「オールド、キユリオシチー、シヨツプ」或は「ヴハニチー、フエイア」の成る決して偶然ならざるを知るに足る。縦合渠等をして大作なからしむるも超凡特異の觀察力に富めるを證するに足るべし。伊太利亞紀行、カイロ漫遊記、巴里雜記等を緋けば風土人情は素より政治宗教文學思想の度に到るまで能く觀察し得たる事今日の我が政治家若くは實業家が唯文明の外面を見物して竊に視察し得たりと鼻撼めかすもの、比ならんや。蓋し今の旅行者の多くは腦裏空乏にして以て社會の狀態を測量する準繩たるべき各自の社會觀をだに有せざればなり。

ユーモリストを譯して滑稽家なりと云ふ。世人從來慣用せし語義に準據して鯉丈一九の徒を以てチツケンス或はサツカレイを想像す。然れども八笑人或は七偏人をもて想像するは十九世紀の此二大家を誤るに庶幾からむ。前者は單に方外の談謔を弄し他の馬琴種彦等が自己の鑄型より義人賢婦を造りしと全しく殆ど意想外——到底實際に見るを得ざる痴漢愚者を其妄想をもて描き出したれども、後者は是に反して此社會に生息し營々屹々衣食に狂奔し饑餓に苦吟し或は貪婪厭なく或は虚傲漫りに不遜なる若くは小心翼翼若くは輕卒にして鄙俚なる匹夫匹婦の運命を寫せり。讀者必ずしも笑はず、然れども淡泊にして眞實なる肥滿禿顛の老紳士ピツクウ井ツクを見れば樂む。讀者必ずしも怒らず、然れどもマードストーンに意地悪くも虐遇せられたる幼なきダビッドを見れば全感を起す。ユーモリストが滾々として噴出する千萬の平和文字中仔細に驗

し來れば涙痕の漉々たるを見るべし。サツカレイは冷眼をもて睥睨せし人なり、然るに渠がジョージの死を寫すや最も眞率に一の冗句を挿まず而も沈痛哀哭の文字を用ひたりき。是れ渠等ユーモリストの筆が又た頗る謹嚴なるを證するに足らむ。

蓋し社會的思想を念頭に置いて細に世を觀察すれば事々物々悉く我が心鏡に反映して悲喜哀歡を表はさざるなし。若し客觀的に人生を人形芝居なりと笑はゞ憂國愛民の士が東西に奔走するも神田兒が神事に熱狂して子を賣り妻と別るゝも素より全様にして豈軒輊するを得んや。富人往々萬金を投じて學校を起し寺院を建つ、吾人頗る其高義を喋々すれども此高義すら猶ほ社會外より見れば一櫛の初經に衣服を典ずると何ぞ擇ばむ。然れども人間は到底社會外に立つを得ざれば主觀的の觀察を怠るを得ざるなり。ロツチエが悲壯戯曲と滑稽戯曲との目的を論じて共に同様

なりと云ひしは此謂にして客觀的に見れば世は悉くコメデイなり主觀的に見れば世は悉くトラヂエデーなり。材は一なれども唯觀察者の眼に依つて甲乙の差をなすのみ。此故に作者の觀念那邊にあるを知らんとせばその選擇せし人物を細かに解剖するは勿論なれども、その抱懷せる社會的思想の厚薄以て能く視ふを得べし。チツケンス或はサツカレイが監獄に孤兒院に救貧院に若くは學校に寺院に注意し虚偽を以て充滿する流行社會に怨恨哀泣空しく嗚咽する貧民窟裡に觀察を逞ふせし結果隨筆雜記の中に片々と爲つて現はれしもの焉んぞ知らむ他日の粉本ならんとは。試に我が篁村氏の旅行記を見よ。叢竹十九卷の「駢廻りの記」及二十卷の諸篇と「もしは草」中の「雨見の記」「七草見」等毫も外界の觀察を描きしにあらで唯自己の一身に受けたる快感を發露せしに過ぎざるなり。「木曾道中記」第一回到、

「(上畧)都府を懸隔ちたる地の風俗を交せ混せにならぬうちに見聞し山河も形を改め勝手の違はぬうち観て置きて歴史など讀む參考ともしまた古時旅行のたやすからざりし有様の一斑をも窺ひ交通の不便は如何ほとなりしかを知らんと願ふ事多時なりしがし云々

とあり。歴史の參考上若くは昔日の交通を窺はん爲めの旅行ならんには彼の時代小説家の着眼に類して寧ろ篁村氏に似つかはざる目的なり。然れども假に氏の云ふ處決して世を欺かずとして、果して氏は木曾に房州に豆相に漫遊して能く其目的に協へる觀察を爲し得たりしや如何に。我は必ず爲し得たりしを信せんとす。又然れども其旅行記に於て毫も氏が觀察及び研究の痕を認むる能はざるを憾む。唯夫れ氏が或は馬より落ち或は崖を這ひ或は旅店に酔ひ或は立場に狂し時に惶惶狼狽時に和平淡雅滑稽談話混々として盡きざる逸興快趣を十分に見るべしと雖も、根岸の

吳竹書屋に於ての日記も木曾の寐覺の里に或は湯本の福住に於ける紀行も殆んど全じきは奈何ぞや。一篇二十回の「木曾道中記」恰も是れ篁村と云へる主人公を持ちたる一種の膝栗毛たるに近し。事物の觀察よりは寧ろ言語の洒落滑稽を盡すに専らなりし故に終に身の秩父にあると鹽原にあると鶯花園にあるとを度外に置きたるにあらざる乎。人は言ふ、當世紀行文に最も長ずるものを篁村氏と爲す。紀行文の本來の性質は姑らく置き、世人の篁村氏に感服するは能く觀察するにあらずして能く諛する故なるべし。余が常に篁村氏の紀行文を喋々推奨するも亦此に外ならず「鹽原入浴記」第三回東歸坊と共に高尾塚を讀むの一節頗る諧諛を極めたるものにして以て頤を解くに足るべし。蓋し氏が最得意の筆にして、他の創作諸篇に半可通を冷かに嘲けりしと全じく客觀的に氏自身を見て恰も他人の如く平氣に遠慮なく冷笑したりしなり。此故に氏の紀行

を讀みて其漫遊地の風土人情の如きは臃氣にも知るを得ざれども無心に好諠を弄する藹然たる氏が狀貌は即ち彷彿として紙面に現する心地す。氏が長處は實に箇一點にして、此詩才が溢れて臚て「苦樂」となり「蓮葉娘」となり以て聲譽を宇内に馳せしなれども氏が社會觀の程度は果して其聲譽を値ひするや如何に。

氏が紀行文を作る實に此の如く外界の事物は毫しも顧みざるなり。その笑ひ樂み嘲り諠するも外物に依て誘起せらるゝにあらずして氏が胸裡に伏匿する滑稽其物の自ら躍動する一人舞臺なり。昔しピットは雄辯一世に冠たり其口を開くや自ら何事を談ずるか知らざりしと。氏が文字に於けるも亦此の如く氏自ら諠するや否やを知らずして筆を採れば生平酒に戯るゝと全じく滑稽諧諠は押へんとするも押ふるを得ざるなるべし。蓋し滑稽は人間本來の一特質なれども平淡和順の人ならずんば此慘

苦の世界に生息し此不公平の社會に衣食して戯むれんとするも能く戯むるゝを得んや。若しくは客觀的に冷視してスウ井フトの如く偏僻なる文字をもて殘酷に嘲諠するは尙ほ望むべし、アヂソンの如く人間の弱點に苦みて是を諷刺して反省せしめんと冷かに談ずるは又た望むべし。唯篁村氏の如く毫も外界の刺戟に反動せしに非ずして無心に自己胸裡の滑稽を洩し他人の如く我を省みて嘲るに到つては余殆んど匹儔あるを知らざるなり。從來我國の詩文人は大抵自己の小世界に住して自然の風色を愛する外は毫も社會的の觀念を蓄へざりき。身は如何に脱俗せんとするも自づから社會の綱網中に束縛せらるゝに係らず猶ほ社會の事物に痛痒相關せざるが如し。彼等所謂詩人歌人俳諧師等叙情詩人に屬する者は尙ほ可なり、人事を咏ずる小説家も材を求むる處此社會を外にして何處ぞや。捨てんとしして捨てられぬ此社會を捨て活動せる人事の觀察を全く

怠りて唯自己の狂念妄想を架空的に描きて満足す。彼等若しアラビヤ夜譚を述作するを常とせば余は強て咎めざるも、横目堅鼻双手双足の人間を材料とする者が其觀察を怠りて勝手氣儘に妄念を凝して義人君子若くは痴漢匹夫を作為し活ける社會の人間と相離るゝも擇ばざるに於ては何等の謬妄ぞや。誠に笑ふべきなり。

人は各々長處を異にす。漫りに比較するは往々失當の嫌あるを以て、余は篁村氏を以て英露の諸作家と並べて評するを好まず。スウ井フト、アヂソン、ヂツケンス、ゴゴリ、又はドストエーフスキー等が有する社會觀或は人生觀に由りて氏を云爲するは却て本來の長處を滅却し去るを恐るゝが故に寧ろ喋々せざるの勝れるを信ず。然れ共氏を小説家又は諷刺家とし見んとせば勢ひ脚躡逡巡するを欲せざるなり。若し江湖に名聲なき小賣文郎或は但だ引札的文章家と目されて満足するの腐れ文學者

其六

ならば知らず、苟くも一と度篁村宗の開山と稱せられ當世の文傑と許されたる篁村氏をもて區々雜報記者と全一視するを欲せざるが故に更に一言を費さんとす。

氏の紀行文は實に上述の如く、是を讀んで笑はざらんとするも得べからず。然れども畢竟可笑しきに止まりて若し氏の本來爰にありとせば寧ろ悲しむべきにあらずや。氏の小説亦此紀行文と同じく「蓮葉娘」を見るも「三筋町の通人」を見るも氏が觀察が實際世間の底に徹したる痕を見ず、偏に自己の妄想を基礎としたる如し。此故に氏が描寫し得たる人情は舊來戯作者が既に筆を染めしものと大いなる徑庭あるを見ざるなり。氏はよく「蓮葉娘」を穿ちたりと云ふ、然り能く「蓮葉娘」の外貌を穿

ち得て而して心的作用に到つては頗る朦朧として他のお花（苦樂）お仲
 （窓の月）等と相違する處なきに似たり。善人悪人賢女淫婦君子小人惣て
 是れ似顔繪の如く寫し出してまた遺憾なけれども僅かに衣裳言語等を除
 却すれば何れか善人悪人賢女淫婦君子小人なるを區別する能はざるな
 り。

余曾て聞く氏が「蓮葉娘」を著すや或は楊弓店に或は下等料理屋に自
 ら實驗して此卷を成せしなりと。氏が用意の周密なる書齋に閉戸して社
 會を観察する似而非小説家の比にあらざるを喜ぶ。然るに「蓮葉娘」を
 見れば氏が頗る意を費せしにも似ず、比較して大に遺憾あり。其十三回
 に「悪人は赤面善人は白い顔と昔し風の芝居の様に分れば陥るものはな
 し」とありて正しく氏は色相をもて善惡正邪を批判しがたきを知るが如
 けれども常に色相をもて性情を描寫し盡せりとなすを如何せむ。

上來述べ來りし如く社會的思想の薄きものは深く真相を透視せざれば外
 面を見て淺薄に批判し唯其經驗に依て育成せし妄想を繰返すに過ぎざる
 は素より當然にして毫も怪むに足らず。昔人が祖先の功名を耀かさんが
 爲め半神半人の英雄を作り大威力大神通あるものゝ如く傳へし渠等が神
 代紀は即ち粗野なる妄想にして渠等が天地自然の壯觀に感得するや唯だ
 ジューピターを禮拜しハーキュールスを想像しアポロと子ブチエンとの
 み眼裡に影じて止まるは畢竟其以上の觀察を凝すべき價値ある社會の組
 織あらざりし故なり。文化次第に開發して社會人事の頻繁なるに連れて
 復たアラビヤ夜譚を想像せんとするも得べからず。偶々ミルトンの大才
 は絶代不思議の失樂園を作りたれども是れ彼が大才を待つて初めて望む
 べく、しかも此失樂園は深く人間胸裡の焔火を洞視して是を魔王と天宮
 との戰鬥に寓したるなれば豈に尋常荒唐恠奇と全一揆のものならん

や。更に下つて此十九世紀に及び諸般の發明は諸國に生じ科學は益々開拓せられて漸く宗教の範圍を減じ、經濟上の不平均はいつとなく貧富の距離をして甚だしからしめ天賦人權の論は四方に起りて昔日の壓制主義を排斥し萬國交通は次第に其域を廣めて中央亞非利加に及び列國の交渉は愈々迫つて歐亞に修羅を現じ來らんとす。事繁なれば苦更に多し、此十九世紀に沈痛にして激切なるユーゴー氏深刻にして眞摯なるトルストイ伯を産せしも又宜なり、淵明ゴールドスミツスの亞流は天に向つて祈請するも豈に其再生を望むべけんや。

兎に角痛切なる人事の四方を圍繞し刻々迫り來るに當り、外界の刺激に極めて脆き人間として焉んぞ虚心たるを得んや。若し夫れ外界の痛苦を感ずる事愈々切なれば内界の情熱を消さんと欲するも到底望むべからず。アデソン又たスウ井フトが冷然として苦笑し人界を見る事恰も動物社會

の如く王侯の富も猛將の勇も皆目するに木偶人を以てするは其胸中に一滴の涙一點の火なきに似たり。然れども若し渠にして眞に冷灰の如くならしめば何ぞ苦笑して人生を嘲るを用ひむ。彼が嘲嘘の文字は焉んぞ知らむ却て其中に萬斛の愛念を包藏するものなるを。

宗教家往々スウ井フトを擯斥す。是れ或は渠が毫末も渠等が天職と信ずる儀式的慈善事業を行はざりしのみか客觀的に人生を酷評して掌上に弄せし傾向ありし故ならむが、凡常の宗教家——寧ろ衣食の資料を得るが爲に道徳を賈ふ下根の眼底には到底影せざる白熱詩人なり。渠れ一身を眞理に犠牲と爲して專念に研究せし哲學者に非ず。また情を放樂に擅にして輕卒にも生悟りせし詩人にも非ず。腦裡常に社會を忘れざりし故に學術の爲に「書籍之戰爭」を著はし、宗教に慨して「テール、オプ、エ、タツブル」を著はし、社會人事に憤つて「ガリバル巡島記」を著

はせり。其間短篇新著一として單に自己の快樂を洩さんが爲め社會を忘
 失したる跡あるはなし。彼等宗教家——徒に聖書の章句を取次ぎ我を教
 ふるを爲さずして漫りに他を教へんとし、最も高尚なる職を以て誇り、
 慈善事業を交際の道具と爲し、偏見狭心或は輕薄淺膚、神と道德とを濫
 用する徒の能く窺ひ得る處ならむや。
 社會的思想あつて能く人事を觀察すべし人事を觀察し得て能く社會的
 思想を蓄ふべし。此二者は互に相待つて離れざるもの、未だ社會的思想あ
 つて人事を觀察せざるものなく人事を觀察して社會的思想を養はざる者
 はなし。蓋し人は各々其職と能とを異にし或は詩人或は商賈若くは官吏
 職工、人々業を全ふせずと雖も盡く是れ双手双脚の社會的動物蒼空を
 戴て大地を踏む者ならざるはなし。妻を愛し子を愛し寒暑冷煖に妄執
 を煽すの人にして縦令山野に隱棲するも悉皆一切の人事を忘却するを得

んや。さるに怪しき哉世間往々這般の俗骨我が俗骨たるを忘れて漫に超
 然として淺墓にも悟り濟して世を罵るものあり。所謂稜々たる好丈夫に
 して無盡燈を傳へざるもの輕障根利の人に於てまゝ是を見る、寒山にあ
 らざるも達眼の人必ずや此徒を憐まむ。
 何人も皮膚を傷くれれば必ず痛苦を感ず、感せざる者は唯癩癩白痴と神
 經麻痺の者のみ。若し然らずして更に感せざるものあれば他に一個の能
 なしと雖も余はその凡常に超越したるを識認せむ。疑ふらくは寒暑を感
 ずるの人能く己れの血を見て痛苦を感せざるを得るか。
 余は常に籃村氏の才思に服する者にして人に會ふ毎に文の妙を嘖々し
 て措かず、氏が今日の文界に立つて勿論一方の將材たる事を信ず。然れど
 も氏が社會的思想の那邊に在るに到ては茫乎として鈍眼未だ知るを得ざ
 るなり。アデソン、スウ井フト等凡そ文界に馳驅して聲名を傳へしもの

夫のゴールドスミツスの如きすら尙は社會と自己との關係を忘れずして能く觀察を凝したるに、今日の文宗を以て許さるゝ氏が唯饗庭篁村外に人あるを知らざる如く獨り過去の自身に戯れ笑ひ嘲り罵るは抑も篁村氏が凡常に超越する所以か否や。曾て女學雜誌に寄稿したる創作に添えし尺牘あり。是れ果して氏が眞面目なるか或は生平の諧謔なるかを知らざれども假に氏の言を信するも如何にして此の如き惡作、(余の無禮なる直言を許せよ)、此の如き惡作が哀哭の末に成りしかを知るに苦しむ。若し女大學に袖の雫を覺ふる多淚の女性あらば能く百千行の涙を揮ふべけれども氏が所謂「世間通常の人情」を具せざる余輩は氏が哀泣せしを到底信する能はざるなり。却て「木曾道中記」に一滴の涙を濺ぎし一節あり、是れ即ち氏が氏自身に泣きし一節にして二十卷の叢竹中之に比すべき感傷文字あるを見ざるなり。

「魂膽」は厭卷の妙作とす、江湖の少年此文字に冷汗を覺へざるもの果して幾人ぞ。文詞の輕妙なるに到つては當年のバジリストを眞似て「Jean Paul der Fizige」と絶叫するを辭せず、眞個に篁村氏が明治の文傑たるを證するに足らむ。

(明治二十四年三月)

老 車 夫

今日梅雨に入初めて第一日、前日からのさんざ降に拂曉前からは東北の風さへ加はつて道端の小礫を流し川沿の青柳を色褪せるまで吹暴らし紙漉場通ひの粹な娘が後生大事に古傘の柄に縋つて見榮も色氣も忘れて裾を高く端折りたる、造兵勤めの勇みな兄いが釦鈕の脱れた古外套をスツポリ頭から被つて偏走りに砂利を蹴立て、行く外は一時は往來全く途絶えたのが、十時頃から風も鎮まり雨も小体となつて折々は雲の断目から蒼空が仄見え、時々お日さまが秘そり顔出しをして新樹に滴垂る露を炫きまで反射しては何日か復た薄朦朧と雲隠れすると、俄にさつと一としきり吹下して五分か六分の間道行く人を狼狽へさしては忽ち復た雲断がして了うので、

平常は此橋詰の停車場に五六臺は缺かさず客待ちするのだが、今日は珍らしく唯ツた一臺——臘塗の禿げた桐油幌の破れて随分小汚ない一人乗だけで、加之も此邊に餘り見掛けぬ酒肥りの六十前後の老車夫が襤褸毛氈を敷いた蹴込にコク、座睡をしてゐた。ツイ二三十分钟前、何處からか微酔機嫌で梶棒に握まつて來たのが折からの驟雨に此處の柳樹の下で雨愁をしつゝ濁水の渦き流れる川面を瞻視めである中、何時か心持よく睡氣が催して、幌の雨滴が曲んだ饅頭笠を傳はつて頸筋に流れるのも、柳の絲の風に吹かれて白髪交りの斑ら鬚を撫でるのも、スットコ被りの尻搦げが大きな魚籃を腰にぶら下げてツイ鼻のさきでぎッぶり投げた網の音の高いのも、何も知らずにどろ、どろと高野で今にも大地に轉げ出しさうである。

處へ艶の抜けて盲縞の筒袖へ穴だらけの雨合羽を引掛けた瘦セツぱち

の五十を越したらしいのが空車を曳いての通りすがりに、偶然と高野の老爺を發見けて其傍に梶棒を卸した。

「オイ兄貴……助阿哥、起きねエか。」

「う、う、最う飲めねエ、飲めねエ。」

「寢惚けてやがる。やい助阿哥、起きねエかい。酔飽らッて雨に當ッちやア毒だ、」と老爺の肩を強く揺ぶッて、

「起きろイ、毒だ、毒だ……」

「う、う、起きる、起きる……」と漸とこさと大欠伸をして、恍惚とした眼を睜つて、「甚公だナア。妙な處で邂逅はした。已ア昨晚ッから……うワあッわア、毒だ、毒だ、毒だ……」

「睡さうな欠伸をしやがる。相變らずポンポン酒臭をさせやがるナ。昨晚ッから奈何した？」

「なア甚公、昨晚ッからナア甚公、」と老爺は欠伸の出さうな脹んだ皺面を頤から前額へ撫上げて、「なア甚公、昨晚ッからナア甚公。」

「昨晚ッから奈何した？」

「奈何した斯うしたッてあのどしや降ぢやアから最う仕様が無エ。己アお前、昨晚ア堤で幌の中にお籠りだ。」

「ぢやアお前、夜明かしか？」

「仕様ことなしだ。堤だッて人ツ子一人通りやアしねエで、雨アどしや、降りやアがる。提灯の火は消えッちまう。宵に飲んだ酒は醒めッち

まう。夜あかしの茶飲屋は早終エにしちまう。筒袖から股引はズ、濡れで身体中がジメ、ジメとする。腹ア減つて來てグウ、グウいやアがる。己ア最う

辟易れたが、懷中が出來ねエけりやア歸る氣にもなれねエから、ソレお前も知つてる三本目の柳の下の葦簾張よ——あん中へ車を引込んで到頭

ひと晩お籠りだ。

『其奴ア痛い目見た。』

『だが甚平、そいでも御方便なもんで、天道様が助けて下さらア。なア甚公、聞きねエ、昨晩碌すッば睡らねエで漸と夜が明けりやア今朝の暴雨だからなア、堤の朝歸りも根ッから無エや。餘まりいめ、しくなッて豪氣に癢に觸ッてならねエから小な仕事ぢやア腹の蟲が承知しねエし、破れかぶれで糞やけになッて堤下で熱いのをキウと引掛けて歸らうとすると、お前、運ッてものア解らねエナ。出逢頭に車夫ッてエから、ヒヨイと見ると本フラに白縮の金鎖だらりといふ立派な旦那だ。平常なら逃がすめエと凝りつくンだが、肝癢魂が腦天に籠上ッてるから私しやア腹が滅つて曳けやせんと啗はせると、田圃まで行けッ喰はしてやるッて御詫言だ。畜生、青二歳のくせに生意氣を吐きやアがると、己だッて昔し

ア羅生門の助藏だから、腹はへ、こゝしても意地を悪く突張つて小石川まで圓助だが可ウがすかッて吹掛けると、お前、二歳でも今時の奴ア馬鹿にならねエナ、吝ッたれな事ウ云ふなッて忌に嫣然笑出しやがッた

『ふウむ、滅法界な上玉に衝突りやアがッたナ。』

『聞きねエ。それから田圃の平野で鍋一枚に酒一本御馳走になッて、其勢でツイ其處の坂の上の黒い西洋門の邸まで送つて來たのだ。處がお前、聞きねエ、お約束が一枚祝義が一枚——圓助二枚ッて此頃の不景氣に聞かねエ寸法だから、有繫の己も度肝を抜かれて二ッ三ッ餘計に點頭をした奴よ。』

『ふウん、其奴ア豪敵だ、奈何した、それから？』

『金子ッてもものは豪氣なもんで、己ア一と晩雨晒しになッてムシヤクシ

「ヤしたのが無法に面白くなつて、お前が馴染の山印で三徳大神酒を五んべゑ聞しめして之からは館へお歸りお歸りだ。」

「昔くやりやアがる。お前は元氣が好いから奈何しても駄引が凄いな。」

「そりやア味噌を擧げるぢやアねエが昔し取つた杵づかで、腕は萎びてもお前の様な若衆とは度胸の鍛錬が違うからナ。三十年前には犢鼻褌一貫で胸毛の赤エのを自慢に賣りもしねエ喧嘩を買つて兩刀に達を突いた雲助様だ。お前なんかは何て云つても以前が立派な旦那衆だから落魄れた日にやア己の方が兄いだ、なア甚公。」

「うむ、お前の伎倆には協はねエ。お前がヅウ〜しい様で何處か助才なく錢儲けをやる駄引巧者には己ア平常から感心してエる。だが阿哥、己アお前が羨ましいよ。唯ッた一人で儲けた錢を一杯に遣うんだから好きな酒を啗つて太平樂を云つてられる。己なんか見ねエ、此不景氣な中

で一家六人を脊負つて立つんだから容易ぢや無エ。まア聞きねエ……」

と腹掛の底から地切を反古紙に捻つたのを出し刀豆煙管の壞れたのでスバ、燻かしてボンと叩き、「米ばかりが南京で四貫要る。薪炭味噌醬油に乾魚の一枚も喰はうツてには一貫五百はかゝる。齒代が六百、屋代が五百……是だけは照降なしに消えて了うんだ。そこで稼ぎに切りやア出るで草鞋が二足、蠟燭が二本、腹も減りやア飯の支度もせざアならねエし、交際に饅頭の二つや三つ喰ふ事がねエでも無エや。第一、牛乳の五勺や玉子の一つ位資本に入れなけりやア精が盡きてしまはア。だからお前、人一倍骨エ折つて七貫か八貫と稼がねエと寐酒どころか全家の願が直ぐ乾上るつて騒動がおツ初まる。其處い行ッちやアお前だ——女房子が無エから吞氣に太平樂を云つてられるだけが幸福だ。己アお前が羨ましくてならねエ。」

「うツムツム、」と助藏阿哥は腹筋を揉出した様な聲で、「お前だッて己だッて今日びの不景氣ぢやア遣り切れねエ味に變つた事あねエ。己アお前と違ッて太平樂が好物だから痛く景氣が好さうだが、此四五日續いて酸ッペエんだから漸と圓助二枚に有附いたッて穴が埋らねエや。お前なんか愚痴を覆すが、嬢アは内職をやる、總領の熊めは立派な伎倆が出来たから最う占めたもんだ。小せエ奴も活板屋へ行くッてやア若干か稼ぐだらうし、第一紙漉場へ出掛ける——それ牛の糞を載つけてるお娘よ、滅法好い容貌で硝子を逆さまッて面だ。些と野暮臭エのが瑕瑾だが鬚の生えた官員が啗付く代物だ。二番目のお米坊と來たら——何歳だッけ？えッ十七か。愛嬌がはた〜垂れる様で已みている老爺でせエ戰慄して氣が悪くなるからナ。追付け最う玉の輿でお前ッちは左團扇だ。オ老爺さん、」とニヤ〜笑つて覗込む様にして、「頼むせ甚公、たんまりお

裾分を……オイ忘れちやア不可エせ。

「だからお前は氣樂だッて事よ。」と煙管を捻りながら凄しさに笑つて、「己ア兒供には精も根も盡きた。内情を知らねエ奴ア野郎が二人で阿魔が二人だから好い兒持だの早く樂が出来るのッて羨ましがるが、己ア兒供の爲には何程泣いたか知れねエ。兒供なんてものは一とはつて甘く養の目が出りやア幸福だが、一つ間違ッたら一生の脊負込で此様な厄介物は無エや。」

「開うよ、當り前よ。嬢と資本要らずに好い事ウして拵エたんだからナ、少と位出來が悪くたッて辛慢するのは當然だ。處がお前なんざア腰の据え様が巧者で鳶が鷹と來たから豪勢なもんだ。」

「爾うでねエから可笑しいや。阿哥、聞いて呉れ。己ア愚痴ぢやアねエが……」と甚平親父は首を前へ突出して、「己ア熊の野郎位てこずつた事

アねエ。民の小は猶だ孩兒で役に立たねエ上に驚風が蘇生ツた奴だから一生物にはなるめエし、他ア罌丸が無エから頭で對手にならねエ厄介物だ。處でお前、肝心片腕にならうツて熊の野郎がカラモウ意氣地のねエ無頼ぢやア什麼にも斯うにも方がつかねエ。己だツてお前、律義一方に堅くしてエたンぢやねエ。之まで落魄れるには商賣の失敗もあるが、半分は飲むと賭つて相應に汚行をやツたんだから、子供の悪語をいふ義理は無エが、熊の野郎位親を泣かせる奴もねエもんだ。』

『うツふツふ……お前も親の罰が中つたんだ。』

『爾うよ。己もナア、』と悄れ返つて、『若エ中に堅くしなかつた罰で到頭牛馬の商賣まで成下つた上に、此年になツて子供の苦勞まで背負込みやア世話アねエや。だがナア、己ア十年前からは眞摯になツて、親爺ア仕様がなかつたが子供だけは満足に出來てると世間に云はせてエと思つて

ナ、第一番に熊の野郎よ、彼奴だけ人間並に育て上げて世間の交際が出来る様にしてエと、苦しい中から算段して學校へ入れてやつた。どうせ己達の子供だから伶俐ぢやアねエが、甚麼か斯うか眼鼻を明けて十三の歳に銀座の洋服屋へ世話アして貰うと一ト月経たねエ中に駈出して來やアがツた。それから己の苦勞は尋常ぢやア無エ。飾屋、石鹼屋、莫大小屋、何處へ行つても長くて二ヶ月の辛抱が出來ねエで己が勝手に出るか追出されるか全然長持がしねエから最う誰も世話アして呉れねエや。と云つて棄て、置やア愈々駄目だから漸と出入の旦那に泣込んで、今の親方に世話アして貰つた、憐うと今年で四年前だ、己ア其時親の慈悲で涙をホロ／＼覆して野郎の横面三つ四つ撲飛ばして呉れた。其上に今度出て來りやア直ぐ叩殺すと引導渡してやつたら、有繫に餘程骨身に徹エたと見エて先ア無事に辛抱して、去年の秋からは什麼か斯うか小遣錢

位取れる様になつた。己も女房も大喜びで、此鹽梅なら苦勞の仕効があ
ると安心してエた處が、お前、子供だ〜と油斷してゐた奴が己達の知
らねエ間に銘酒屋入りをおツ初めやがツた……………」
「うツふツふ……………」熊の野郎め中々話せる。面白エ、面白エ……………」
「うツふツふ……………」

「調戲ぢやアねエ。元來お前なんかいい老爺さんのくせに己の家へ來
ぢやア馬鹿咄しをするのが野郎の毒になつたんだ。ナア助阿哥……………」
「うツふツふ。頭ア禿げても獨身者だ、お前の様に燻ぶらねエ處が羅生
門助藏の價値だ。なア甚公、年を老つて色と酒は忘れねエから若エ者は
當然だ。棄てとけ、棄てとけ。」
「己だつて苦勞人だ。若エ者が色狂は萬更無理はねエと寛大に見てやツ
たが、熊の野郎め増長しやがツて碌な錢も取らねエくせに毎日〜入浸

りだ。女の嫌エな男はねエから女に惚れるなたア云はねエ。氣に入ツた
女なら女房にしやうと妾にしやうと手前の働で爲る事なら己ア微塵も
文句は無エんだ。だが熊の野郎みてエに一人前になれねえくせに小とば
かりの小遣錢を上げた上に、親方が拵エて呉れた仕着を打込んだヤア
己が血の汗を絞つて總領の阿魔に拵エてやツた銘仙の晴衣まで持出しや
アがツた。其上にお前、民の小まで騙くらかして漸と稼ぎ貯めた僅ツた
七貫三百の錢まで巻上げやアがツた……………」
「うツふツふ、熊公中々行るワイ。」

「まア考へて見なせエ。お前の様なハホ、ハんだツて顔を擧めずにはゐら
れめエ。親爺は五十面を下げて梶棒に握まつてる。お母は眼の悪いのを
辛抱して紙蓑を巻いてる。妹は揃つて紙漉場で眞黒になツてる。民の小
まで虚弱エ身体で活板屋にコキ使はれてる。尋常の人間なら少とでも補

足に入れて苦ねエのを助けやうツてのを、熊の野郎は番毎に家の物を持出しやアがツて、今日日南京が六升古澤庵が五百する滅法界な世智辛エ時勢に、民の様な孩兒の巾着錢までくすねて醜面賣女に入上げるツて其心持が己には面白くねエ。

『若エ者だ。負けてやれ。』

『まア聞きねエ。其心持が餘り意氣地が無エからしん、みり叱言をいふと何時でも口返答した。』

『父さん、お前だつて堅氣で身代潰したンぢやアあるめエ——ツて此様な悪たれ口を叩きやアがツて、己も肝癢に觸るから撲飛ばす、ムシヤブリつく、取組合ふ。野郎め蚊細いから己の力に協はねエが負けると直ぐ腕に喰ひつきやアがる。親の臍エ噛り足りねエで腕まで喰ひつきア世話アねアや。』

『あツはツはツは、』と助藏老爺は黄色い齒を露出して左も可笑しさうに笑つた。『お前が餘り甘エからだ。』

『はツはツは、辛エ奴を平氣で噛るンだからカラ最う仕様が無エ、』と甚

平親爺は餘義なささうに苦笑ひして、『己にせエ斯うだからお母の云ふ事

なんか全で耳に入らねエや。己も腹ア立つが什麼か土性骨を叩直して真

人間にしてやりてエと氣長に胸エ撫つて面倒見てやツたが、野郎め新聞

なんか讀臭つて屁理屈を陳べて親を馬鹿にしてけつかる。ナア助阿哥、

呆れるぢやアねエか、己の前で臆面もなく醜面阿魔の自惚を吐かしやア

がつて洒蛙くしたもんだ。』

『うツふツふ、面白エ野郎だナ。お前より餘程話せらア。だがよ甚公、

鳶が鷹ツてンだ。』

『面白くもねエ、眞劍に聞いて呉れ、』と甚平親爺は勃然となつて、『己だ

ツて若エ中は相應な罪を作つて身代を滅茶苦茶にした男だ。全然世間の

解らねエ木強漢たア違うからナ。道樂者の腹のどん底は一から切まで心得て萬更同情が無エでもねへ。だが助阿哥、己ア斯う見エても猶だ女に惚けて馬鹿アした事アねエせ。酒と賭博ア飲より好きだツたが、身代を潰したナア時の廻り合せて道樂の罪ぢやアねエ。ナア爾うぢやアねエか、一升酒エ啗ツたツて月に灘の薦被りが僅ツた一本だから財産のある時分には此位は何でもねエ小な消費だ。賭博だつて爾うよ。欺騙を行らせエしなけりや勝負の味は碁や將碁と少とも變りやアしねエ。今の髻の生エてる紳士面が商賣にしてエる米や株の相場の方が己達の手慰よりやア餘程質の悪いチヨボ一だ。己ア始終云つてる、筋の善くねエ借金を拵エたり女房子に餓じい目を見せたり、人に迷惑を掛け世間に義理を缺いたりしちやア今日様へ申譯がねエが、爾んな秩序の無エ事せエしなけりやア賭博位小氣味の宜い男らしい道樂は無エんだ。尻の腐ツた女郎にデレデ

レして二本棒垂らした態ア見ツともぬエ根本で己ア蟲唾が走るほど嫌エだ。だからよ、同じ道樂をやるなら賭博に負けてスツテンテンで轉込んだ方が己アまだ勘辨してやる氣になるが、鼻くた賣女に陥りやアがツて己がヒヨットコ面を忘れて妙ウ色男振りやアがるのを見ると己ア肝癢の蟲が籠上げてムシヤクシヤして来る。先日の晩も喰エ酔つて歸つて來やがつて變な聲を出して惚けやアがるから横面のひん曲るほど撲付けてやツた。鳶が鷹どちやアねエ。西瓜の蔓に絲瓜が揺下がツたんだ。あん畜生め、絲瓜野郎だ……」

「うツふツふツふ、」

「お前よく茶かして笑うな。己だツて道樂の果だ、野暮な伯父さん見てエな事ア云はねエ所存だ。女狂ひも大負に負てやるが一貫や一貫半で切賣する賣女たア思切つて情ねエ真似エしやアがる、呆れ返ツて話が出来

ぬエや。己ア大酒を喰つて丁半に負けて八間口けんまぐちの屋臺骨やていぼねを首尾しゆびよく打潰ぶした大白痴おほたはけだ。堅氣かたぎ一遍べんの世間様せけんさまから見りやア狂氣きちげえの沙汰さただらうが、汚ねエ眞似まねはケチ燈りんもした事が無エお底かげに道樂仲間だうらくなかまぢやア寒帷子かんかたびらの甚平じんべいツて少ちつとは顔かほの賣うれた阿哥株あにきかぶだ。十年前ねんめえから堅氣かたぎに戻もつて最もうざまア無エ牛馬うしうまの商賣しょうばいしてエるが一度叩たた上げた根性こんじやうはいつまでも寒帷子かんかたびらの甚平じんべいだ。女房かめだらうが子供こごだらうが男をとこの面つら潰つぶす所為まねをされちやア腕うでが鳴なつて辛抱がまんが出来できねエ。なア助阿哥すけあにい、お前まえだつて羅生門らしやうもんの助藏すけざうなら己おれの心持もちは合點のみこんでるわけだ。己達おれつちだつて古瑕瑾ふるきずのある身躰からだだ。口くちが横よこに割さけても仁義じんぎの講釋こうしゃくは出来できねエ義理合ぎりあひだ。だがナア助阿哥すけあにい、どうせ生身なまみで腐くされるもんなら男をとこは男をとこらしく腐くされるだ。女の腐くさつた所為まねは骨ほねが舍利しゃりになつても仕ねエのが男をとこの有ありがてエ處ところだ。さっくり割わつて眞赤まっかな血ちのポタポタ垂たれるのを江戸兒えさうごに賞翫しょうくわんされるのが西瓜すゐくわの小氣味こきみ好よい己達おれつちの嬉うれしがる價しん

値しやうで、のらくらりと半間はんまに揺下ぶらさがりやアがツて將來ゆくすゑが足袋たびの底そこや帶上おびあけの心しんになつて女の足あしや尻けつに重寶ちやうほうがられる様やうな腐くさつた絲瓜野郎へちまやらうは風上かざかみに置おけねエ反吐へざの出でる奴やつだ。なア助阿哥すけあにい、己おれの心持こころもちを察さつして呉くれ、己おれア最もう殘ざん念ねんで堪たまねエ、熊くまの絲瓜野郎へちまやらうめ意氣地いきぢの無エ事ことをしやがツて……」
と爰こゝまで語かたつて甚平親父じんべいおやぢは遽にはかに鼻はなを塞つまらして了しまつた。で、窃ちつと拳こぶしで濕うるんだ眼めを拭ふくのを助藏老爺すけざうぢいさんは不思議ふしぎさうに瞻ながめてゐた。
「若わかエ中うちは二度にどとは無エからナ、」と甚平じんべいは手鼻てはなをチンと拭かんで、「女狂おんなぐるひも大抵たいていなら負まけてやるが、己おれが身みぢんまくも出来できねエ中うちから鼻はなくた賣女せこくに逆上さかせやがツて親方おやかたや朋輩ほうばいへ迷惑めいわくを掛かけちやア世間様せけんさまへ己おれが顔出つらだしが出来できねエ。己おれが身代しんだいは滅茶々めっちゃぢゃにしてスツテン〜の眞裸まっぱだかで水みづをかッ啗くう事ことの出来できねエ時ときでも世間せけんに迷惑めいわくを掛かけた覺おぼえはケチ燈りんも無エのが寒帷かんかた子この甚平じんべいだ。ナア助阿哥すけあにい、甚平じんべいが兒供こごア色狂いろぐるひをやツても男をとこらしく小氣こき

味よく生一本交り氣なしにズバ抜けて行つて貰エてエ。秩序の無エ意氣地の無エ條理の經たねエ間拔な縮の緩んだグウタラベイな外聞の悪い所爲エしやアがツて……己ア最う面目なくて消えツちまひたくなつた。』

『仕様が無エや。若エんだから情婦の一人や二人、辛抱してやれ。』

『己ア親子の情だからナア。強い事を云つたツて可愛い兒供の爲る事なら辛抱してもやりてエが、世間様へ對して申譯が無エからナ。ナア助阿哥、己ア酒は好きだツたが竟に一度飲料をねだツた事も尻拭ひをさせた事もねエが、圖部六に喰エ酔つて人様に迷惑掛けた覺えも無エ。賭博は飯より好物で破落戸の仲間入までしたが欺偽は爪の垢ほども嫌エで曲つた事はケチ釐もしねエから威張返ツて公然らに大白癡の吹聴が出来たが……畜生め、熊のお蔭で己ア生れて初めて肩身が狭くなつた。熊の絲瓜野郎め、親の面へ泥を塗りやアがツて……』

甚平は口惜しさうに切齒して口訥つて了つた。ハ、ホ、ハの助藏老爺もいつの間にか引入れられて眼をばち／＼してゐた。

『助阿哥、己の心持を察して呉れ。己ア最う肝癢に觸つて腹ア搔揉つて死にてエ様な氣がする。愚癡ぢやアねエが民の小は性來が薄のろだから迎も頼みにやアならねエし。牝は何人あツたツて相談相手にはならねエし。女房は眼が悪いから打棄つときやア追付け替婦だ。正可の時片腕にならうツてのは熊の野郎一人で己ア老先の樂みにしてエたのが……畜生奴、飛んでもねエ事をしやがツて、己ア殘念でならねエ。』

『若エ者は、お前、色を拵エるのはベタ一面だせ。當然だアナ。己アお前の殘念がるのが可笑しくてならねエ。』

『色狂ひは關はねエ。氣のきかねエ銘酒屋入りでも辛抱してやらア。だが己の云ふなア遊ぶなら男らしく奇麗にやれツてのよ。なア助阿哥、お

互に頭ア禿げらかしても、お前も五十三次に鳴らした羅生門の助藏なら男の道樂の仕様は知つてるだらう。犢鼻褌を質に置いても色情の出入に人の厄介にならねエのが男だ。高が小女郎一匹に後暗エ事をして世間を狭くする様な小な所爲はして貰ひたくねエツてんだ。己ア熊の野郎の根性が餘り情ねエんで涙は出ねエが腸が沸くり返る様だ。」

「若エからよ。賣女に陥つたから後暗エツてのは寒帷子の阿哥の文句には少と野暮過ぎるせ。なア甚平、お互も若エ内は……」

「解らねエナ。己アお前、色狂ひするから意氣地がねエの情ねエのたア云はねエ。情婦を拵エやうと梅毒を患かうと各自の勝手だから人の厄介にならねエ様にしろツてんだ。お前だから話すか……」と甚平は急に四邊を憚る様に聲を潜めて、「己アお前、昨日まで仕事を休んで熊の野郎を捜してたんだ。」

「うツ、逃げ出したか？」

「む、駈落ちしやアがツた。七日前の晩親方の金子エ盗んで阿魔と一緒に逃出しやアがツた。」

「うツムツム、道行だナ。畜生、妙りきな事をしやがる！」

「笑エ事ツちやアねエ。親方から使介が来た時ア己ア途胸を突いて飛んでくと、其前の目に懸先の金子を五十兩集めて歸つて來ねエツて騒動だ。帳場の金子も三十兩はかし足りねエツて事ツた。己ア最う肝が潰れて其足で心當りを駈ずり廻つて夜遅く歸ると、家ぢやア銘酒屋から尻が來て熊の野郎が阿魔を伴出したツて難かしい懸合で女房はまごごする兒供めはメロメロ泣いてる、家中が轉手古舞だ。」

「はツはツはツ、お前の周章た面が見たかツたナ。」

「調戲ぢやア無エ。其晩は碌すツば寐ねエで女房の愚痴を聞き徹して夜

のしらへ明に茶漬をかッ込んで野郎を捜しに飛出さうとする處へ、銘酒屋のやじをが怒鳴込みやアがッて阿魔を出す敷前借を償すかッて大論判だ。此方は一言も無エから恐入つて詫り閉口すると、奴増長しやがッて餘まり因業な手前勝手を吐しやアがるから己ア肝癩玉が反動つて三つ四つ撲飛ばして溝板へ踢倒して呉れた。有繋が權幕の妻まじいのに辟易して逃出しやアがッたが、直ぐ警察へお訴へだ。己ア丁度二た晩拘留になつて無事に説諭で放免になつたが厄介なのは熊の一條が表沙汰になつたので、己には能く解らねエが、婦女を拐引かしたッてエのと金子を持逃げしたのとが重なつて中々難かしいッて事だ。己だッて可愛い子供金の首に繩アかけたくねエから種々氣を揉んだが、結局示談で願下るには金子と轉ぶより外仕様がねエんで銘酒屋へは向ふ半月に阿魔が出て來なけりやア二十五兩渡すッて約束で内濟にして貰つた。親方は道理が解ッ

てるから極穩便に八十何兩を無利息に月に若干か宛濟し壞しに返すッて相談で先づ塚が明いたが、其日暮しの己達に二十兩の三十兩のッて工面が附くか附かねエか推測にも知れたもんだ。元來此方が悪いンだから下手に出りやア弱味を附込みやアがッて二十五兩の内濟ッてのは餘り阿古義な話だ。第一癩に觸るなア家の娘が揃つて澁皮の剥けてるのを見やアがッて、二十五兩の内濟を出せねエけりやア娘を一人代りに呉れるッて懸合だ。餘り馬鹿にしてけつかる。己の氣性ぢやア奴の面へ紙幣を叩付けて思入れコッ痛い目に會はしてやりてエが、先へ立つのは金子だから情ねエが切齒しても賣女の亭主にギウの音も出ねエや。』
『うッふッふ、寒帷子の阿哥も金子ぢやア意氣地が無エナ。』
『だからよ。己ア残念でならねエんだ、』と甚平は力瘤を入れた腕を顫々慄はして、『熊の絲瓜野郎め、可愛さ餘つて打殺してエほど憎くッてなら

ねエ。親の身代を潰しても心持の腐らねエのを自慢に天道様へ申譯をし
てエた己が、此齡になつてあん畜生の爲に面目玉を踏潰した。助阿哥、
察して呉れ。己ア男だ、愚痴も未練も云はねエが、あん畜生が餘まり情
ねエほど小な根性有つてやがるからいめエましくて腸が沸くり返らア。
何處をハツツしてやがる乎。あんな意氣地の無エ奴ア阿魔に棄てられ
て首でも縊るのが最期だ。』

「先ア勘辨してやれ。錢を握んだいけで梵天國ぢやア根ツから氣が効か
ねエが、情婦を引張出して道行なら少とは踏めらアナ。なア甚公、野暮
も好い加減にして勘辨してやれ。』

「勘辨出来ねエや。帳場の錢を竊ねたり懸先を集めて拐帶する様な奴ア
世間に無エ事もなからうが、此甚平の小忤ぢやア勘辨出来ねエ。己ア見
當り方策、面の皮アひん剝いてどてッ、腹ア振つて此世の引渡して呉れ

る。畜生め、兒供の時分からさんざツばら苦勞をかけやがッて漸と一人
前になりやア直ぐ此態で、親の面へ泥を塗りやアがる、己ア平氣な顔ア
してエるが、あん畜生が餘まり意氣地の無エのが癢に觸つて残念でなら
ねエ。なア助阿哥、お前には己の心持が解らねエか、解るめエナ、お前の
様に全で子供の味を知らねエ奴には解るめエナ——あん畜生、世間に
顔出しの出来ねエ問拔な所爲エしやがッて……』

と甚平は胸が一杯になつて竊と汗を拭く擬をして手拭で眼の縁を撫で
た。で、人知れぬ様に低い嘆息を吐いて俄に煙草をスバ〜燻かし初め
た。助藏老爺も有繫に氣の毒さうに悄れ出したが、復た磊落な聲で、「う
ツふツふ」と笑出して、

「覆すな、覆すな、熊の野郎ばかりが子供ぢやアねエ、お國坊もお米坊も
——民の小だッて今に物にならア。なア甚平……野暮に腹ア立てねエ

伊達な意氣地を恢復して胡粉の化物みていな達摩藝妓の度肝を抜いてや
 りてエと思つてたんだ。なア甚平、娘を賣るツてやア面白くねエが正銘
 の江戸唄女を一枚出して三味線枕の下卑た風儀を矯すと思やア腹ア立た
 ねエ。なア爾うぢやアねエか甚平……縦令んばお前が困らねエでも、
 己ア既から唄女にしてエと思つてたんだ。』
 『氣樂だナア、お前は、』と甚平は苦々しい顔をして燼切つた吸売をボン
 と叩いた。『お前は女房も兒供もねエから己の眞箇の心持は解るめエが、
 己ア娘を喰物にして浮上らうたア思はねエ。背に腹ア代えられねエから
 齒切をして地獄に突落す様な所爲エするんだ。』
 『うツふツふ、まだ愚痴を覆してやがる。喰物にしやうがしめエが二十
 五兩ツて才覺が附くのはお米坊のお庇だ。己なんか見ねエ、白銅一枚欲
 しいツたツて財布を逆さに振つて落ちねエ時は質に置く代物てやア蚤と

虱ぐれぬだ。考へると果敢ねエ浮世で己ア精々厭になつた。白痴な婆さ
 んの繰言ぢやアねエが何卒此世のお暇が取りてエんだ。』
 『人ウ、わらかしやアがる、』と甚平は淋しさうにふふツと笑つて脂だら
 けの雁首に粉莢を捻込みながら、『お前なんか世の中が忌になツちやア
 生きて、エ奴ア一人も無エ道理だ。何故ツてお前、若エ内から頭の壓制
 者がなくて道樂は仕放題に仕てエ三昧して頭の禿げるまで世帯の苦勞も
 女房子の心配も知らねエんだから稼いだ錢で啗エ酔つて好きな太平樂を
 云つてられる。己アお前の身に一日爲りてエんだ……』
 『はッはッはッ』と助藏老爺はハツケに反つて笑出した。『爾うよ、己な
 んかはギヤツと生れた曉から青天井瞻めて箱根八里の兒守唄で育つた男
 だ。本卦返りを濟ました此齡になるまで女房も小供も人間らしい家もね
 エんだから爲様ことなしの太平樂で酒エ飲みてエ時ア稼いで錢が餘りや

ア轉がッてるンだ。榮耀も知らねエ代りに苦勞も知らねエ。苦勞も知らねえ代りに氣樂と思つた事もねエが、どうせ短エ生涯なら泣顔をしたッて初まらねエからナ。」

「己だッてお前、泣き面したかアねエが、子供の可愛いのは人情だからナ。熊の野郎め意氣地のねエ所爲エしやがッて己の顔へ泥を塗つたのが憎くてならねエが世間を狭く心細がッてるだらうと考エると可哀想でならねエ。お米の阿魔だッて碌でなしの兄貴の爲に厭な客勤めをさせて年も行かねエのに苦勞をさせるのが不便でならねエ。なア助阿哥、笑つて呉れる勿、親子の情ッて奴ア妙なもので、己ア泣きやアしねエが殘念しくッて堪らぬエ。己だッて賽ころに陥つて親の身代を滅茶々々にした時分は女房の禪を質に入れて太平樂を陳べたもんだが、子供が殖へて來ると妙に後生願エする氣になつて若エ時の元氣は抜けッちまつた。江戸

ッ兒根性も鈍刀になりやア意氣地が無エから一本筋を真直に曲らねエだけを見榮に汚ねエ所爲ア一切毛嫌エして牛馬の商賣してエるのも、小供の生先を樂みにしてエたんだ。斯う見えても己ア子供の臍を嚙つて左團扇で無駄飯を喰ふ氣は微塵も無エ。腰の骨の折れるまでは梶棒へ握まつて女房と二人で湯なり粥なり啜つて奇麗に娑婆のお暇を取る了簡だが、子供達が眞人間らしく出世するのを見て寒帷子の甚平は落魄れても江戸ッ兒だと威張つて死にてエんだ。處がお前……」と云掛けて甚平は胸一杯に感つたらしく俄に口呷つて、右手拭を鷺握みにした拳に力を入れ二三度瞬きして目的もなく向河岸を睨んだ。

「己ア殘念で堪らねエ」と暫らくして甚平は力の抜けた聲で、「己も江戸ッ兒だ。此んな事ッて泣きやアしねエが考へると熊の根性骨が餘まり小臭くッて腹が立つ。己ア賭博に負けて鍋釜から禪まで質に叩込んで女房

と二人三日飯を食はねエ事もあつたが、人に頭を下げて合力を頼んだ例もねエけりやア人の錢を竊ねる様な間拔な真似は夢にもした事アねエ。熊が色狂ひは若エから忍耐もしてやるが親方の錢を攫獲つて梵天國を極めた汚ねエ心持が餘まり情なさ過ぎて己ア一生の遺憾だ。元來意氣地の無エ奴だツたが是程の馬鹿ぢやあるめエと思つた。高が駄賣婦に腐れやがッて斯んな半間な騒ぎを仕出來しやアがるとは見下げ果てた畜生で己ア喰付いてやりてエはと憎くてならねエ………と思つても矢張心配になるのが親子だ。助阿哥、笑つて呉れるな、己ア斯んな見下げ果てた無氣力の畜生が不便でならねエんだ………」と曇つた聲で消えさうに云つて低い歎息を吐いた。『お米の阿魔だツて萬更の愚圖ぢやアねエが、未だ了簡の定らぬエ奴を泥水商賣に突落すのは餘まり親甲斐が無エかち何度も考直したが、時の用には鼻をも削ぐで矢張親子の因果で仕様が無エ

と諦めてるが、總領の朦朧と穩當かなに引替へてお米はハキ／＼して世事賢エだけにお洒落だから猶更安心が出來ねエや。所詮泥水を飲ませる親が悪いンだから、少と位な浮氣は仕方が無エが萬一惡足でも附いて一生浮上る事の出來ねエ深味へ陥つた日にやア親の身代潰したより先祖へ申譯が無エからナ。爾んな斯んなを考へると仕事も手に附かねエで己ア此五六日妙に愚痴ッばくなツた。助阿哥、笑つて呉れる勿、親馬鹿ツてものは斯うしたもんだ。』助藏阿哥は段々引入られて磊落な笑聲も出ないで頭を抱へて陰氣になつて了つた。『世の中ツてもものは無味らねエナ』と悄れ返つた甚平は凄しい微笑を洩しつゝ、再び言葉を次いだ。『ノホ、ンのお前でせエ厭になるンだからナア。己ア甲羅の生えた貧乏に馴れツただから諸色の高エにも慄ともしね

エが、兒供の不景氣には我が折れて久し振で仕事に出ても氣が乗らね
エ。年は老つても若エ者に負けねエ氣だが、熊が見えなくなつてからゲ
ツソリ力が抜けて唯ツた今傳通院前まで一杯廻したら疲勞しちまつた。
……なア助阿哥、笑つて呉れる勿、己ア兒供が樂みで着實に稼出した
が、斯んな目に會うと初めツから女房も子供の無エお前の方が餘程羨ま
しいや。』

助藏は頭を抱へて俯向いたざりて返事もなかつた。甚平は其容子を凝
視めてゐたが覗込む様に首を突出して、

『なア助阿哥、お前なんかは氣樂なものだ。此苦勞を知らねエで太平樂
を云つてられるから、己アお前の生涯が羨ましくてならねエ。己なんか
お前、乳媪日傘で育つたお坊さんだが財産のある時分から樂は出来なか
つた。己ア懷育ちだから一人前になつてからも親類縁者なんて奴が餘

計な干渉ア焼いて自己が月給呉れどく氣になつて何から何までお指揮だ
から頭ア上がらねエ。己が身代潰したなア一つは餘計なおせつけいがい
めエましくつて自棄を起してパツパと遣つてやつたんだ。親類縁者なん
て奴は資本の掛らねエ叱言ばかり云やがツて率といふ時踏止まつて力に
ならうツて氣は微塵も無エんだ。云は、お前、罪も無エ奴をふん縛つて
置いて繩拔すると咎人呼ばはりする様なもんで、縦令金銀で縛つた繩で
も縛られた心持は快くねエからナ、骨節のある奴ア迎も辛抱が出来ねエ
や。だからお前、己ア身代潰したのを善い心掛だとは思はねエが、ハン
キに鼻唄歌つて白痴が鉋屑を燃やす様に失くしたんぢやアねエ。財産ツ
て奴ア豪勢罪を作るもんで親類縁者が親切さうに干渉ア焼くが元來家が
大切より財産が大切なんだ。己ア之が疔癩に觸つたから思切つて茶々滅
茶苦茶にして呉れると全で己を罪人待遇しやがツて犬畜生だの人非人だ

のと云つてけつかるさうだ。己ア財産を失くしても根性が腐らねエから
 家名に傷はつけねエ。憚りながら己が生きてる上に子供も四人有りやア
 甚平が先祖の血統は絶えねエ道理だ。なア助阿哥、爾うぢやアねエか。
 其奴をお前、人を蠕蟲か蚊蟲の様に見下りやアがッて腹が立つてならね
 エから、切めて熊の野郎を人間らしく育上げて腹慰をしてやらうと、夫
 ればッかりを樂みにしてエたのが――熊めが飛んでもねエ事ウしやがッ
 て百日の説法屁一つだ。斯んな事なら寧そお前の様に裸で生れて裸で暮
 して世間を馬鹿にして太平樂を云つてる方が氣樂だ。ナア助阿哥、己ア
 お前が羨ましくてならねエ。』
 助藏老爺は重さうに首を擧げて、うッふッふと苦がなさうに軽く笑
 つて復た口を閉ぢて他方を向いて了つた。甚平は其の横顔を凝と瞻視め
 て氣の抜けたやうな調子で、

『己ア眞箇にお前が羨ましいんだ。財産のある家い生れるのは懲くし
 たが、兒供のあるのも懲くした。今更お前の身にもならねエが、女
 房と子供始未せエ附きやア頭ア丸めて廻國巡禮に出掛けてエや……
 …』と言掛けて氣の無さうに嘆息して助藏老爺の容子を視守つてゐた
 が、聽てタワイない聲で故とらしく、『はッ、はッ、』と笑つた。
 『はッはッは……面白くもねエ。己ア饒舌り勞びれた。ナア助阿哥、
 死にてエツたッて江戸ッ兒が首を釣つて青鼻をくッ垂らすわけには行か
 ねエや……はッはッはッ』
 『うッふッふ、』と助藏は頤を突出して撫上げながら軽く笑つた。『鬱ぐ勿、
 鬱ぐ勿、腹で泣エて口で太平樂を叩くのが江戸ッ兒だ。人間は塞翁が馬
 ヲツて……なア甚公、講釋師が能く云ふ塞翁が馬だ。嬉しい事も嬉しく
 はねエ、悲しい事も悲しくは無エ。怒る勿、泣く勿、鬱ぐ勿、嘆す勿。』

心配も苦勞も一生は一生だ。二人前の一生も半人前の一生もねエけりやア面白く笑つてノンキに暮すが十千萬兩の富持になるより百倍増して幸福だ。なア甚平、意氣地なく鬱がねエで笑へ、笑へ——幽霊聲で笑はねエで景氣よく笑へ。己が破鐘聲を見習つてウンと力を入れて下腹から笑へ。さア甚公、聾にならねエ様に用心しろ、羅生門の助藏は斯ういふ風に笑ふんだ……」

と助藏老爺は満面に微笑を漲らして蹴込に身を反らし、下腹をヌウツと突出し大手を廣げて、「わツはツはツは」と笑出した。

其容子の可笑しさ、澁皮色の頬を脹らして垢だらけの太い咽喉に筋を出し、色の褪げた補綻だらけの筒袖の釣を外して赤い胸毛の生へた黒い胸を突出し、寐惚けた達摩の様な面相を仰向けて大口を開き、不思議に何處となく備前焼に有りさうな躰で、

甚平は呆氣に奪られて凝視めてゐた。恰度向河岸に四手網を卸した白地の尻捌げは狭手網を擔いだ幼童と一緒に喫驚した顔をして、通合はした橋の上の二三人も肝を潰して、我知らず佇立した。

「ふツふツふ」と助藏老爺はグタリと肩を下して前に屈み、滑稽けた口附で、「甚公、恁麼だ。五十三次に鳴らした羅生門の助藏は何時でも此元氣だ。なア甚公、笑へ、笑へ。所詮錢の儲からねエ己達だ。笑はなけりやア壽命が無エや。米が兩に一升しやうと白馬一合が圓助しやうと儘よ。己ア面白くて笑ひ通すんだ。寒帷子の甚平、鬱ぐ勿、辟易む勿、遲疑する勿。思切つて笑つまぢやア心配も苦勞も厄介も絲瓜も無エ。酔の蒨蕪のと泣いたツて歎したツて死なざ止むめ此世の苦勞だ。なア甚公、陽氣に笑つて笑ひ抜いちまへ。なア甚公、甚公——沈香も燻かず屁も放らずぢやアうまらねエや。己の兒分になつて面白可笑しく笑つちまへ……」

……ふツふツふ……妙な顔して……己の元氣に呆れた顔つきだ……
ふツふツふ……己ア可笑しくツてならねエんだ。お臍が茶を沸かして
下腹が搓れる様だ。はッはッはッはッは……」

「ふツふ……己も笑はうや、」と甚平は淋しさうな微笑を口邊に湛えて、

「お前の云ふ通りだ。己だツて寒帷子の甚平だから泣いたり歎したりは

滅多にしねエが、能くいふ親馬鹿でお前の知らねエ人情だ。だが愚痴咄

も最う云はねエ。餘まり饒舌つて口が酸ッぱくなツた。」

と云つて甚平は續けて二三服烟草をスバスバ燻かして向河岸で今引上

げた四手網に小魚が二三尾潑潑躍るを瞻視めた。シットリした糠雨は何

時か休んで雲間から薄日がちら／＼燦つて來た。

「ヤイ甚公、見さつせ、」と助藏老爺はニタニタ笑ひながら仰むいて、「己
が破鐘聲で笑つた御利益は靦面だ。此通り日輪様が顔ア出した。な……」

……だから笑へツて事よ。あツはッはッはッ……」と左も面白さうに笑つて

伸をしながら意義らしく突立ち、「ドリヤ御輿を扛げやうかい……甚公

横寺まで交際エねエか。お前の因果咄で大分酔が醒めツちまツた。さア

一緒に交際つて圖部六に管を巻いて呉れ。なツ甚公、己の御馳走は神武

以來無エ圖だが、今日こそア大盤振舞だ。神后皇后様が懷中にチャンと

鎮座ましますからナ……」

二人は一緒に空車を曳出した。五六間行くと助藏老爺の鈍みたる「面
白エや、なア甚公」ツて聲が聞えて車の音が段々遠く横道に消えて了つ
た。

(明治三十一年九月)

湯女

我輩の隠遁かい、生憎と君等が嬉しがる不平話が全然無いんだよ。云
 はい先ア墓が日本橋や銀座邊に在ないやうなもんでナ、元來田舎向き
 に出來上つた身躰なんだネ。何だど、矢張流行の失戀だらうツと。うツ
 ふツふツふ……………如斯な肥胖した芋蟲の甲良生えた様な薄汚ない鬚面
 でも矢張蒼ん藏の才子並に失戀する事があるかエ？ 有ツたら打てつけ
 三題噺に擔出される材料だらうよ。何だど……………我輩の許へ女の寫眞封入
 の手紙が來たのを見た……………だから少と失戀臭いッて云ふのかい。君等も
 餘程な斜視眼だと見える。では一つ、柄にない艶ッぱい處を語つて聞か
 せやうかな。

戦争時分だツた、海洋島の號外が飛んで歩く時分だツた。鼠火花然た

敵愾心が殆んど三百度も沸騰したらうナ。折角涼風の催ツた残暑が遠
 にさへ返つて膩汗がダク／＼出るんで、我輩殊の外辟易して到頭都をわ
 と故郷へ落延びたが子、其時だ、隣村の秦川樓へ評判の娘見物旁々湯治
 に出掛けたのは。

何がさて辻々の立ちん坊まで軍夫を志願して軍國の大事に參するんだ
 から、紳士緑の愛國者は恤兵部にお冥加を納めて兵站の御用を勤めやう
 ツて大奮發で、我輩如き國難を外に見て綽々として天地に逍遙する大哲
 人は無いネ。飛んだ目に遇つたは諸方の温泉場で、隣村なんかも寂寥と
 して近所のお百姓ばかりだ。だから我輩が降臨したのは恰も掃溜に鶴一些
 と肥り過ぎてるから信天翁だ。左に右に累々たる擔板漢が澁紙面を晒し
 た中へ風流瀟洒の貴公子御來降だから大欵てに欵てたよ。溪河に臨んで
 向ふ山を見晴らす上等座敷に通されて遽にお大盡様待遇でナ、罐詰づく

めの山海の大饗膳で杯盤に侍するものは名代の評判娘——と竊に待構へてると、ボテ〜肥つた綿細工然たる姉さんだから、我輩も悉く失望した。秦川樓の評判娘はナ、我輩も猶だ知らなかつたが、豊下れのボツトリした愛嬌のある二重眼縁の婀娜者だと聞いてゐた。尤も隣村を悪くいふやうだが、温泉場といふ名ばツかりで、實は肥荷臭い兄アが野らの骨休めに浴びに来るが相應してゐる場所だからナ、従つて都人士には向かない深山の奥のすつとの奥で、何方を見ても山猿が木通を啗つたツて御面相のお揃だから、人間並の面框で些と濫皮が剥けてゐりやア忽ち傾城傾國の美人と拜まれるンだ。早い咄が、君等が村の寄合で羽根を伸して大政治家、大教育家、大學者と仰がれるやうなもんだと。うツム何だど、早い咄が我輩が上等客と成濟ましたやうなもんだと。うツムツムツムツム……其通りだよ。白地の浴衣に天竺木綿の帯を纏付けた誠

にお粗末な装で、紳士が常用の擬ひバナマの帽子や金着の時計は御持參なかつたが、氏素性は争はれんもんでナ、何處に威嚴が有ると見えて、主人め我輩の風采の氣高いのに烟に捲かれてヒョコ〜叩頭をした。同宿のお百連中は一同眼を聳だて、仰瞻るといふ素ばらしい形勢で、我輩の意氣恰も政黨内閣の新大臣宜しくだつたナ。唯だ些か不平だつたは、思ふ目的が見えんのでナ、且つ其上に見渡した處麥飯面のお揃ひで臂を執て共に當世を談じやうツて者が無いンでナ我輩も痛く無聊に苦んだよ、肝腎商賣道具の繪具篋やカンバスは悉く置いて來たし、他に之と云つて娛樂のない藝なし猿だから、月夜井オリンを擔いで溪河の水の音に調を合せる毛唐の風流や、爪弾の寂びた音締に戀のあはれを忍ぶ洒落本流の粹事は行つて見たくても出來ないネ。なんばお百連中と輕蔑つても月落ち烏啼いてぢやア些と面の皮に瑕瑾が生

るから高い聲で朗吟は恐れるよ。さればツて碁將碁は嫌ひ、讀書は蟲が好かず、酒は飲めず、喰べるものはなし、我輩如斯な閉口した事は無かつた子、一日かそこらで忽ち退屈して了つた。

此邊の景色は勝れて面白いナ。樹木の鬱葱した山が重なり合つて、近いのは濃いテレベルト色で、遠い處はローアンバー色をして、折々紫がかつた雲烟が其中を往來してゐる。取別け雨上りの時は水蒸氣が一面に立罩めて光線の具合でアンチモニイが、ツたコベルト色に見えるのが處々禿げた巖角のローションナ色と反映する景色は得も云はれない子。處が我輩は繪工のくせに風流心が乏しいンでナ、朝から晩まで景色に看惚れてばかりゐられないよ。イヤ最う悉く退屈して了つて、欠伸をするのさへ飽きて了つた。

五日目の午後だつた、仰向に顛倒反つて面白くもない太平記（宿で貸

して呉れたのよ）を據なしに讀んでゐると、襖がすうツと開いて、途端に東京訛りの柔しい聲で、

「御退屈さまよ……」

其聲が意外だつたので、臥そべつたまゝ、顧盼くと、看馴れぬ手弱女だから忽ちむくと跳起きた子。今でも覚えてゐる、ヤケに引詰めた櫛巻に黒ずんだ手織縞の衣物で、帯だけは齡相應に華美なメレンス友禪と紫縹子の晝夜を締めてゐたが、田舎の野暮づくめの中ちやア衣装こそお粗末だが不思議に垢抜けてゐるから我輩も大に驚いたよ。

優然と沈着き拂つて、一疊下つて膝を突いたなりに菓子器と茶道具を靜に運込んだ時は、實際見惚れた子、實際だよ、色白で愛嬌があつて爛雅で品格があつて、第一厭味が無い、怯懦者が暗黒を歩くやうに妙ウおツかなびツくに風采を粧る——能く田舎の東京風な割烹店や旅店にある

— 那樣な變則の女禮式の温習をするのとは違つて、べ々くもしないしギグシヤクもしないから頗る感心した子、果然之が例の評判娘だと直ぐ感附いた子。

『御退屈でムいませう、山の奥でお寂しうムいますから……』

『至極閑靜で好いよ……姉さんは、何かエ、此家の娘さんかエ?』

『オホ、』と軽く笑つた、「二三日親類共へ遊びに参りましたので……」

「今日からは、妾が御用を伺ひます。」

『有がたいナ、實は君の顔を拜みに遙々東京から來た處が、一向後姿も

見せないので落膽したンだよ。』

『甘い事を仰しやいます。山や溪ばツかりで嘸お寂うムいませう。』

『處が君の様な美人が出現すると、遽に山奥が陽氣になるから子。其代グツと尻を落付けて、歸れツたツて楨杆でも動かんよ。』

『オホ、』、ツ、お歸り遊ばすツても楨杆でも動かしませんよ。』

『おやツ此奴め、當身を呉れたナ。宜しく直ぐ歸るぞ。』

『えエ〜お歸り遊ばせ、』と嫣然して、「折角美味いものを調べて來まし

たのに、(と云つて菓子器の蓋を取つた。)— お嫌ひ、山葵餅は。お忌な

らお歸り遊ばせ。餅米の上等なと搗の細かいのが土地の大自然でムい

ます。』

『此奴め、妙ウ味をやるナ。山葵餅よりやア此羽二重餅だツ。』

と云つて猿臂を伸ばして引寄せやうとしたを娘は敏捷こく摺抜けた。

『オホ、』、ツ御免遊ばせ、羽二重餅は滑りますから子。』

『此奴、はぐらかすナ、』と云ひつゝ、意地汚なしに山葵餅を撮んだ。『む、

甘エや、秦川樓の名物は山葵餅と評判の娘か子。』

『はい、色男は貴客でムいます。』

「うツふツふ、」と口一杯に頬張つた山葵餅を漸と嚙下んで、「處で物は相談だが、此色男と評判娘と戀愛になれまいか子？」
「なれますとも、貴客の様な容子の好いお方に岡惚れしない女は罰が中りますワ。」

「そこで増長ツて引張るとズドンか子。好い耻搔だ。」

「好い繪工だと仰しやい……。」

「おヤツ、此畜生、此畜生……何故己が繪工だ……。」——之に

は我輩も大に面喰つたよ。

「オホ、真摯臭つて——中りましたらう、秦川樓のおかよは内職

に人相を鑑ますから子。」

「ふウむ、」と鼻頭で首肯しながら、喰つたワ喰つたワ、残りの山葵餅を一度にペロリとしてやツた。「能く解ツたナ、己に繪工染みた處でもあ

るから。」

「だツて貴客、宿帳を拜見しましたもの。隣村の吉澄さんなら東京で立

派な繪工だと、誰でも貴客のお名前だけは知つてますよ。貴客でせう、

女の裸躰を畫いて新聞屋に悪く云はれたのは。」

「此奴め、何でも知つてやがる。」

「ですから必と別嬪さんの裸躰を見においでなすつたのだと帳場で衆人

が噂してゐましたよ。生憎と別嬪のお客様がなくてお氣の毒さま。」

「馬鹿にしてやがる……否エ最う秦川樓のおかよさん一人で澤山でムい

ます。」

「どうも有りがたう……妾で宜しくば、えええお易い御用で、いつ何

時でも。其代りお禮が些とお高ふムいますよ。」

「其代りお景物にお枕が附きませう。」

「おうやおやッ、日本一の繪工は其んな吝な事を仰せやると活券が下り
 ます。何でも御保養に入らしつたなら色氣抜にお金子を、バツバと遣つて
 妾どもに樂をさせて下すつた上にお歸りの置土産に額の一枚位残してい
 らつしやるお心掛がなくては——第一貴客、大家の嬢様方に見染められ
 やうつてには。女の裸體なんか書くと忌がられますよ。」
 『はら〜、御意見恐入りました。愚拙なんぞは逆も女の兒に好かれな
 いと諦めましたのでナ、其處は凡夫の淺ましさに裸畫で辛抱致したんで
 ……はら、はら〜誠に心根に徹しました。之からは必と謹しみまする
 で……』
 『以來必とお謹みなさい、』と娘は故と畏まつて膝に手を置き可愛らしい
 眼で睨まへた。『さア前非後悔遊ばしたなら大負けに勘辨して上ませう。
 さッ、お茶を一つ……』

『はい〜難有い仕合で……はい、はい〜早速の御勘辨で吉澄青靨望
 外の大幸でござる。はい、はい〜』と無茶苦茶に首を掉立て、莞爾々
 々しながら茶を酌んで出す娘の手をグツと握つて引寄せると、娘は綿の
 様にグタリとなつて膝に凭れかゝつた。占めたと矢庭に肩へ手を掛けつ
 ゝ、『ちよいと、御褒美を……』と鬚だらけな頬べたを押付けやうとする
 と、娘は忽ちすツと摺抜けて三尺ばかり離れてオホ、ツと轉がる様に
 笑出した。
 『おッ、復た振つたナ。』
 『餘り貴客がお美しくしんで、ツイ耻かしくなつたの、』と云つて突と起
 ち、色ッばい横眼でジロツと見て甘ツたるい調子で、『復た來ますよ。』
 『此畜生、勝手にしやがれ。』
 『えエ勝手に來てよ、』と顧眄つて滴たる様な愛嬌を口邊に見せて、いッ

と笑ひながら襖を閉切つた。同時に仇めいた低い聲で、「色氣ないとして苦にせまいもの……」
中々の喰はせ者で、温和しいどころかした、かな摺辛しだ。尤も噂は豫てから聞いてゐたが――
何でも繼母と間が悪くツて、十四の時喧嘩して東京へ出奔し、二三軒の屋敷奉公を渡つた末が騙されて到頭茶屋女まで墮落したのが、十八の時繼母が死んだので漸と歸つて來たのださうだ。なにしろ鬼も十八の妙齡を水道の水で磨上げたんだから田舎の評判は大したもんで、砂利の下から金剛石が光り出した様な騒ぎをしたさうだ。秦川樓が遽に流行り出して去年は奥座敷と離室を新築したほどに繁昌したのは此娘のお庇ださうで、東京の湯治好きの仲間にも其名が傳播つて一度は或る雑誌の口繪に土地の景色と一緒に娘の寫眞が載つたといふこつた。

左様さ、思切つて美人と褒めても宜からうよ。勿論、東京風に磨込んだ婀娜ッばい處が大に艶色を引立たせるのだが屋根へ石を轉がして置く家には全く勿躰ない女だ。眞實だよ、眞實に勿躰ない。肥荷の底を叩いておいと惣太を歌ふ連中には那樣なのは却て向かないもんだ。矢張玉蜀黍の様な赤い髪の腐つた李桃のやうな頬べたのでくくした身躰で腰の太さが行水盥ほどもあつてどツたりばツたり怠義さうに歩く村娘達が豪義に無事で好いのサ。秦川樓のおかよは田舎に些と出來過ぎたからナ、繼母に責られて早くから親の手許を難れて墮落したのも畢竟美人薄命の譬に洩れない因縁だらうよ。何だど――話が御法談じみて來たど。はッはッはッ、夫れに違ひないテ。田舎娘は田舎娘らしく醜くないと得て墮落したがるもんだ。苧羅村の西施、鹽原の里の高尾、古へより其例指を折るに違が無い、美人墮落則薄命でナ、元來我輩は美人が大嫌

ひなんだ。寧ろ醜婦を擇んだ諸葛亮先生、近くは森田節齋なかは話が出
 来るナ。何だと、身の程を知つてると。馬鹿を云ひなさい、君等の様な
 輕羅細腰黨が天下を腐らせるんだ。

だがネ、美人は美人だ。我輩實は輕蔑しておつたんで一見すると又不
 相當に感服して了つたよ。惜むらくは浮世の風に當てずに秘と箱入にし
 て藏つて置きたかつたネ。女は無垢な處が價値だ。レベルトやバンド
 アンバーのやうに空氣に觸れると直ぐ飛んだり變色したりするから困る
 同じくはおかよも最う少と初心で置きたかつた。那樣茶屋女根性が染み
 込んで了つては最う救ひがたしだ。我輩痛く残念に思つた。

或晩だつた、月の大變好かつた晩にスケッチブックを持つて寫生に出
 掛けたのよ。ビチューム専門の先生達には少と明る過ぎる位に澄渡つた
 月夜で、木の間隠れに流れる溪河を照らして銀色に光る具合は、若し裸

躰の美人を四五人點綴したら、それ、ザロンに在つた誰だつて……む、
 ウエンケルの繪を其まゝ、活現した様なもんだつた。

段々溪畔を縫つて狸の湯とか貉の湯とかいふ風呂場から外れて四五間
 下りると赤松の大木が流に臨んで下枝が水に這ふ様に突出してゐる。其
 樹蔭で人聲が聞えるんで、ハテナと耳を傾けて秘と月明に透して見ると
 中形の浴衣に見覚えのある帯を引掛けにした後姿は正しく秦川樓のおか
 よだ。相手はズンガリした男で、縞柄は夜目には解らないが黒ずんだ衣
 物にキチンと帯を貝の口に胸高に結んだ容子が土地の者らしいので、少
 と罪だが立聞きしてやつたのよ。

『そりやアお前嫉妬だよ。大抵あたしの心持だつて合點めさうなもんだ
 子の小供の時分からお互に氣心知合つて兄妹同様に和睦くして、お父さ
 んだつて將來は一緒にする氣でゐるのに違ひないのは妾も知つてるから

子。お前の疑ふ様な爾んな筈が有りやうわけは無いぢやないか。』
 『お前は爾ういふけれど、己ア安心出来ねエだよ。お前の父様は己がの
 孩兒の時分から可愛がつて呉れて正月の饗應にも温泉稻荷の祝祭にも一
 番駈に己を呼んで誰よりも土産物を餘計持たして歸したもんだ。だから
 お前とは兄妹同様に一本の王蜀黍を半分宛喰べた間だ。己ア今でも覺エ
 てる、お前と己と大平の松の根ッこに轉がッてたを辰松ン許の婆さまに
 發見けられて、太郎作とおか坊と夫婦だンベエ最う情事ベエしてエるだ
 と太エ聲で囃されて己とお前と眞赤になつて逃出したナア今でも覺エて
 る……』

『何だよ、爾んな無味らない事を。人が聞くと笑はア子。』

『誰が聞いてエる、お月さま聞いているか。お月様に聞かしてやるベエ。何處のお月様も忘れたから話して聞かせるだ。……あの時は己ア十二

でお前は八ッだった。可笑アしな烟草盆に結つて赤エ布を袴にくッ着
 けた衣物で正銘の田舎ッ子だったが、あの時分の方が考へると可愛らし
 かった。東京さア行つて歸つた時は、滅法美麗になつて、己アふッ魂消
 るほど見違えたがお女郎の様なおしやらくは嫌だから己ア餘り面白く思
 はなかつた。だけと昔しからの幼馴染で結髪同然の仲だから、東京風のお
 洒落が氣に入らねエでも往日の田舎ッ子の面影が戀しいから、お前の好
 きな自在餅を調エてお前に會ひに行つたが、お前は碌な挨拶もしねエで
 全で己がの顔を忘れた様な素振だ。己ア正直一方で氣働きの無エ無氣力
 漢で、村の若エ衆から佛太郎作と有がたさうな渾名を呼ばれて馬鹿にさ
 れてるだが、なんぼでも腹の立たねエ事ア無エ。あんだッてお前が家
 を駈出す時相談ベエしたナア己ぢやアねエか。十五兩の路費をお前に呉
 れて——己ア恩に掛けるぢやねエよ——山の下り口まで三里送つて八右

衛門が腕車を本街道の宿まで頼んでやツたのはよもや忘れやしめエ。あの時別れ際に己がの膝へシガミ付いて泣エた事を考出したら那樣率氣なくは出来ねエ筈だにと己ア思つてるナ。なアおかつ子、己がの理窟は違つてるか？」

「だから最う既に詫まつたぢやアないか。お前眞箇に拗いよ、一つ事を五度も六度も、最うお止しなねエ。」

「五度だつて六度だつて、五十度だつて六十度だつて關はねエ。お前的心持が己がには合點めねエからよ。お前が歸つた時、己がの許エ阪の八右衛門か挨拶に來た——お女房もお戻りやツて先アお目出てエ——ツて挨拶に來た。お前が己がの膝へシガミ付いて一生恩を忘れねエツて泣エたのは八右衛門の婢が誰よりも證人だ。」

「嘘だとは云はないや子。眞箇だとも、眞箇だとも、眞箇にお前を愛し

いと思つてりやこそ内々は夫婦になつてるぢやないか。唯お父さんが猶だ安心しないから爰の處お互に少と辛抱して忙がしい時は逢ひたいのを耐へないぢやア……子エ爾うぢやアないか。爰でお前お父さんの機嫌を損じたら折角の苦勞が悉皆水の泡だア子。だから妾は片時もお前の顔を見たいのを凝と耐へてゐるのを、お前は少とも遠慮なしに公然と無暗に呼出すから眞箇に困つて了うよ。妾だつてお父さんや奉公人の前もあるから子、爾うくは出られやしないワ。それをお前は太變疑つて妾が變心した様にやツかひのは餘り同情が無さ過ぎるよ。少とは妾の身にもなつても御覽。お前の様に一々往日を繰返してヤイヤ云はれちやア立切れやしないワ。子エ太郎さん、お前猶だ俯に落ちないかい。人目を忍ぶ間だから子、思ふまゝにならないのは當然だよ。苦しい思をして人目を關所を超えて秘密と逢引するのが色戀の面白い處で、妾ア寧そいつまで

も夫婦にならないで忍ぶ戀路に敢果ない逢瀬を樂む方が遙に人情が見えて却て面白いと思ふワ。』

『己ア忌なこつた。お前とは全で分別が違う。親に秘密で世間を狭く盜賊でもする様に逢引するのは面白くねエ。夫れよりア一日でも早く一緒になつて孩兒でも出來たら情愛が深くなるべエと思つてナ。』

『忌だよ、孩兒なんか。妾アお前、尋常大抵ぢやアないよ、苦勞してエるのは。猶だお前、二十歳を越さないのに最う孩兒の苦勞なんかは眞平御免だア子。』

『あんだつて、孩兒の苦勞したくねエだ。お前、猶だジャラ〜とお洒落爲足りねエだナ。……やい、おかつ子、お前情ねエ根性に腐つたナア。東京さア駈出す時は、家は繼の母様だから歸つたら直ぐ世帯を持ちてエの何だのとアお前忘れやしめエナ。何故己がと一所になるのが忌だ

ツていふだ。父様が猶だ承知しねエツて父様を托辭に持出すが、お前の父様は己を息子の様に可愛がつて呉れたからナア、己が貰ふべエツてエに故障いふ理由は無エだよ。矢張お前がベロ〜した着物に赤エ脚布を締めて漆腐細工の人形みてエに塗立ててジャラクラしてゐてエから己がと一緒になるのは忌だつていふだナ。』

おかよは無言で下枝の松葉を撮んで嚙んでは吐き出してゐた。男は氣の抜けた様な嘆息を吐いて女の横顔を恍然と凝視めてゐた。

『山科象太郎ツて代言が復た二三日内に來るツてこんだネ。』

女は愕ツとしたらしかつたが、平氣な顔をして、『あア、入らつしやるツてこつたよ。』

『己アあの野郎は嫌エだ。色が生白けて、ニチャ〜、變な身振をしやアがつて、横柄で慳貪で那樣な生意氣な和郎は滅多に無エだ。』

「爾んな事を云つて、お前、あの方は進歩黨で有名の代議士さんだよ。」
 「あんだか知んねエが生意氣な和郎だ。去年も鳥を打つツて鐵砲擔いで己がの桑園を蹂躙しやアがツて挨拶もしねエだ。農夫の利益を思はねエ代議士は國家の利益にもなんねエから、春戸の牛部屋に鐵砲打放した時は最う勘忍袋が切れて打殺してやるべエと思つたが、東京さア來た湯治の客だから先ア勘辨してやつた。」
 「先ア恐い人だ子。」と女は喫驚した容子で、「山科さんを打殺すなんて、飛んでもない人だ。」

「那樣な禮義を知らねエ、百性を昆蟲見てエに思つてる蕃茄野郎は打殺した方が人助けだ。代議士だの何だのツて農夫のお利益どかし吐かして奸悪アしやがる奴は己ア人間の蛆蟲だと思つてるだ。」
 「だツてお前、山科さんは大變好いお方で妾なんか東京にゐる時么麼な

にお世話になつたか知れやしない。」

「お前は世話になつた恩人だから大切にすることが好エ。己アあの野郎の面ア見ると胸がムシヤクシヤして頭の腦天がピン／＼してくるだ。生白けた海鼠の化物みてエな面アして鼠の尻尾にも足りねエ鬚を生してやがる。那樣な奴がお前は好きなんだから思入れ大切にして枕の番までしてやるが好エだ」と云つて力の抜けた氣味の悪い聲で、「へッへッへッ！」
 「變に云ふ子、嫉妬も好い加減におしよ。」
 「己ア嫉妬ぢやアねエ。全くの話だから云ふだ。爾んだらお前は何だツて、あの和郎が來ると座敷に入浸つてべタ／＼凝着いて晩くまで三絛をガチャ／＼奏つてるだ。」

「そりやアお前仕方が無いよ。恚ういふお客商賣だからネ、今では野暮な女房氣も浮氣な酒に紛らしてツて唄にある通り誰が氣樂に忌な機嫌

きづまを取るもんかネ……」
「無効な事を吐くな。客の機嫌取るのが怠だッてなら何故己がと祝言の
う爲ねエだよ。己だッて眼が黒エから睨んだ壺は間違エねエや。お前が
山科の和郎と私通ベエして口を拭いてるの。ア己は既に睨んで知つてる
だ。」

「調戲お云いでないよ。山科さんは立派な奥さんもお子さんもある御身
分のある方だよ。爾んな事を言觸らされちやア妾が濟まないから止しと
くれ。」

「復た欺瞞かすべエたッて、……へッへッへッ、爾うは行かねエや。己
ア去年、山科の和郎が来た時は氣が揉めてなんねエから毎晩お前の家の
裏庭の植込に忍んでお前が山科の海鼠野郎とジャラ〜調戲けちらすの
を見て、己ア業が沸へて腕が鳴つて堪んなかつたが、己だッて表向き良

人だど名乗れたわけでもねエし、無分別ノウウやらかして土地の景氣に觸
ッてはお前の父様を初め村の衆にも濟まねエと胸エ撫つて辛抱しただ。

お前だッても往日世話になつた義理合で 據なく自由になつたベエが心
底から那樣な東瓜野郎を好いてるわけアねエから何でも是りやア早く祝
言ノウウして天下晴れて己が鼻様にして了うベエと去年の秋からお前に相
談打掛けたに酔の菫蕪のと一寸退ればかり吐きやアがッて最う一年にな
るぞ。それも好エ、齡の若エものを己がの家へ呼んで世帯の苦勞をさせ
るでもねエから急ぎはしねエが、今年も復た山科の和郎を呼びやアがる
ッてのは、己アお前の心持が解んねエ。」

「無理だよ、爾んな事を云つたッて無理だよ。毎年御願負のお客様を呼
ぶのは何處の温泉場でも當然だア子。第一、山科の旦那には妾が東京で
大變御恩になつたんだもの、御入來になれば妾が先へ立つてお世話をす

るのは不思議ぢやアないや子。山科さんの自由になつたなんて、お前餘程滑稽けてゐるよ。勿論御酒のお對手をして音曲がお好きだから一度や二度三味線を弾かないぢやアないが、何時妾が山科さんの自由になつたい、お前その現場を御覧かい。植込に隠れてゐたなら定めし現場を見届けて云ふんだらう子。さア、何時妾が自由になつたい。人ウ、餘り過言ぎるよ。間男呼ばゝりは何程でも御免を蒙むりたい子。』

『何時自由になつたつて、馬鹿ア云はねエもんだ、現場を見ねエからつて平日の舉動で直ぐと解るだ。天井の鼠ぢやアねエからナ、夜る夜中何じよ爲てエるか見てエる事ア出来ねエだけんど、宵の間から椽の障子を明放して胸糞の妬ける小淫らしい眞似をしてエるだもの、燈火を消してから何じよするか、聾だつて盲だつて直ぐと嗅付けるだアナ……』

『お止しよ、人聞の悪い……』と女は話の腰を折つて他方を向いて黙つて了つた。

『己も止めやう。過去つた事を愚圖々々いふでもねエから……』と男は暫らく何事か考へてゐたが、『……お前、先ア奈何して呉れるだ。』

『何をサ？』

『父様に話して嫁入の相談ノウおツ初めやうか？』

『馬鹿な事をお云ひでない。今商賣の忙がしい中で爾んな氣樂な相談が出来るもんか子。』

『祝言は秋に延びたつて關はねエが、己ア父様の許諾を貰つて、切めて結納だけでも取換して置くべエと思つてるだ。』

『秋になつてから相談したつて好いちやアないか。』

『爾うでねエ。山科の和郎が二三日中に來るつてからにやア愈々急がねエぢやアなんねエ。』

『山科さんが来たッて好いちやアないか。』
『好くねエだよ、お前の胸に聞いて見ねエ。好くねエ理由がチャンと有るだ。』

『可笑しな人だよ。爾んなら勝手におしナ、』と云つて女は昵と考込んだが、何を憶出したか忽ち淫めいた甘ったれた調子で、『ちやア太郎さん、後生だから……』と云ひつゝ、男の肩へ手を掛けヒタと顔を押し付ける様にして何か耳語いた。男は忽ちタワ、イなく頻りに點頭いて、聴て二人は睦まじさうに手を引かれて互にべつたりと凝着き合つてもつれながら草叢を蹂しだいて行つた。

其あとを二間ばかり離れて秘と跟けて行つた。聴て藤蔓の絡んだ槐樹の蔭に隠れて了つたので、此方も茂みに忍んで首だけ伸ばして様子を伺つてると、二人は躊躇んでべつたりと抱合つて密々咄してゐた。些ども

談話は聞えないが、月明でも知れる淫かしい容子で、大抵先ア想像が出来る。

我輩は秘と拔足して溪河へ下りて、曲りくねつた雑木が蔦桂と一緒に左右の岸から茂り合つて、其下を水が眞黒に流れて恰度大きな巖礁に碎けて落ちる處を月に照らされてアンタープブルーに銀色を帯びて光る面白いスケッチを一枚圖取りした。それから水の中を徒渉りして二三間行くと茂みの中から燈火が射したので、只見ると、眞向ふが狸の湯とか貉の湯とかの風呂場で、玉を削つた様な乳色の肌膚を憐れに犖然したランプに照らされつゝ、半分湯に漬つた美人が痩せこけた銅色の男に絶り付いてゐた。ザロンの畫譜にも餘り見掛けない圖で、有繋の我輩も少と氣の毒らしい氣がしないでもなかつたよ。

殊に二人の談話で意外だつたは代議士の山科象太郎で、我輩も萬更知

らない顔でもないのだ。亞米利加仕込のドクトルで、辨護士が職業で三
 四年前から政治社會に首を突込んだ當世風の何でも屋である。狡猾で、
 横着で、高慢で、生意氣でイヤ最う鼻もちのならぬ男だ。五ツ紋の白紐
 を看板にして己ばかりが政事家だといふ高慢な顔をしてやがる。議會第
 一の氣取屋ツて評は衆論の歸する所で我輩一箇の私見でないのだ。
 烏森や赤坂では随分新聞で浮名を流した中々の好色者だが、百里離れ
 た此山奥で其名を聞かうとは餘り思掛けんから子、我輩も實は驚いた。
 すると、果して三日目の夕方、此代議士山科ドクトルがお着になつて、
 秦川樓の離室へ先づ御鎮座しました。果して又おかよ美人が我輩の部
 屋に來なくなつて了つた。また果して之まで優遇等閑でなかつた我輩
 が恰も冬枯の案山子の様に振向きもされなくなつて了つた。恐ろしいも
 んだよ。人間萬事腐つても政事家だ子。美術家なんぞに決してなるべか

らずだ。之は眞摯に諸君に忠告するよ。

二三日經つと山科代議士が名刺を通じて我輩を招待した。で、少と小
 癢に觸つたが退屈避けの時間潰しに出掛けて見ると驚いたよ。正面に山
 科象太郎君が西洋手拭の浴衣に大巾縮緬を纏付け縮緬の座蒲團に相恰を
 も壞して座つてる躰は正に太郎作の名評の海鼠の化物が頗る適つてる
 子。其傍におかよ美人が絹せるの單衣に風通と鹽瀬の晝夜帯を丸く結
 んで頭は束髪に品よく薄化粧さへしてお部屋様然と澄まし込んでゐたか
 ら、我輩も化け方の凄まじいのに呆れ返つて了つた。

我輩も大に面白くないから早々部屋へ戻つて翌る朝未明に出立した
 が、夫限り忘れて了つて太郎作もおかよも山科も屢氣にも出なかつたよ。
 處が、ツイ一ト月前——避暑旁々當分田舎に暮す氣で出立しやうとする
 前日、山科象太郎め突然やつて來て自分ら夫婦の肖像を畫いて呉れとい

ふ依頼だ。宜しいツと請合つて有合の寫真がなくば、新たに撮して我輩の許へ届けて呉れと云つて歸郷して了つて、漸と二三日前山科夫婦の寫真が届いたのを見ると君——人ウ、馬鹿にしてゐる。山科の妻ツてのは秦川樓のおかよぢやないか。おかよが、君、今度新任の敕任局長の令夫人なんだよ。我輩々ツと疝癩に觸つたから寫真を送還して謝絶して了つたが、美術家なんかになるべからず、湯女上りの令夫人の肖像まで御用を仰付かるンだから子。諸君、日本に生れて決して美術家となるべからず、是れ丈は堅く諸君に勸告する子。——處で我輩が隠遁したのは此理由に基くのか——ツて、爾うぢやないよ、別に理由も絲瓜も無い、唯だ山水に放浪したいが持病で、先ア崎人傳の材料物だらうよ。はッ、はッ、アッは、、、。

(明治卅一年七月)

あたらよ

かしこくも二年續きての御大喪に、加へて年々歳々押迫つた金融閉塞と諸色高直、中から下は青息を吹いてチャンから舶來のお米を頂戴し、役所は人減らし、議會は解散する、金利は高くなる、株券は下落する、何處も彼處も思案投首、途方に暮れの魂膽を鬱ぎの虫やシヨウダ蛙の黒焼では逆も勘忍なりがたきを、さりとは有がたさ大御代の豊けき收穫に深川在米三十餘萬石、相場は八圓臺に落ちると聞いて俄に元氣附き、世直し大明神の地租増徴やら鐵道國有やらに人氣立ちて、酉の市は雨降り年の市は賣聲のみ高く押迫りては俄に室内旅行者の例年より夥だしきに似氣なく、春は東天紅となく家鶏の勇ましく啼く晨より處世の經綸を蓄ふる大頭腦に高き絹帽を戴ける未來の矢大臣殿左大臣殿、無智文盲を賊

冠大帽に包める藩閥功臣、高慢を金縁眼鏡に光らして満身の忌身をフロ
ツクコートに飾る人才先生、銅臭は道行く人の鼻を撲つて辟易せしむる
脂肪肥りの黒紋附株紳士、各々麟輓たる車聲を大路に轟かして、四百餘
洲を唱へる兒供が颯々る紙鳶は高空に凱歌を迂鳴り、見渡せば四方か海
なる日本國と月琴尺八で賑かに奏づるホウカイ節は年の初めの目出たさ
を戸毎に運んで二三年以來の新年らしき新年に、軒の日の丸は一と際鮮
かに門松の色は翠深く屠蘇の香は巷に充ちて軒端を洩る、笑聲は八千代
の春を祝ぎける。

裏屋は裏屋だけの綺羅を盡して赤絲入の二子縞の晴衣に唐緬縮友禪の
帯を結んだ小まちやくれた娘が顔中墨だらけの瓦斯絲織を着た粹せな兄
いと遣羽子に跳廻る太陽氣な傍を、此邊で顔の賣れたお伽坊主の妙鐵が
例の禿チヨロけの小皺の寄つた前世紀の遺物らしき黒の山高帽を阿彌陀

に被つて、春だけに小清淨した手織縞布子にキャラコの石持羽織を引掛
け袈裟法衣を入れた金巾の小包を小脇に抱へて、心配さうな嬉しさうな
顔をして跛曳くやうにヒョコツカと急ぎ足で前齒の缺けた厚朴齒の下駄
を引摺つて來た。印袷天の上に唐棧の羽織を引掛けた男は躍上つてお洒
落羽根を撞返しながら、

「妙鐵さん、お目出たう！」

と聲を掛けると、愴惶て、危なさうに蹲くしつ、前世紀の山高帽を脱
取つて、

「皆さん、お目出たうございやす。」

「年始めエリか子？」

「いエ〜、なアにナ、お逮夜の御供養始めで……へッへッへッ。』
「なんだ、お逮夜だ——鶴龜々々ッ、』とぶる〜、ッと首を掉つて羽子板

を振上げながら故どらしく聲ばかり張上げて、「此糞坊主奴！」
 妙鐵坊主は吃驚して頭を押へつゝ、家鴨が逃出すやうに周章くつて駆出した。同時に背後で聲高く、「あッはッはッ——おッほッほッ。」
 妙鐵坊主はヒョコ、ヒョコ、尻を掉つて逃出したが、ツイ四五間先の薪屋の路次口へ駆込んで了つた。
 路次口の行留は隣地の堺の朝鮮矢來で、右へ折れると一番端れの總後架に近いのが三十年來一文商ひをして小金を貯めた館竹爺で、其隣家は路次裏で田舎侍の新吾左と渾名された石倉鐵平で、毎も人出入の無い家が珍らしく混雜してゐた。
 妙鐵坊主は小腰を屈めて立附の悪い表戸を力づくで開けると、急にがらツと滑つて降々どししかゝつた。
 『やッ妙鐵さん、今日は御苦勞様、』と聲を掛けたは館竹爺で、

『いやッ、お正月でがすからツイ遅れやして、』とお壺口をしてヒョコ叩頭をしつゝ、「此方の旦那も誠に飛んだ事で……」
 水口と上り口と兼帯した入口は新聞紙で貼つた破れ障子で仕切られて、中は八畳の一と室の古壁の前に豊國の役者繪と廣重の名所繪とを貼付けた小穢ない二枚折の腰屏風を立て、古机の上に戒名を貼つた杉折の蓋を屏風に立掛け、灰を盛つた炮烙に煎香を林のやうに燃やして、青い蜜柑や樽柿を煎餅駄菓子と一緒にがらくた器に盛つたのを供へてあつた。之を中心にして處狭さまで並んだは、死んだ佛の弟だといふ眼の血走つた頬骨の高く現れた髪を長く伸ばした疎ら髯の貧相な五十恰好の男を初めとし、一つ長屋の饅頭屋の佐平、館屋の竹藏、ホウカイ節の長井東四郎夫婦、日傭壯士の劍崎亥之助、大道講釋の鱗々齋風麟、救世軍の兵士八十尾信幸等の面々で、下座に白髪交りの小さな圓鬚を載せ

た皺だらけの疲セツばちの五十四五の老婆が釣上つた眼を泣腫らしてゐた。

妙鐵坊主は一同に叩頭しつゝ、位牌の前に座つた。

「初春早々、誠に御苦勞様で……」

「いやもう么麼致しやして、」と坊主頭をポンと叩いて、「之が僧侶の役目でございやす。誠に飛んだ事で……しかし是も何かの因縁で……」

「太い御迷惑で、」と佛の弟の瘦男は國訛りのドス聲で、「なんばお役目でござりやんしても春早々ぢやから誠に早や御迷惑のこッぢやらうと、實は松の内だけは遠慮いたす心得ぢやツた處が、何分尋常でない死様ぢやもんで未亡人が太い力落しぢや。そこで一日も早く後世安樂の回向を營んだが切めてもは心やりになるぢやらうツて、お長屋の皆様がお骨折でナ、貴僧を招待してお經を讀んで貰やんして唯の心ばかりの一七日の供

養を營まようちう譯で、何分御迷惑ぢやらうが未亡人の氣の安まりやんすやうに懇ろな御供養を願ひ申すぢや。」

妙鐵坊主は慇懃な切口上に吞まれて唯々叩頭ばかりしてゐた。聽て恭

やしく包を解いて法衣を掛けつゝ、「誠にお氣の毒な事で、是も何かの因縁でございやせう。昔し世尊が靈鷲山に……」

「オイ妙鐵さん、お説教は跡廻しにしてお經を念入に願ひやせう、」と無遠慮に云つたは死んだ佛と親善の講釋師風麟で、口小言のやうに、「坊主奴、瀧島さんの切口上で面喰やがツた。」

妙鐵坊主は愴惶て、膝を向直して持參の鈴と木魚を陳べて何だか解らぬ言葉を節を附けて低音で誦へ出した。此節と聲柄が中々修行を積んだ和尚らしいので、此處の裏店では馬鹿にされつゝ、重寶がられてゐたが、實は心經と觀音經の一點張で八宗兼帶の回向追善を何擇ばずにお茶を濁

してゐるんで。

『石倉大人は誠に飛んだ御不幸で、』と劍崎亥之助は肩を怒らしつゝ、石倉の弟の瀧島頑作に向つて、『天下の志士志を得ずして中道に殞るゝ位残念な事はござらん。』

『誠に残念でござる、』と頑作は血走つた眼を瞬きしつゝ、『尙だ五十四歳ぢやから、最う一度旗擧げする元氣も尙だ十分有りやんした。然るに此から乗出さうといふ矢先に鐵道馬車に曳殺されるちうはよくゝ天運に盡きたもんと見エるぢや。』

『實に怪しからん。馬車鐵近來の專横は我輩實に慷慨に堪へない、』と劍崎は演説を初めさうな口調で、『天下の道路を自儘に專用して七割乃至八割の利益を壟斷するにも飽足らいて此上に賃錢の直上げしよるとは實に言語道斷無禮極まる。加之、市の公通道路を私して更に人蓄を毀傷し

て、颯然其罪過を改めざるは實に暴慢の極ぢや。況んや石倉鐵平君の如き憂國の志士を殺すに至つては馬車鐵社長の咽喉笛に啗付いても腹が慰んぢや。』

『先アゝ偶然の怪我ぢやから仕方が無い、と私は斷念めるぢや、』と頑作は和めるやうに柔かに云つたが、一段聲を張上げて、『唯だ残念なは維新の勤王家、二十年前の民権家たる石倉鐵平を社會は最早忘れ果て、今日鐵道馬車で牽殺されるちう非業な最期を遂げやんしたを誰一人吊つて呉りやるものが無いぢや。無論新聞に出やんしたから以前の政友は知ツちよる筈ぢやが、私は切めてもは佛の追善の爲め昔し事を共にした知名の政治家に線香の一本も手向けて貰やんせうと、政黨の錚々たる名士に愚兄の死亡を知らしてやりやした。處が、貴公、么麼ぢや、自由黨出身の△△縣知事どのから一圓爲換で送つて呉りやッただけで餘の仁から

は梨の礫の返事も来んぢや。却て愚兄がバリ、の民権家で國會開設請願の爲め太政官へ出頭した時分の大書記官、今の樞密顧問官△△子爵が——勿論其時分敵味方で餘り親しくもなかつたのが何處で聞かれたか、同じ國を憂ふるもの、末路が如何にも氣の毒ぢやツて、可憐な吊詞に五圓の香奠を附けて遣はされたぢや……」

「へエー、太エもんだナ、△△子爵は日本一だ、」と講釋師の風麟は力味返つた。

「世の中は實に薄情でござる、」と瀧島は大意を吐いて、「愚兄の鐵平は御存じの通り律義一方の仁で、維新の時は王事に勤めて郷國の良民が較やともすると幕府方に教唆かされて政府の諭達に背きたがるを種々理解して聞かせ、其後は維新の御誓文に随つて民の權伸びざるを歎いて、大臣や參議の馬車を要して建白書を上つるツて護衛の巡查に押へられたり、

太政官の門前に握飯を食つて徹夜ぶツ座ツたり、國事犯の嫌疑で監獄に擲ち込まれたりしたのは一度二度ぢやござらん。先度亡くなられた陸奥伯爵や後藤伯爵には一ト方ならぬ値遇を辱ふして、今の院内總理どのや本部の役員などには殊に莫逆の交を結んで飲食坐臥を同うした事も度々でござる。それだもんで身代は政黨の運動費に悉く潰してスツテン〜となりやんしたが、扱て斯う貧乏しよると人の心の奥ぞ知らるゝといふ通りで今迄運動を共にした同志の人達は次第に寄附かなくなつたぢや。尤も愚兄は誠實の人ぢやもんで政治運動の爲に資産を震つた位ぢやから、嚴格硬直で諛ふを好まず、較やともすれば長者の面を冒して忌憚なく直言する癖があるぢやから輕薄な輩には嫌はれやんしたが、産を破つてからはトンと人が來なくなつて了つた。人情反覆の間に變ずるとは能く云つたもんで、昔し同志間の頭株に推されたものが零落れてか

らは侮蔑られて、偶さか金策を持込むと以前は世話になつたを忘れて合
 力を乞ふ乞喰待遇をするぢや。中には親切めかしく詐偽に類した智恵を
 授けるものもあるぢやが、愚兄が廉直な氣質から謝絶すると宛も意氣地
 なしのやうに冷笑するぢや。それで愚兄も社會を見限つて清貧に安んじ、
 不幸な境界を樂んでおツたが、今日淺ましい非業な最期を遂げても更に
 昔の政友の吊つて呉れるものがないのは如何にも心外ぢや、』と悵然と
 して聲濡ましつゝ、『しかし愚兄は不幸なやうで幸福でござる。大厦高樓
 に住む肉食者流は禽獸に近くて眞正の人情は貧しき裏屋の軒に見えるど
 存生中屢々語られやしたが、家に擔石の貯蓄なくて非業に殞れても、貴
 公等の手厚いお世話で埋葬を濟まし眞正の人情のある皆様が寄合つて初
 七の逮夜を回向して下さるは、却て君子面する政治家連に賣藥の能書染
 みた祭文を讀まれるよりは遙に愚兄が満足致すでござらう。愚兄に成代

つて私が御禮申上ぐるでござる……』
 瀧島頑作は有繋骨肉の悲しさに生前を憶出し、涙一杯になつて俯いて
 了つた。しかつべらしき漢語交りの切口上で能くは解らぬが、一同濡り
 返つて寂とした。妙鐵坊主の少とも悲しさうもない讀經の聲ばかり喧ま
 しく聞えて、饅餚屋の佐平と館屋の竹藏は到頭シクシク忍び泣きをし初
 めた。

『時世時節ツてエが、這般な勝エ旦那が此方等と同じ棟割に落ちて、鐵
 道馬車で死ぬつてのは己ア天道様が恨めしくてなんねエ、』と館竹爺は聲
 を出して泣出した。

『實に残酷極まる社會ぢや。我輩の鐵拳幸ひに未だ萎えざれば……』
 と壯士の劍崎は慷慨極まつてポロ／＼覆れる涙に聲を詰らして了つた。
 『貴公らが其様に同情して呉りやるが、何よか佛への手向ぢや、』と頑作

は片手の掌で眼を摩りつゝ、『劍崎先生、其様に慷慨しよつても詮がないぢや。』

『否、否、諸君の様に泣寐入をしては……』

『先ア〜お静に』と講釋師の風麟は壯士の劍崎が激昂するを制して、

『鐵道馬車よりは昔し旦那と運動を共にした政治家達の小面が憎いぢや

がアせんか。しかし是非が無エや、何とかいふ坊主の歌に——人の面被

りし人は數あれど人の心を持つ人はなし——俺ア世間が憎くてならぬ

エ。なアお前さん達、俺ア旦那と親善だツたから旦那の身の上は能く知

つてる。なにしろ徳川様の時代から苗子帶刀御免の由緒ある百五十町步

の高持の旦那様だ。それがお前、百姓の利益を思つて身代を捨て、國の

爲に奔走する事二十年だ。先づ明治の佐倉宗吾郎だナ。それがお前、運

悪く白龍魚服すれば豫且に苦めらる、英雄も時に會はざれば田夫野人匹

夫匹婦無知文盲の我々風情の巢に落ちて、情けねエ、俺も講釋ぢやア度々泣いて見せるが、亢龍一と度雲雨を得れば正に天下を指揮しやうツて方が、情けねエ、時未だ來らざる中勿躰なくも鐵道馬車で御落命になツたんだから、俺ア眞劍に悲しくなツて泣きたくなツた……』

『我輩も悲しくてならんワ』と劍崎亥之助は握拳で涙を拂ひながら鼻

つまらして、『江湖に落魄する十年猶ほ志を更めざる石倉君の心事を追

想すると腸九廻する心持がしよる……』

瀧島頑作は頬骨高く出た瘦れた顔を涙に汚して目瞬してゐた。飴竹と

佐平爺は突伏して了つた。ホウカイ節と救世軍とは膝に手を突いて俯向

き、劍崎と風麟とだけが調子の外れた聲を折々出して泣面を強にこまか

してゐた。

妙鐵和尚の觀音經は駄々子が讀書の復習をするやうに甲高の調子を

頓狂にはづませるだけで一向悲しくもなく猫兒一匹成佛出來さうにもな
かツたが、其傍に附添つて此有がたくもないお經を謹んで聽聞して折々
低音で南無阿彌陀佛と念ずる新後家の貧に瘦れた後姿が淋しさうに見
えて一座の人の袂を濡らした。

讀經が漸と終つてから、新後家とホウカイ節の女房が兼て用意した法
事の饗膳を運出した。角の薪屋から遣したおせち、佐平爺が供へた商賣
物の饅飩、瀧島頑作が墓口を拂いた口取擬きの隠元ぎせい豆腐椎茸の煮
附、新後家が嗜を見せた今出川豆腐汁と葱の富士和の料理に、講釋師
の風麟とホウカイ節の東四郎等一つ棟割の一統から供へた酒——之で裏
屋に珍らしい法筵が開かれた。

正席が妙鐵坊主、麟々齋風麟、續いては壯士の劍崎亥之助、救世軍の
八十尾信幸、ホウカイ節の東四郎を初め、饅飩屋、飴竹とは窮屈さうに

正座つてゐた。

差配の久兵衛さんと薪屋の親方とは一寸くら顔を出してお線香料を奮
發んで歸つて了つた。ホウカイ節の女房と新後家は臺所を濟まして瀧島
頑作と聯んで席末に坐した。

酒が一巡廻つた頃、新後家は上品な慇懃な割合に倨傲な口上で挨拶し
た。暫らく沈淪れてツイぞ客來なく淋しく暮したのが、薄運な良人の非
業に殫れたを吊ふ心ばかりの追善にしる、久し振の饗應に較や得意らし
く、

『はんの氣は心でございます。昔しの十分一もございますと、皆様を八
百善にでも御招待申しますんですが……』

『何卒お心置きなく、皆様のお庇で立派な追善が出来やんした、』と瀧島
頑作は慇懃に周旋つた。『定めし草葉の蔭で愚兄も大喜びでがんせう。』

一同は裏屋交際と少と變つた應對振に何となく窮屈さうに縮こまつて叩頭いた。

「實に残念ぢや、」と劍崎亥之助は一と煽りした酒の勢で、「我輩猶ほ頑童盛りだつたが、石倉君が三十何人の壯士を率ゐて和田倉門で内務太輔の馬車を要して手詰の談判を初めた壯舉を聞嚙つて、子供ながら君の節義稜々たるを敬服しよつた……」

「はア、能く御存じぢや。明治十三年ぢやつたか、十四年ぢやつたか、故の大久保内務卿が猶だ存命の頃ぢやつた。」

「あの頃の民権家は眞に義を見て勇む豪傑揃ひだつた。」

「武士ならば元龜天正の生命を鴻毛より輕んずる……」と講釋師の風麟は嘴を容れた。

「さやう、其頃は我々百性風情も聖人の教を嚙つたものは各々武士魂を

有つておりやんしたから……」と言掛けた時、節竹は手を伸ばして、

「旦那、御免を蒙むりやす、」と云ひつゝ、盃を献した。

「いや辱ふござる、」と恭やしく盃を受けてホウカイ節の女房が酌する酒を一口飲んで、「今の代議士や政黨を御覽なさい。白晝公然主義を切賣して却て正義を行ふに戚々焉としちよる。愚兄なかは此才子流の伎倆がなかつたぢやから斯の如く零落しよつたが、ノウ劍崎君、風麟師匠、諸君么麼思はッしやる、今の腐敗しよる社會では此零落は即ち名譽ある失敗ぢやアでははんか？」

「同感！」と劍崎は更に一段聲を張上げて、「同感！我輩如き寧ろ貧しきを潔しとして煤つちよる。自由黨が何んだ、進歩黨が何んだ、良心切賣會社だ……」

「へー！」と鑑鈍屋の佐平爺が間の抜けた挨拶をした。

「ひ、四ッ角の焼鳥屋と同じだ。政黨内閣が何をした？ 大臣馬車の算段と椅子の奪合だ……」

「紀伊國屋文左衛門が中の町の雪に播いた小判小粒を拾ふやうなもんでさア」と風麟は大口開いて嘴を出した。

「ナア、貴公」と劍崎は興に乗つてボンと呆れた顔をした。館竹に向つて、

「貴公なかは三十年節を更めずに館を賣つちよる、此長屋第一の元老

だ。唯だ藩閥の元老と異なるは、渠は不義の榮華に耽り貴公は清廉の徳

を樂む。若し元老が尊いなら貴公なかは正に内閣を組織すべき資格があ

る。我輩乞ふ館竹内閣の警視總監とならん……」

館竹は劍崎の漢語交りが少とも解らないで變な顔をして笑つた。「へッ

へッへッ……」

新後家は座を進めて風麟と妙鐵坊主を頻に周旋つた。昔し古郷で石

倉大盡と歡待された時は田地が百何町歩、圃が何十町歩、農男が何十人、

養蠶時は百人近く出入して縣知事を初め勸業課の役人達が頭を下げて來

た事から、今の自由黨の△△が猶だ書生で凡そ三年間海外へ留學する費

用を辨じた事や、△△伯爵が民論を容れんとして衝突し終に政府を退い

てから三年半ほど臺所 賄を引受けた事や、何々事件の志士が入獄中家

族の生活費を寄進した事や、終には國を憂ひ民を憂ふる餘りに一郡で屈

指の大盡たる身が草鞋脚絆で上京し寒夜太政官の門前に起ち通した難義

咄や、日本隨一の大臣方が屢々旅宿に訪ねられた事や、其擧句が「之が

良人の一生の過失でした」と云ひつゝ、同じ黨員の何かしにツイ騙されて

株に手を出したが失敗の抑もある事を細にか語り出した。

「尤も其前から政治運動に注込んだお金子は尋常大抵でなく、公債や株

券を大分失くしました處へ、抵當に入れた田地の期限が迫つて來ました

から、大變心配しておったのを悪魔に附込まれたので……」と新後家は恨めしさうに聲を濡ました。「まかし賭博や女狂ひとは譯が違ひますから、妾も諦らめております。唯だ如何にも残念なは政黨の方達でさ、んざお金子を遣はして置きながら、憎いぢやありませんか、相場に手を出して身代を失くしましたのを左も大馬鹿のやうに吹聴して、加之も貴處、何とかいふ新聞に妾共が破産した顛末を尾緒を附けて瘋癲だと云はぬばかりに出しておるんです。」と口惜しさうに濡聲で世間の輕薄を罵つて竊と涙を拭いた。

「先ア内室、そんなにお泣きなさるな。天道様が附いてやす、」と風麟は氣の毒さうに慰めて盃を獻した。

「さア一杯、時世時節ですからな、平家檀浦の没落を御覽なせエ。十二重を引摺つた京女臍がお米を磨ぐ憐れッばいのを考へてお諦めなさる

が却て佛様の爲でがす。」

「何んでもお斷念が却て御功德でござります。昔し世尊が靈鷲山に……」

……」と妙鐵坊主は復た説法を初めさうにした。

「妙鐵さん、止しなせエ、」と風麟は尻眼を掛けてキツと嗜めた。「お前が長たらしい説法を初めると佛様が宇宙に迷ひ出さア。」

妙鐵坊主はモグ／＼してて、隠しに饅頭をづる／＼と喰初めた。

「戴きまます、」と新後家は恭やく猪口を戴いて、「之でもねエ、貴處、斯うして裏屋住居に馴れましたが、矢張昔しが戀しくて……」

「諸君、」と劍時は突然座を起つて、「海内第一の自由の唱祖たる不遇の豪傑石倉鐵平君の遺靈萬歳を祝す。」

「遺靈萬歳！」と瀧島頑作は呵然として笑出した。「遺靈萬歳は新案でござる。」

『我輩謹んで遺靈萬歳を祝する、』と劍崎は眞摯に盃を舉げて飲盡した後、恭やしく一献を新後家に薦めた。『石倉鐵平君の未亡人に献する榮を得ます。』

『あッはッはッ、劍崎先生、餘り堅くろしいぢやから皆さんが驚いてござる。』

『頂戴致します、』と新後家は嬉しさうに微笑しつゝ、杯を受けた。『良人が存生時分、丁度十年ほど前でした、郷里で聯合懇親會がありました時、萬歳を祝されました……』と再び往日を憶出して潜々と泣いた。『其時萬歳の發聲をして下さつた方は良人が永らくお世話をした其お庇で今ぢやア衆議院でバリ／＼の代議士さんでゐらッしやるが、残念です——』と身悶えして歎息上げつゝ、良人が非業に死んだ報告を上げて、吊状一本下さいませ。』

『先ア仕方がねエ、時節ぢや、其様な薄情な奴の吊状は貰はねエ方が却て佛様がお歡びだ、』と講釋師の風麟は濡聲で慰めたが、故と元氣を附けやうとして、『なにしろ目出てエ、佛様になつてから萬歳を云はれるのは結局神様になつたやうなもんでがす。なにしろ立派な旦那衆であつた方が此方等の合長屋に落ちて亡くなられたんだから、内室の御愁傷は無理は無エが、なにしろ死んで了つても萬歳を祝はれるのは目出てエや。俺も風變りに手打をしやせう。飴竹の親方、佐平の伯父さん、頼みやすぞ。よし——シヤン／＼……シヤン／＼……』

法の筵やら正月の祝やら何やら解らぬ騒ぎに、新後家の泣顔も微醺を帯びて段々陽氣づき笑ひ上戸の飴竹が徐々地金の胴魔聲を出し、近所の娯衆や兒供が珍らしさうに折重なつて障子の隙から代る／＼に覗かうと妙な面構を突出してゐる折から、銘仙の羽織を引掛けて糸織の前垂を

締めた四十恰好の色の淺黒い生際の抜上つた小粹な内儀風の女が、疳癩
力でがらツと戸を明けて、

『今日は、』と尻上りな調子で口邊に意味な微笑を含みつゝ、『おやツ、皆
さんお揃ひで……さう、お逮夜、少とも知らなかつた。』

一座は妙な顔をして新來の客人を見ると、壯士上りの三百を亭主にし
て内職に損料と日濟金を貸し妾の肝煎や怪しい商賣の周旋をする素性の
善くない直き近所の下宿屋の女將のお辨で、

『御新造さん、今日はあの子、一寸いと用があつて來たの、皆さんお揃
ひで困つた子。』

『お内儀さん、何の御用……』と新後家はツンケンして云つた。

『困つたね、大きい聲ぢやア云はれないから……ねエ御新造さん、一
寸いとお耳を拜借しませうか子？』

『なんですエ？』と云ひつゝ、新後家は怠義さうに起つて戸口に行き一言
三言秘々云つたかと思ふと新後家は疳癩聲で、『復た緩くり話においで
なさい。證據もない事を——馬鹿にしてゐる。』

『お待ちなさい、何ですと……』とお辨は忽ちぢり／＼とした調子で

『何ですと、證據が無いツての？證據が無いから咄し合ひにするンぢや
ないか、證據が取つてありやア暮の内に訴ひに出まさら。此方だツて節
季で金子が忙がしいから先月の初めから催促して遅くも晦日には若干か
入れて貰うお約束だツた。處へ那樣な非業な……』

『喧ましいよ、知らないてば……』

『喧ましいと、大層剣突を呉れる子、』とお辨は入口にドツかと腰を掛け
て男持の鈆煙草囊を帯の間から出し、沈着拂つて銀の女煙管に煙草を詰
込み、『館竹さん、火入を貸しとくれ——寸燐でも好いよ。』

「喧しいのは當然サ、」と一座の呆れ果てたのを睨廻しながらボンと煙草を叩き、「何處の國に貸した金子を踏倒されて嬉しがるべらぼうがあるもんか。石倉さんは裏店住居しても貴顯方や議員さん達に澤山お親昵があるから今に立身すると仰しやるから、妾がツイ口前に騙されて無證文で貸して上げたのが馬鹿サ。けれども子御新造さん、妾が夏中からお百度参りしたのは豈やお前さんだつて知らないとは云はれまい。なんば這般な婆さんだからつて石倉さんの禿頭に惚れやアしまし。○の催促たア么麼な感の悪い瞽盲だつて氣が附く筈だ。ねエ御新造さん、今日返して呉れとは云はないから子、白ばツくれるだけは好い加減におしな……」

「喧しいよ、復た出直しておいでといふに、解らない子。」

「大層な權幕だ子、どうせ踏倒すには其位度胸が据らなけりやア。お辨さんにも有繫感心して上げます。」

「煩さい子、お歸り、お歸りッ！」

「大きにお世話、好い時分に歸るから子、」とお辨は一向平氣に冷笑つて、「子エ飴竹さん、田舎大盡の御新造様の御權識は大したもんだ子。妾も好い馬鹿サ、貸した金子は踏倒され、加之に劍突を喰つて耻をかきやア世話アないサ。……子エ飴竹さん、お前から願つてお呉れナ、お辨は大盡様とは違つて其日暮しの貧乏人だから、何卒因業を仰しやらすにお金を願ひたいもんだつて……」

「喧ましいよ。お歸りッ！」

「子エ、飴竹さん、佐平さんも聞いてお呉れ、」とお辨は濟し返つて煙草の煙を輪に吹きつ、「最初石倉さんが來た時は一と月で返すつていふお約束で、尤も故郷の田地が訴訟になつてこゝ二週間で勝公事になると定つてると甘い口前にツイ載せられて一寸くら十五圓貸して上げたのサ。」

之が高利貸を商賣にしてゐるぢやなし、良人も昔しお世話になつた事もあるし、妾も仔細があつて田舎に遊んでゐた時分お馴染の旦那だつたから子、御恩報じだと思つて唯つた一ト月ばかりだからと天引にもしないでお加之に無證文で御用立つたのサ。處が一ト月が二ヶ月になつても元金は思か利子も入れないで、それぢやア證文にして下さいと云やア酢の蕪弱のと勝手な熱を吹いて、段々手を廻して聞くと田地の訴訟だの勝公事だの形なしの嘘の皮だから妾も少々驚いたね。貧すりや鈍すると善く云つたもんで、昔しは一と晩の纏頭の五十兩も藝妓に呉れた立派な旦那衆が、之ぢやアお前、恰で詐欺ぢやアないか。だからサ、良人は怒つて訴へると騒いだのを、何ぼでも久しい見知合だからと妾が種々蔭で心配して漸とこさと勘辨して貰つたのサ。そいつをお前、馬鹿々々しいや子。いくら可哀相だと思つても、全然呉れつちまッちやア此方も瘦身代だか

ら行きた、ねエから子、随分氣を長く面倒を見て温和しく催促すると、人間も零落れるとズウ、しくなるもんで、昔し少とばかり世話をしたのを恩に被せて威張つて踏倒さうとするんだよ。斯うなると金子は欲しかアないが仕打が餘り癢に觸るから……』

『お黙りッ！ 歸らないか？』

『お前さんと話してるンぢやないよ……』

『何だい……さア、何でも好いから直ぐお歸りッ！ 薄情者！ 薄情者！ 犬畜生！』

『何だど？』

『故郷で姪賣をしてゐた時を忘れたか？』

『何を云やがる、』とお辨は忽ち顛顛に青筋をビク、ツと動かして、『此方は無證文で金子を貸した恩人様だ、踏倒す汝と何方が不人情だ、犬畜

生だ！』

『……』と新後家は口惜しさうに眞赤になつて身悶えしつゝ泣聲振擻つて、『歸れッてば——歸らんか？』

『歸らないよ、斯うなりやア歸らないよ、金子を請取らない中は歸らないよ』とお辨は勃然となつて後向きに腰を据えて空嘯いてゐた。

意外の珍事に一同は呆氣に取られてゐたが、風麟と劍崎と瀧島は堪りかねて飛んで來た。恰も其途端に新後家は咽喉の破れるやうな聲を振上げて鬨側の壘を蹴立てつゝ、『歸れ、歸れ、歸れッてば……』

『おや、足蹴にした手、』とお辨は眼を釣上げ血相を變へて、『調戲けるな、田舎漢奴！』

『先ア……』と風麟は愴惶て、二人が間に飛込み今にも打合を初めさうなお辨を漸と押へて、『これ、これ、お辨さん、お前さんの俠氣にも

似合はねエ。今日は此處の旦那の逮夜ぢやアねエか……』

『お退きッたら、妾ア辛抱が出来ないよ……』

『先ア……』それぢやア温和しくねエ。』

『どうせ亞婆摺だよ。田舎の姪賣まで稼いで鍛え上げたお辨だ。金子を踏倒されて田舎婆アに馬鹿にされぢやア……』

『先ア……爾んな事を云はねエで……』と風麟は強にお辨を引摺出さうとした。

瀧島頑作は例の沈着いた調子で新後家の躍出さうとするを背後から抱へて持餘しつゝ和めてゐた。

『姉さん、これッ、悶いてはならん、私が附いとするから大丈夫でござる……』

『お放しなさい、お辨の畜生、さんざ鐵平どのを騙くらかしておいて義

「理も人情も辨へん奴だ……」

「そんな事は云はいでも解ツちよる……」

「お放しなさいッたら、」と新後家は頑作が抱留ひる手を強に放さうと悶きつゝ、息切れ聲を擗立つて、「年は老つても石倉鐵平が妻だ。鐵平を騙くらかした古狐を位牌の前で折檻して呉れる——えッ、放しませんか……」

「先ア〜、此頑作心得ちよる、」と頑作は一生懸命に死力を出して振もぎらうとする新後家を抑へつゝ、「劍崎先生手傳つて呉りやれ。」

劍崎亥之助は飛出したが仔細解らずに茫然してゐると、瀧鳥頑作に聲掛けられて得たりと新後家の前から大手を廣げて支へ留めた。

「劍崎さん、貴處までが……」と苦しさうな聲をして、「妾を留めるなら、あの畜生を打擲つて……」

劍崎は勢ひに呑まれてツイ手を緩めた途端に、此方はお辨が風麟に引摺られやうとするを意地になつて入口の腰障子にしがみ附きつゝ、「石倉の拘盜め、詐欺師め、」と罵る聲が耳に入ると、俄に根と怒つて横合から飛出し唐突にお辨の横顔を平手で打つた。

「打つたナ、どの畜生だ、」とお辨は喰付きさうな勢で風麟の手を握ぎ放して劍崎に武者振り付いた。劍崎亥之助は最前よりの鬱憤一時に發して握拳を固めてポカ〜二ツ三ツ毆打付けた。

「毆打つちや不可エ、コレ劍崎さん、」と風麟は仲裁に入つて、「コレ怪我アさせると事が面倒だ……」

「なんだ、此どた福、梅毒患者め、因業婆アめ、高利貸め、」と劍崎は暫らく振はなかつた鐵拳を思ふさまに振つて腰障子と共に毆打り倒した。表は長屋總出の見物で、扮ひサビタを喫へて安ハンケチを頸に巻付け

た、ヒョロ長いハツペリした顔や、虫歯眉の頬べたの破裂れさうな毬栗頭
 や、頸ばかり剥げるやうに白粉塗つた面炮だらけの蛇遣然たる女の顔
 や、齒糞だらけの口を開いて鼻の穴の屋の棟を睨んでゐる青ぶくれや、
 百鬼夜行に類た顔が重なり合つた處へお辨が障子と一緒に倒れると、人
 山が一どなだれ動いて、姉さん冠りの手襷掛の女が躡ける機會に溝板が
 跳反つて、肩をすばめてや、どうをきめた兄いに向臈へ打つける、赤い帯
 を締めて押繪の剥げた羽子板を持つ鼻垂らしの子が新らしい足袋を泥ぼ
 ツけにする、裁立の二子の袴纏を着た紺足袋の女が向長屋の水口に尻餅
 を突くと手に持つ風呂敷から馬鈴薯が轉がり出す、途端に三毛猫が魚を
 喫へて飛出す、白班犬が逃しなからキャン／＼吠える――長屋中が大
 革命だ。

風麟は到頭を辨お表へ伴出して百方手を盡して和めたが、お辨も有繫

に荒くれ男の揃つてゐるに手を出しかねて肩腰の節々が痛むを堪へて不
 性／＼に歸つた。後に段々聞て見ると、お辨は本と石倉全盛時代に外妾
 となつて相當の恩誼を受けたもので、今の良人も石倉配下に奔走して運
 動費に煖つた事もある、それや是やの關係で若干かは用立てたらしく、
 一つには石倉が格別偽りをいふ積りもなく權門の知己を吹聴して今にも
 知事位には成れさうな口吻を眞に受けた處が今度の變事で烟になつたの
 が残念で、折から馬車會社から三十圓の吊祭料が出たを復た聞きにして
 金子が失くならぬ間に取立てやうといふ心組で、新後家も其消息を萬更
 知らぬでもなかつたが、以前の姪賣上りの妾風情が僅かばかりの金子を
 恩誼がましく鼻に掛けて催促するを快く思はなかつたのである。尤も
 お辨は二度や三度は監獄の門も潜つた悪黨だから随分言掛りもしかねな
 い奴で、無證文で貸したのが却て魂膽があるのかも解らんのだ。

『先ア好エワ、私が附きよるから心配せんでも……』と瀧島頑作は泣
類れた新後家を頻りに慰めてゐた。一座は煙に捲かれたやうに茫ツとし
て、風麟のおせちの皿と銚子が倒れたのを氣が付かずゐた。妙鐵坊主
だけは素早く膳の上を平らげてお布施を捻込んで何時の間にか逃出して
了つた。飴竹は頻りに外れた障子を穿めやうとしてゐる處へ風麟が歸つ
て來た。

『やい、退け、見世物ぢやアねエ、』と風麟が恐い顔をして睨付
けると、兒供はワイ、云つて、『講釋屋の伯父さんが怒つた、』と逃
し、青い顔や赤い顔や黒い顔や氣障な頭や忌味な頭やが各々苦笑ひしつ
、冷笑ひしつ、馬鹿笑ひしつ、何邊へか見えなくなつた。

『内室、先ア機嫌を直して……俺が合點んでやす、』と風麟は己が席に
戻つて、『やッ、ぎせい豆腐を踏付けッちまつた。おやッ、妙鐵坊主逃

しやアがツた……おい、ホウ、カイ節の姉さん、お銚子の熱い處を……
……おや、徳利が倒れてやがらア。』

『さア姉さん、貴姉が泣いちよると皆さんも酒が甘く飲めんからノウ、』
と瀧島頑作は頻りに新後家を慰めつ、一同に向つて、『何卒皆さん快
飲んで……誠に失禮でありやんした。』

『渠奴失敬な奴だ、』と劍崎亥之助は意氣昂然として、『風麟君が留めず
んば我輩打殺してやる處だつた。渠奴夫婦の素性は我輩石倉大人から些
か聞いて知つちよるが實に破廉耻極まる、渠奴如きは社會の爲め我輩の
鐵拳を呉れて印導渡してやるが好エんぢや。』

『劍崎さん、あの婆ア眞個に仕様が無エ奴で俺も彼奴には……』と飴
竹はモグ、した調子で嘴を容れた。

『君も痛い目に遇つたか……』と劍崎は早吞込に吞込んで、『我輩の友

人が渠奴から三圓借りた處が、渠奴め煩く催促に來よつて下宿へ怒鳴り込むから、我輩友人に代つて渠奴を死ぬほと打ちのめしてやつた。渠奴を打んなぐるは今日で二度目ぢやが、有繋の悪たれ婆も我輩には閉口ししちよるぢやらう。』

『僕も頗る辛められたです。』とホウイカ節の東四郎は微笑しつゝ、『僕は一圓五十錢借りて二割の天引で日濟しに八錢宛一と月で返すつていふ約束で、一日でも遣らんと怒鳴り込まれた上に到頭三圓計り搾り取られたです。』

『君もか……何故擲つてやらんぢや。彼様な奴の金子は踏倒してやるが人助けぢや。』と劍崎は己れが腕力を得意がツてポンチ繪にありさうな身振をした。『しかしナ、瀧島君、石倉君は果して金子を借りおつたでせうか？』

『これは、』と頑作は當惑らしき顔をして、『私は能く知らんがの……あなたのお辨が無證文で貸すつてが些と疑ぐりやるぢや。渠は本と愚兄の外妾で、愚兄が失敗しよつた原因は渠れ夫婦が頗る與かつて力があるぢや……』

『怪しからん、怪しからん、』と劍崎は俄に激昂して膝を叩いて憤つた。『怪しからん。實に怪しからん、恩人の位牌に無禮を加へるとは渠奴實に禽獸である。諸君、風麟君、八十尾君、東四郎君、飴竹君、佐平君、我黨須らく義憤を發して渠奴等夫婦を足腰立たんやうに毆打して呉れん……』

『先ア、劍崎君、那樣な虫介同様の奴は捨置くが却て好エぢや……』と頑作は温和かに莞爾と笑つて、『それよか皆さん、大に飲んで歌つて貰やんせう。愚兄は太い陽氣好きでこはんしたからの、賑かに矢張り正

月らしく……なア姉さん、そぢやどは、んか。』

泣頼れた新後家は漸と起直つて、泣張らした眼元に故とらしき微笑を
浮べた。けれども何處か淋しさうで悲しさうで、

『飛んだ處をお目に掛けて、誠にお耻かしうございます……』

『憎い奴でがすナ、』と風麟はホウカイ節の女房の酌でグビく二三盃引

掛けて、『しかし飛んだ處へ來やがツて、今頃は大方腰が痛くて弱ツて
やせう。劍崎さんに遇つちや慾張婆アも叶はねエや。』

『誠に残念でございます。渠は本と召仕で、死んだ佛の好人物に増長ん
で、ンざ騙くらかして……』

『先ア姉さん、愚痴は最う止めに……』と瀧島頑作は自ら椀の蓋
で一杯を満引して、『皆さん、逮夜の席でござるが愚兄は大陽氣の人ぢや
ツたで、取別けて正月のこんぢやから長屋中を騒がすが面白うごあん

せう。さア風麟師匠、一杯献じますぞ。』

『俺は小せエのは嫌エだ、』と椀の蓋を引受けてぐツと飲んで、『さア、ど

しく飲んで此方の旦那が石倉大権現と祭られる前祝をするだ。高山彦
九郎、蒲生君平、近世水滸傳の豪傑は悉皆旦那のやうに貧乏してエたん

だ。今にナ、俺が此町内の鎮守に石倉大権現を勸請し奉るからナ、
さア飲んだり、飲んだり、』と風麟は面白さうに浮れ出して杉箸で膳の

椀を叩きながら死んだ石倉鐵平が酔ふと必ず唄出す得意の甚句を唄出し
た。『金子にや負けてエも、國の爲め盡しやア、今にや銅像ウ立て、やア

る、民権自由平等權利藩閥元老メツチャく』

『すツとこ、すツとこ、すツとこ、』とホウカイ節の東四郎は
矢庭に躍出した。『一日もウはアやく亡ぼし國のため、政黨内閣燕尾服、
ホウカイ、似合ひましたか平民大臣じみたか見ておくれ、ミンケンく』

風麟は茶碗を叩いて嘯し立てる。佐平や節竹、酔が廻つて手拍子を打出す。瀧澤頑作も酔眼朦朧として國訛に妙な節を付けて太い聲で謠ひ出した。『最早おぢやるか、露西亞へおぢやるか……』

一同はやんやと嘯し立て、裏長屋の根太板が落ちさうな騒ぎに机に飾つた位牌が轉けさうなのを新後家は獨り悄然と淋しさうに笑ひつゝ、護つてゐた。法事の筵やら何やら解らぬ三味線抜きのだタバタ騒ぎに今迄眞面目に苦り切つた救世軍の八十尾信幸まで満室の酒精インスピレーションに逆上せて、『夢エ酔めエよ眠る靈魂……』と唱ひ出した。それツハ十尾君まで浮れ出したと一同面白がツて總立ちとなつた。瀧澤頑作は舞臺とおいと惣太と一緒にしたやうな妙な身振で一と際太い胴魔聲を振擽つた。

『最早おぢやるか、露西亞へおぢやるか、軍艦つよかれ、水雷銳かれ、

二十サンチがびゅーる〜！』。

此騒ぎに表は一杯の人立ちがして頑童小僧の一と群が忽ち聲を擧げた、『石倉鐵平君萬歳！鐵道馬車往生萬歳！』。

(明治三十二年一月天地人所載)

落

紅

『成功は矢張無……無盡……とお……おんなじですから』と早口に啞りながら氣の無さうに微笑したは三十前後の脊のヒヨロリツとした薄鬚の生えた頬の削つたやうに痩せこけた貧相で凄味のある、鐵欄の近視鏡を掛けた羊羹色の黒紋付の着流しで、

『爾うとも君。鬪強いよのと壓が強エンだ。壓を強くしないと損しますよ。』と得意めかして辨じつけるはズン、グリと肥つた色の淺黒い金壺眼の同じ年輩の男で柳原物の洋服の色の褪めて綻びかゝつたのを無恰好に着て大手を掉りつゝ、『勝川が何が出来る？何にも能は無エンだ。唯だ面の皮を厚く大臣だらうが豪商だらうが關はずにハ、コ、ハ、出掛けて蠅をみて

いに肉へ喰込むんだから堪らねエ。到頭一と山當てやがツた。……なアに俺だツて參與官位になれまさア。實力を競べたら奴如きはお茶の子さい〜だが、唯無盡が中らんから大に癢に觸る。なア土師君。』土師と呼ばれた黒紋付はニヤリと冷笑しつゝ、相手の男を見卸して口をモグ〜してゐた。

『だから君、思切つて壓を強くすべし、』と角顔の金壺眼は丸くムク〜した肩を聳かして屈みがちに大勝に歩きながら、『勝川如き伎倆のない奴が成功するのは全く面の皮が厚いからです。えッ壓の強エツてのが伎倆があるんだ？ 違エねエ、無藝大食も一藝だから……はッはッはッ。』丸の内を出で賑かな大通りから横へ外れた新開の角に安直便利世界第一驚く勿れ一品唯ツた五錢で賣出した珈琲店兼ての間合割烹で、安直好きの當世紳士が自から集まつて俱樂部を組織つた青いペンキ塗の前まで

來ると、

「ど……どうです、一杯飲つては？」

「うゝ、」と阿彌陀に被つた中折帽の下から金壺眼を光らして、「頗ぶる妙、不景氣で暫らく御無沙汰になつた……」

細くて長いのは氣力の抜けた機械的の歩武で、太くて短いのは大勝に靴音高く階子段を蹴立て、樓上の廣間の扉を排き五六人の座客を見向きもせずニツカ、と奥の隅の小卓を圍んだ椅子を占めた。忽ち一方の席から太い聲で、

「五十幡君！」

「やッ、」と五十幡は金壺眼をバチ、して莞爾々々笑出した。「やア……」

豪傑お揃ひで……么麼です、儲かりますか？」

「ホウ、土師君もおいでぢやナ、」と四十恰好の赤ら顔の肥胖した二十貫

目もありさうな男は聲を掛けた。「此方へ來て我が黨の仲間入りをしな

るか。」

一人は脊の矮い跛の外見ない男で服装だけは鹽瀬の五紋羽織に風通の小袖といふリウとしたものだ。一人は小汚ない脊廣を着た狂犬然たる凄味のある險相な男である。赤ら顔の破裂れさうなのが窮窟さうにフロツクコートを着た態はポンチ繪丸出しである。一番愛嬌のある聲で、

「么麼ぢやい、五十幡君。」

「喰へない子。」と更に故どらしく力を入れて、「頗る喰へない子。」

「しこたま儲けたツて説があるせ、」と跛の五紋は皮肉に微笑した。

「中々儲からん子。」と五十幡は厚い唇を翻してべら、と、「信用なしの薄資本で高利を借りてゐちやア、からもう仕様が無エ。問屋は引締める、仕入は控へる、倉敷は取られる、利息は搾られる、金融は塞る、注

中

文は滅る、其中には廢物が出る、損耗が立つ、イヤモウ商人は形なしだ。惘然孤城落日氣息奄奄に旦夕に迫るんだから子。お察し下さい、實に氣の毒千萬なもんで、有業の五十幡亮太郎も青息吐息五色の息を吹きにけるといふ次第だ。』

『はッはッ……巧く仰しやるナ。段々泣言が黒ッぽくなる。』

『戯戯云つちやア不可エ、眞箇に儲かりませんや。何處に行ッたつて品物が動かねエんだから仕様が無エ、』と五十幡は無愛想に頤を突出して、

『早い咄が馬鈴薯が函館に臥てゐる。此五月になればドンと直の出るの
は知れてゐるが、悲しい哉ピイ〜空ッ臂でござるから高利と倉敷に追はれて逆も持耐へられなくなる。だから仕方がなしに足元を見られて蹴倒され見す〜損の立つのが知れてゐても金の運轉が付けたさに泣の涙で手離すやうになる……』

『手離したか?』

『いんにや。と思つても全で蹴倒して呉れる奴さい無エんだ……』

『あッはッはッはッ……』

『時に、』と五十幡は手暴く麥酒の杯を握んで鱷のやうな口を開いてがぶと飲んだ。『時に火曜日の汽船で硫黄と油、大口魚と大豆で積んで來るが、么麼だ、買手は無からうか子。部合は三パーセント出します。』

『相場は?』

『能くは解らんが、代物が能くて割合に安く賣るツて評判だ。しかし荷が着いて見なければ廉い歎高い歎眞箇の鑑定は附かないが子、左に右に君、三パーセント出しますから悪くないでせう。』

『相變らず漠としてゐるナ。それぢやア周旋が出来ない。』

『いや何れ荷が着いたらば、諸君の御厄介を願はう。どうせ資本の無エ



此方らは少とばかりの部分コンミツシヨンを頂戴てうたいの右から左へ衣兜ぼつぽの隧道トンネルを通抜ごほりぬけの米屋薪屋こめやまきやへ召上げめしあられるんだから全然かたなしどま態ア無エ。四五日前にちぜんに濱はまへ行つてベングルインディゴオとポルトフネリツプの毛とペトリエームを少とばかり價格かねにして漸ぞつと三千圓計りの取引とりひきをしましたが、間へ入つた奴やつが三人だから五パーセントの部合コンミツシヨンを取つても一人前にんまへいくら幾許にもならねエ。加之おまけに平生ふだんから泡沫あぶく銭を取つて眞箇ほんごうの商賣あきなひを知らねエ濱の奴やつだから、這般こんな端多はした銭は飲んちまへツてんで、鳥渡ちよつこした遊興あそびが大きいや、藝妓げいしやを一打だも揚あげてチリカラタツボウだから、俺あつしの虎の子こだツて翼はねが生へて飛んちまやさア。翌ある日新橋ひしんはしへ戻つて朝直あさなほしに淡泊あつさり一杯いっぱいやツて捌序はつせいに二三軒けんからい、ツと車を廻ましたら懐中ふところに残つたのは唯ただツた三兩二分りやうぶと銭ぜにが一貫二くわん三百——馬鹿ばか氣けさ加減かげんがお咄はなしになりませんワ。』
 狂犬やまいぬ然ぜんたる險相けんさうな男おとこと跛ちんぱの五ツ紋もんは此家こゝで自慢じまんのビーフステッキを宰さり

つ、五十幡いごはたの言葉ことばを耳みみにも入れずいに口重くちおもの土師はじ文作ぶんさくを對手あひてにしてゐたの『痛いぢやないか。自分じぶんだけ甘い汁じゆを吸すつて君達きみたちにお裾分すそわけをしないツてのは、』と跛ちんぱの五ツ紋もんは機はすみに庖丁ナイフをガチリと滑すべらした。『勝川かつかはがあの位置おちまで乗出のりだてしたのは君達きみたちの力ちからが、大おほいに與あつかつてゐる。そいつを忘れて自分じぶんさへ本願ほんぐわん成就じゆうじゆすれば好いいワツて、云いは、其有きゆうの新聞社しんぶんしやを相談さうだんもなく獨斷どくだんで潰つぶし、創立さつりつの元勳げんくんたる君達きみたちを浪人らうにんとして知らぬ顔かほの半兵衛はんべゑは、それツ何なんとに云いつた——うゝ、飛鳥ひちやうつ盡じんきて何なんとか狡免かうごし死しして良狗りやうく煮にらる——それだ、餘あんまり痛ひいや。』
 『痛いども、痛ひいや、』と五十幡いごはたは唐突だんげつに頓狂どんきやうな嘴出くちだしをした。『土師君はじくんはあの社しやの元勳げんくんだからナ、其股肱そのこたり元勳げんくんたりし土師君はじくんを棄すてるといふは畢ひつき竟やう勝川かつかはの男おとこで無エ證據しやうこだ。だから俺あつしは今いまも途中みちうち云いふんだ、何奴なにやつが出來きる？……文章ぶんしやうが少イちとばかり書かけたツで仕様しやうが無エ。字じの上手じやうずが看

板工となつて文章の巧エのが廣告案文者歟代書人となる時勢だ。何でも
 伎倆だ。金を儲ける伎倆がなくては駄目だからナ。奴なんかは唯だ面の
 皮を厚くして大頭に諂諛をするのが能で漸と勅任官になつたのを豪さ
 うに肩で風を切てやがる。だから俺は土師君に勧めるンだ、爰が好い
 思切り時だから御祐筆の足を洗つて牙籌を弾く方が遙かに當世だ。一つ
 投機が當つたら十萬や二十萬は大風の丸の内の砂のやうに頬べたへ衝突
 るんだから面白いや。年に三千や三千五百の目腐れ金を貰つて勅任官
 で候と材木屋の鳶先生ぢやア少と膽ツ玉が小さ過ぎまさら。だから
 俺は……」

「だが五十幡君」と險相な男は嚙付きさうな聲で、「世間の商人は十萬や
 二十萬儲ける、君は三兩二分と錢が一貫二三百……」
 「ぶッ、」と五十幡は獅が唇を反返して笑ふやうに吹出した。「冷謔しち

やア不可エ。三兩二分と錢が一貫二三百儲けるには容易ぢやありません
 んや。一兩に二百目の絲が濱で一斤三兩四兩で翼が生えて飛ぶ時勢と
 は違ひますからナ。」

「それぢやと十萬二十萬中々儲かりませんナ、」と赤ら顔の肥大漢は故と
 らしく空惚けて、「矢張三パーセントが關の山ですナ。」

「先ア仕方がねエから……しかし大きな取引さいありやア都合も馬鹿
 には出來ねエが、此頃ぢやア何處でも火の消えたやうだからカラ最うお
 咄しにならねエ。過般も汽關車十臺の注文が出たから爰ぞ一攫萬金と半
 狂亂で奔走したが、資本の無エ奴は駄目だ、七處借をした運動費の小百
 圓もチャトフにして到頭取られツちまつた……」

「はッはッはッ、五十幡將軍も大に器量を下げた子、誰に取られた。」
 「ビーエス商會、」と、五十幡は吐出すやうな口吻で、「なにしろ先方

は千と二千と金子に絲目を附けずに捲くんだから、此方は七八置いて唯
 ツた小百圓——取られるのは當然だ。どうせ大きい奴と競争しちやア協
 はねエよ。骨ばツかり折れて忽ち息ついちまひまア。唯だ資本金千萬
 弗のビーエス商會と競争しやうツて度胸を買つて貰はなけりやア——
 俺ア負けても鼻が高エんだ。」
 『ふツふツふツ、』と五ツ紋の跂は妙な聲で笑出した。『無い鐵を損をする
 のが度胸だ子。』
 『さうサ。だから俺は土師君に商賣を勧めてるんだ。資本が無エから出
 來ねエツてのは素人で、無い資本を繰廻すのが商人の伎倆だ。處で俺は
 今度英吉利の自輪車を賣出さうツてんで、ウルフルナやマリオットと交
 渉最中だが、巧く行くと東洋を一手に引受けるんだから、是非とも土師
 君の一臂の力を借りやうと先尅から口を酸くしてるんだ……』

『危ねエ、危ねエ……』

『どうせ商賣は危ねエに定つてる』と五十幡は金壺眼を光らして、『だが
 此事ア必と當ると踏んでる。日本の自轉車は米利堅ものでクリベランド
 やウオーセスター、ウオーナーなんて奴が跋扈してるが悉皆駄目だ。英吉
 利はセンタウル、オスモンツ、クワドラント、ニムロツド、マリオット、
 ウルフルナ、ニューターナー、ワデレイ、——何れも米國製より遙に堅牢
 で外觀も立派だ。殊にウォルハンプトンのウルフルナと來たら世界に
 鳴響いて鞍の具合ギヤ、リンクの仕掛第一にボルトが堅牢で取外しが
 自由だから極便利だ。バーミングラムのマリオットは二十五年前の創立で
 工場の廣さ一萬〇八百九十立方ヤード、日本の二里半四方、東京の半分
 だから驚きまア。其處のアツペレイ式ガーラード式、歐羅巴では有名
 なものだ。此物なら米國製の仕入物とは全で品が違うから競争したツて



負ける氣遣は無エ。なにしろ世界有名の大工場だから信用さい得れば品物は、ドシ、送つて来る。一臺賣つて二割から三割、附属品や部分の一つ、離して賣ると五割位儲かります。這般な巧エ儲があるもんでねエから、俺は土師君に一口乗らねエかと……」

「危ないな」と赤ら顔の肥大漢は柔と土師の肩を叩いて口輕に、「土師君氣を注げないと危ないよ。五十幡の法螺に迂濶り乗ると恢復がつかんから子。はッはッ……五十幡君妙な顔をするナ。真箇だよ、君の法螺ときたら鐵砲彌八以來の名人だから子……」

「調戲云つちやア不可エ。なんば俺がヅボラでも土師君まで迷惑を掛けやアしねエ。眞實自轉車を賣らうてんだ。現に俺が乗つてるのは濱へ来たワレレイの見本だが、同じ商賣するならウルフルナカマリオットを引受けやうと考エてるのだ。それに就ても種々諸君を驚かす神機妙算が有るが子……」

「そろ／＼眉毛に唾を塗けて」

「調戲ぢやアねエ。五十幡亮太郎も斯う信用が無からうとは豈に計らんやだ。仕方がねエ、口を緘んでるやう。だが、實際土師君の位置を喪つたに深く同情するから子。縦令伎倆のある細君があらうが、縦令清廉の徳を守らうが、此節柄浪人ぢやア忽ち咽喉が干つちまひまさア。」

「だから君」と今までニヤ／＼微笑しつゝ、無言で肉刺と庖丁を握んでゐた土師文作は初めてモグ／＼と口を開いた。「自……自轉車よりは火……火の……火の車を賣らうてので。」

「はッはッはッ……火の車なら此方にも澤山持合せが、はッはッはッ。」

東京一の險坂で一年に二度は必ず車が顛覆つて大負傷をする名代の坂の下に、安政の地震以來倒れかゝつてゐるを漸と突かい棒で支へてある伊太利のピサの塔よろしくといふ半潰れの二階家がある。此家の妻君は区内のなにかし學校へ通ふ助教ださうで、絹緋の羽織に双子の衣物脂けなしの束髪に世帯疲れした蒼白い顔のある顔を朝寒の風に吹かして通る度に近所の者は必ず見送つて肺病雷神——何故だか知らぬが——と譚名を付けたさうだ。

主人は前回に見えた土師文作で、脊の高い瘡削すな間の抜けたやうで何處か凄味のある不思議な人相は此家へ轉して來た翌日から忽ち近所の注意を牽いて口悪な嬖から厄病學者と譚名を付けられた。夫婦の外は、妻君の阿母だといふ意地の悪さうな險相の、頭臚だけは殊勝に圓めた比丘尼の女隠居と、此三人暮しで、晝間は夫婦とも大抵留

守なので、毎でも女隠居が唯ツた一人で留守番をしてゐた。押柄な突慳貪な小面の憎い物言振は出入の酒屋八百屋を驚かして安達が原と綽名を付けられた。

肺病雷神と厄病學者と安達が原と——此三人で組織た土師の家は此界限の札附で、土師さんと尋ねるより綽名を呼んだ方が通りの好い位である。しかし實際は安達が原どのが少と拗けてゐるだけで夫婦は根がお心善しの上人間である。唯だ何れも無愛想で口數が少ないので三人顔を合はしても隠氣な處へ、近頃は文作が新聞社を罷められた不平で物置めきたる二階に垂籠めてばかりゐるので、家庭が愈々物凄しく何時までも寒氣がひとしは侵徹つて、徐々櫻が咲き匂ふ彼岸時候になつても春めかなかつた。

妻君のおいよが蒼白い顔を尖らして比丘尼の隠居と合膳で夕餐の茶漬

を濟ました處へ、茫然と歸つて來たは主人文作で微醉機嫌の赤味を帯びた顔へ例の凄しい微笑を泛べて無言で點頭きながら長火鉢の傍にどかりと座つた。

「何處へ行らしたつた？」とおいよは澄し返つて、ジロツと見た。

「五……五十幡と一緒に銀座を漫歩いて、あの毎……毎日社の……あの

……」

「銀座へ行らしたつたの。」とおいよは茶を注ぐ手を止めて上目で昵と良人の顔を凝視め、「何故勝川さんへ行らつしやらないの？」

「行……行つたつて仕方ない。」

「何故仕方が無いの？」とおいよは焦れつたさうに茶碗を突き出しながら、「出掛ける時は行らつしやる筈でしたに。なんぼ勝川さんが冷淡な方

だつて貴夫とは社の創立以來十年からの御交際ですもの。貴夫が泣付い

てお頼みなされれば世話をして下さらない理由が無い。世話の出来ない身分ぢやなし、今では高等官二等といふ重いお役ぢやアありませんか、貴夫の一人や二人何處へ適るたつて容易しだと思ひます子。ですから行つてお願ひなさいとあの位、妾が諄く云つたのに……」

「勝川は無……無駄です。」と文作は口邊に冷笑を寄せて、「彼は非常に冷淡な男……」

「冷淡々々つて此方が頼まなければ……」

「頼……頼んでも無駄です。世話をする人情があるなら突……突然社を潰して人……人を困……困らせるやうな、爾……爾んな失敬な事は……」

「けれども當つて見なければ解らないワ、とおいよは沈着き拂つた容子を擬つて、「なにしろ貴夫のやうに頼みもしないで冷淡だの何だのと邪推ばかり廻してゐては仕様が無い。先般だつて堤さんが折角親切に世話を

しやうと仰しやッてお遣しなすツたのに那樣な失禮な返事をお出しなす
るツて事が……誰だツて怒つちまひまさア。勝川さんだツて猶だ一度も
頼みに行らッしやらない中から貴方が獨りで冷淡だと斷めてお了ひなす
ツたンぢやないか。』

『頼……頼まないでも、勝川の冷淡は誰……誰でも知つてる、』と文作は
冷へた茶を一口舐めて、『社にゐたものは、原が二……二十圓の囑托に
出たきりで、他はみ……みんな關ひつけない……』

『でも原さんをお世話なすツたなら、貴夫は無論——十年から關係があ
る……』

『原は同……同郷だから……』

『それだつても貴夫。貴夫は十年から——勝川さんが新聞を創めた時分
から……』

『だから世……世話をする理由なのを世……世話しないんだから、だか
ら冷……冷淡ツて云ふんだ。』

『そ、そんな不人情な……』とおいよは凝と思案してゐたが、臆て深い
歎息を吐いて、『仕様がな、平氣でゐらッしやるんだから。毎日、勝
手な處へばかり行らッして御自分の處置をつける工風を少ともなさらな
いから、何時まで經ツたツて口の出來やうわけはない。そりやア貴夫も
名を賣つた方だから豈夫に新聞の校正にも出られますまいが、三國誌時
代とは違ひますから子、草廬に高臥して三顧の禮を待つたツて誰れも來
者はありませんワ。勝川さんだツて——あの位名を賣つた方ですへ實際
を手廣くして大臣や元老に立入つて出世なすツたぢやアありませんか。
頼むのが嫌だと仰しやツた日には際限が無い。そりやア膝組で咄の出來
る方で世話をして下さるなら之に上越した事アないが、五十幡さんのお

仲間ぢやア世話の出来る理由がない。ねエ貴夫……』

『五十……五十幡にた……頼みやアしない。』

『でもよく五十幡さんの處へ行らッしやぢやアありませんか。』

『そ……それは唯だ遊んでゐても仕……仕方がないから、五十幡の鑛油

でも賣ッて見やうと思ッて……』

『五十幡さんの鑛油……オホ、ッ、』とおいよは淋しさうに笑つて、

『貴夫が奔走なすッたら嘸賣れませうよ。五十幡さんが自轉車を乘廻し

てさへ一ト月も掛つて漸と十鐘試験に何處とかへ納めたゞけだッてエの

に、貴夫が口無調法で世辭愛嬌もなく賣込まうとしたッて……オホ、ッ、

ッ、ッ、眞個に馬鹿らしいワ。同じ頭を下げて頼むなら勝川さんなり堤

さんなり何處へなりと行らしッて身分をお頼みなすッた方が甚麼なに勝

しだらう。』

『……ま、まア待てば甘露ッて事が……爾んなに急……急いて堤や勝川に頼まんでも……』

『氣樂を云つてらッしやるよ、』とおいよは焦れッたさうに搔平した灰に

火箸を手荒く突込みつ、『恚うして少とでも妾が月給を取つてから凌

ぎは附くやうなもの、萬一妾が病氣になッたら奈何なさる、社が潰れ

てからは最う一ト月も越してるのに、毎日、勝手に漫歩いて身分の事

なんか全で考へてゐらッしやらないから。勿論名を大切になさるンだら

うが、縦令名が惜いからッて家族が困るのに著述をして原稿料を取らう

ぢやなし、新聞や雑誌へ投書をして報酬を貰はうともしないで、其くせ

勉強をなさるでもなくぶら、してゐらッしやるのは、なんば餘裕のあ

るのが文學者の常だッて……』

とおいよは愚痴やら忌味やら諄々と不平の有る限りを陳べ立てた。文

作は瘠れた片頬に凄しい微笑を寄つ、紙莢を燻かしながらおいよの壁訴
 訟を聞いてゐた。

文作は當代の奇才子と云はれた勝川が創立した新聞社の文藝擔任の記
 者で、一度は何々と署名した漫筆や批評が文壇を騒がして何社の何と珍
 重された事もあつた。で、猶だ青春の野心充滿したる頃で戯作者上りの
 出来星文學者や素人離れのしない似而非小説家や戀愛神聖に浮身を扮す
 新躰詩連を白眼睥睨して勁拔奇警の説を吐き、世を拗者の名を歌はれて
 文壇に二人となき奇物と言囃された事もあつた。

文作が之までになるには中々尋常ならぬ苦辛で、自から勞働して衣食
 する餘閑に苦學し嗜好が原因で操觚社會の一人となつたのであるから、
 歌俳諧川柳都々逸の投書三昧から粹が身を喰ふ果の三代目文學者とは自
 ら違つて、左したる學問はなくとも社會の辛酸を味つてゐるだけに何を

書いても着眼の變つた處が呼物となつて賣出したのである。で、新聞郵
 便牛乳の三配達から或時は車を挽いて散三安泊の蚤虱に半夜の夢を噪が
 した往日と比べたら左も右も文壇の一人と云はれて折々は新聞や雑誌に
 學士や博士と一緒に名を列べられるやうになつたは成功の一段として満
 足しても可いのである、且つ往日は安泊に起臥したものが文筆の名を知
 られたお底に教育ある(學校教師をさへ勤める)妻女を娶つて理想的の家
 庭を作るを得たは人生幸福の一段として満足しても可いのである。然る
 に何事をも冷視して人生を謔浪傲靨に附するを快とする文作は常に自分
 の境界をも冷笑して人生の最大滑稽だと云つた。其意味は誰にも判然解
 らぬが、文作が常套の不思議な詭説から推すと善くも悪くも何方にも解
 釋出来るので。

おいよは文作と一歳違ひの今年三十になる教師盛りである。本は好い



た同士の共稼で相互の理想をで、ツち合はしてスウ井ト、ホームを樂んだ夫婦中であつたが、さて一緒になつて見ると文作は思つたほどの親切者でなく、おいは惚抜いたほどの淑女でなく、割合に伎倆の無い迂闊な、ホ、ン男で、案外に意氣地無し、愚痴ッばい引摺女で、お互に希望が多かつた、いけに結婚して間もなく索然としたが、各々理想の爲に縛られて外見には愉快らしく見えて實は面白くない日を送つてゐた。

で、僅ながら共稼で左したる困苦もなく一年ばかりは氣樂に暮してゐたが、其中故郷の兩親が長煩ひをして擧句が若干の負債を殘して死んで了う。文作は窒扶斯を煩つて三月を病院に一月を大磯に病後の保養遊びをした。おいは二度流産をして一度は病院に二月入院した。其上に隣家から出た火事に焚かれて夫婦共に寢衣一貫の全裸となり、或時は文作がツイ騙されて連印した友人の債務を尻拭ひする。何や彼や續い

ての失費が篤んだ處へおいは父が破産して行方知れずとなつたので、取殘された阿母と弟とを引取るといふ始末で、左らぬだに追々逼迫する此頃の諸色高直の折から世帯の苦勞が段々増して、之と同時に家庭の不平が愈々長じて來た。

處へ文作は新聞社を罷られた。恰も政治社會は政黨内閣組織せられて文作が平生兄弟分のやうに咄す勝川は一蹴して勅任二等の榮職に任じ、文作が常から三文野郎と冷笑する何某さへ高等官五等の秘書官を拜命した。其時に新聞社は瓦解して文作は浪人となつたのである。多くの人は得意揚々たる時獨り文作は不平怏々として世間と共に勝川が糟糠の友を賣つたる不徳義を憤つた。けれども一向口へは出さないで例の通り最大滑稽だと冷笑してゐた。

けれどもおいは頗る不快だつた。時の廻合せと云ひながら餘所の榮



華に引替へて良夫の腑甲斐なさを口惜しく思つた。加之良夫が一朝位置を喪つたを格別に憂ふる色なく、勿論折々は鬱込んでゐたが、再び職を求めやうと苦心する容子が見えぬを面白からず思つて間がな隙がな奉公口を探す運動を勧めたが、文作の内心は兎にかく外面は冷然と構へて一家の困難が目前に迫り来るをも無頓着に澄し込んでゐた。

おいよは左にかく教員の端くれに座るだけの教育はあつても、根が苦勞性の女の常として良夫の身分を心配して前後の思慮もなく文作の師たり友たる勝川に泣付いて一日も早く相當の地位を得させたき希望が頻りで左もなくば自分が勤める學校の校長堤何がしが親切に世話して呉れるといふを幸ひに頼込んで多少なり収入ある方便を片時も早く附けたいとやきもきしてゐた。で、文作が割合に绰々自如として、新聞雜誌へ投書して小遣錢を取る術だになさで武士は喰はず高楊枝を極込んでゐるらし

いのを戻かしく思つた。

此日も散三愚痴を陳立てた末、文作が張合の無いほど平氣で聞流してゐるにあぐみ果て、口を緘んで了つた。恰度庖厨の跡片附を済ました安達が原ぞのは長火鉢の傍にムツと座つて長羅傘の煙管をバク、バク、煙かしながら文作の冷笑うやうな顔とおいよが前額に青筋を出して小焦れた顔とを代るく凝視めてゐた。

「奈何なさるの？」とおいよは横目で睨と良夫の顔を凝視めながら、「勝川さんへ行らッしやるのがお嫌なら堤さんにお頼みなさいナ。」

「つ……堤」と文作は妙な口を拗めて、「堤に何が周旋出来るものか……」

「何故？——堤さんは小學校の校長でも教育家として名が賣れてる方ですから世間も随分廣いし本屋にも交際が有るから……」

「ふ、ふ、ッ……」

「笑ひでツちやアありません、」とおいよは断乎とした調子で、「儲蓄があるぢやなし、妾が少とばかり月給を取つたからつて貴夫が若干か稼いで下さらないと此節柄逆も……何故堤さんに頼むのはお嫌なの？」

「堤のやうな男はき……きらいだ。」
 「えッ、」とおいよは良夫の言葉が俄に厲しくなつたを不審つて暫らく昵つと凝視めた、「何故お嫌ひ？」

「な……なせでも嫌ひだ」と文作は苦々しい顔をして他方を向いた。
 「何故お嫌ひなさるの、」とおいよは裁判官が詰るやうな調子で、「お嫌ひなさる筈はないが……親切で能く人の世話をなさる那樣な好い方は滅多に有りはしない……」

「止しなさいよ、おいよ、」と今迄無言で二人の容子を見てゐた阿母は、ボンと煙管を叩いて齒を露出しつゝ、「お前ばツかり氣を揉んだつて無益だ

よウ。文作どんは賢い學者だもの、今に太く出世さツしやるに違エねエだ。だから俺ア安心して臍栗でも貸付けべエ、はッはッはア……」
 「爾うだ子、お母さんの云ふ通りサ、」とおいよは後れ毛を前齒で、ギリ、と噛みながら、「馬鹿々々しいよ。女の細腕で立派な旦那様を喰はして上げるツてのは妾も飛んだ好い月日の下に生れたもんだねエ。」
 文作は緩茶をがぶと飲んで突と座を起ち登音荒く階子段を踏んで眞暗な二階へと行つた。聽て隣寸を摺る音が聞えた時、阿母はニヤリと皮肉な微笑を洩し、おいよは懷に願を突込で尻と思案した。

三

翌る日は日曜日でおいよは例もより朝寢をしたが、二階に一人で臥た文作は朝食が濟んで十時を點つても起きなかつた。

中東

十一時近く前から噂のあつた校長の堤が訪問した。おいよはいそいそして客間に請じ、強に文作を起したので不承不承に蓐を出で顔も洗はずに苦り切つた顔をして客間に出た。

堤は四十恰好の眞黒に髻の生へた躰格の立派な男で紬の紋付の羽織に嘉平治の袴を着け博多の帯に搦んだ時計の鐵鎖を頗りに捻つてゐた。

「太いお寒い事で、」と柔かな質朴な聲で時候の挨拶をした。文作は無言で無作法に會釋した。いけで苦り切つてゐた。

「先日は失敬な手紙を差上げて太い御立腹のやうぢやつた、」と片頬に笑を含みつゝ、「實は手紙の書きやうが悪るかつたでお氣に觸つたぢやらうが、斯ういふ理由でござる。」

「誠にいッこくでムいますから……オホ、ホ、」とおいよは茶を酌んで薦めながら、「先日も貴方の御親切を無にして飛んでもない失禮の手紙を差上げましたッて……、」

「いや全く私の方が悪るかつたので、先生方の御見識からは無論お断りあるが當然でござる、」と堤は鐵鎖をチャラ／＼捻りながら落着き拂つた合聲で、「しかし今日は枉げて御承引を願ひたい儀がありましてナ、實は此度我々同志の機關の教育雜誌を發行しまして、大に普通教育の爲め盡力しやうといふので、勿論資本家もありませんし黒幕もありませんし參謀官もありませんし十分準備は出來てますが、唯だ事務と編輯と併せて主裁する経験家を缺いてますのでナ。そこで先生のやうな伎倆家が恰も此際に閑散になつたを幸ひに編輯及び事務總理を願ひたいと我々同志一統の熱望でござる。」

「誠に毎度御親切様に、」とおいよは文作が聞えぬ振して他方を向ひてゐるを戻かしがつて差出嘴を容れた。

「爾ういふ事なら是迄の経験がありますから……ねエ、貴夫、お望み通りで結構なお話ぢやアありませんか。」

「唯だ編輯を纏めて戴けば好いので、新聞の切抜雑報は書生がおりますからお指揮を願へば宜しいのでござる。其外に若し教育上或は文藝上の御論説歟隨筆やうのものを折々書いて戴けば好いので、勿論之は御隨意でござる……御承諾出来ませうかな？」

文作は紙賃を燻かしながら天井の隅を凝視めて返事をしなかつた。堤校長は口を結んで文作の容子を凝と見た。

「尤も創業の際で十分の御報酬は出来ませんが、堤は較や暫らくして重々しく、『さし當つては月二回の發行で二十五圓呈上致します。勿論追々は週刊にして新聞の性質に變へる計畫でござるに依て、其時は復た段々と殖やします。』

「結構でムいます、」とおいよは良夫の無愛想を取繕ひたさに再び嘴を出した。「月二回なら大してお忙がしい事もありません、結構なお咄でムいます。」

「中々以て僅に二十五金では先生をお招き申すに足りないのは勿論でござるが、しかし奥さん、堤は較や躊躇ふやうな調子でおいよに向ひ、『愈々御相談が出来ますと、猶だ外に願ふ仕事は澤山ござる。隨て定つた額の外餘分の御所得もござらうツて譯で……』

「へエ……是非御周旋遊ばして……」とおいよは獨り合點んで文作の無愛想な沈黙を戻かしがりつゝ、「ねエ貴夫、結構なお咄ぢやアありませんか。」

「何卒御承諾を願ひたいもんでござる。愈々御承諾ならば復た種々秘密のお話もして御盡力を願はなければ……なア奥さん、貴婦からも是非お



「勧めを願ひたす。」
「否エ、貴方、結構過ぎたお咄でムいます、』とおいよは此甘い口の掛つたを遁すまじとするやうに自分の権識も忘れて、『何卒御周旋を願ひます。文作も御覽の通り不調法者でムいますが、雑誌の編輯だけは仕馴れておりますから。』

「左様でござる。何れも素人揃ひで一向案内が解りませんのでナ」と堤は莞爾と笑つて黒髯を撫でつゝ、『若し先生が一臂の力をお貸し下すつたなら我々同志は謹んでお指揮を願はうといふので……且つ只今も申上げる通り俸給は假に二十五金と定めて置きますが、種々外に御面倒を願ふ事もござるので、自然お骨折に依ては二十五金が五十金百金にも上る事もあらうかと……』
「な……なにを爲……爲るです、』と文作は唐突に口を尖らして云つた。

「はッ……』と堤は文作の尋ねる意味が確と取りかねたやうに妙な顔をした。『雑誌の編輯を願ひたいと……』
「い……いや。雑誌編輯以外の仕……仕事ッてのは……』
「あ、あ、左様でござるか。それはナ、極秘密でござるが……』と堤は暫らく考へて居たが、聴て微笑みつゝ、『貴處方ならお話し申しても差支はあるまい。實はナ、今度の雑誌の資本家といふは御承知の大運堂で、我々同志は資本を貸して呉れたを徳として大運堂の新讀本と新修身書を教科書に採用する運動の應援をしやうといふので……斯う申すと卑劣なやうでござるが、大運堂で出版したは某博士の檢閲もあつた折紙附のものであるから縦合私の關係が無くとも教科書撰定の問題が起れば大運堂のを推薦するが最も公平の審査でござる。畢竟私の義理の爲と云ひながら最良の教科書を推薦するのでござるから、矢張我が教育界の爲め盡す

ので良心に疚しい事はござらぬ……」

「雑誌はだ……だい運堂の機関ですか？」

「雑誌は誰の機関でもないの……手初に各教科書を厳しく批評して自
から大運堂の提灯を持つやうな結果になるも大運堂から頼まれたんでな
く……」

「す……すると錢になりませんナ」と文作は皮肉な微笑を洩しつゝ、鋭く
切込んだ。

「はア……」と堤は意外な不意打にトギマガシして急に行詰つて了つた。

「椽の下のち……ちから持ですナ」と文作は再び冷笑つた。

「そ……それがそれ」と堤は故と沈着いて見せて、「御承知の通り教科書
は非常に儲かりますからナ、若し我々の社の應援が有力でしたなら縦令
頼まれたでなくとも夫れだけの報酬は必ずあるべき筈でござる……」

「そ……そこへ附込むので……」

「附込むわけではなく、我々は好意で盡したにしろ、謝禮をするは商人の
常でござるから、受けんといふわけにも行かんで、受けた處で賄賂を取
つたとは大に性質を異にしますから少しも憚る事はない……」

「わ……わかりました」と文作は漸と合點めたやうな顔をして口邊に冷
笑ひながら、「幾何儲かります？」

「御盡力次第でござるが」と堤は言掛けて昵と考へ、暫らくして、ニツ
と微笑みつゝ、「愈々御相談が纏まれば秘密のお咄もまだ澤山ござるが……」

……之は御入社後に譲つて、最う一件は小學教員優遇法でござる。今度教
育費國庫補助案が議會を通過しましたので教員の待遇も大分面目を更め
るでござらうが、我々は猶ほ満足が出来ないので……斯んな事を申すと我
田引水に聞えて困りますが、從來の教員待遇は職工よりも下等でござッ



たからナ、多少程度を上して判任官吏同様の恩恵を與へて呉れた處で決して満足するわけに參らんです。尤も俸給や退隱料のみを云ふではござらんが、國民の教育を司る重い責任あるものが車夫馬丁よりも輕蔑せられるのは第一に此收入の少いのが原因でござる。一時巡査の薄給を憐む同情の聲が大分聞えました。巡査は警察權を戴いて威權を奮ふ事が出来る。教員は氣の毒なもので道德の模範たらねばならぬ職務から權力を以て人に望む事も出來ず、輕蔑を甘んじて忍ばねばならんです。地方へ行くと解りますが、兒供が巡査は恐がりますが教員は馬鹿にします。誠に情ない事で昔は物の師匠は一郷の師表と仰がれて何かの集會に村名主より上席に就いたものが今では何處の村でも教員は厄介者と輕蔑されてます。勿論人物の無い爲でござらうが、今の教員待遇では迎も人物が小學教員となる筈がないです。』

『之……しかし貴君のやうな大人物が……』と文作は満面頰る、如く冷笑した。

『はッ……』と堤は有繋に躊躇ひて顔を赤くしたが、忽ち頤髯を握つて苦笑ひしつゝ、『御嘲弄では耻入りますが、畢竟我々如き薄徳無學の者が團栗の脊競べを致すも教員待遇の宜しきを得ないからでござる。そこで我々が優待を望むは我慾を貪るやうで甚だ耻入りますが、請ふ腕より初めよで矢張一般教育界の利益を思ふので……』

『御……御奇特な事で、』と文作はニヤ、ニヤ、笑ひながら微温茶を啜つた。おいよは良人が無愛想な、時としては憚りなく冷笑さへして較やともすると氣に觸るやうな角目だちさうな文作の無作法な舉動を心配して互代りに二人の顔を見競べつゝ、晝餐の準備さへするを忘れてゐた。

『御盡力下さるでせうか？』

「お……お断りします、」と文作は断乎と力を籠めて云つた。
 「な……なにを仰しやるの、」とおいよは周章て文作に向ひ、「貴夫、奈何なすつたの、這般な結構な口が、何處を搜したからツて……折角先ア御親切に御世話下さつたのを……」
 「御承諾出来ませんですか」と堤は垂頭いて考へたが臆て徐ろに頭を上げ莞爾かに打笑みつ、「しかし御即答は求めませんから、篤と御熟考あつて……」
 「熟……熟考する必要がないです、」と文作は一向膠もなく、「断然お……」

お断りします』
 「復た一酷な事を仰しやる、」とおいよは破れ掛つた相談を取繕らうと氣を揉んで、「貴方、何卒お腹をお立ち遊ばさないで、斯ういふ一酷な御遠慮の無い氣性でムりますから、何卒御勘辨遊ばして……何れ緩乎と相談

の上で御挨拶致しませうから……」

「相、相談せんでも可い。お……お断りします」

「でござるか、」と堤は取付く島もなく困じ果てた様子で、「止むを得ませんな。が、私は同志一統の名代でござるから、簡単に御不承諾の理由を伺ひたいもので——其理由に依ては百歩も千歩もお譲り致して苦しくござらん。」

「う……いつたい教育家が嫌ひです、」と文作は皮肉な冷笑するやうな口吻で、「教育雑誌が大嫌ひ——学校の先生が大嫌ひ——教科書運動は一種の詐偽です——教員優待より罪人優待即ち監獄改良が急務です。」

「何です子、堤先生の前で、」とおいよは氣の毒さうに良人を嗜めた。「復た貴夫の病氣が初よりました子。」

「今の小……小學教員は兒供を戕ふ社會の毒素です、」と文作は口啞り勝



四

ちの言葉に力を入れて、「高利貸をする、女郎買をする、女教師を妾にする、本屋から賄賂を取る、生徒に物を賣附ける……」

「でござるか……成ッ御道理……でござるか……成ッ……」と堤は去氣なき躰を粧つて眼をバチクリさして居た。おいよは幾度か夫人の無遠慮な言葉を取りなさうと口まで出掛つては言ひそゝくれてゐた。

「ま……まかし貴處方はエ……エライ大教育家です」と文作は一と際力を籠めて言放すと同時に哄然と笑出した。「あッはッはッはッ……」

堤校長が手持無沙汰で歸つたあとは茶の間で母子夫婦が三縮みをして睨合つてゐた、文作の苦り切つた顔と、おいよの眼尻を釣上げて焦込んだ顔と、阿母の意地悪るさうな笑を含んで空嘯く顔とで。

「先ア么麼する御了簡なの」とおいよは暫らくして文作に向ひ、「折角堤さんが態々親切に云つて下さつたのを、何が氣に入らないでお断んなすつた。月給が二十五圓で、教科書運動の應援をすれば若干か餘分の所得もある、這般な甘い話は澤山はありませんワ。從來の事をお考へなさい十年も毎日一日勤めて僅つた十八圓ぢやアありませんか……」

「なアに子、文作さんは百圓も貰はなけりやア」と阿母は妙う冷諷すやうに笑つて、「日本一の豪い人だもの。」

「それもお嫌なら仕方が無いが、同じ断るにも断りやうがありさうなものです子。あア剣もホロ、に愛想氣なく加之に學校教師の悪語まで仰しやッては人の感情を破しますから子……」

「こ……こはしたッて可い」と文作は懽然として言葉鋭く、「あ……あんな俗物は偶にやアお……おどかしてやらんとナ……」

「貴夫は可いでせうが、」とおいよは眉に八の字を寄せて、「妾は困りますよ。堤さんには種々お世話になつてゐるんですから、今日のやうな事があると明日ツから顔が合はされませんかから子。」

『そ……そんなら學校を罷……罷めるサ。』

「えッ、」とおいよは眼を釣上げて昵と文作を凝視めた。「學校を止せと仰しやるの……止しませうとも、止せと仰しやるなら早速辭職しませう。

誰が好き好んで雨の日も風の日も學校通ひをして忌な思ひをして惡戯らな頑童様の御機嫌を取りたいのですか。出来るなら絹物纏みで長火鉢の傍にチンと濟まして夫人顔をしてゐたいですが、貴夫が十八圓の月給では——否エ、馬鹿にするンぢやありませんよ——十八圓の月給では矢張妾が八圓なり十圓なり稼がなければならぬから、忌な思ひをするのも世帯の爲だと辛抱してゐるのに馬鹿々々しい。早速止しませう、明日

直ぐ辭表を出しませう、』

「辭……辭職しろ、」と文作は啞り勝ちな口を愈々啞らして、「S……Sやで教育が出来るものか、め……めしを食ふだけが目……目的なら、學……學校の教師よりは、た……たばこを巻く内職でもしろ。」

「何ですと、」とおいよはヂリ、と詰寄つて、教師を止して卷蕘の内職をしると……好いお心掛です子、女房に職工同様な眞似をさしたら嘸貴夫のお手柄になりませう。けれども教師をしてこそ氣樂に十圓の月給が取れるやうなもの、卷蕘の内職ぢやア眞黒になつて四圓歟五圓——么麼して世帯を張る御了簡です。」

「解つてらアナ、梶棒へでも握まる御了簡だらうサ、」と阿母は憎さげに冷笑した。

「調戲ぢやアない、」とおいよはジロツと阿母を横目で睨みつ、「ねエ貴

中

夫、么麼なざるンです。貴夫は折角口が出来ても断つてお了ひなさる、其上に妾までが教師を罷にして直ぐ其明日からの生計は么麼しますか？」

「么麼したって好いや子、」と阿母は文作を輕蔑すやうに下目に見て、「お前が慙じ月給を取るから恃にされるンだよ。寧ろ罷めて了つたら、文作さんだつて男だもの、稼いで下さらア子、安心して思ふさま贅澤をするサ。文作さんは力があるもの、車力でも土方でも何でも出来るサ。」

「阿母さん、黙つておいでよ、眞摯な相談だから子。」とおいよは暫らく沈吟してゐたが、懸て裕然と沈着拂つて、「元來何が肝癢に觸つて其様な無鐵砲な事を仰しやる。堤さんには四五年來お世話になつて、妾が碌な學問も出来ないくせに十圓の月給を戴いてゐるのは悉皆堤さんのお庇ですワ。ですから……」

「だ……だからお前は堤のめ……めかけだと評……評判だ。」

「えッ、何を仰しやいます？」

「お……お前は堤のめ……めかけ……」

「妾ですと、」とおいよは顔色を變へて肩を前の方に突出した。「何が證據で……外の事とは違ひます。戸籍上貴夫の妻なら有夫姦ぢやアありませんか。怪しからん事を仰しやる。縦令良夫だからツて聞捨てならぬ飛んでもない事を仰しやる。さア、誰が云ひました、伺ひませう。」

「天……天知る地知る、だ……だれでも知つてる、」と文作は鼻の頭で冷笑ひつゝ、「お前が堤の妾だつてのは明白な事實で、俺は既から知つてゐる。」

「何を證據に仰しやる、」とおいよは蒼白い顔を眞赤に染め顛顛を激しく動かしたつゝ、「證據を仰しやい。なんば夫婦の間でも聞捨てにならん事を仰しやる。」

「えッ、何だい、お前が有夫姦した？」と阿母は勃然となつて手厲く長煙管を叩き立て、「飛んでもない。なんぼ婿だかつらて證據も無い事を難癖附けられちやア勘辨出来るもんか。さア、么麼な證據がある——有るなら聞かうよ。」

「有……有るです。」と文作は裕々と沈着顔に皮一枚下で冷笑して、「今……今月の最初の土曜日は歸家がお……おそかつたが、何……何處へ廻り道した？」

「土曜日は毎でも教員會議がありますから、何處へも廻りませんサ。」

「夜……夜るまで會議が掛つたのか？」

「何を疑るんです。」とおいよは急に沈着いて見せた。「あの日は試験の打合せと卒業式の相談で手間を費つたので、衆人歸宅は日が暮れました。」

「ふウむ、」と文作は鼻で會釋ふやうな調子でおいよを正面に凝視めなが

ら、「そ……そんなら飯田町のど……どて下の待合へ堤と一緒に入つたのはだ……誰だ？」

「えッ、」とおいよは急に行詰つて眞赤になつて垂頭いた。で、聲を慄はして、「妾だと仰しやるんですか……存じませんよ。」

「知……知らないだらう、」と文作は皮肉にニヤ、冷笑しつ、「知……知つてるとは云はれまい。ま……まだ有る。俺の方では探訪が届いてゐる。第一堤といふ奴が氣……氣に入らない。彼奴は……」

と文作は重い口を咄らしつ、堤が常に書肆と結托して不義の利を貪り、内職に學校用具教科書の賣捌店を開いて生徒に高く賣付け、或は不正の高利を貸付けて良民の血を搾り、或は好色の慾を擅にして色里に狂ふは猶だしも處女を誑かし人の妻をすら奪ふ不行跡を數へ立てた。之は或る新聞社が教育社會の内幕を曝露する爲め探訪して搜り得た材料で、

文作の妻が堤校長の妾の如き關係であるといふ最も信すべからざる奇怪な秘密さへ端なくも探訪者の口から傳へて文作の耳へ入つたのである。けれども若干の道義心もあつて何事にも控目な文作が深く心に收めて噓にも出さなかつたのは、勿論、悉く事實だと信じてゐなかつたからである。殊に我が妻に關係する醜聞一條の如きは初めは左まで念頭に置かなかつたが、有繋に平かならぬ心地して油断なく注意してゐると、疑心暗鬼の譬喩で怪しい素振が全然無いでもなかつた。けれども萬事を冷笑し去る東洋風の理想に走り勝ちな文作は飽くまでも冷淡を粧つて今日の今までは素知しらぬ顔をしてゐたのが、ツイ賣言葉を買つた口争に花が咲いて肝癢紛れに口走つたので、實は猶だ評判の眞偽を確かめたわけはないのだ。

おいよは顔色を喪くして恰で魂魄の抜けて了つたやうに活きた色なく

悄然としてゐたが、聽て靜かに顔を上げて暫らく涙一杯の眼を睜つて文作が空嘯く顔を凝視めてゐた。

「嘘です、全で嘘です」と較やあつておいよは涙交りの震へ聲を甲走らした。「堤さんは小學校の校長中で勢力がありますから、随分敵も澤山あります。不行跡どころか非常に潔癖の人ですから却て嫌はれる位で妾は其様な失敬な評判を立てた人も大抵推測が出来ます。悉皆嘘です、根も葉もありません……」

「う……うそだらう」と文作はニヤ、ニヤ、笑ひながら、「嘘だから驚いて顔を變……變へたんだらう！」

「口惜しいッ、失敬な事を……」とおいよは滴り落つる涙を拂ひながら口惜しさうに膝摺寄せて、「苟にも名譽を傷ける事を、人の噂ぐらゐで確とした證據もなくして仰しやる事がありますか。外の事とは違ひますから

子、最つとく判然した證據を見せて下さい。さア最つと確かな證據を

「おいよ、氣強りおし、」と阿母は長火鉢を押潰すばかりに力を籠めて、

「馬鹿々々しいや子。散三世帯の苦勞をさせられた上に難癖を付けられて

黙つてゐる事があるもんか。聞棄てにはならないよ、何とか處置をつけ

なければ……」

「さア、么麼して下さる、」とおいよは蒼くなつた顔を段々赤くし、「妾

だつて名譽を重んじますから立派に明白を立てなければ世間に顔向けが

出来ません。貴夫だつて男ぢやアありませんか、有夫姦するやうな女房

なら何故證據を擧げて離縁をなさらん……」

「此方で行くが好い、」と阿母は頭から烟の出るほど怒り立つて、「馬

鹿々々しい、なんぼお前が好いて來た家だからッて嫁に來てから今日が

日まで襦袢一枚拵いて貰はないで、世帯の半分も持たせられて、其上に立

派な世間並の旦那様風を吹かせられて、揚句が有夫姦呼はりをされる、

這般な間尺に合はない咄が唐天竺から阿蘭陀へ行つたつて有るもんか。

おいよ、こゝいらが見切時だよ。證據も何もあるもんか、難癖を付け

られたが勿化の幸福だ、此方から出て行くサ。なあ文作さん、文句は

無からう。」

「お母さんの云ふ通り、調戲にも程がある。證據が有るなら裁判へでも

何處へでもお持出しなさい。無いなら無いで、其様な事を疑ぐられ

ちやア氣拙くて面白くありませんから子、奇麗に離縁して戴きませう。」

「當然だとも、離縁して貰うサ。」と阿母は胸と頤とを一緒に突出して、

「さア、文作さん、奇麗に離縁して貰ひませう。斯うなりやア娘は么麼でも

母の妾が承知出来ないから子、嫁に來た時の衣類諸道具——お前さん



のに直して上げた琉球の書生羽織風通の小袖、以前は娘の所有だから悉皆戻して貰ひませう。さア、おいよ、躊躇する事アない。早速と離縁状を書いて貰つて今日直ぐ出て行かう。」

文作は左右から詰寄せられて口邊の冷笑が次第に消えると共に段々蒼くなつて二人の顔を睨みつけた。

「なんば良夫だからツて、」とおいよは口惜しさうに涙をポロ／＼覆しなから、「人の名譽を傷つけて平氣でゐらツしやる。此まんまには濟まされませんから子、何とか妾の顔の立つやうにして下さい。」

「離縁してお貰ひよ。這般な伎倆もないくせに嫉妬をやく男に添はして置いては母の妾が心配だから子。未練を残す事アない、早速と離縁して貰うサ……」

「貴夫、么麼して下さる——何とか仰しやツて下さらう。」

「離縁は出来ん、」と文作は蒼ざめた唇を慄はしつゝ、斷乎と云つた。

「えッ、何故です。有夫姦した女なら何故離縁をなさらんのです、」とおいよは眉に八の字を寄せ疊を叩いて詰つた。

「俺は意……意地が悪いから、」と文作は強に作つたやうな苦笑ひをしつゝ、「お前が有夫姦したと疑つたら決……決して離縁は仕ない。間……間男した女を離……離縁するは姦淫の非を遂げさせるとお……おなじだからナ。」

「何ですと、」とおいよは勃然となつて、「妾が離縁を取つて堤さんと一緒になるとでも思つてらツしやるか。人ウ、餘り馬鹿になさいますな。憚りながら之でも少とは道徳を心得てます。貴夫に彼是云はれるやうな不品行は爪の垢ほども仕ませんから子……」

「おいよ、勝手な眞似をされて泣寐入りする事アない、」と阿母は泡を飛



ばして連りに焚付けた。『お前が今ぢやア家の天下様だ。文作さんはお前の稼で食つてゐながら生意氣に亭主風を吹かして勝手な御詫を吐かすのは元來お前がお心好しだからだ』
『お母さんの云ふ通り妾が餘り人を好くしてゐるもんだからサ。散三ツぱら苦勞をして其上に外の事と違つて姦淫したと云はれちやア最う勘忍袋が切れるから子、』とおいよは焦れツたさうに突と起上つて箆筒の傍へ行つた。

『お前何處へ行くの？』と 阿母はおいよの舉動を訝りながら云つた。
『あア出て行くの、面白くないからお友達の處へ行つて當分遊んで來るよ。』
『お前ばかり出掛けて、妾が跡へ残つて旦那様のお守は眞平御免だ。』
『阿母さんも何處へでもお出掛けナ。』

『阿母さんは行處が無いから出掛けたツて仕様が無い。お前も煮切らなぢやアないか、道樂娘が勘當されやアしまし、茫然家を出で彷徨き歩くよりは奇麗さツぱりと離縁狀を取つて別れるが好いやナ……』
『爾うお母さんの云ふ通りテキ、バキは出來ないよ……』
『出來ない事があるもんか。お前が離縁を取る氣なら妾が取つてやる、』と阿母は居すまゐるを直して斷乎と言葉を更め、『さア文作さん、お前さんも男らしくもない、有夫姦するやうな娘なら未練らしく躊躇せずと早速と離縁狀を書いて貰ひませう……』

『離……離縁しません、』と文作は力を入れて云放した。
『否エ不可ません。娘は么麼でも妾が承知出來ません。さア……さア……さア書いて貰ひませう。』
『離……離縁出來ん、』と文作は眼を瞋らして聲を荒らげた。

『大層恐い顔をなさる、』と阿母は冷笑つてジロツと睨み、お前さんの怒つた顔が恐けりやア蝦蛄や鰐魚は喰べられませんワ。出来なけりやア出来ないで此方にも了簡がある。警察へなり裁判へなり持出して離縁を取つて見せる……。』

『馬鹿アいふ!』

『何だい、馬鹿アいふ!』と阿母は長煙管を叩き付けてたつみ上げた。

『おいよを離縁しない中は猶だ姑だよ、姑に對つて馬鹿とは何の呆言だ。』

『最う勘辨も絲瓜もない。』とア男らしく離縁状を書いて貰ひませう。

此方アお前さんなんか離縁されても困るンぢやアないから子……。』
文作は有繫にムラ、と肝癢が籠上げて来たを凝と胸を撫つて故とらしく苦しうに微笑した。おいよは腹立ち紛れに筆筒から出した餘所着に着更へて出掛けやうとしたが阿母の權幕の凄まじさに暫らく躊躇ひて

無言で二人を凝視めてゐた。

『おいよ、妾も行くから準備をおし、』と阿母は云ひざまに起上つた。『家の財は半分はお前の所有だから子、どんく片付けて兎も角下宿屋へでも立退かう。文作さんに與つた琉球の書生羽織と風通の小袖は元來お前の所有だから持つて行くが好い、妾が遣ひ込まれた十五圓は、どうせ返して呉れさうも無いから思切つて施與してやらア。其代り先月新調いた秩父縞のねんねこ、あいつは妾に似合ふから貰つて行かう……わア、今まで氣兼苦勞をしたが之で漸と留飲の下つたやうに樂々した。おいよ、早速と準備をしないか。お前も之から良い旦那様を見附けて填合せに樂をするサ……。』

阿母はブツクサ憎さげに罵りながら自ら先へ立つて葛籠を持出し柳行李を引摺出し今にも轉宅すやうな騒を仕初めた。



處へ格子を開ける音がして玄關に訪ふ聲が聞えたが、おいよも阿母も返事さへしなかつた。

「オイ土師君、在るかい、」と太い地聲で呼んだは五十幡亮太郎で、臆てつかい、と遠慮なしに此室まで踏込んで容子の尋常ならぬを見て眼を圓くした。「么麼した。轉宅か。大變な騒動だナ！」

五

「么麼したんだい、」と五十幡は呆氣に取られて洋袴の衣兜に手を突込んだなりに突立つてゐた。

阿母は願盼もせず勝手に荷作りをしてゐたが、有繫においよは凄まじい見相をしながらも一寸いと會釋した。

「么麼した、土師君、」と五十幡は座るのを忘れたやうに突立つたまゝ文

作の蒼くなつた氣の抜けたやうな顔を見下した。

「么麼したんだ、阿母さんも妻君も君も妙な顔をして、えッ喧嘩でも爲つたかい？」

「令閨、么麼しました、」と五十幡は更においよに對つて、「么麼したんです？」

「離縁されました、」とおいよは投出すやうに云つた。

「離縁！」と五十幡は豆鐵砲の不意打を喰つた鳩のやうに眼を一杯に睜つた。「離縁——么麼いふ仔細で？」

「妾が有夫姦しましたと！」

「有夫姦！」と五十幡は呆れ果てた顔をして暫らく口を緘んで了つた。

臆てぞツかど座込んで文作の顔を覗きつゝ、「土師君、么麼いふ間違だい。間男は馬鹿らしい。苟にも文壇に遊ぶ君や教育の任に當る妻君の間に生

する問題でねエや。えッ、土師君、元來先ア么麼したッてんだ？」
 「離……離縁して呉れといふんだ、」と文作は漸々苦くしげに口内り
 つ、云つた。

「否エ、貴夫が有夫姦したと仰しやるから……」とおいよは口惜しさう
 にペツタリ筆筒の前に座つて、「何の證據もなく自分が邪推を廻して人を
 有夫姦呼ばはりしますから、妾だッて外の事とは違ひますから口惜しう
 ムいます……」

「道理、道理、」と五十幡は連りに點頭いて同情を示した。「有夫姦は重大
 な罪だから、何程夫婦の間でも是りやア妻君が立腹するのが道理。土師
 君、平生謹慎な君にも似合はねエ事をいふ。元來證據も無いのに何だッ
 て其様な難癖付けたんだ？」

「斯……斯ういふ譯だ、」と文作は例の淋しい微笑を含みつ、「おいよの

学校の校長堤——この堤が教……教育家に似合はぬ不品行な奴で、お

いよを妾にしてゐるといふ風説を咄したら大變怒りだしたんだ……」

「あッ、堤——好色家と評判の堤、」と五十幡は合點顔に首肯いて、「あの
 男怪しからん奴だ、俺の友達の妹も既の事玩弄にされる處だッた。先般
 も或る教育家の許で奴の咄が出たが、奴めは猫のやうに柔しい聲で親切
 振を見せるから女は大抵一杯啗エ込むさうだ。だから奴の学校の女教師
 は何時の間にか騙されて奴の自由になつて了うのが例ださうだ。俺の友
 達の妹ッてのは奴の学校の卒業生で、チヨイチヨイ奴の處へ遊びに行く
 ンださうだが、一度偶然奴の妻の不在の時尋ねて二階の書齋で咄をして
 ゐると突然手を握つたさうだ。處が猶だ齡が行かんで色氣が付かんから
 唯だ肝を潰して泣出したんで、奴めも有繋に手を離して瞞して了つたさ
 うだが、實に言語道斷な怪しからん奴で俺は其咄を聞いた時新聞に剔抉

中
東

かうと思つたが友達が迷惑するから中止にしてやつた。奴の好色ときたら評判だからナ、上は侯爵の大政治家、中は美術の大保護者、下は小學の大教育家たる堤——之が好色國の三チャンピンオンだつて天下の輿論だ……」

と五十幡は幾多の實例を擧げて堤校長が質朴さうな風采に包める好色の惡癖を攻撃して自分が夫婦の喧嘩を仲裁する位置に立つを忘れてゐた。

「貴處までが妾を堤さんの自由になつてゐるやうに仰しやるんです子。」
 「イヤツ、」と五十幡は初めて氣が附いたやうに周章て言葉を變へ、「イヤツ、貴婦が堤の自由になつてゐる——其様な事ア無エのは解り切つてゐる。但だ堤が無類の好色家で、能く配下の女教師を妾にする實例があるんで、世間は堤の學校の女教師だといふと直ぐ堤の妾だといと口に云つて了う

……」
 「澤山惡語を仰しやい。だから妾は離縁して貰うんです。」

「令閨、爾う怒ツちや不可ねエ、」と五十幡は愛嬌のある地聲で、「世間が一と口に堤の學校の女教師だと妾のやうに噂するんだから、畢竟貴婦の損で仕方がねエや。」

「けれども五十幡さん、妾が堤さんと一緒に待合入りをしたやうに云ひますから。」

「先々週の土曜日の晩でせう、飯田町の堤下の待合に。」

おいよは五十幡までが同じ事を繰返すので愕として顔色を變へた。

「貴婦が例の鼠色の蝙蝠の模様のある肩掛を着て——丁度八時頃でしたナ、俺が摺違つたんだが暗黒だつたから解らなかつたでせう。」

「人違ひです、」とおいよは急に復た眞赤になつて搾り出すやうな聲を細

中
東

め、「人違ひです。」

「不可エ〜」と五十幡は微笑しつゝ、首を掉つた。「俺は貴婦が其時小石に躓いて堤の肩に跟々と握まつたのまで知つてまさア……」

「おいよは眞赤に顔を染め身を慄はして垂頭いて了つた。」

「實は俺が土師君に咄したんで、」と五十幡は一向怯めずに平氣な顔をして、「貴婦が堤と一緒に待合入りをしたのは確に俺が證人になる。俺が見掛けたばかりぢやアねエ、あの待合には俺の遊び仲間が潜り込んでるから證人は若干もある。けれども待合入りしたから貴婦が堤と怪しいとは俺は云はねエ。學校の先生だからってお釋迦の再來ぢやアねエから氣保養に男の先生と女の先生と相鳴の突つき合位したって不思議ぢやアねエ。此位な事ア當然だ。少とも不思議は無エ。貴婦が秘すのが俺には解らねエ。俺は慥に見掛けたから、君の妻君のやうな常盤御前歟袈裟御前

歟つて貞女でゐらしつても堤と一緒に待合入りをしたと土師君に咄したんだ。なア令閨、秘さなくなつて好いちやアねエか、待合入りをしたんでお床入をしたンぢやアねエから……」

「知りませんよ、」とおいよは涙交りの腹立ち聲で、「知りませんよ。」

「秘すから可笑しい。令閨未だお嬢様でゐらッしやるナ、」と五十幡は傍若無人に臆面なく高笑ひして、「土師君、君はまた野暴に嫉妬を起したの

かい。正に二十世紀の曙白まんとする今日其様な前世紀の道德をぐぐらんが、男女交際ッて奴ア悪くねエ、一寸いと妙なもんだ。有夫姦だからッて其様に咎める理由も無エ。俺なんかも一寸いと情人にしたい妻君が其處ら中にあつて困りまさア……、はッはッはッ……なア令閨、何故待合入りが悪いだらう。俺は悪いとは思はねエ。縦令へば、之は例で



すよ、貴婦と堤と出来てるからッて若し惚合つたもんなら仕方が無エ。
士師君が嫌はれたのが伎倆が無エのだから、有夫姦だの何だのと騒ぐの
は野暮の骨頂で、二十世紀の文明には無エ事ッだと俺は思つてる。何で
も優勝劣敗で、女房だらうが亭主だらうが取るのが伎倆が有るんで取ら
れたのが意氣地なしだ……』

『僕……僕ア意氣地無しだよ、』と文作は唐突に云つた。
『こりやア驚く。君までが嫌味をいふとは實に驚く。』と五十幡は呵々と
遠慮なく笑つて、『だから文筆を止めにして商賣を初めるといふんだ。爾
う開けねエでは世話が焼き切れねエ。勝川なんかは金を儲ける伎倆は無
エが十年の友を賣つて榮達を貪ぼる算段をして首尾よく無盡に中つたの
は有繋に當世の文明を看破つてる才子だ、堤が配下の女教師を妾にする
のも慶庵賃を取られた上に高い給金の前借を倒される心配もなくて加之

に無給だから這般な利方な事ア無エ。悪くはいふもの、矢張當世の文明
を看破つてるのかも知んねエ。なア令閨、今時士師君のやうな野暮を云
つたッて初まらねエ。餘所の男とお床入だけは少と遠慮をしても待合入
りの珍鴨だけならドシ、やるべし。なアに關うもんか、世間一統が出
来るだけ狡猾こく出来るだけの不道德を法律が禁ずる土俵際まで行るん
だから男と一緒に待合入り位を咎めたら朝から晩まで叱言の絶間は無
エ。なア阿母さん、爾うぢやアねエか。』

先刻から苦虫を嚙潰したやうな顔をして忙がしさうに整理けてゐた阿
母は肝癢の腰を折られて手持無沙汰に後向きになつて柳行李の中を掻廻
してゐたが、突然五十幡に聲掛けられて野猪のやうな太い頸を身躰と一
緒に背後へ廻した。
『なア阿母さん、貴婦までが怒るッて事ア無エ。』

「怒りたかアありませんが子、」と阿母は般若が戸惑ひしたやうな顔を
 て、「文作さんが餘り痛い事をいふから。貴處は御存じなからうが、娘が
 此家へ嫁に來た時は文作さんは古机と古本箱と繼縷夜具が一と組だけ
 で、月給を澤山取つてゐなさるぢやなし、娘が稼いで世帯を助けたから
 漸と諸色の高い押迫つた世の中を奈何やら斯うやら凌いで世帯道具の一
 と通りも揃へたんで、之までになるのは中々な苦勞ぢやありませんから
 子。」

「道理く、」と五十幡は眞面目に首肯いた。

「だから貴處、」と阿母は長羅宇の烟管を叩いて、「斯うして娘が月給を取
 るのは堤さんのお底ですから、縦令んばお附合に待合へ行つたからッて
 嫉妬を起す義理が無い……」

「道理く、」と五十幡は左も感服したやうに首肯いた。

「だから餘り義理を知ら無さ過ぎると思つて、娘は辛抱しても妾が辛抱
 出来ないから寧ろ離縁して貰はうと……」

「こいつア少と氣が早過ぎる。好い歳をした苦勞人の癖に若い者と一緒
 に騒ぎ出すのは、こいつアお母さん、俺は豪氣に恨む子……」

「生意氣を云つてるよ」と阿母は忽ち勃然となつた。

「お前さんまで文作さんの肩を持つて餘計なお世話焼だ。其様な世話を
 焼く暇があるなら自分の義理でも済ますが好い。お前さん記憶えてるだ
 らう子、去年の大晦日に年が越せないツて泣付いて來た時の事を。お前
 さんの萎れ返つて蒼くなつて容子が餘り可愛想だと娘が小袖を一と揃
 ひ貸して上げたらお前さん此恩ばかりは忘れないと手を合はして拜んだ
 子。あの小袖は何時返して呉れるの、丁度會つたのが幸ひだから早速返
 して貰ひませう……」

「こりやア痛い、唐突に催促は頗る手厳しい……」
 「痛いの手厳しいのと、人を馬鹿にしてゐらア、お前さん一と月の中に返すと云つたぢやないか。男の癖にお前さんも虚言者だよ、一圓だの二圓だのと何度も借りに来て一度だつて返した事アない。文作さんの友達だけに口ばかり巧者で義理も恩も何にも知らない子。馬鹿くしい。お前さん達を對手にしてゐちやアお彼岸が十度あつても足りないから子……あアく飛んだ暇潰しをした。おいよ、さッ早速と支度してお暇乞ひしやうぢやないか。』
 「先アく阿母さん、爾う怒るもんぢやアねエ……」
 「知らないよ。』
 「こいつア不可エ。おいよさん——令閨、貴婦が何とか云はなけりやア……」

「知りませんよ、』とおいよは撥付けて突と起上つた。
 「不可エく……お母さん、令閨——おいよさん、お母さん……』と五十幡は頻りに仲裁さうとして氣を揉んだ。
 おいよと阿母はそくさど葛籠に着物を詰込み柳行李を搦げ風呂敷包を拵へて今にも出掛けさうな素振をした。文作は先刻から默然として一向素知らぬ振をして願望きもしなかつた。
 『オイ土師君』と五十幡は堪りかねて文作の膝に手を掛け揺ぶつた。『阿母さんも妻君も非常な権幕だ、形勢頗る危いぞ……オイ、奈何にかしなうか。』
 『關……關はんで置け、』と文作は斷乎と言退けた。『僕ア離縁しないが。離……離縁して呉れど迫つても、離……離縁は仕ない。いくら浮氣をしやうと男を拵へやうと離縁は決……決して仕ない』

中東

「そこだッ」と五十幡は手を拍つて、「土師君も離縁しねエといふんだからお母さんも令閨も此邊で和睦りを仕ねエとナ……喧嘩も長じると結局が附かねエから子。」

「打……打棄つて置き給へ」と文作は冷然たる語調で「勝……勝手に出て行くが好い。離……離縁は仕ないが、出て行くといふのを強に留めるわけには行かないから……」

「あア〜出て行くとも」と阿母は憎さげにツンケンして、「這般な家に誰がゐるもんか。荷物は一と先つお預けにして下宿屋へでも立退きませう。何れ離縁は裁判へ出て取つてやるから……とれ〜」と五十幡と文作とを後目に掛けつゝ玄關へと行つた。「おいよ、車は二人乗と一人乗が一臺つゝで澤山だらう子。荷物ば行李が二つに風呂敷包が二ツ三ツで殘餘は當分預けて行くんだから子……なアに賣りでもしたら裁判へ訴へて

やるまでサ。」

「阿母さん、最う一臺なけりやア、夜具蒲團を積んで行くから……妾も熟く考へたが、那樣な無益らない事で疑ぐられちやア餘り夫婦の情愛が無さ過ぎて末始終案じられるから、眞實に離縁して貰ひたくなつたよ。」

「眞實も虚もあるもんか。屁のやうな無益らん事でヤア何だの彼だのと番毎に嫉妬を起されちやア命も何も堪つたもんぢやアない。眞實に離縁して貰うんだとも、當然サ……さア車を呼んで来るから子。」

と言棄て、阿母は車を呼びに行く。おいよは有繫に氣の濟まぬやうな顔をして悄然と部屋の隅に垂頭いてゐた。文作はひうツとして懷手をしたま、堅く口を緘ぢてゐた。

「不可エナ——オイ土師君、令閨」と五十幡は獨りで氣を揉んで手に汗

を握つてキ、ヨトキ、ヨトキしてゐた。「無益らねエぢやねエか、喧嘩をするほどの事アねエ。待合入りが原因ぢやア俺が饒舌つたんだから困らアナ。なア土師君……令聞、貴婦も腹を立たねエで、俺ア平生が道德だの不道德だのツて事ア知らねエもんだから、貴婦が待合へ出掛けたのも格別不思議に思はなかつたので……」

『存じませんよ、』とおいよは腹立ち聲で突跳ねて了つた。恰も阿母が車を呼んで来たので、いと起つて風呂敷包と柳行李とを一緒に抱えつゝ、無言で入口まで出掛けたが、有繋に未練が残るやうに暫らく躊躇つた。

『おいよ、何を躊躇してゐる、』と阿母は邪見に急立てつゝ、文作と五十幡とを見て小憎らしく皮肉に微笑した。『文作さん、種々お世話さま、何れ結局を付けに復たお目にかゝるから。……箆筒兩掛悉皆錠前のまゝお預け申したよ。少とでも品が不足したら裁判へ持出すから子、其お積りで

お願い申すよ。』

と云つて障子をピツシヤリ手厲く閉めて格子戸の音も荒々しく二人は出て了つた。文作は何思ひけん、急いで起上つて玄關まで出掛つたが、再び思直して以前の座に復つて恰もおいよ母子の車を挽出す音が聞えた時、底に力の無いやうな高笑ひをした。

『土師君——土師君』と五十幡は氣の毒さうに例の元氣なく、『土師君、大に元氣を出し給へ。妻君は必と戻つて来る。あの糞婆アが仕方が無エんだ。』

文作は火鉢の傍に兎角の返事もなく考込んでゐたが、較や在つて座を起ち背後の戸棚から麥酒を持出して、

『五十幡、麥酒をやらう、』と文作は力を入れて塞子抜を捻込ながら、『はッはッはッ、二……二……二三日樂をやる。』



『安心し給へ、妻君は歸つて来るから……』
『歸……歸つて来んでも意……意地を悪く、』と文作は麥酒を浪々と二個の杯に酌ぎながら、『意地を悪く離縁はやらんから……はッはッはッ。』

之から四五日経つて、おいよは復た歸つて来たさうだ。けれども阿母の姿は見えなかつた。文作も何處へか出勤するやうになつて大抵朝の九時ごろ洋服姿で家を出掛けた。之と同時においよが學校へ通ふ薄淋しい後姿を見掛けなくなつて了つた。

(廿二年三年廿二日脱稿)

(完)

嚼 氷 冷 語



●昔し物徂徠は炒豆を嚼んで天下の豪傑を罵つたさうな。時節から早魃災をなして野に生稼なしといふ文壇だから一つ暑氣拂ひに氷でも嚼んで見やう乎。

●物徂徠といへば徂徠位小氣味の好い學者は無い。自ら三代以後の第一人と揚言して暗に日東の聖人を擬してゐたの實に素晴らしい氣象だ。

徂徠が柳澤吉保に仕へたのを痛く惜んでゐる者もあるが、吉保は當時隨一の權臣で天下の樞軸を握つてゐたから隨つて其帷幄に參する徂徠は隱然王者の師を以て任じてゐたのだ。唯だ君徳を頌し若くは君權を説いて官位を貪る曲學者や或は長官に面從阿諛して其惡詩を恭やしく褒評する俗詩人等と決して同一でないのだ。例へば富春叟が柳澤家を辭して奥州に脱奔した時岡島冠山、安藤東壁、太宰春臺等をして甲冑を帶して遙に江戸の郊外まで送らしめし如きは實に主家を憚らざる豪傑の舉動である。護園の學風は必ずしも好ましくないが、其氣象の勝れて大きく乾坤を吞吐する意氣込だけは頗る面白い。寛政以後の學者は栗山、一齋等諸先生其學殖造詣に於ては護園諸學士は本より徂翁とすら略ぼ相伯仲してゐたが、氣象だけは遙に及ばなかつた。頼山陽の如き霸心鬱勃として王侯にすら屈せず傍若無人に振舞つたが、唯だ悲憤慷慨したゞけで勿

論徂翁の大腹中には中々及ばなかつた。日本の學者で推すべきもの、眞人としては中江藤樹、醇儒としては伊藤仁齋、君子としては伊藤東涯、豪傑としては物徂徠だらう。其頃元祿から享保へかけ徳川の大全盛を極め好色本の跋扈した時代であるが、猶ほ儒者や溜徒の輩には妙な一風のある男が澤山あつた。歴史は時代を美しく見せるから、歴史を讀んだだけでは信用にならんが、今のやうに上下悉く學者も政治家も宗教家も教育家も惣て紀綱紊亂してはおらんやうだつた。殊に悲むべきは理想の權化ともいふべき學者文人等精神界までが社會の惡風に浸染して悉く商賣的事務的機械的となつて了つた。斯ういふ理想も信仰もなく目前の利益ばかりを齷齪する時代には頽俗に動かされざる眞人醇儒君子豪傑を生じて活ける理想界を見せるのが必要である。勿論黄金の外色聲香味觸を感じない社會では眞人や君子や醇儒は目前に現はれても解るまいが、

中東

徂徠のやうな王侯をだも睥睨する個儻不羈の豪傑が破鐘の聲を擧げて天下に號令したら少とは眼が攪めるだらう。でなければ文壇の將來は迎も難かしいものだ。矢張俗惡社會の後塵を拜して腐つて了うのだね。

●徂徠は聖人の道より兵學律令は勿論市井の雜事にまで通じてゐた。政談を見ると武家屋敷の作法から經濟交通宗門戶籍遊女乞食の取締まで論じてゐる。論孟一點張の腐れ學者とは大いに異なつてゐる。徂徠の見識と學殖とで小説を書かなかつたは日本文學史の恨事である。時勢さへ變つてゐたら徂徠は必ず小説を書くべき男だ。巢林子の文章を激稱した事や鼠の嫁入を人の間に答へた事や其平日經を解き古文を教ふるに比喩造語に巧みであつた事は徂徠が優に小説家たるべき資格を供ふるを證明してゐる。シエークスピアをベークソンの匿名だといふ牽強附會の説が英國に流布してゐるが、巢林子を徂徠の變名だといふ臆説が出ないのは不

思義で、之は畢竟日本で夫れだけ小説戯曲を重く見ないからであるが、徂徠をして小説を書かしためなかつたは實に千秋の恨事である。徂徠位な男が切めてラセラスのやうな物でも書いておつたなら日本の小説文學及び小説界の趨勢が最う少し進んでゐた筈だらうに、残念な事をした、恐らく馬琴時代から既に戯作風を脱してゐたらうに。

●日本の學者詩人等精神界の人は得て社會から離れ勝ちで兎角畸人傳の材料を作る人たちが昔時から多い。畸人傳、隱逸傳、奇人談、先哲叢談等を讀んで見ると解る。高名の人は多く常道を外れてゐる。之は畢竟佛敎や老莊學の影響であつて今の文明とは全く乖いてゐる、模範として學ぶべきもので無いのだ。幸ひ今の學者はそれ程仙人風でないが小説家の方は老莊主義が小さく働き出した戯作者形氣が猶だ脱しないのである。明治時代だけに詩人と言葉を換えていふが今の小説家の所謂詩人は畢竟お

中東

茶番に過ぎないので持前の茶番氣を高尚らしく詩人的と名付けてゐる。罷り間違へば八笑人となる。所謂文學者の多數は矢張團珍や親釜集の投書家に甲羅が生へたのである。であるから道樂に器用な筆を操つても眞劍に眞摯に筆を持つ事は出来ぬので、此眞摯の缺けてるのが即ち文壇の發達しない最大原因である。夫故先づ詩人と茶番氣とを混同する道樂根性、洒落根性、即ち戯作者形氣を一掃しないと、文壇は何時までも刷新する事は出来まい。小説家は畸人でも隱遁者でも風流人でも藝人でもなく矢張政事家や商人と同じく社會に働くべき尋常の人たるを忘れてはならぬのだ。だが斯ういふと忽ち惡俗に感染して戯作者風の半面の商賣根性を増長して來さうだが、爰にいふは月花に浮世を觀する茶人風を街つて三分五厘と脂下る似而非風流を斥けるだけで、社會的となれといふは昔間風となれといふのでは無いのだ。

●爰に當今隨一と自ら任じてゐる大小説家がある。此大小説家が此頃新聞紙面に載せた口上の末に『今後段々面白い作をお目に掛けまするほどに師走の染物を眺へたやうに思召されず御心寛かに末長く御愛讀を願ひまする恐惶謹言』とある。なんと庵看板に書きさうな文句ぢやないか。斯ういふ藝人風の文句が堂々たる大小説家の口から出るから驚くだらう。實に意外千萬な咄だ。畢竟お師匠様からして此心持だから末派の見識が次第に失くなるも道理で、骨節のある本屋は此頃では職人呼ばゝりするさうだ。職人は却て資本家に楯突いて正當の權利を請求する時勢に小説家先生は却て職人待遇をされて満足してゐる。勿論小説家は第一に修辭上の技倆を重んずるから見識なんぞは奈何でも可いが、見識の乏しいのが即ち理想の低い證明である。元來今の小説家の理想の乏しいのは其摸範とする先人の人物が餘り小さ過ぎるからだ。西鶴、其磧、京傳、

三馬等何れも一風の氣骨を具へて、殊に此作才は各々一方の覇たるべき資格があつたが、當今の精神界に住する者の模範たるに適はないのは明かである。然るに今の小説家の過半数が是等の作を喜んで其人物までも尊崇し且つ模倣するは怪むべき限りである。畢竟此お手本が悪いから何時までも戯作者形氣を離れないで自然小規模に満足するやうなわけだ。這般な具合に何時までもお師匠様からして文化文政度の作者根性を離れず世間を教へるといふ見識どころか恐惶謹言して世間の御最負を仰ぎ奉つてるやうでは、之では中々文壇の刷新などは思ひも寄らんナ。

●處で是まで御一新以後文學が振つた事があるかといふと、實はお祭り騒ぎをやつただけで未だ文學の振つた例がないのだ。何故なら、未だ不朽の大作として後世に傳ふべき價值あるものが一つも出ないだらう。紅露道鷗の作中には無論立派なものがある。併し何れも短篇ばかりで以て

明治の文學として世界に紹介し後世に残さうてには一口にいふと少と貫目が足りないやうだ。元來一時文學が盛んになつたらしく見えたのは國民が政治に倦怠した結果なのである。其歴史的關係をチヨツピリ陳べて見やうが、元來日本人はアングロサクソンの何處までも實際問題を離れない、讀書子が注目するは第一に政治問題である。處で十年の戦争が濟む、政府の基礎は段々鞏固になる。政治上の野心を腕力で貫く事は迎も出来なくなつたので段々言論文章に訴へるやうになつた。明治の文學がレフオームされて追々進歩して來たは是等政治的言論文章例へば福地、成島を初め扶桑新誌、近事評論等が興つて大に力がある。後世明治文學史を編むものは是等民間の政客論客が演説に工風し文章に苦心した跡を考へて其發達を見なければならぬ。處で十七年の改革となつて二十三年國會開設の詔勅が下る。國民は吻と息を吐いて一と先づ政治上の希望

が満足されたを喜ぶと共に政治的言論文章に頓挫を來した。如何に渠等が絶叫しても二十三年の國會開設を早めるわけにも行かぬから渠等は安心すると共に政治的野心が眠つて了つた。十七年から二十三年までは國民の政治的休息時間で、文學は即ち此時に乗じて勃興したのである。其時分末廣鐵腸子の二十三年未來紀を初め數多の未來記が續々著述されて悉く歓迎されたのは即ち國民が現在の希望を略ぼ満足して國會開設以後の黄金時代を妄想してゐたのと恰も觸着したからである。坪内氏が文學上の功蹟は誰も認めてゐるが、一般社會が文學を歓迎したのは坪内氏の力ではなく、矢野末廣等諸氏に與へられたる政治的教訓と、一つには諸氏の名譽ある政治的閱歷である。小説が重んずべきものと認識されたのは小説其物の價値を認めたわけではなくて作家の人物を推重したのである。坪内氏の書生氣質が世間を驚かしたのも實は文學士の肩書で噪がしたの

でデスレリの翻譯物が流行したのも英國の大宰相であつたと云ふ經歴が助けたのである。であるから此時分の文學は作者の人物、殊に政治家の閱歷に由て重きをなしたので文學の價値は實に猶ほ認識されなかつたのだ。云はゞ國民が政治的勞働の休養時間に先輩の雜談を聞いてゐたやうなものである。紅露諸氏が偶爾其間に起つたのは恰も老人が茶啣しをしてゐる傍から己の方が談話が巧いと若い者が嘴出し、たやうなものだ。國民の眼中には作家の政治的閱歷があつて實は文學だの何だのと面倒臭い事は奈何でも可かつたのだ。

● 這般な風に發達したのだから、文壇の盛衰は明かに二十三年を以て區劃されてゐる。紅露道鷗諸氏が傑作を出したは無論二十三年後であるが、一般社會に名を知られたは二十三年前に認識された聲價の情力である。國民は二十三年の國會開設の祝砲に俄然として政治的睡眠から覺めると

同時に文學を顧みるものは失くなつて了つた。紅露道鷗の作すら文壇といふ小世界に嘖々されるだけで一般國民は文學を閑事業として殆んど無視して了つた。之といふも畢竟は二十三年前の文學流行が眞に文學其物の價値を認識して生じたわけでないからで、左もなければ幼稚なる紅露道鷗に隨喜したものが進歩したる紅露道鷗を一層に推重して可いわけであるが、却て其以前の評判ほどでなく、普通讀者は本より文學に容喙する其道の人の中にすら今だに色懺悔、風流佛、妻君、面影等諸氏が初期の作を嘖々して後の作に勝ると信じてゐる者が若干もある。いつぞや太陽の臨時附録に諸氏が傑作ならざるものまでも集めたのは即ち世間の讀書眼の如何に低いかを證明してゐる。即ち紅露道鷗等諸氏の勢力が二十三年前に作り得たのが十分解る。文壇の盛衰即ち社會の文壇に對する冷熱は實に二十三年を以て區劃し得るのである。換言へれば國民は未だ文

學を理解する力なく唯だ政治家のワイ々文學を喜んで一時お祭り騒ぎをしたので、勿論眞に文學を發達せしめんとする心もなく又之を理解するだけの思想もなかつたのである。

●第二期の發展といふべき所謂新進作家の勃興時代は如何にといふに、此時代の文學研究は龍溪、鐵腸時代よりは無論眞面目になつてゐるが其勢力の波及した範圍は青年に限られて大人に嘖々されたので無い。青年文とか文學界とか帝國文學とか早稻田文學とか何れも青年の機關で、是等の雜誌で盛んに雷同された、けで一般世間には少しも反響を與へなかつた。であるから一部の流行で社會は何等の影響をも蒙むらず、従つて一般の人に其價値を認識せしむる力は少しも無かつたので二十三年前の流行とは大に性質を異にしてゐる。即ち二十三年前には小説家を以て他の政事家等と同格に見たので、第二期の時代には初めより文學を以て

一等下れる青年の業とし決して重く見なかつたのである。それから以後一時流行にかぶれた青年も飽きて了ひ次第に沈静したので、今となること文壇不振だの文學衰弊だのと云ふが、實は初めから社會の眞摯な熱心な歓迎を受けてゐたわけではないのである。或る意味でいふと、文學は獨り相撲を取つてゐたのである。段々力を増して來たには違ひないが未だ會て社會の同情を招いた事も反感を起した事もないのである。文學は全く社會から無視されてゐるのだ。

●それだから文學者即ち小説家の勢力は一つ穴の操觚社會でこそ先進とか新進とか大家とか名家とかいふが社會上には全く零である。金力も腕力も無いから仕事師の頭領どころか實は町内の若い者にも及ばないのである。然るに多數の小説家は此零位に満足して加之も今の鄙俚なる俗尙に容れられざらん事を戚々乎として憂ひてゐる。文學は理想の權化で之

に従ふ者は一代の好尙を率ひて教ゆるの覺悟がなくてはならぬのだ。處が今の小説家は隨一の先輩すら戯作者形氣乃至藝人根性を暴露すやうな口上を臆面なく新聞に載せて怪まんやうでは、中々奈何して一代の高潮に乗じて風雲を起すといふやうな事は解るまいよ。

●左右意氣の缺乏してゐるが今の文壇の弱點である。先進老輩の沈衰は姑らく措き、所謂新進作家の如きすら元氣既に挫折したらしく見える。といふは新進作家の多數は初め紅露の風を望んで起つたのだから、偶然に紅露の壘を摩するものゝやうに評判されると忽ち大満足して第二期の大家と成濟して了つたからだ。尤も中には立派な目的を立て、怠たらず造詣を勤め眞摯に勉強してゐる人もあるやうだが、大抵は初め名の爲に書いたものが利の爲に書くやうになつて、初めは多少讀書社會の批評に氣を揉んだのが終には唯だ原稿の賣れ口を捜すに氣を揉むやうになつ

た。従つて製作的良心も詩人的技倆も次第に消磨して未定稿同様な辻褃の合はない尻切蜻蛉の取手間小説を作るやうになつて、今では頭から小説に取合はないのが批評界の見識になつてゐる。一と頃は小説家といふと若手の流行兒で小説は哲學書よりも法律書よりも經濟政治書よりも宗教道德書よりも重んじられてゐたのが、今では意氣地なし世間知らずのお坊さまと厄介者待遇せられて小説は新聞雑誌の景物と成下つて了つた。文學新聞の名がある國民讀賣すら小説を拒絶して講談を歡迎するやうな始末では小説家殆んど顔色なしと云つて可からう。然るに小説家は頓と奮發する氣力なく或者は大家と成濟して好事三昧に陥り或者は朝三暮四の爲に濫作して社會の冷待に發憤するは魯か能く忍んで却て冷待にすら叩頭する者が有る。蓋し小説家が小説を述作する本と遊戯の爲でなく古への豫言者が絶叫すると同じ心持であるから淺躁鄙薄の社會に偶爾歡迎

されるよりは却て斯の如く冷待されるのが寧ろ得意の時得意の時で意氣十倍すべき筈である。詩人の出づるは亡國の兆だと能く人がいふが、之は間違ひで亡國せんとするやうな場合が即ち詩人が滿腔の心血を注ぐべき時であるのだ。即ち詩人が大に奮つて力量を示し光明を放つべき時であるのだ。今日亡國だのと不祥の言葉を吐くは勿論忌むべきとであるが社會が理想もなく信仰もなく盲目的に浮動し政治界も宗教界も其日々の御都合主義となつてゐるは事實で、昔の花鳥風月一三昧の風流先生は知らず、苟くも近世思想を呼吸しつゝある詩人は今の時に於て須らく激憤すべき筈である。唯だ夫れ賣名の爲め、若くは利の爲に筆を操る作家の如きは到底此豫言者の心持が理解出来ぬだらう。畢竟當初の大目的が唯だ新聞廣告上の虚名を貪るに過ぎんからナ。

●元來日本の小説家は多く市井から起つて他の學者と齒ひするを得な

つた。そこで見識が自づと狭くなつて世間を茶にするとか無學を自慢するとか妙な疝氣筋に發達した。偶々尋常勝れた氣象のものは唯だ傲岸一方で世間を輕蔑し、悪く拗くれて頑固になつて了つた。例へば風來や馬琴の輩である。純粹の戯作者根性の腑甲斐なき連中は取るに足らず、左ればとて執拗偏癖の風來や馬琴では矢張新文明の操觚者のお手本とならんから、差向き文壇の時弊を濟ふために作家及び讀者に高い大きな理想と健全な思想を與へやうてには、第一に外國文學の輸入だらう。外國文學の高尚な趣味と其作家の超脱したる氣象とを少と鼓吹んだなら或は文壇の時弊を濟ふ事が出来るかも知れぬ。先づ此外國文學の輸入を第一番に行るんだ子。

●處で外國文學の輸入だが、之が中々難かしいのだ。今の西鶴其積を喜ぶ戀愛家、京傳三馬を尊ぶ滑稽家、栗枝亭或は咸和亭を翻案する一種

のセンチシヨナリストや、無論外國文學の研究で蒙を啓く事が出来やうが、扱て此外國文學は中々俗耳に入り難いものと見える。二三年前米國のテート會社が米國の各圖書館より集めた報告書に依ると、公衆の最も多く閲覽する小説中第一に位するはディッケンズの「デビッド、カッパーフ井ールド」、第二はスコットの「アイバンフー」、第三はホーソーンの「スカーレット、レター」で、其他最初の十一種は最高文學として價値あるものだが百七十七種中六十七種を除くの外は寧ろ趣味の低度なもので、殊に驚くべきはゴーゴリ、ツルゲーネフ、ドストエーフスキイ、トルストイ等露國作家は本より比較的平易なるバルザック、ドーデ、ゾラ、モーパーサン等佛國小説家の作ですら殆んど顧みるものが無いのである。米國の小説讀者の多數は無學の婦人だからであるが、一般普通教育の進んだ米國ですら斯の如きを思ふと從來日本で翻譯小説の喜ばれなかつた

は當然である。尤も少數の操觚者輩は喜んで外國文學の翻譯を愛讀して自然若干の益を享けた者があるさうだ。然るに翻譯に障礙を來したのはベルン條約の實行である。尤も文學は強ち最新を競ふ筈もなく又一般著作權の振張としては無論祝すべき筈だが、日本の様な新進國で最近の科學及び文藝の翻譯を禁じられたは畢竟交通遮斷を行れたと同じである。勿論之が爲に濫譯の憂は減じるだらうが今の文壇の急務は全譯抄譯意譯翻案の別なく多少の巧拙は度外としてドシ〜輸入したい處へ禁制の制札を建てられたのは文壇の不幸此上も無い。まかし操觚者だけに爰で一と奮發して外國語を研究して其原文に由て直ちに世界の傑作を咀嚼したなら恐らくは頓に文壇の面目を更める事が出來やう。一方から考へると萬國版權同盟の加入は文壇を奮發せしめる好機會で之から初めて眞正の外國文學輸入が出來、我等は愈々熱心に外國語を研究すべき時が來た

のである。一外國語にすら通せず世界の太文學を一篇だも味はざる操觚者が斯壇の文豪を任ずるは誠に厚顔の沙汰である。ベン、ジョンソンが無學だと嘲けつた沙翁すら希臘羅甸を若干理解してゐたのである。然るに今の堂々たる我が文壇は頻りに大家が輩出するやうだが、外國語の修養あるものは指を折るほどさうだ。之では文學の發達しないのも當然である物での科學及び工藝等か悉く進歩したる中に文學だけは獨り猶ほ西洋事情輿地誌略時代に屬してゐる。坪内氏初め他の英文學者が頻に鼓吹したドイツケンス、サツカレイを初め沙翁ギョーテの大名すら普通讀者に於ては其時代國籍は魯か名氏さへ知らんのだ。況してやゾラ、トルストイの如きは何處の馬の骨だか一向知らず、元來小説家の生活は麼な風だか、小説家の社會上の位置は麼なもんだか、小説家の勢力はどの位有るか、小説家の學問識見はどれほど有るか、全然解らずにゐる。讀



者は本より小説家自身すら多くは知らずにある。斯ういふ讀者に西歐の
 大作を直ちに翻譯して示すは實は無益の沙汰で、大作よりは先づ西洋小
 説事情を知らせる時代である。先づ西洋小説家の學問經歷社會の位置及
 び當時の境界著述の目的著述の影響等を精しふして而して後其述作を示
 したなら或は其眞價が解るかも知れない。さもなくて放蕩者の成の果な
 る我が戯作者を標本として作者も讀者も娛樂を小説の唯一目的であると
 考へてゐるやうでは世界の大文學たる傑作を見ても高が修辭の巧妙に
 ぎないだらう況んや翻譯は全く修辭の妙味を滅殺するから肉を褫ぎて骨
 感服する位に過を見るやうなもので骨を咀嚼する力の無いものは唯だ索
 然とするばかりだ。それだから之から文學の新世界を開墾しやうてには
 先づ西洋小説事情から導くのが順當で畢竟坪内氏の高尚なる戯曲論や鷗
 外氏の深奥なる審美説が案外効果が少くて西鶴の元祿文學や紅葉の硯友

文學が非常な勢力を有つは文壇が猶ほ幼稚であるからで、四五年來俳諧
 が流行した如き(小説の咄ではないが)丁度醫學上の發明が日に盛んなる
 今日猶ほ草根木皮を服するやうなもので左に右他の科學工藝と共にドシ
 外國趣味を輸入するが最も必要である。

昔から翻譯されてる有名な傑作は随分有る。魯敏孫漂流記、ガリバル
 巡島記、ドンキホテ物語、天路歷程、ユートピア物語、ライオンツケ狐物
 語、其他ギョーテ、シルレル、ボツカチオ、モリエル、ラフォンテイン、ジヨ
 ンソン、スコット等の巨篇名作、中には梗概的抄譯もあり或は杜撰極まる
 惡譯もあらうが、兎にかく少からざる數だ。まかし讀者の多數は恐らく
 惣てが唯だ午寐の材料に供する目的を以て讀んだのであらう。(尤も翻譯
 が概ね拙惡を極めて原作の價値を零にしたからであるが。)夫故例へば魯
 敏孫漂流記或はガリバル巡島記にしる唯だ物語の筋書を理解するに留ま



りてデフオーが逼真の筆力、明快鋭敏なる觀察或はスウ井フトが痛烈骨を刺す諷刺を味ふものは無く、漣山人のお伽噺同様に心得てゐるやうだ。勿論お伽噺には別種の價値は有るが、デフオーやスウ井フトの作を之と同視するは殆んど菽麥を辨へぬ沙汰である。一つには翻譯の罪と云ひながら畢竟讀者が小説を戯作視して其文學上の位置を知らないからである。斯ういふ讀者が大多數を占めてゐるから先づ西洋小説事情を知らして置いて後に通常讀者の耳に入り易い前記の魯敏孫漂流記やドンキホテを毫しも抄略せずに改譯するのが急務である。願くは能文の士に十分骨を折つて貰つて是等外國文學の立派な翻譯が出来たら恐らく文壇は頓に面目を更めて必ず大飛躍すべき筈である。

●且つ最も奮發して貰ひたいのは批評家である。批評家一面の任務は讀者の知識を啓發し趣味を發達せしめるのである。之にも二つの意味あり

て、一つは鄙しき下等趣味を高めると、一つは多忙なる讀者に陸續公刊せらるゝ著述の梗概及び價値を知らしむるのである。西歐に比較すれば人文の發達猶ほ幼稚なる日本でさへ日に二三の新刊書の無い事はない。(此頃の不振なる出版界ですらも)之を悉く涉獵するは容易ならざる仕事で、社會が益々繁忙になればなる程文運も發達して出版も盛んになつて多數の讀書家をして其時間なきを苦しましむるやうになる。批評家は是等の讀書時間に渴する人達に新刊書を説明する責務がある。縦令へば澤山の書籍を涉讀する時間なき人でも某の新聞又は某の雜誌の批評を讀めば略ぼ其大躰を窺ふ事が出来る。此種の批評は即ち説明的梗概で繁忙な社會には最も必要である。第二には讀者の幼稚なる趣味を高めるので、例へば假に相當の價値ある小説があるとする、普通讀者の窺ふ能はざる内容を剖析して示すも一法である。普通讀者の掬し能はざる趣味

中東

の含蓄に説明を與ふるも亦一法である。或は其理想を評釋し其主義傾向を解説して小説は娯樂を與ふる外別に各々本領あるを認識せしめ其理想又は主張を樂んで味はしむるものは藝術的伎倆なりと教へて無學なる讀者を啓發するが批評家の職務である。然るに今の批評家は其錚々たる三者を除くと他は概ね痛罵冷嘲を専らとし強て己れが眼識の高きを衒はうとして文章の奔るまゝに惡語するを批評の能事とする傾向がある。著作家に對しても讀者に對しても不親切の極で云は、人の犢鼻褌で相撲を取る毀を免かるゝ事が出來まい。此四五年來は美論が大分盛んで美學上の議論が無いと批評らしくないのだ。夫だから普通讀者には批評位面倒臭く解らないものはなく、肝腎批評されてゐる御當人の作家にすら解らない。中には批評してゐる御當人にも解らなさうながある。最も笑止なは勝手な造語を用ひて不測な解釋を與へ故さらに晦澁にしないと批評ら

しくなく思ふものもある。左もなければ無責任に放言高論して好めるまゝの惡謔を弄び唯だ著述家を眼下に見下すを以て批評家の見識と心得る連中もある。夫故批評は著述家をも益せず猶さら讀者には理解し能はざる獨りよがりの議論或は樂屋落の惡謔となつて結局批評家無用の聲が聞えたのである。然るに近ごろは又此種の批評さへ絶えて、日本に文學の有りや無しやが疑はれる位である。大文學の出づる畢竟大批評家の力に待つものであるが大批評家は姑らく措き健全なる批評の有無は頗る文學の消長に關係する。批評の盛んなるは即ち文學の振興する所以で全く批評の跡を絶つは文學の爲め憂ふべき事である。今の文壇には批評を値ひする傑作が無いといふものもあるが批評は必ずしも當世の作に限らなから、古人の作を評するも可なり、西人の著を品臨するも可なり、或は小説詩戲曲等文學一般に就きて解説するも可なり。例へば我が往時の脚



本院本及び戯作の眞價を細かに批評し説明して文壇に彷徨する士をして蒙を啓かしめ或は西歐の大作を精しく評釋して世界の大文學とは斯の如きものなるを知らしむる如きは文壇をして一進境を開かしむる好方便であらう。批評家の事業は創作家と離れて獨立して行くべきもので必ずしも創作家の伴侶たるわけでない。當世の作家を對手として或は提灯持となり或は半道敵となる如きは半ば廣告掛りの性質を帯びる新聞の三文批評家の役で此種の批評家は有るも無きも更に文壇を損益しないのだ。若し益がありとしたり恰も店頭を賑はす冷かし客の偶々商賣繁昌の一因を作ると同様で、斯ういふ所謂附き時文批評家は願くは影を潜めて穩健なる眞摯の批評家の多く出るやうにしたいものである。

●惣じて日本の文明は一時に輸入したから智識の平均は普く行渡らないで各種の思想が混殺してゐる。其新思想と其最舊思想とは千里の差に留

まらんのだ。例へば政治上に最近の國家社會主義を説くものと固陋なる勤王攘夷的の愛國論を説くものと、宗教上にコント派人道教を説く者と高天原の八百萬神を崇拜する者と、或は社會上に巴黎の最新流行を銜ふ者と天平美術に酔ふて衣食住を寧樂時代に擬する者と、其他各階級に根本思想を殆んど數百代隔つる者比隣相接してゐる。何處の國でも新舊思想は人の年齒の異なるだけ相違する者だが恐らく日本の如く全然根本を異にする各種の思想が一時に混殺したる例は無からうと思ふ。此故に衝突して相せめぐものは較や近似したる同士の間にして最新と最舊との間は懸隔餘りに甚だしき爲め殆んど路人の觀を爲す。文學に於ても亦た斯の如く、聰明なる讀者中佛魯最新の小説を涉獵し若くは沙翁ギョーテの精髓を窺つた者も有るが、是等の最新空氣を呼吸したる人から見ると天明振の戯作氣質より産出した作は趣味の懸隔餘りに甚だしきが故に初め



から眼中に入らるのである。之と同じく假に佛魯の自然派を擬して創作する人があつたら——早い咄がゾラの作でも翻譯して見たら——普通讀者には到底其趣味が理解し悪からう。即ち聰明なる讀者は初めから文壇を冷視して顧みないし進歩したる作家は初めから讀者を見限りて筆を操るを屑しとしないし、文壇に跋扈する者は唯だ凡庸なる作家と無學なる讀者とに限らるゝから文學は依然として舊態を更めぬのである。若し聰明なる讀者盛んに嚴密なる批評をなし進歩したる作家奮つて佳什を貢獻したなら文壇は忽ち面目を更めて振興する筈である。

●聰明なる讀者が文壇を冷視するに反して下等讀者は段々と殖えて來る。此下等讀者の増加を文學の進歩を杜絶するものと云つて識者顔に憂ふ輩がある。併し之は無用の心配で、文學の進歩を妨げるほどに下等讀者が力を入れて呉れば結構だが、渠等は浪花節を聞くと同じ心で讀む

のだから文學の何のといふ考は無いのだ。惣じて下等にしる上等にしる社會をおしなべて讀書其物の趣味を理解する者が極めて少ないから困る。七八年前初めて赤本が流行し出した時眉を顰める識者が澤山あつたが、經驗ある書肆の話に今の急務は讀書趣味の普及だから誤刷だらけの杜撰なる赤本でも猶ほ流行しないに勝ると云つたは實際に通じた説である。鹽原多助一代記の如き二十萬部に達し太閤記の如きは十數ヶ處にて出版し殆んど十萬部を越したさうである。宜なる哉北海道の僻遠なる植民地にすら上田屋或は金櫻堂の書籍を見るは讀書趣味普及の功蹟却て紅露諸氏の作より勝るといつて宜しい。此種の小説讀者は本より歿趣味に相違ないが趣味の高級低級を問はず讀者の範圍の廣くなるだけ平均趣味は次第に長ずる理だから如何なる種類の作にせよ流行するは文學進歩の兆候として祝すべきである。此意味に於て或る新聞が十萬を越え或る小

説が二三萬に超ゆる讀者を有するは臆ては他の新聞が五萬に達し他の小説が一萬に届かんとする段階として見るを得。俗悪なる讀者は例へば空中の塵埃のやうなものだ。塵埃は無数のバクテリアを含有するから衛生上有害と認められるが塵埃其物は生活の必要物で且つ自然の美を現はす媒介である。下級なる讀者の増加は文學の進歩を阻碍するやうで實は文壇の成立に必要なものみならず趣味の發達を助くる力があるから毫も其多數なるを憂ふべき理が無い。此故に弦齋派の流行及び講壇物の跋扈は讀者の範圍を廣むる恰好の方便として寧ろ喜ぶべき筈である。

●時代小説家は暫らく措き、世話小説を物するものは現代社會を注目に怠らざるは云はでもの事で小説家皆此必要を口にしてゐる。且つ口に説くのみならず、常に注目しつゝあるのである。唯だ少しく遺憾なるは所謂社會觀察なるものが新聞の三面的探訪に留まつてゐるらしいのである。

である。何故なら今の小説家の材料が常に三面的事實に外ならんからである。紅葉氏の多情多恨の如きは失敗の作であるが構作の陳套を脱したいは面白、且つ立案の動機と思惟せられるものも亦頗る面白いが、斯ういふ立案は極めて少なく今の多く行はるゝ小説は鏡花にしる柳浪にしる所謂新進と稱するものすら舊戲作者の趣向を基礎として案を立てるやうである。幸ひに方式を少しく異にするから目新らしく見えるが實は陳腐なる趣向に新らしき皮を着せたのである。此故に渠等の作は衣食住及び言語を明治にしたゞけで其人物の抱ける思想や動作は三四十年前の戲作に現れたものと大差なく毫も今の社會と密接しておらんのだ。尤も新進作家のみでなく老功大家の作も何れの時代を寫したのか譯分らんのが多い。畢竟之は今の社會に通じない爲めで、渠等が怠らず注目しつゝあるものは流行の衣裳とか髪容とか外形ばかりで時代の真相を少しも

中東

10

理解しないからだ。例へば如何なる匹夫匹婦も其度に應じて多少時代の風潮に化せらるゝ筈で、大にしては日清戦争の時厨婦兒守まで敵愾心を起し小にすれば直接渠等を喜憂せしむる社會事項に動かさるゝは自然の勢である。然るに今の作家の好んで寫せる下等社會は宛然落語家の口吻に上る八さん熊さんで絶えて明治の空氣を呼吸したものは見えない。同じ江戸ッ兒でも明治には明治らしき江戸ッ兒がある。縦令其髪をチヨン鬘にし大漁の襦袍を着てゐても江戸時代の江戸ッ兒とは自から異なる筈である。併し之は別としても明治の思潮により多く觸着すべき筈の中等社會を寫すにも猶ほ頗る粗笨である。例へば今の時勢粧をして今の言語を話してゐる。それで其動作や云爲は一々封建思想で働き出されてゐる。恰度木偶の芝居を見るやうで、如何に巧妙でも奈何も喰足りない。中には昔しの小説を地名と人名とだけ變へたゞけかと思はれるのも

ある。今の小説が識者の爲に輕蔑せられて唯だ婦女子の翫讀だけを値ひする最大原因は是である。此弊を救ふには根本から作家を改造する必要があるが、聰明なる作家は恐らくは其心境を一轉して西歐作家の眞摯敬虔なる目的を以て直ちに自家の目的とし初めて深く社會の眞相を精しく觀察する事が出来るだらう。例へば國家主義と世界主義との衝突の如き久しき以前から擾れて何時までも中々に解けざる問題である。政治上に宗教上に社會上に將た文藝上に此衝突は到る處に免かれない。又社會組織上には家族單位と簡人單位との思想の瞭着が往々家庭の紊亂を來す如きは多くの小説（大抵家庭を描くが故に）に必ず關係する絶好の資料である。即ち小説家が他の經世家と共に研究すべき重要なる問題である。又近日多くの識者を惱ます倫理教育問題の如き政教分離説の如き宗教と教育との衝突の如き認可宗教論の如き地租論の如き政黨内閣論の如

中東

帝王神聖説の如き是等諸問題は何れも一時の時事問題でなく永久に研究すべき價値があるから小説家が具象的の解釋を與へるのも頗る妙だらう。又今の作家が常に材料を搜索する範圍内でも松平紀義の如き或は近日の稻妻強盜の如き犯罪の心理的側面を窺ふべき無二の好材料である。又高鹿家殺人の如き横田のぶ亭主殺しの如きは家庭の紛紜に原因すれば頗る倫理的側面を研究する價値がある。斯くいふは直ちに其事實を以て材料とせよといふにあらで事實の跡を尋ねて雜報記者亞流が到底窺ひ得ざる奥を極め以て一般社會の心理的及び倫理的の消息を描けといふのである。今の作家の注目する事實の原因を尋ねるといふは事實の聯續を辿るので心理的及び倫理的方面の觀察を全く怠たつてゐる。況してや議論多くして事實少き宗教政治及び他の社會的問題の如きは全く其蹟を尋ねやうともしないで恰も小説家が撰擇すべき材料以外と考へてゐるやう

である。今の文學の單り婦女子の翫讀に適して學識ある士君子に却て顧みられざるは即ち小説家が新聞雜報記者以上の觀察なく其作は概ね三面雜報の延長に過ぎないからである。

● 明らかさまに云ふと今の作家の名を成したるは力量に依るのでなく文明を粉飾する社會の虚榮心に乘じたらしく思はれる。今の社會は文明を粧ふ虚榮心から西歐文物の盛んなるを羨んで他の學術と共に文藝をも輸入しやうとした。所へ恰も二三の學者が小説に筆を染めたから西洋劇や舞踏を奨勵すると同じ筆法を以て雷同した。到頭戯作者上りの新聞小説家にまで文學者の名を與へた。處で野心ある青年が名を成し易きを羨みて陸續筆を採り初めたので社會の虚榮心は益々満足して所謂文學者を歡迎し大家の名を上つりて文學萬能を鼓吹したのである。爰に於て一時は元祿天明は魯かエリザ、井クトリヤ兩朝をも壓する黄金時代の如く歌はれ

中 東

て末派の者共までが大天才を氣取るやうになつた。處が時代移ると本と造詣も力量もなき所謂付き文學者だから忽ち箔が剥けて大家たる價値が覺束なくなつて來た。搗て、加へて戦争が初まり社會の虛榮心が他に傾くと文學は全く忘れられて曾て尊敬して呉れた公衆が今度は輕蔑するやうになつた。文學者先生即ち顔色なく或者は韜晦し或者は逼息し或者は本の古巢の新聞小説に閉籠つて甘んじて再び婦女子の御機嫌を取り初めるやうになつた。勿論四五の人は眞摯なる心をもて忠實に文學を研究する者もあるが、此四五輩を除きて他の者は社會の虛榮心が惹起したる流行に乗じて文壇に投じ今や深田に陥りしもの、如く惰性的に操觚に従ふのだから文學の進歩、一般趣味の發達の如きは殆んど考究しないで唯だ米鹽の爲め餘義なく筆を舐るに過ぎないのである。憐むべきは文學者である。社會の虛榮心の爲め胸上げにされて再び手嚴く投出されたやうな

ものである。即ち文學者は文明を粉飾する社會の虛榮心の爲め犠牲にせられたる慘酷なる例の一つである。

●近來文學は衰頹の極に達し所謂文學者は成存の權すらなき無能力者となつた。しかし今迄は幸運の寵兒で力量不相應に擔上げられたのであるから其反動で俄に搖落されるは仕方が無いのだ。明治の社會で一番幸運なもの政治家と文學者だらう。此二者は精神界の相場師で首尾よくオツポーチユニチエに投ずれば昨日までの匹夫が今日は社會の巨人として濶歩出來るのである。日本は新文明で思想界が紛糾錯雜してゐるお蔭に政治及び文學の相場が時としては僥倖の奇利を博する事が出來るので今迄政治文學二界に名を成した人たちは多くは一六勝負に偶中したオツポーチユニチエで其實力ある者は極めて少ないのだ。夫故名を成したも早いが名を晦ますのも早く或人の云ふ如く早熟早老ではないので、畢竟社

中東

會全体が半熟であるから倏忽に消滅すべき半熟者が却て一時成功したものである。例へば夜る天象を窺ふに一定の時刻を限りて見はるゝジュービターやドルフ井ンよりは瞬時に消ゆる流星が一時人目を眩耀すると同様である。實力なくして僥倖に成功した者が失敗するは當然の沙汰で名を知られるだけが切めてもの幸福で止むを得んのだ。西歐に聞ゆる作家は皆夫れ相應に辛苦艱難を積み其間に養ひ來れる經驗から人生觀を得たのである。日本作家の如く學窓に教科書を研究する片手間仕事に大名を成し若くは發句川柳輕口俗謠の投書から一足飛びに大家の班に入つたと決して同一でないのだ。であるから社會の輕率なる歸嚮心が失せて文學者の價値が不相應に降落したは却て他日大に成功すべき階段である。即ち此失意の境に在つて猶ほ刻究倦まざるもの能く他日の騷壇に覇權を奮ふ事が出来る。文學者の爲には社會から輕蔑されて來たのが即ちお藥にな

るんだ。爰で一と奮發せずはなるまいよ。

●西歐文學者が大名を成すまでの艱難辛苦は中々尋常でない。我が作家にも随分苦勞した者もあるらしいが西歐文學者のと比較すると些か相違してゐるやうだ。といふは西歐文學の艱難辛苦が生活上の困難や戀愛の苦勞だけでないからだ。蓋し文學者は常に理想の生活を樂むから何處の國でも中々俗人に容れられないで従つて處世上の困難を伴つて來る。且つ感情の極めて鋭敏なるが常だから戀愛の淵に彷徨する例は若干もある。之に依て人生一部の消息を窺ふ事も出来る。しかし此二者の經驗よりはより多く小説家を啓發せしむるに足るは思索上の疑惑に生ずる葛藤痛苦或は社會上即ち政治上宗教上の迫害である。此二者は今の作家で經驗したものが恐らく絶無であらう。物質上或は戀愛の困難も經驗しないには勝るかも知れぬが後の二者に比べると勿論同一で無い。畢竟我が

中東

作家が腦中空乏したる男女の戀愛以外に一步も擢んずる能はざるは渠等の經驗が狭く小さいからである。トルストイやレルモンドフやユーゴーやドストエーフスキイや思索上の刻苦は尋常ならで殊にトルストイが宗教に關する諸著の如き殆んど哲學者が思索の踵を辿ると同様である。唯だ詩人であるから思索の形式を異にしてゐるが。又渠等は故國を追放せられ或は獄中の苦楚を試めた事さへある。ドストエーフスキイの如きは銃刑架に上せられて砲烟一發の下に將に露の命を失はんとした危き刹那を経験した事さへある。斯ういふ經驗で養はれた思想が唯だ戀や生活に彷徨したものゝ思想と同一でないは云ふまでもなく渠等の傑作と比較して日本の小説が鄙近淺薄なるは此理由に外ならぬのである。しかし是等思索上若くは社會上の大いなる困難は何人も容易に試み得るものにあらず今多數の作家のやうな通と粹とを理想とするものは細巧なる文技

に耽り猥瑣なる穿鑿を専らとし花に戯れ戀に浮かるゝ外は思索上若くは社會上の危機を経験し得る資格が奈何も無さうである。

●小説家は一面に於て哲學者たり宗教家たり豫言者たるのである例へばトルストイの如きは希臘教羅馬教プロテスタント教以外別にトルストイ宗を創立し現にトルストイ派の教會が數十ヶ所ある。渠は一面に於てルートル以後の宗教改革者である。ドストエーフスキイは十九世紀を支配する罪惡を細さに剖析して詩人たるよりは寧ろ豫言者であるといふ語が噴々として聞えた。若し夫れギョーテが希臘以後の疑惑せる問題を決しやうと試んだ如きファウストは實に天の聲である。シルレルが韓圖學者としてても有力なるは渠がギョーテとの往復尺牘及び其論文集の鑿々として聞くべきを以て亮かである。ジョージ、イリオットの如き女流の身を以てすら猶ほ深邃なる獨乙學者として有名である。渠等は皆哲學者とし

ても相應の名を成すべき資格があるのである。然るに我が作家は美文家と云ひ人情博士と稱し漠然たる意味にて人情を穿つを以て小説家の能事畢れりとする。人情を穿つは強ち心理學或は倫理學の力を借りるわけでないが高き見地を持して臨むのでなくては到底深く人心の機微を觀察する事が出来ぬだらう。デッケンスは幼時より艱難して比較的無學であるが、猶は常に聖書を繙讀して敬虔の心を養つたといふ事である。小説家は常に這般の用意がなければならぬ。唯だ漠然と人情を穿つなど稱するは戯作者の謂で今の小説が三面雜報と大いなる徑庭を持たざるは畢竟之が爲めだ。露伴子が獨り文壇に濶歩する巨人の觀あるは佛典及び經子の造詣深きに由る。作家は是等に鑑みて先づ世態人情を觀察する標準照鏡たるべき自家の見地を養う爲め科學及び哲學の造詣を勵む必要がある。併し色眼鏡を掛けて見たる社會を自家の溶爐に融解するやうな理想

派は餘り好ましからんだ、(尤も理想派たるすら能はざる作家より勝りたるに相違ないが。

○我が水滸傳が廣く行はるゝ如くモントクリスト位趣味の上中下を通じて小説を讀む者の間に稱指さるゝものはあるまい。唯だ新奇を喜ぶ普通讀者は本より沙翁ギョーテの骨髓を窺ひし高等讀者すらも猶ほ一と度繙けば手を釋くを忘るゝほど興味を感ずるは水滸傳と同様である。然るに一は百八人の豪傑が各様の性格を具して働くのであるが區々梁山泊の中に踞踏するのだから讀んで頗る窮屈を覺える。モントクリストは之に反して初め水底の獄を脱して孤島の寶窟を我物とし伊太利の南陲より倫敦巴黎に到る大陸を舞臺として横行するが故に唯だ一人の行動であるが讀者の心意を壯快にするは却て前者に過ぎてゐる。此二者の相違は即ち東西小説の異同を示すに足るものでモントクリスト及び他のデユマ



の作さくの如ごとき同おなじ俗すく尚しやうに適てきする類るいにても日本にほんの此この種しゆの者ものと較くらべると規模きぼ及び感興かんきやうの大小だいせう廣くわう狹けう決けつして同一だういつでないのだ。若もし日本にほんにて差向さしむき佛露近世ふつろきんせいの自然派しぜんぱを望のぞみ得えないなら切せめては今の流行りやうかうする弦齋げんさい或あるは浪六亞流なみろくありうをしてデユマ若もしくはマルリヤット一流いちりゆうの域あきまで達たつせしめたいものである。即すなはち其見識そのけんしきを高たかくし其眼界そのがんかいを廣ひろめて今いまの思想しやうお及び學術がくじゆつに今少いますこしく觸着しよくちやくせしめたいのである。米國まいこくあたりの雜誌ざつしに散見さんけんする小説せうせつは下等趣味かたうしゆみの讀者さくしやが多いので自おのづから鄙近ひきん淺薄せんぱくたるを免まぬかれんが能よく當時たうじの風潮ふうてうに合あつて且かつ大抵たいてい科學的くわがくてきの新事實しんじじつを材ざいとするから有識いうしきの者ものも別種べつしゆの興味きやうみを持つ事ことがある。探偵たんてい小説せうせつ或あるはベルチ一流いちりゆうの作さくは其その一例いちれいで日本にほんの陳腐ちんぷなる文化文政ぶんくわぶんせい度さの草双紙くささうしを燒直やきなほしたものは霄壤せうじやうの差さがある。勿論もちろん地方新聞はうしんぶんは相變あひかはらずお家騷動いへさうどう若もしくは武勇傳的ぶゆうでんてきの小説せうせつを好このむさうだから止やむを得えないが、切せめては斯か、草双紙くささうし的てきを脱だつして今少いますこしく時勢じせいに適てきし科學くわがくに合あつて進しん

歩ほさせたいもんだ。すれば先まづ下等讀者かたうさくしやの開拓かいたくが出来る。

◎さて小説家せうせつかの苦心くしんである。一ひとと頃新著月刊ころしんちやげつかんに苦心談くしんだんが澤山たくさん出たが、奈何いかんも苦心談くしんだんと披露ひろうするだけの價値かちが乏なしいやうである。小説せうせつを書くには衣類調度いるいどうどの研究けんきうも必要ひつえうであらう、所謂通いはゆるつうの研究けんきうも必要ひつえうであらう、又骨子またこっしたるべき事實じじつの詮索せんさく及び之これに關くわんする専門知識せんもんちしきの研究けんきうも勿論もちろん必要ひつえうである。まかし是等これらは更あらためて苦心くしんの名目みやうめくを興あへるまでもなく苟いやしくも小説せうせつを書かかんとするに是これだけの用意よういは無なくて協かはぬのである。此位このくらゐの穿鑿せんさくをすら苦心くしん談だんとし紹介せうかいするに文壇ぶんだんは餘あまりに非苦心的ひくしんてきにあらざると思おもはれる。且かつ是等これらの苦心くしんは小説家せうせつかとしての平日へいじつの心掛こころがけで特とくに或ある作さくをするに臨のぞみて俄にはかに狼狽らうたいして穿鑿せんさくするやうな事ことでは盜人ぬすびとを見て繩なはを縛なふと同おなじく不用意ふようい千萬せんばんである。小説家せうせつかの苦心くしんといふは別べつに有ある。即ち事實じじつの心的現象しんてきげんしやうと之これを生しんずる心理的關係しんりてきくわんけい及び倫理的側面りんりてきりめんの研究けんきう、或あるは物語ものがたりの精神せいしんたるべき問題もんだいの

研究、或は文章の鍛練推敲等である。餘事は扱置き、文章の鍛練推敲である、之だけは有繋に我が作家にも中々苦心する者がある。紅葉氏の如き其最も聞ゆるもので新聞一回即ち一日分を書くに一日の苦心では足りぬさうだ。又緑雨氏の如き僅に三行の文を推敲するに殆んど一年を費したといふ咄だ。其他風葉氏の如き宙外氏の如き何れも聞ゆる鍛練家である。けれども文章の鍛練は無論爲さるに勝るが、否な爲るが當然であるが是れだけの苦心では未だ以て特に苦心として語るべきものでなく且つ又苦心の効果即ち傑作を求むる事が出来まいと思ふ。まかし此鍛練家さへ今は中々少なくて所謂インスピレーションの力に頼て筆を呵するを文士の名譽とし、甚だしきは一夜に三十枚四十枚を物し或は同時に五六種の小説をさへ作る人がある。勿論筆の遲速は各自の才藻に由て異なるから或る天才は一日に百枚書くも一枚書くも同一の成效で時としては

一枚を推敲するよりは百枚を呵成する方が却て成效する事さへある。まかし之は或る天才に限りて許すべき事で文學者の普通行事として推奨すべき事ではない。又商賣的に五六の新聞小説を懸持するもの、如きは兎角云ふだけが野暮である。唯だ斯ういふ商賣的操觚者が自分の商賣根性を萬更知らないでもない癖に或る場合には矢張文學者顔するのが奇怪至極である。尤も斯ういふ連中は么麼でも關はぬが、苟も歴史上の文學者たらんとするものは斷篇零楮猶ほ全力を費やして苦心しなければならぬ。ヂッケンスの名が一世に重かつたは蓋し渠が心勞を惜まなかつたからで何事を爲すにも全力を献げたから同時に二三の仕事に手を出して一身の力を二三に分つやうな事は決して仕なかつた。小説を書くにもインスピレーションを待たないで朝は十時より午後二時に到る一定の時尅を定めて専念に勉強したのである。渠の解釋によるとインスピレーションは

中東

怠慢の場合に生ずべきものでなく専念勉強すれば必ず来るべきものであ
 る。デッケンスが多作した割合に駄作の少ないのは畢竟此理由で我々操
 觚者は須らく學んで則としたいものだ。且つ平生から各般の注意を怠た
 らず推敲鍛錬は本より研究の方面を更めて深く人生の秘密を捜る方に苦
 心したなら文壇は忽ち刷新出来るのである。

●學者が學術以外の何物にも關係せざるを尊しとする如く藝術家は藝術
 以外の何物にも頓着しないのが即ち藝術の神聖なる所以である。まかし
 惣ての學術技藝が實際の事物と互に相關聯するが故に學者が學理を研究
 するに全く經驗を度外に置く能はざる如く藝術家も亦た社會の活ける事
 實と全く離れる事は出来ない。殊に文學者は天地山川に寓して咏懷する
 抒情詩人の外は人事と直接の關係を有つから社會と離れる事は決して出
 來ないのだ。であるから有力な作家は多くは一時公生涯を送つてゐた歟、

或は操觚に従事しつゝ、猶ほ公生涯に身を投じてゐる歟である。又全く操
 觚を業として他を顧みないものでも廣く交遊を社會に求めて苟くも大問
 題あれば先じて解釋を試みやうとする例。へばバイロン、シエレイが希
 臘獨立軍に同情を濺ぎ盛んに頌詩を作つて歐羅巴の公義心を鼓舞した上
 に親しく渠等の帷幄に交つて少なからざる援助を與へた如き、又ユーゴ
 オが猛烈なる勢を以て幾度挫折するも屈せずニ那翁の暴政に抵抗した
 如き、又近くはゾラが一身としては深き關係なきドレーフェー事件の爲
 め一片の義侠心を奮つて大抗議を試みた如き其一例である。勿論歐羅巴
 人は何人も社會上の權利を重んじて苟くもせざる風習があるが、日本
 では爲政治家が獨り權を擅にし他の階級の者は各自の一家を守る外惣て
 黙従したる封建の遺習が今でも消えぬから、殊に文藝の士は世外に超然
 たるを高しとして公生涯に入るを好まない傾向がある。であるから益々

實際社會と遠ざかつて自分も隠者風になるが人からも仙人扱ひされるんで結局今の小説が何の時代を描きしか不明なるほど作家が社會の實情に通じないのも之が大原因である。尤も根が草双紙に養成された頭腦では三面雜報以外の社會の出來事にインテレストを持つ事は出來まいが――、又唯だ青年男女の戀愛だけを抒述するだけなら活動社會の事情に迂遠なるも差支へあるまいが、若し婦女子の翫讀以外の目的を以て述作するものは今少しく社會と密接して實際活動の事情を審かにせざれば協まじと信ず。而して活動社會の實情を知るには出來得るだけは公生涯に身を投じて親しく觀察するのが第一の方便である。明窓淨机の下に瞑目して考察するものが時として其局に當る者よりは深く透徹する事があるが畢竟大牀の觀察に過ぎないのは云ふを待たない。且つ今の作家の如く社會の大問題を見るに茶番の相談よりも無頓着なるは是等問題を解釋する

能力なきに由る歟然らざれば故さらに世間を冷視する風流病に憑付かれてゐるかで何れにもせよ實情の大牀をすら窺ふ事は出來ないのである。夫故社會の實情を觀察する方便としても傍ら公生涯を送るが却て便宜である。且つ作家も社會の一人なら古は知らず今の人權發達したる世の中に好んで社會上の權利を放棄する事があらうや。社會の利害休戚は文士の頭上にも落つれば苟くも山林に隠るゝにあらざる限りは須らく進んで權利を主張するが即ち操觚者の社會に於ける位置を高むる所以である。今の作家の如く世間を煩さがりて隱君子を氣取り却て社會の食客扱ひをされて一つには其實情に疎くなり一つには當然享有する權利を放棄して文士の位置を高むる事を爲さざるは余の與せざる處である。さてとて強ち世間の瑣事に奔走せよといふのではないが機會の投すべきあらば傍ら活動社會に加はりて其實情を審かにし其材料を饒かにし以て

今の單調なる戀愛小説を複雑なる社會小説たらしむるは即ち文壇の革新である。(爰に社會小説といふは別に此種の小説あるを意味するにあらず。普通人事を描くと同時に社會一般の實情を髣髴せしむるをいふ。)

●歐羅巴では小説家の作が社會に及ぼす力は絶大なものだが、日本では小説は殆んど無勢力である。例へば雪中梅や佳人之奇遇は非常に歡待されたのだが何程の影響を世の中に與へたかといふと、高が書生芝居に興行された位な外は際立ちて陳立つる事は無いのである。畢竟讀書家の少ないのが原因してゐるが一つには小説が勢力を有つほどに社會から價値を認められてゐないのだ。歐羅巴には面白い咄が澤山ある。魯敏孫クルーソーは實在の人だと信じられ、疫癘日記は暫らくの間ツイ二十年前ごろまでは實際の記録だと信じられてゐたさうな。最つと笑止なのはムーアの『ユートピヤ』が出た時態々此ユートピヤ島探檢に舸を派遣した

處があつたさうだ。ヂッケンスの『ピククウ # ック』之も非常に世間を騒がしたもんで、ピククウ # ック帽とかピククウ # ック杖とかピククウ # クの名を附けたものが頻りに流行したさうだ。ゴーゴリの『監察官』は餘り能く露國民を穿ち過ちて讀者が悉く各々自分の事を書いたのではないかと疑つて全露國に惡感情を抱かして漸く露國皇帝の勅裁を仰いで芝居に興行したといふ事だ。その位世間を嫌がらしたお庇にゴーゴリは到頭故國に住はれず獨乙に逃出して了つた。ユーゴーは非常な帝政反對で其慷慨を洩した著述がナポレオンの忌諱に觸れて國外に放逐されて了つた。トルストイの諸作は常に露廷と衝突したが民望が全露に遍く歸依者が中々盛んだから如何とも處分し難くて持餘されてゐる。此頃ではゾラの『ル、ド』及び『羅馬』の二篇にカトリック教徒が怫熱してゾラ放逐を叫んだ如き以て其勢力の如何に大なるか解る。之に反して我が

中東

文壇の諸作は其傑出なるものでさへ二三の文學雜誌に褒貶せられるだけで文學者以外より絶えて反響を聞かずに何時の間にか出版されて何時の間にか消滅し去るを常とする。殊に近頃は文學雜誌にすら吹聴も褒貶も聞かず唯だ新聞廣告面に二號或は四號活字を見るだけである。其無勢力も餘り大なるを驚かざるを得ない。社會が小説に對して冷談である故だらうが畢竟小説が勢力を作るだけの價值が無いからである。第二期の作家即ち風葉鏡花等諸子が名を成すや殆んど疾風砂塵を捲くの勢で凄まじかつたが、其の頓に名聲を高ふしたる『夜行巡查』、『外科室』、『九段坂』、又柳浪子が一層其名を高ふしたる『今戸心中』の如き今猶は其名を記憶するものがある乎。今から八九年の諸作には却て記憶されてゐるものがあるが最近秀才諸子の作に到つては案外に早く忘られて了つたやうだ。是等の名譽は唯だ壯士芝居に材を供うし詩味を解せざる三文批評家の口

の端に上つた外は未だ曾て何等の影響を社會に與へなかつたやうだ。之といふも今の小説が青年男女を喜憂せしむる戀愛談で社會は今の小説に接して何等の痛痒をも感じないから之を度外に無視するのである。云はい今の小説の如き社會と離れたものに勢力を與へらるゝ筈がないのである。此故に小説家が社會の位置を確認せらるゝだけ勢力を作らんとするなら繰返し云ふ如く社會の實際を精うして更に密接するやうに仕なければならぬのだ。

●日本では小説は猶だ戯作同様に認められてゐる。尤も今の小説は戯作以上の價值が無いから依然として婦女子の翫讀となつてゐる。従つて小説家は殆んど藝人待遇を受けて政治宗教等社會の問題に容喙する權利が無いやうに思はれてゐる。夫故今の作家は自ら奮勵して造詣すると共に箇人の權利を十分伸長するやうに勤めねばならぬのだ。自ら屈辱に甘ん

じて政治家宗教家教育家等の下風に立つは頗る無氣力千萬である。吳々も隱居根性を去りて進んで社會に驥足を伸ばすは即ち小説家の社會に於ける位置を高め、随つて小説の勢力を大にし能く社會全軀を動搖する事も出來、小説は初めて雕蟲の技である婦人の業であるといふ誤解を免かれる事が出来る。

●處で、之は餘事であるが、操觚者と出版者との關係だ。此二者は何れの時代にも衝突を免かれないものだ。昔は唯だ自己の思想を世に想ふるだけを目的として著述したから報酬の如きは度外に置いて利益は惣て商人に任して了つた。處が文運發達して書籍の販途が擴まると共に文士は報酬を求めて追々著作の報酬に依て衣食する習慣を生じたから爰で初めて衝突の端を啓くやうになつた。尤も著作者の思想及び文章は多年の造詣と經驗とを積んで成功したもの故出版者が金錢を運用する勞力よ

りは比較的重きを有するは當然である。然るに出版者は半ば文藝の保護者たるべき性質を有するを忘れて較やともすると文士を苦めて利益を壟斷しやうとする。十八世紀の某詩人（名は忘れたり、ヂスレリの隨筆に見ゆ）が出版者は恰も興行師が鐵鞭を揮ひ動物を嚇かして奇異なる聲を放ち曲藝を演せしむる如くに文士を苦めて著述をなさしむるのだと嘆息したは慥に操觚者一面の消息を洩したものである。今の作家と出版者とは幸ひに和合してゐるが、今の事情は暫らく措き、文士は常に著作者の權利を保護する必要が十分有る。之につき今より十有餘年前英國の著作者はリットン卿テニス卿を初めとしハックスレイ、ゴツス等錚々たる名士を集めて著作權伸長の會議を開いた事がある。此議事は小説を院本に改作したる場合の興行權及び出版上の利益を著者及び書肆に折半する事其他二三を議決し一は政府に著作權法の追加を求め且つベルン條約

の擴張を欲し一は書肆の同意を求め其利益折半に就き容易に同意を得た事がある。是等は我が操觚者が頗る参考すべき例で、今度改正の著作権法の如き従來のに比べると明かに著作者の権利を保護してあるが猶ほ條文中疑惑を生ずべき廉がある。著作者正當の権利は未だ之に由て確定されたと認める事が出来ないのである。我が作家は世間一切の事務を鄙俗として蠲縮し著作者の権利の如きは故さらに冷視するが正當に享有すべき權利を主張するは當然である。此故に儀式的の親睦を名として無意味に集會する文學者美術家懇親會の如きものよりは寧ろ著作權保護及び伸長を目的とする操觚者俱樂部を組織したなら可からうと思ふ。此種の説は堂々たる文學者を以て労働者に比するに等しき故一部の仙人的操觚者は冷笑するだらうが既に若干の報酬を得、且つ既定の著作權を萬更放擲するにあらざる以上は當然享有する權利を保護するは怪むに足らんのだ。

此程の權利さへ重じないやうでは文士は社會上既に死せるものと云つて可からう。既に日本でも操觚者と書肆との關係が徐々、労働者と資本家との關係に變じて、書肆が次第に專横を極め著述家の資力なきに乗じて勝手氣儘を働くやうに追々なりさうだ。之には種々の原因もあつて無論著述家の方に輕蔑されるだけの弱點があるだらうが一つには文士が餘りに高尚過ぎる歎卑屈過ぎる歎隱居然としてゐる歎仙人然としてゐる歎の道勢利の競争に劇甚なる今の社會に處する意志の力が乏しいからで、労働者すら此頃は次第に權利を恢復しつゝあるに文士は却て段々と權利を收縮して來る。文士は清貧に甘んずべきもの乎、報酬を啜々するは賤むべき賣文なる乎、是等は別問題である。我等が主張するは文士が正當に享有する著述上の權利で、此權利の保護と伸張とを計るは勿論當然の沙汰である。

●斯ういふと、早合點の男は直ぐ賣文根性だと悪く云たがりさうだ。併し賣文を一概に嘲弄するは頗る疑問である。文士は強ち著述を賣らうとはしまいが、社會は文士の貢獻に對して相當の報酬をするが至當である。文士が利を以て著述の唯一目的とせざるは勿論云ふまでもないが著述以外に衣食の道なき者ならば報酬として若干を請求するは當然の權利である。此故に賣文は敢て文士の恥づべきものでなく著述相當の報酬を請求するは少しも疚しくないのである。唯だ粗末なる製作を濫りにし只管婦女子の翫讀を希ふもの、如きは即ち文士の恥辱である。或は糊と剪刀とを以て他人の著述を切張して製作する如きは殆んど論外である。斯ういふ所謂賣文根性の墮落文士が多いために眞摯な操觚者までが一と口に輕蔑されるは迷惑の沙汰で、同じくは社會の經綸を補ふべき構案若くは人の品性を高むべき理想或は人生の慰安且教訓たるべき消息を與ふるも

のを得たいのだ我等は大旱雲霓を望む如く此種の著述を待ちつゝあれば必ず大いなる報酬を献げて歡迎するのである。賣文賣文と冷笑するが文藝界の巨人シエークスビーヤは即ち大賣文家であつたではないか。

●さて今の死んだやうな文壇が何時振ふかといふと、二十三年前のやうな全盛時に戻るには中々間があるだらう。元老は死んで了ひ政黨は愈々腐敗する、國民が何も彼も失望して勞れて了う、處で今の小學校の兒供が長きくなつて第二の國民となる、此墮落した社會に反動して徐々理想が焔初める、此時が即ち文學の頭を擡上げる時代であらう。處が歐羅巴では枯殘つた十九世紀の老豪が漸と太平の命脈を維いでゐるが、佛蘭西では排猶太熱と無政府主義が愈々篤じて來る。若きギイヨームは益々野心を燃やして老いたるフランソアヨセフは將に百載の期に近づいてゐる、東洋では列國が牙を磨いで肥豚の肉を争つて毛髮首足を悉く割取

せせんば止まざらんとしてゐる。モンロー一點張の君子國までが劍を握んで敢て遅れざらんとしてゐる。亞弗利加や南米までが暗雲慘澹として將に大風雨を齎らし來らんとしてゐる。世紀の初めは何時でも世界が動亂するが常であるから、文學を樂むやうな太平時代はまだ中々遠いだらうと思はれる。併し革命後は必ず大詩人を生ずるやうだから、愈々世界が動亂した擧句が初めて文學興隆の時代かも知れぬ。文壇の衰弊は單り日本ばかりでなく、殆んど世界の形勢である。斯う世の中が統計的に算盤珠ではぢき出すやうではシエークスピーヤやギョーテでも恐らく甲を脱いで降参するだらう。併し此非文藝の時代に恰も氷塊を嚼みつゝ苦熱と闘ふやうにいと汗流したら奈何だ一禪榻に高臥して夢に先哲と語る如きは老輩諸先生に委して我等青年は一度二十世紀の舞臺に躍込む覺悟をしたら奈何だ。(明治三十二年八月稿)

明治三十二年九月二十日印刷

著者 内田貢

發行者 東京日本橋區本町三丁目八番地 大橋新太郎

印刷者 東京本郷區丸山福山町六番地 水谷景長

印刷所 東京小石川區久堅町百八番地 博進社工場

東京日本橋區本町三丁目

發兌元 博文館

明治三十二年九月廿五日發行

(錢五拾參金價定)

大和田建樹君著 (卷の三——八月十日發行)

日本大文學史

全五冊洋裝菊判
紙數壹冊三百餘頁

正價壹冊四拾錢五冊前金壹圓八拾錢○郵稅壹冊八錢

文學史は文學發達の歴史なり故に苟も斯道に志す人の明にせざるべからざるものこそ大和田建樹氏が斯道の開導者として特に得意の本著あるは偶然にあらず四方の君子請ふ一本を机上に備へ玉ふべし。

- 卷の壹……總論紀元前後○三韓交通以後 藤原奈良の朝
- 卷の貳……延喜天曆時代○源氏物語時代
- 卷の參……鎌倉時代○足利時代
- 卷の四……近世今代文學
- 卷の五……文學年表○索引○文學史評釋

發兌元 東京市日本橋區本町三 博文館

老鼠堂永機宗匠著

俳諧自在

金壹冊洋裝袖珍總クローヌ金字入
正價金壹圓——郵稅拾四錢

有情無情天地の森羅萬象を捉へ、之を十七字の中に收むるもの、是れ我俳句に非ずや。本書は、永機宗匠の起源、沿革、作法を詳述し、春夏秋冬、及神祇、釋教、戀無常を分ち、羈旅、名所、四季に至る迄、洩すなく、千二百餘頁の大冊を爲す。初學者は素より、斯道研究者の爲め、不可闕書也。

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

中東

中
東

乙羽生六大著書

<p>風月集</p> <p>全袖本三正五 壹珍紙百價 美數頁拾三 冊拾錢六</p>	<p>千山萬水</p> <p>全袖本六正四 壹珍紙百價 美數頁五 冊稅錢</p>
<p>若菜籠</p> <p>全壹冊和 裝美本綴 紙數三 餘頁正 廿八錢 稅四錢</p>	<p>花鳥集</p> <p>全壹冊總 クロース 金文字入 正價壹圓 郵稅廿錢 頗美本</p>
<p>累卵の東洋</p> <p>全袖本正 壹珍洋裝 美數拾 冊拾錢 稅四錢</p>	<p>名流談海</p> <p>全袖本三正 壹珍紙百價 美數頁三 冊拾錢 稅六錢</p>

(五)

—(第三版)—

時代管見

文學士 高山林次郎君著

是れ高山文學士が當代の時勢文藝の觀察評
論七十餘編を收めたるもの、道德、宗教、文
學、美術等凡て國民的人文を經緯する、諸般
の要素に對する著者の意見畧々茲に現る、
思想混亂の今日、敢て江湖の一讀を請は
む。附録「わが袖の記」文人ならぬ著者が
一流の美文なり。

全壹冊袖珍美本正價卅錢郵稅六錢

發兌元 東京日本橋區目 博文館

(四)

美文韻文散文書類

文學士 大町桂月君著



美文韻文 黃菊

(六版)

白菊

全壹冊洋裝美本
正價金三拾錢
郵稅六

鹽井、武島、大町三先生合作



美文韻文 花紅

(拾二版)

葉

全壹冊洋裝美本
正價金三拾錢
郵稅六

大和田建樹君著



美文韻文 雪

月 (六版)

花

全壹冊洋裝美本
正價金卅五錢
郵稅六

谷 信次君編



月

の

光

全壹冊洋裝美本
正價金拾八錢
郵稅四

大和田建樹君著



美文韻文 深

山

櫻

全壹冊洋裝美本
正價未定
郵稅 || 近刊

發兌元

東京日本橋區
本町三丁目

博文館

中外堂書店
東京・東中野
(郵便局前)

100